Pioneer

取扱説明書

お取り扱いについてお困りのとき

http://pioneer.jp/support/

カスタマーサポートセンター

フリーコール 0120-944-222

一般電話 03-5496-2986

受付時間

月曜～金曜
9:30～18:00
土曜・日曜・祝日
9:30～12:00、13:00～17:00

(弊社休業日を除きます。)

※ フリーコールおよびフリーダイヤルは、携帯電話・PHSからはご利用になれません。一般電話は、携帯電話・PHSからご利用可能ですが、通話料がかかります。

AVマルチチャンネルアンプ

SC-LX90

安全上のご注意

●安全にお使いいいただくために、必ずお守りください。
●ご使用の前にこの「安全上のご注意」をよくお読みのうえ、正しくお使いください。

この取扱説明書および製品への表示は、製品を安全に正しくお使いいただき、あなたや他の人々への危害や財産への損害を未然に防止するために、いろいろな絵表示をしています。その表示と意味は次のようになっています。
内容をよく理解してから本文をお読みください。



警告

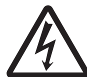
この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が死亡または重傷を負う可能性が想定される内容を示しています。



注意

この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が損害を負う可能性が想定される内容および物的損害のみの発生が想定される内容を示しています。

絵表示の例



△ 記号は注意(警告を含む)しなければならない内容であることを示しています。
図の中に具体的な注意内容(左図の場合は感電注意)が描かれています。



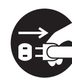
⃠ 記号は禁止(やってはいけないこと)を示しています。
図の中や近くに具体的な禁止内容(左図の場合は分解禁止)が描かれています。



● 記号は行動を強制したり指示する内容を示しています。
図の中に具体的な指示内容(左図の場合は電源プラグをコンセントから抜け)が描かれています。

⚠ 警告

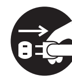
異常時の処置



- 万一煙が出ている、変なにおいや音がするなどの異常状態のまま使用すると火災・感電の原因となります。すぐに機器本体の電源スイッチを切り、必ず電源プラグをコンセントから抜いてください。煙が出なくなるのを確認して販売店に修理をご依頼ください。お客様による修理は危険ですから絶対おやめください。

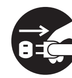


- 万一内部に水や異物等が入った場合は、まず機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。



- 万一本機を落としたり、カバーを破損した場合は、機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

設置



- 電源プラグの刃および刃の付近にほこりや金属物が付着している場合は、電源プラグを抜いてから乾いた布で取り除いてください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。



- 電源コードの上に重いものをのせたり、コードが本機の下敷きにならないようにしてください。また、電源コードが引っ張られないようにしてください。コードが傷ついて、火災・感電の原因となります。コードの上を敷物などで覆うことにより、それに気付かず、重い物をのせてしまうことがあります。



- 放熱をよくするため他の機器、壁等から間隔をとり、またラックに入れる時はすき間をあけてください。また、次のような使い方で通風孔をふさがないでください。内部に熱がこもり、火災の原因となることがあります。
  →あおむけや横倒し、逆さまにする。
  →押し入れなど、風通しの悪い狭いところに押し込む。
  →じゅうたんやふとんの上に置く。
  テーブルクロスなどをかける。



- **着脱式の電源コード(インレットタイプ)が付属している場合のご注意:**
  付属の電源コードはこの機器のみで使用することを目的とした専用部品です。他の電気製品ではご使用になれません。他の電気製品で使用した場合、発熱により火災・感電の原因となることがあります。また電源コードは本製品に付属のもの以外は使用しないでください。他の電源コードを使用した場合、この機器の本来の性能が出ないことや、電流容量不足による発熱から火災・感電の原因となることがあります。



- 本機の上に火がついたろうそくなどの裸火を置かないでください。火災の原因となります。

使用環境



- この機器に水が入ったり、ぬらさないようにご注意ください。火災・感電の原因となります。雨天、降雪中、海岸、水辺での使用は特にご注意ください。



- 風呂場・シャワー室等では使用しないでください。火災・感電の原因となります。



- 表示された電源電圧（交流１００ボルト 50 Hz/60 Hz）以外の電圧で使用しないでください。火災・感電の原因となります。



- この機器を使用できるのは日本国内のみです。船舶などの直流（DC）電源には接続しないでください。火災の原因となります。

使用方法



- 本機の上に花びん、植木鉢、コップ、化粧品、薬品や水などの入った容器または小さな金属物を置かないでください。こぼれたり、中に入った場合、火災・感電の原因となります。



- ぬれた手で（電源）プラグを抜き差ししないでください。感電の原因となることがあります。



- 本機の通風孔などから、内部に金属類や燃えやすいものなどを差し込んだり、落とし込んだりしないでください。火災・感電の原因となります。特にお子様のいるご家庭ではご注意ください。



- 本機のカバーを外したり、改造したりしないでください。内部には電圧の高い部分があり、火災・感電の原因となります。内部の点検・整備・修理は販売店にご依頼ください。



- 電源コードを傷つけたり、加工したり、無理に曲げたり、ねじったり、引っ張ったり、加熱したりしないでください。コードが破損して火災・感電の原因となります。コードが傷んだら（芯線の露出、断線など）、販売店に交換をご依頼ください。



- 雷が鳴り出したらアンテナ線や電源プラグには触れないでください。感電の原因となります。

⚠ 注意

設置



- 電源プラグはコンセントに根元まで確実に差し込んでください。差し込みが不完全ですと発熱したり、ほこりが付着して火災の原因となることがあります。また、電源プラグの刃に触れると感電することがあります。



- 電源プラグは、根元まで差し込んでもゆるみがあるコンセントに接続しないでください。発熱して火災の原因となることがあります。販売店や電気工事店にコンセントの交換を依頼してください。



- ぐらついた台の上や傾いたところなど不安定な場所に置かないでください。落ちたり、倒れたりしてけがの原因となることがあります。



- 本機を調理台や加湿器のそばなど油煙、湿気あるいはほこりの多い場所に置かないでください。火災・感電の原因となることがあります。



- キャスター付きの場合にはキャスター止めをしてください。動いたり、倒れたりしてけがの原因となることがあります。



- テレビ、オーディオ機器、スピーカー等に機器を接続する場合は、それぞれの機器の取扱説明書をよく読み、電源を切り、説明に従って接続してください。また、接続は指定のコードを使用してください。



- 電源を入れる前には音量を最小にしてください。突然大きな音が出て聴力障害などの原因となることがあります。



- 本機の電源が入っている状態で本機の底面に触れないでください。電源が入っている状態の本機底面は熱くなり、火傷の原因となることがあります。



- 本機の上に重いものや外枠からはみ出るような大きなものを置かないでください。バランスがくずれて倒れたり、落下してけがの原因となることがあります。



- 本機の上にテレビを置かないでください。放熱や通風が妨げられて、火災や故障の原因となることがあります。（取扱説明書でテレビの設置を認めている機器は除きます。）

異常時の処置



● 電源プラグを抜く時は、電源コードを引っ張らないでください。コードが傷つき火災・感電の原因となることがあります。必ずプラグを持って抜いてください。



● 電源コードを熱器具に近づけないでください。コードの被ふくが溶けて、火災・感電の原因となることがあります。



● 移動させる場合は、電源スイッチを切り必ず電源プラグをコンセントから抜き、外部の接続コードを外してから、行ってください。コードが傷つき火災・感電の原因となることがあります。



● 本機の上にテレビやオーディオ機器を載せたまま移動しないでください。倒れたり、落下してけがの原因となることがあります。重い場合は、持ち運びは2人以上で行ってください。



● アンテナ工事には技術と経験が必要ですので、販売店にご相談ください。
→送配電線から離れた場所に設置してください。アンテナが倒れた場合、感電の原因となることがあります。
→ＢＳ、ＣＳ放送受信用アンテナは強風の影響を受けやすいので、堅固に取りつけてください。



● 窓を閉め切った自動車の中や直射日光が当たる場所など異常に温度が高くなる場所に放置しないでください。火災の原因となることがあります。

使用方法



● ディスクを使用する機器の場合、ひび割れ、変形、または接着剤などで補修したディスクは使用しないでください。ディスクは機器内で高速回転しますので、飛び散ってけがの原因となることがあります。



● レーザーを使用している機器では、レーザー光源をのぞきこまないでください。レーザー光が目に当たると視力障害を起こすことがあります。



● 長時間音が歪んだ状態で使わないでください。スピーカーが発熱し、火災の原因となることがあります。



● 本機に乗ったり、ぶら下がったりしないでください。特にお子様はご注意ください。倒れたり、壊れたりしてけがの原因になることがあります。



● お子様がカセットテープ、ディスク挿入口に、手を入れないようにご注意ください。けがの原因になることがあります。



● ヘッドホンをご使用になる時は、音量を上げすぎないようにご注意ください。耳を刺激するような大きな音量で長時間続けて聞くと、聴力に悪い影響を与えることがあります。



● 旅行などで長期間ご使用にならない時は、安全のため必ず電源プラグをコンセントから抜いてください。

電池



● 指定以外の電池は使用しないでください。また、新しい電池と古い電池を混ぜて使用しないでください。電池の破裂、液もれにより、火災・けがや周囲を汚損する原因となることがあります。



● 電池を機器内に挿入する場合、極性表示（プラス(＋)マイナス(ー)の向き）に注意し、表示どおりに入れてください。間違えると電池の破裂、液もれにより、火災・けがや周囲を汚損する原因となることがあります。



● 長時間使用しない時は、電池を取り出しておいてください。電池から液がもれて火災、けが、周囲を汚損する原因となることがあります。もし液がもれた場合は、電池ケースについた液をよく拭き取ってから新しい電池を入れてください。また万一、もれた液が身体についた時は、水でよく洗い流してください。



● 電池は加熱したり分解したり、火や水の中に入れないでください。電池の破裂、液もれにより、火災、けがの原因となることがあります。

保守・点検



● 5年に一度くらいは内部の掃除を販売店などにご相談ください。内部にほこりがたまったまま、長い間掃除をしないと火災や故障の原因となることがあります。特に湿気の多くなる梅雨期の前に行うとより効果的です。なお掃除費用については販売店などにご相談ください。



● お手入れの際は安全のために電源プラグをコンセントから抜いて行ってください。

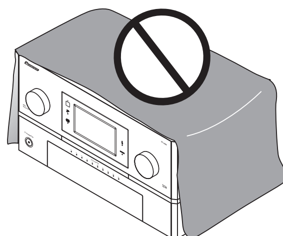
本機の使用環境温度範囲は5 ℃～35 ℃、使用環境湿度は85 %以下(通風孔が妨げられていないこと)です。
風通しの悪い所や湿度が高すぎる場所、直射日光（または人工の強い光）の当たる場所に設置しないでください。
D3-4-2-1-7c_Ja

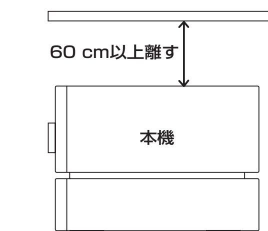
設置について



警告

- 放熱のため本機の上に物を置いたり、布やシートなどをかぶせた状態でのご使用は絶対におやめください。異常発熱により故障の原因となる場合があります。
- ラックなどに設置する場合は、上部に60 cm以上空間をあけてください。







注意

- 本機を設置する場合には、壁から10ｃm以上の間隔をおいてください。また、放熱をよくするために、他の機器との間は少し離して設置してください。ラックなどに入れるときには、本機の天面から60ｃm以上、背面から10ｃm以上、側面から30ｃm以上のすきまをあけてください。内部に熱がこもり、火災の原因となることがあります。

パイオニアの設計思想：アドバンスド・マルチチャンネル・ステレオフォニック思想
「原音再生とは、サウンドクリエーターの思い(soul)も伝えること」
という私たちの思想を実現するため、以下の3ステップをお約束します。
ステップ1）妥協を排した高音質設計
ステップ2）視聴環境の精密調整機能（Advanced MCACC)の搭載
ステップ3）原音製作者(エアースタジオ技術者）による音質チューニング
この思想は、映画制作のスタンダードであるルーカスフィルム社(ハリウッド)や、音楽レコーディング業界の最高峰エアースタジオ社(ロンドン)といった、実際の制作現場の技術者への徹底的なヒアリングにより構築されました。

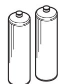


付属品を確認する

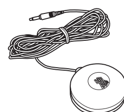
アクセサリーボックス内に付属：



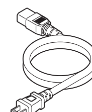
リモコン



単3形乾電池(2本)



セットアップ用マイク(5 m)



電源コード



iPodケーブル

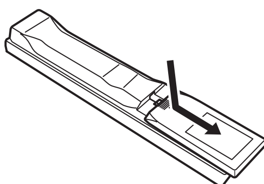
ワイピングクロス（1枚）

- 取扱説明書(本書)

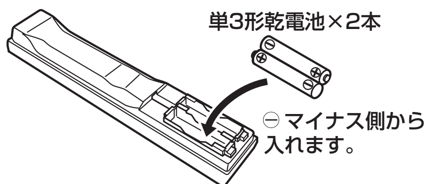
- 保証書

リモコンに電池を入れる

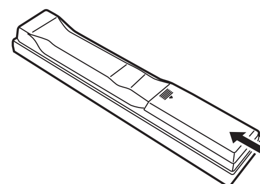
1



2



3



- リモコンの操作範囲が極端に狭くなってきたら、電池を交換してください。
- 電池を交換する際は、なるべく5分以内に行ってください。それ以上では、リモコンの設定が解除される可能性があります。再度リモコンの設定を行う場合は、「他機器を操作するためのリモコン設定をする」をご覧ください(117ページ)。



電池を直射日光の強いところや、炎天下の車内・ストーブの前などの高温の場所で使用・放置しないでください。電池の液漏れ、発熱、破裂、発火の原因になります。また、電池の性能や寿命が低下することがあります。



電池を誤って使用すると、液漏れしたり破裂する危険性があります。以下の点について特にご注意ください。

- 新しい乾電池と一度使用した乾電池を混ぜて使用しないでください。
- 乾電池のプラスとマイナスの向きを電池ケースの表示どおりに正しく入れてください。
- 乾電池には同じ形状でも電圧の異なるものがあります。種類の違う乾電池を混ぜて使用しないでください。
- 長い間(1 カ月以上)リモコンを使用しないときは、電池の液漏れを防ぐため、乾電池を取り出してください。液漏れを起こしたときは、ケース内についた液をよく拭き取ってから新しい乾電池を入れてください。
- 不要となった電池を廃棄する場合は、各地方自治体の指示(条例)に従って処理してください。

目　次

準　備

ホームシアター入門

各部の名称

接　続

再　生

応用操作

目　次

設　定

リモコン

エキスパート

目　次

技術資料

困ったとき

付録

本機の特長　～こんなことができます～

高音質・多機能な本機SC-LX90の主な特長をまとめました。「本書の掲載ページ」に進むと、それぞれの機能や操作を楽しんでいただけます。

本書の掲載ページ

1 ダイレクトエナジーHDアンプ搭載

パイオニアとICEpower社とのコラボレーションにより、独自のリファレンスクラスDアンプ「ダイレクトエナジーHD（High fidelity class D）アンプ」を共同開発。ハイパワー（1400 W同時出力）、ハイレスポンス、低歪率（0.005 %）という高スペックと高音質を実現。最新のマルチチャンネルデジタルコンテンツを理想的に再生します。

2 10 chアンプマルチアサイン機能

ご希望のシーンに合わせ、10 chのアンプ（スピーカー端子）を5つのパターンから選ぶことができます。

P.26
「スピーカーの配置 / 使用パターンを選ぶ」

3 Advanced MCACC を搭載 

MCACCでは実際の製作現場で行われる高精度な調整を家庭でも実現できるように自動化し、チャンネル間の空間情報の歪みを補正。正確なマルチチャンネルの音場を再現します。
最新型のMCACCでは、リスニングルームの残響特性や定在波を解析した補正を行い、補正前後の特性の差をPCで表示することもできます。

P.14
「リスニング環境を測定して最適な設定をする
～オート MCACC ～」
P.96
「部屋の残響特性の測定と残響を考慮した補正
(EQ プロフェッショナル)」

4 FULL BAND PHASE CONTROL 機能 

従来のPHASE CONTROLによる正確な低域成分の再生に加え、スピーカーで発生する帯域間での位相のずれ（群遅延）を補正し、スピーカー全帯域（フルバンド）における正確な再生を実現します。

P.47
「位相乱れ(群遅延)の補正」

5 HOME MEDIA GALLERY を搭載

LAN端子でネットワークに接続されたパソコンやUSBメモリーに保存されている動画/音楽/画像ファイルなどを再生することができます。

P.57
ホームメディアギャラリーを使用する

6 HDMI端子を搭載

映像と音声をデジタル伝送できるHDMI端子を搭載。ドルビーデジタルプラス、ドルビーTrueHDやDTS-EXPRESS、DTS-HD Master Audioなどのデジタル音声フォーマットに対応。また、高画質規格のDeepColor出力やx.v.Colorの伝送も可能（x.v.Colorはソニー株式会社の商標です）。HDMIコントロール機能も搭載し、HDMI機器との連動動作も実現。

P.32
「HDMI対応機器の接続」
P.140
「デジタル音声フォーマットについて」

7 その他の主な特長

- 音声のデジタル伝送も可能で、iPodの音楽や映像を楽しめるiPod専用端子
- DVDオーディオやSACDの高音質マルチチャンネル伝送が可能なi.LINK端子
- THX Ultra2 Plusの認証を取得
- 「ビデオスケーラー」、「I/P変換」、「デジタルビデオコンバーター」搭載で高画質映像の再生環境を実現
- フロントサラウンド・アドバンス機能を搭載
- 学習機能付き多機能LCDリモコンを付属
- 省エネルギー設計（待機時0.5 W）

P.73
「iPodをつないで再生する」
P.77
「i.LINKで接続した機器を再生する」
P.140
「デジタル音声フォーマットについて」
P.31
「映像機器の接続について（パイオニアビデオコンバーター）」

ホームシアター入門

本章「ホームシアター入門」をご覧いただくことで、簡単にマルチチャンネル再生を楽しむことができます。
ここではまず通常のマルチチャンネルサラウンド再生を行うために必要な最低限の接続、設定、再生操作をステップ1〜3で説明します。より本機を使いこなしたい方は「ホームシアター達人への道」(→19ページ)をご覧ください。

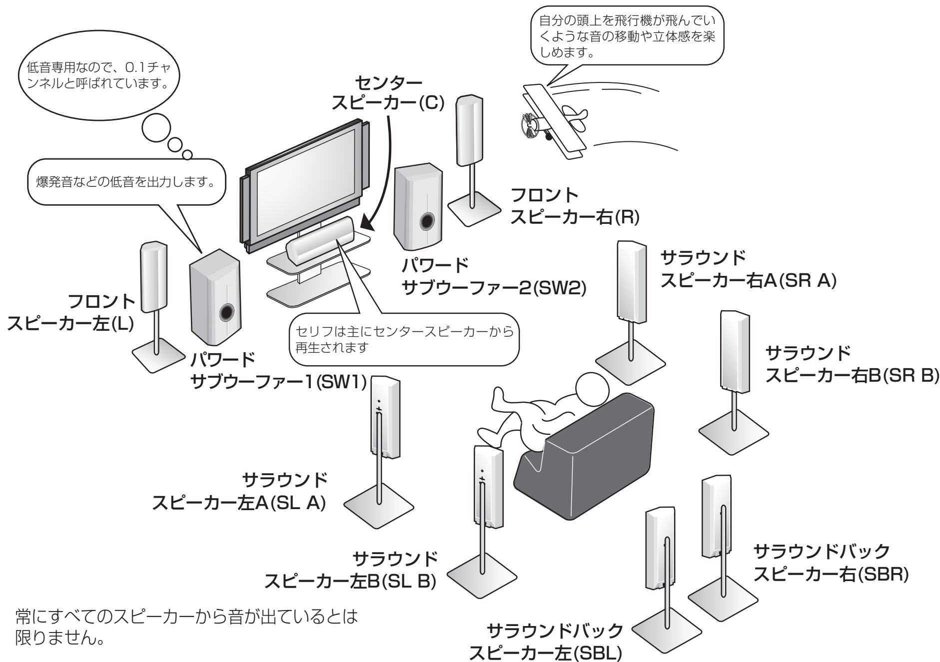
ステップ1 **接続する** ……… 「テレビ/DVD プレーヤーとの接続」「スピーカーとの接続」
ステップ2 **設定する** ……… 「リスニング環境を測定して最適な設定をする 〜オートMCACC〜 」
ステップ3 **再生する** ……… 「DVDのサラウンド再生」

マルチチャンネルサラウンド再生とは

3 本以上のスピーカーで多チャンネル再生することを指します。音場の立体感や移動感が増し、迫力ある臨場感が期待できます。

①ドルビーデジタルまたはDTSサラウンドなどのマルチchソフトを再生する場合
マルチchソフト(5.1 ch収録が一般的)には各チャンネルに独立した音声が収録されているため、忠実な5.1 ch再生でも十分な立体感が得られますが、いろいろなモードとの組み合わせにより、接続されたスピーカーすべてを使った臨場感あふれるサラウンド再生も可能です。この再生をするにはデジタル接続が必要です。

② CDまたはドルビーサラウンドなどの2 ch(ステレオ)ソフトを再生する場合
ソフトが2 ch収録の場合でも、ドルビープロロジックIIxやNeo:6技術などを施すことで、サラウンド再生が可能になります。ソフトの内容やお好みにマッチしたモードを見つけることも、ホームシアターの醍醐味です。



常にすべてのスピーカーから音が出ているとは限りません。

再生するソフトの音声記録方式(フォーマット)を知るには？

DVDやBlu-rayなどの多くのソフトには、パッケージ(裏面)に以下のように表示されています。1枚のディスクに2〜3種類の音声が収録されていることが多く、聴く音声を選ぶことができます。切り換え方法はプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

例） ③

1. 英　語 (5.1 ch サラウンド)　DOLBY DIGITAL
2. 日本語 (ドルビーサラウンド　DOLBY SURROUND
3. 英　語 (DTS 5.1 ch サラウンド)　DIGITAL dts SURROUND

収録音声数　記録方式　音声記録方式(フォーマット)

ドルビーデジタルはDVDの標準音声フォーマットであるため、単に「5.1 chサラウンド」と記載されている場合は、「ドルビーデジタル(5.1 ch)」であることを示します。

ステップ1 接続する

機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

テレビ／DVDプレーヤーとの接続

ドルビーデジタルやDTSといったマルチチャンネル音声の再生にはデジタル接続が必要です。
接続の前に、別売りのビデオコード2本、同軸ケーブル（または光ファイバーケーブル）1本をご用意ください。
同軸ケーブルにはビデオコードが代用できます。
光ファイバーケーブルで接続する場合は設定の変更が必要です。詳しくは入力端子の設定（→111ページ）をご覧ください。

テレビ（モニター）
映像入力
ビデオコード
SC-LX90
DVD/LD IN
MONITOR OUT
光ファイバーケーブル
デジタル出力
光
同軸
DVDプレーヤー
映像出力
ビデオコード
同軸ケーブル（推奨）
どちらか一方で接続

■光ファイバーケーブル／同軸ケーブル

- 急な角度に折り曲げないでください。保管するときは、直径が15 cm以上になるようにしてください。
- 接続の際は端子の向きを合わせてしっかり奥まで差し込んでください。誤った向きでむりやり挿入すると、端子が変形し、ケーブルを抜いてもシャッターが閉まらなくなることがあります。

光ファイバーケーブル
同軸ケーブル

■ビデオコード

一般的な映像用コードで、コンポジットフォーマットの映像信号を伝送します。

ビデオコード
黄

スピーカーとの接続

9本のスピーカーと2本のサブウーファーをつないだ例です。「ステップ2　設定する」を行うことで、サラウンドバックやセンタースピーカーがない場合でもお持ちのスピーカーに応じたサラウンドサウンドが楽しめます。接続には、市販のスピーカーコードとオーディオコードをご使用ください。

フロント
スピーカー右(R)

アンプ内蔵パワード
サブウーファー2

センター
スピーカー(C)

アンプ内蔵パワード
サブウーファー1

フロント
スピーカー左(L)

INPUT

サブウーファーが1本の場合はSUB WOOFER 1端子に接続します。

THXサブウーファーをご使用の方は、THX入力端子またはTHXフィルタポジションをご使用ください。

SC-LX90

すべての接続が終了したら、電源コードをコンセントに接続します。

AC IN

SPEAKERS

R1 4Ω-16Ω　R2 6Ω-16Ω　R3 6Ω-16Ω　R4 6Ω-16Ω　R5 6Ω-16Ω　L5 6Ω-16Ω　L4 6Ω-16Ω　L3 6Ω-16Ω　L2 6Ω-16Ω　L1 4Ω-16Ω

FRONT　SURROUND-A　SURROUND-B　SURROUND BACK　CENTER　SURROUND BACK (Single)　SURROUND-B　SURROUND-A　FRONT

LOW　HIGH　FRONT R　LOW　HIGH　SURROUND R　LOW　HIGH　CENTER　HIGH　LOW　SURROUND L　HIGH　LOW　FRONT L

サラウンド
スピーカー右A(SR A)

サラウンド
スピーカー右B(SR B)

サラウンドバック
スピーカー右(SBR)

サラウンドバック
スピーカー左(SBL)

サラウンド
スピーカー左B(SL B)

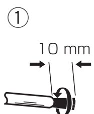
サラウンド
スピーカー左A(SL A)

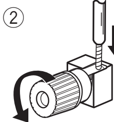
サラウンドスピーカーが1組(2本)の場合はL2/R2端子(SURROUND-A)につないでください。

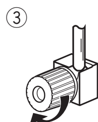
サラウンドバックが1本の場合はL4端子につないでください。

サラウンドスピーカーが1組(2本)の場合はL2/R2端子(SURROUND-A)につないでください。

■SPEAKER(スピーカー)端子

①


②


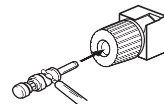
③


① 線をねじる。

② スピーカー端子を緩め、スピーカーコードを差し込む。

③ スピーカー端子を締めつける。

バナナプラグを接続することもできます(詳しくはプラグの説明書をお読みください。)




注意

- **公称インピーダンスが6 Ω～16 Ω(R1とL1端子は4 Ω～16 Ω)のスピーカーをご使用ください。**
- スピーカーと本機の⊕ および⊖端子どうしを正しく接続してください。
- スピーカーコードを接続するときは、芯線をしっかりねじり、スピーカー端子からはみ出していないことを確認してください。芯線がリアパネルに接触したり、⊕および⊖が接触すると保護回路が働いて電源がスタンバイ状態になることがあります。
- センタースピーカーをテレビの上に設置するときは、適切な方法で固定してください。固定しないと地震などの外部の振動により、スピーカーが落下してケガをしたり、スピーカーを破損する原因となります。

ステップ2 設定する

リスニング環境を測定して最適な設定をする ～オートMCACC～

本機のオートセットアップでは、従来のマニュアル調整では難しかったさまざまな設定を、自動で高精度に測定、設定することができます。スピーカーから出力されるテストトーンを付属のセットアップ用マイクで測定し、解析します。測定項目と全体の流れは右記のとおりです*[1]。

*[1] 右記の全体の流れは、オートMCACCの「カスタムメニュー」で[ALL](全項目を自動測定)を選択したときのものです。

右記①～⑨の測定／解析にかかる時間
合計3～10分程度


注意

測定中は大きな音でテストトーンが出力されます。近隣住宅や小さなお子様などへのご配慮をお願いします。

- スピーカー出力の設定
- 測定、設定値の保存先選択



初期測定(測定環境のチェック)
① 暗騒音（部屋の騒音）の測定
② マイク感度の診断
③ 各chのスピーカー有り無し判定



スピーカーの有り無し判定結果のユーザー確認(または修正)



システム全体の解析/測定
④ スピーカーシステム
（各chの低域再生能力を判定）
⑤ スピーカー出力レベル
（各chの出力バランスを補正）
⑥ スピーカーまでの距離
（最適なディレイ値を解析）
⑦ 定在波制御
（定在波の影響を軽減）
⑧ 残響特性の測定
⑨ 視聴環境の周波数特性
（出力音声の音色を統一）



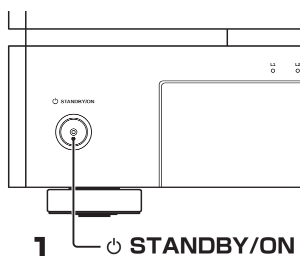
スピーカーの位相乱れの解析/測定
⑩ スピーカーの群遅延特性
（高域に対する低域の遅れを補正）



システム全体の解析結果のチェック

1）オートセットアップで自動測定を開始する

- 測定を途中で中断したときは、それまでの測定内容は確定されません。
- システムセットアップ中に静止画面を3分間放置すると画面にスクリーンセーバー機能が働きますが、いずれかのボタンを押すことで再び同じ画面を表示します。
- 測定は静かな環境で行ってください。
- スピーカーとリスニングポジション(マイク)の間に障害物があると、正確に測定できないことがあります。
- 測定中はリスニングポジションから離れて、各スピーカーの外側からリモコンで操作を行ってください。



1 本機とテレビの電源を入れる。

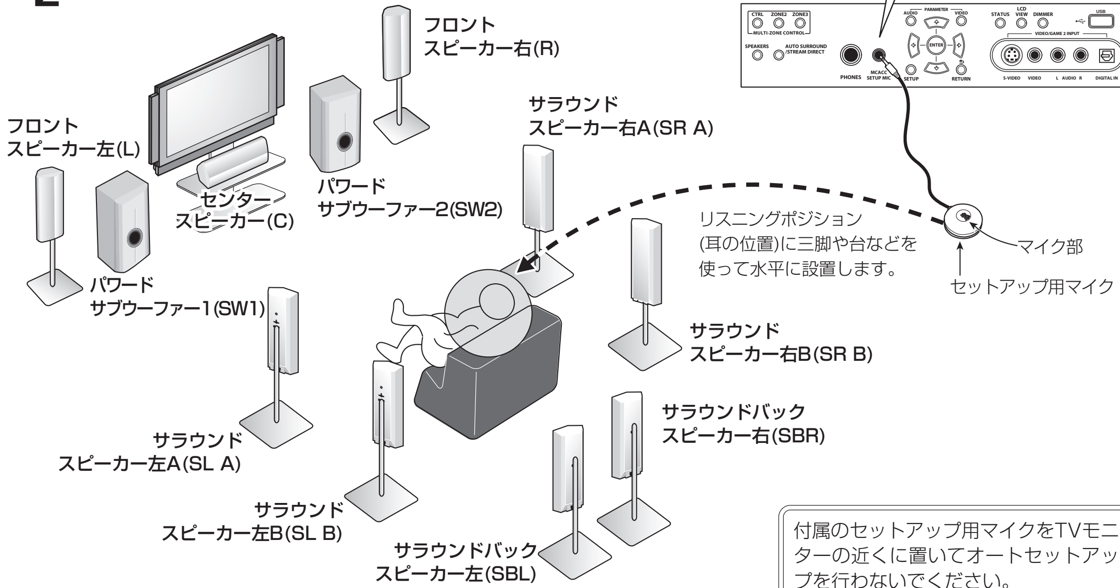
本体のSTANDBY/ONボタンを押します。

- サブウーファーを接続しているときは、測定のためサブウーファーの電源を入れてボリュームレベルを適度に上げておいてください。
- テレビにメニュー画面が表示されるようテレビ側の入力切換を合わせてください。

2 付属のセットアップ用マイクを接続する。

リスニングポジションにマイクを配置します。
マイクの接続は次ページをご覧ください。
マイクを差し込むとオートMCACC画面が表示されます。

2

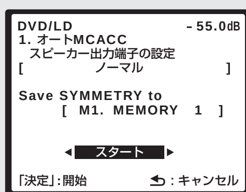


付属のセットアップ用マイクをTVモニターの近くに置いてオートセットアップを行わないでください。

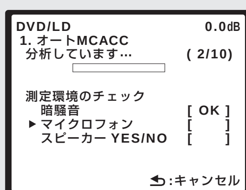
入力機器　テレビ　AVアンプ　— **3**

⇧⇩決定 **3~5**

3



4



3 [スタート]が選ばれているので、リモコン操作切換スイッチをAVアンプにしてから決定する。



注意

オートセットアップのテストトーンは大音量です。ボリュームを下げることもできますが､正しく設定されない場合があります｡小さなお子様が近くにいる場合などはご注意ください。

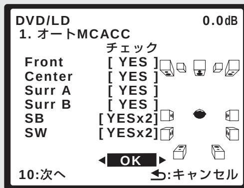
オートセットアップの自動測定に進みます。
手順4へお進みください。
[カスタム]を選んで決定すると、項目別の測定を行うことができます。詳しくは｢オートMCACCをより詳細に測定／設定する｣(→88ページ)をご覧ください。

4 自動測定が開始されます。

まずは初期測定（測定環境チェック）です。
暗騒音：暗騒音（部屋の騒音）の測定
マイクロフォン：マイクの感度を診断
スピーカー YES/NO：各スピーカーの有り無し判定

「暗騒音」および「マイクロフォン」のチェックでエラーが表示されたときは､測定環境およびマイクの接続をもう一度確認し､[リトライ]を選んでもう一度測定することをお勧めします。⬅➡で[次へ進む]を選択し､次の測定へ進むこともできます。

5

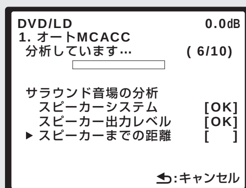


エラーが表示されたら

判定結果で[エラー]が表示された場合は、スピーカーの接続を間違えている可能性があります。[リトライ]しても結果が同じような場合は一度電源を切り、スピーカーの接続を確認してください。また、途中で測定エラーによる警告が表示されている場合がありますので、そのときは画面の指示に従ってください。指示の詳しい内容については「システムセットアップでのMCACC(音場補正)時に表示されるメッセージの意味」(→175ページ)をご覧ください。

スピーカー有り無しの確認画面で、SWを「NO」から「YES」に直して決定すると、サブウーファーのレベルを確認するためにサブウーファーのみ再測定を行います。

6



確認画面へ

7



5 スピーカー有り無しの確認画面になります。

確認画面で何も操作がないときは10秒後に自動で手順6へ進み、オートセットアップが再開されます。
スピーカー有り無し判定については以下の表をご覧ください。

チェック画面の見かた

スピーカー＼有無	接続している	接続していない	規定外の接続
Front フロント左右	YES	エラー	エラー
Center センター	YES	NO	– – –
Surr A サラウンドA左右	YES	NO	エラー
Surr B サラウンドB左右	YES	NO	エラー
SB サラウンドバック	YES×1（1本接続） YES×2（2本接続）	– – –	エラー
SW サブウーファー	YES×1（1本接続） YES×2（2本接続）	NO	– – –

スピーカー有り無し判定結果が正しいとき

[OK]を選んで決定ボタンを押します。

もう一度自動測定をやり直すとき

[リトライ]を選んで決定ボタンを押します。

スピーカー有り無し判定結果が間違っているとき

[リトライ]を選んでもう一度自動測定をやり直してみてください。それでも間違ってしまうときは⬇⬆⬅➡ボタンで正しい設定に直してから決定ボタンを押します。

6 補正用測定が開始されます。

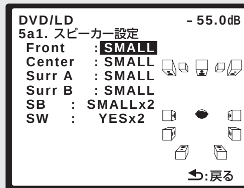
スピーカーシステム：各スピーカーの低域再生能力判定
スピーカー出力レベル：各chの出力バランスを補正
スピーカーまでの距離：スピーカーまでの距離を解析
定在波制御：定在波の影響を軽減
残響特性：残響特性の測定
Aco Cal EQ Pro.：出力音声の音色を統一
群遅延特性：スピーカーの群遅延測定
これらの自動設定には接続しているスピーカーの数によって3〜10分程度かかりますので、手順7の画面になるまでしばらくお待ちください。

7 「MCACCデータチェック」の画面が表示されたら自動測定は終了です。

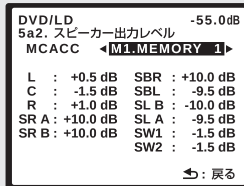
「測定/設定結果を確認する」にお進みください。
オートセットアップが終わりましたら、必ずセットアップ用マイクを本機から抜いてください。

2）測定／設定結果を確認する

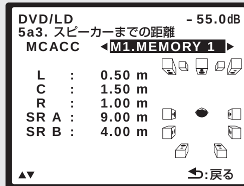
1.スピーカー設定



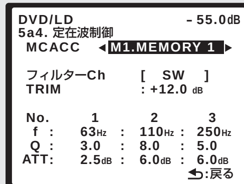
2.スピーカー出力レベル



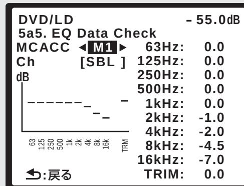
3.スピーカーまでの距離



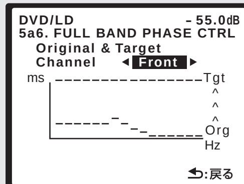
4.定在波制御



5.視聴環境の周波数特性



6.スピーカーの群遅延特性



14〜16ページの手順1〜7を行ってから以下にお進みください。

1 **⬇⬆ボタンで項目を選んで決定し、測定された内容を確認する。**

確認後は戻るボタンを押して項目一覧に戻ります。
各測定項目について、詳しくは「設定データを確認する」（→102ページ）をご覧ください。

- 同じスピーカーを接続していても、部屋の環境や設置の影響によりスピーカーの大小判定が一致しないことがあります。設定を変更したい場合はシステムセットアップの「スピーカー接続と低音再生能力を設定する」（→105ページ）を行ってください。
- サブウーファーまでの距離が、メジャーなどによる実測に比べてやや遠めに設定されることがありますが、それは電気的な遅延も含めた補正となっているので問題ありません。また、他のスピーカーも音響特性を測定して距離設定をしているため、実測したスピーカーまでの距離とは異なることがあります。
- 各スピーカーと視聴環境との相互作用によって、まれにオートMCACCの測定が正しく行われないことがあります。その場合は手動で設定を調整することをお勧めします。

2 **設定ボタンを押してオートMCACCを終了する。**

通常動作に戻ります。

ステップ3 再生する

つないだDVDプレーヤーにディスクをセットして、サラウンド再生をします。

DVDのサラウンド再生

1 **本機、テレビ(モニター)、プレーヤー、サブウーファーの電源を入れる。**

⏻ STANDBY/ONボタンを押して電源をONにします。
(サブウーファーは、「ステップ 2」のオートMCACCを行ったときと同じ音量にしておきます。)

2 **テレビに本機の出力映像が表示されるようにテレビの入力切換を設定する。**

たとえば、本機のMONITOR OUT端子とテレビの「ビデオ1」端子を接続した場合は、テレビの入力を「ビデオ1」に切り換えます。

3 **リモコンのDVDボタンを押して、本機の入力を「DVD/LD」にする。**

4 **AUTO SURROUNDモード(工場出荷時の設定)にする。**

ディスプレイにAUTO SURROUNDと表示されるまでAUTO SURROUND/STREAM DIRECT(リモコンはAUTO/DIRECT)ボタンを押してください。

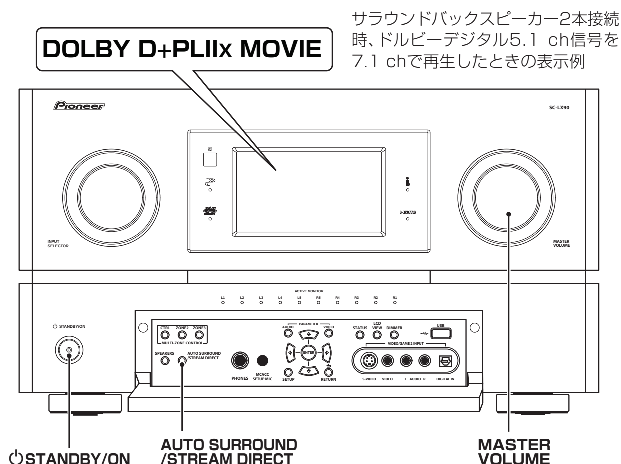
5 **DVDを再生する。**

再生する前にDVDプレーヤー、DVDソフトの確認をしてください。

① **DVDプレーヤーのデジタル音声出力**
ドルビーデジタル、DTS、および96 kHz PCMの音声信号が出力されるように設定してください。
※本機はMPEG音声に対応していません。PCM音声が出力されるように設定してください。
② **DVDソフトの音声の確認**
DVDソフトのメニュー画面やDVDプレーヤーの音声切換操作で音声(5.1 chサラウンドまたはドルビーサラウンドなど)を選んでください。

CDなどの場合はステレオ(2 ch)再生になります。

6 **適当な音量になるまでMASTER VOLUMEを回して音量を調整する。**



マルチチャンネル再生が正しくされているかをLCD表示で確認することができます。
たとえば、サラウンドバックスピーカーを2本使用しているときにDolby Digital 5.1 ch信号を再生すると**DOLBY D+PL IIx MOVIE**と表示され、DTS 5.1 ch信号を再生すると**DTS+Neo:6**と表示されます。
サラウンドバックスピーカーを使用していないときにDolby Digital信号を再生すると**Dolby Digital**と表示されます。
その他、詳しくは「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→149ページ)をご確認ください。入力信号とリスニングモードのとおりに正しく表示されないときは接続や設定をご確認ください。

何か問題はありましたか？

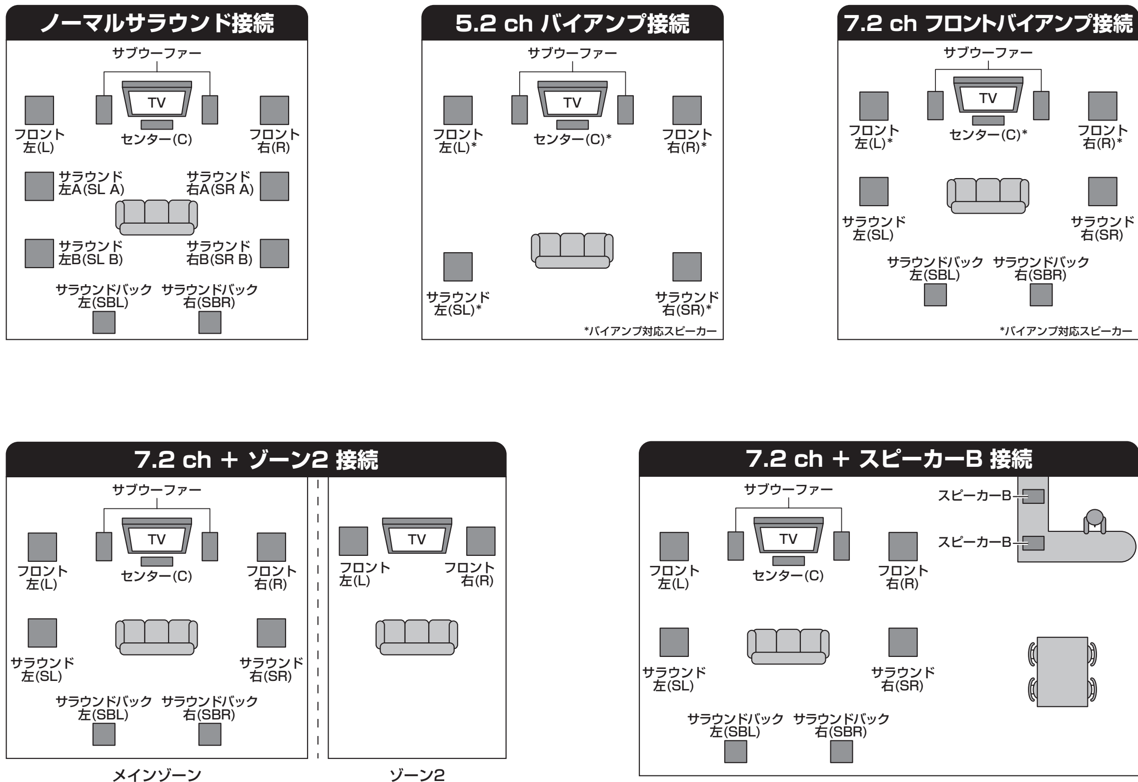
「故障かな？と思ったら」をご覧ください。
(→164ページ)

誤使用防止のため、取扱説明書は必ず最後までお読みください。

ホームシアター達人への道 ～より本機を使いこなす～

 いろいろなスピーカー配置/使用パターンを選ぶ

本アンプは10 chのスピーカー端子を装備しており、5つのスピーカー配置パターンからお好みの配置を選んで接続することができます。5つのパターンにはそれぞれ特長があり、さまざまなホームシアター空間を実現します。詳しくは「スピーカーの配置/使用パターンを選ぶ」(→26ページ)および「スピーカーの配置と接続を行う」(→28ページ)をご覧ください。



 より美しい映像で再生する

本アンプはDeepColor出力も可能なHDMI端子を装備しています。また、コンポーネント/Dビデオ端子およびSビデオ端子も装備しています。より美しい映像をお楽しみいただくには、それらのコードで入力機器およびテレビ(モニター)と接続します。

最高画質のHDMIで本機を接続する➡「HDMI対応機器の接続」(→32ページ)

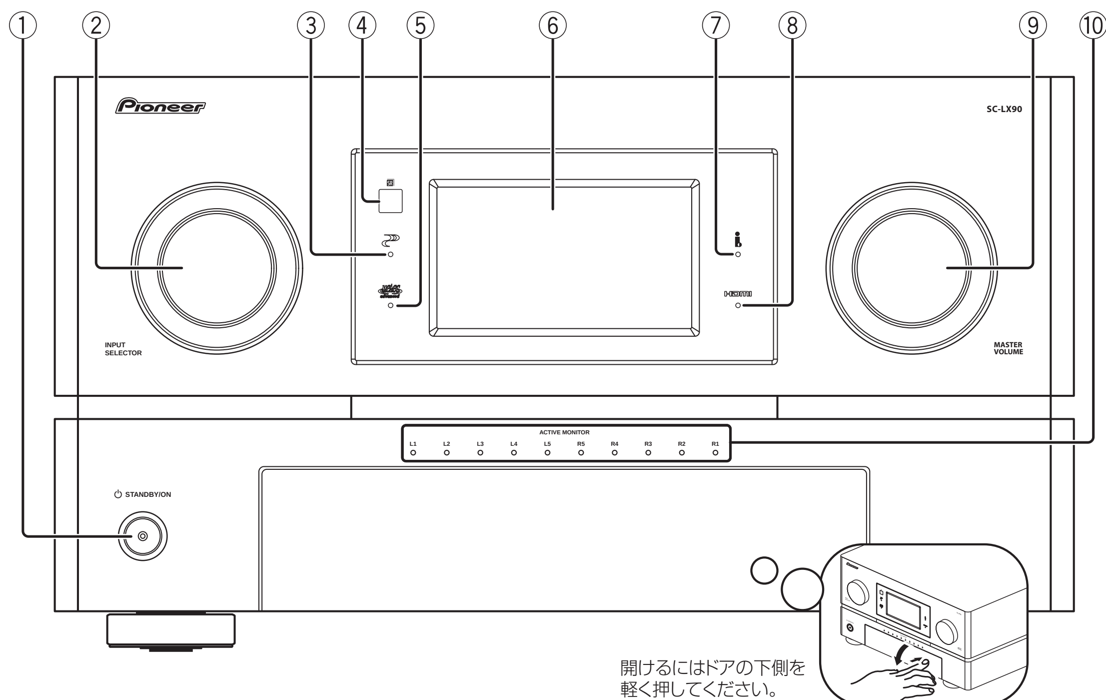
コンポーネント/Dビデオで本機を接続する➡「映像信号のコンポーネント/Dビデオ接続」(→37ページ)

ビデオコンバーターについて知る➡「映像機器の接続について(パイオニアビデオコンバーター)」(→31ページ)

 サラウンド再生をより楽しむ

本アンプは多彩なリスニングモードがあり、いろいろな音場効果を加えることができます。詳しくは「リスニングモードでいろいろな音を楽しむ」(→43ページ)をご覧ください。
また、より詳細な設定を行い、お好みに合わせた音場補正を行うこともできます。詳しくは「本機で設定できること」(→84ページ)をご覧ください。

フロントパネル



① ⏻STANDBY/ONボタン
本機の電源を入／切(スタンバイ)にします。

② INPUT SELECTORダイヤル
本機の入力を切り換えます。

③ PHASE CONTROLインジケーター
PHASE CONTROLまたはFULL BAND PHASE CONTROLモードをONに設定しているときに点灯します。(→47ページ)

④ リモコン受光部
下記「リモコンの操作範囲」参照。

⑤ Advanced MCACCインジケーター
MCACC MEMORYの1～6のいずれかが選択されているときに点灯します(→49ページ)。オーディオ調整機能の「ＥＱ」がＯＦＦに設定されているMCACC MEMORYのときは点灯しません(→52ページ)。

⑥ 表示部（フロントパネルディスプレイ）

⑦ i.LINKインジケーター
i.LINKで接続されている機器が選択されているときに点灯します。

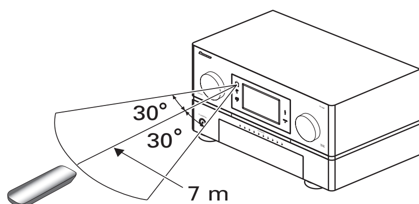
⑧ HDMIインジケーター
HDMIケーブルで接続されている機器が選択されているときに点灯します。

⑨ MASTER VOLUMEダイヤル
音量を調節します。

⑩ ACTIVE MONITORインジケーター
音声を出力可能なスピーカー端子のインジケーターが点灯します。

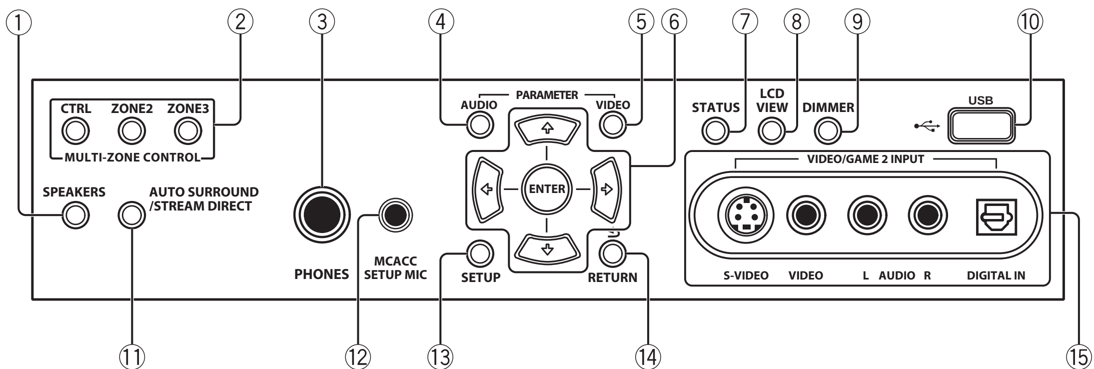
リモコンの操作範囲

本機をリモコンで操作するときは、リモコンをフロントパネルのリモコン信号受光部に向けてください。



- リモコンと本機との間に障害物があったり、リモコン受光部との角度が悪いと操作ができない場合があります。
- リモコン受光部に直射日光や蛍光灯などの強い光が当たると誤動作することがあります。
- 赤外線を出す機器の近くで本機を使用したり、赤外線を利用した他のリモコン装置を使用したりすると、本機が誤動作することがあります。逆にこのリモコンを操作すると、他の機器を誤動作させることもあります。

フロントパネルドア内部



① SPEAKERSボタン
スピーカーシステムを切り換えます。（→82ページ）

② MULTI-ZONE CONTROLボタン
別の部屋で本機につないだ機器を再生する機能（マルチゾーン機能）に使用します。（→122ページ）

CTRL
別の部屋（サブゾーン）で再生する入力ファンクションを選んだり、MASTER VOLUMEダイヤルで別の部屋の音量を調節します。

ZONE2
ZONE2をONにします。

ZONE3
ZONE3をONにします。

③ PHONES端子
ヘッドホン端子です。（→43ページ）

④ AUDIO PARAMETERボタン
オーディオ調整機能の設定になります。（→51ページ）

⑤ VIDEO PARAMETERボタン
ビデオ調整機能の設定になります。（→55ページ）

⑥ ⇧⇩⇦⇨/ENTERボタン
オーディオ調整機能やビデオ調整機能、システムセットアップの操作を行います。

⑦ STATUSボタン
選択/設定されている機能や入力信号などの情報をディスプレイに表示します。（→81ページ）

⑧ LCD VIEW
ディスプレイに表示させる情報を切り換えます。（→79ページ）

⑨ DIMMER
ディスプレイの明るさを切り換えます。（→80ページ）

⑩ USB端子
USBメモリーを接続します。（→59ページ）

⑪ AUTO SURROUND/STREAM DIRECT
リスニングモードをAUTO SURROUND、DIRECTまたはPURE DIRECTのいずれかに切り換えます。（→44ページ）

⑫ MCACC SETUP MIC端子
音場設定の自動測定のときに、付属のセットアップマイクを差し込みます。（→14ページ）

⑬ SETUPボタン
本機のシステムセットアップを表示します。（→87ページ）

⑭ RETURNボタン
システムセットアップで1つ前の画面に戻ります。

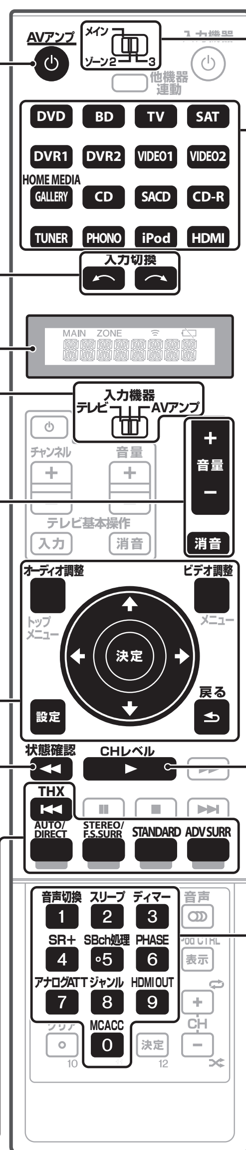
⑮ VIDEO/GAME 2 INPUT
ビデオカメラやゲーム機を接続するために、前面に備えた入力端子です。（→36ページ）

リモコン

アンプコントロール部、テレビコントロール部、他機器コントロール部の3つに分類されます。
本機のリモコンは各操作ボタンごとに以下のように色分けされています。
白＝アンプコントロール、テレビコントロール
青＝他機器コントロール

アンプコントロール部

本機を操作するときに使います。



AVアンプ ⏻ ボタン
本機の電源をONまたはOFF(スタンバイ状態)にします。

入力切換ボタン
本機の入力を切り換えます。

リモコン表示部
操作／設定時の表示画面です。

リモコン操作モード切り換えスイッチ
テレビ：テレビを操作するときに合わせます。(→118ページ)
入力機器：他機器を操作するときに合わせます。(→118ページ)
AVアンプ：本機の操作をするときに合わせます。

音量ボタン
+/−：本機の音量を調節します。
消音：消音します。

設定/調整ボタン
オーディオ調整：オーディオに関する調整を行います。(→51ページ)
ビデオ調整：映像に関する調整を行います。(→55ページ)
設定：システムセットアップを行います。(→87ページ)
⇧/⇩/⇦/⇨/決定/戻る：各種設定項目の選択/決定/戻る

状態確認ボタン
選択／設定されている機能や入力信号などの情報をディスプレイに表示します。(→81ページ)

リスニングモードボタン
(THX、AUTO/DIRECT、STEREO/F.S.SURR、STANDARD、ADV SURR):いろいろな音場効果を加えることができます。(→43ページ)

マルチゾーン用切り換えスイッチ
メインゾーン、ゾーン2、ゾーン3のそれぞれを操作するときに切り換えます。

マルチコントロールボタン
本機の入力を切り換えます。また他機器を操作するときのリモコンの操作モードを切り換えます。

CHレベルボタン
チャンネルを選択し、⇦/⇨でレベルを調整します。(→107ページ)

アンプ操作ボタン
音声切換：入力信号の種類(アナログ/デジタル/HDMIなど)を切り換えます。(→42ページ)
スリープ：スリープタイマーを設定します。(→80ページ)
ディマー：フロントパネル表示部の明るさを切り換えます。(→80ページ)
SR+：プラズマテレビとの連動モードを切り換えます。(→131ページ)
SBch処理:サラウンドバックチャンネルまたはバーチャルサラウンドバックチャンネルのON/AUTO/OFFを切り換えます。(→50ページ)
PHASE:PHASE CONTROLまたはFULL BAND PHASE CONTROLモードのON/OFFを切り換えます。(→47ページ)
アナログ ATT：アナログ信号が入力されている場合、入力信号のレベルが高すぎて音が歪んでいるときに押すと聴きやすくなります。(→79ページ)
ジャンル：再生中のソースに最適なADVANCED SURROUNDモードを自動で選択します(HDMIコントロール対応のパイオニア製DVDレコーダーをHDMIで接続しているときのみ。ただし、本機発売時点では対応機器がありませんので、この機能は使用できません)。
HDMI OUT：HDMI信号の出力端子を切り換えます。(→80ページ)
MCACC:MCACC MEMORYを選択します。(→49ページ)

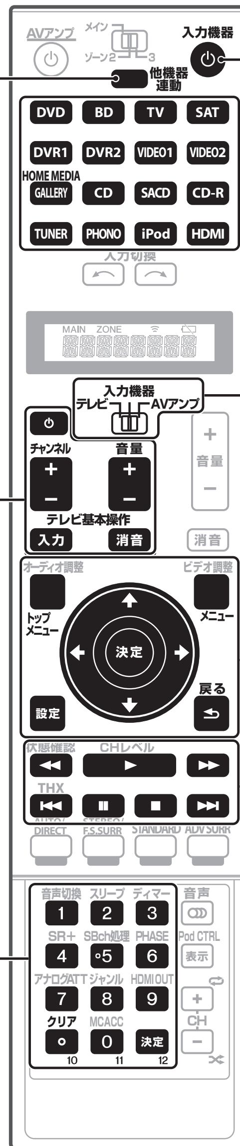
テレビ/他機器コントロール部

テレビや他機器を操作するときに使います。
他機器の操作について詳しくは「リモコンで他機器を操作する」(→118ページ)をご覧ください。

他機器連動ボタン
起動時連動および終了時連動操作を行います。(→135ページ)

入力機器⏻ボタン
他機器の電源を入/切します。

マルチコントロールボタン
リモコンの操作モードを切り換えます。



テレビ基本操作ボタン
⏻:テレビの電源を入/切します。
入力:テレビの入力を切り換えます。
チャンネル +/−:テレビのチャンネルを切り換えます。
音量+/−:テレビの音量を調節します。
消音:消音します。

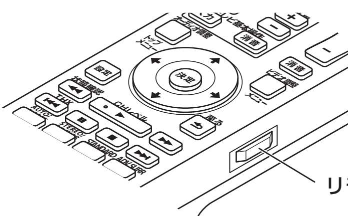
リモコン操作モード切り換えスイッチ
テレビ:テレビを操作するときに合わせます。(→118ページ)
入力機器:他機器を操作するときに合わせます。(→118ページ)
AVアンプ:本機の操作をするときに合わせます。

メニューボタン
各機器のメニュー画面の操作などをします。

操作ボタン
各機器の再生/停止などの操作や機能の切り換えなどをします。

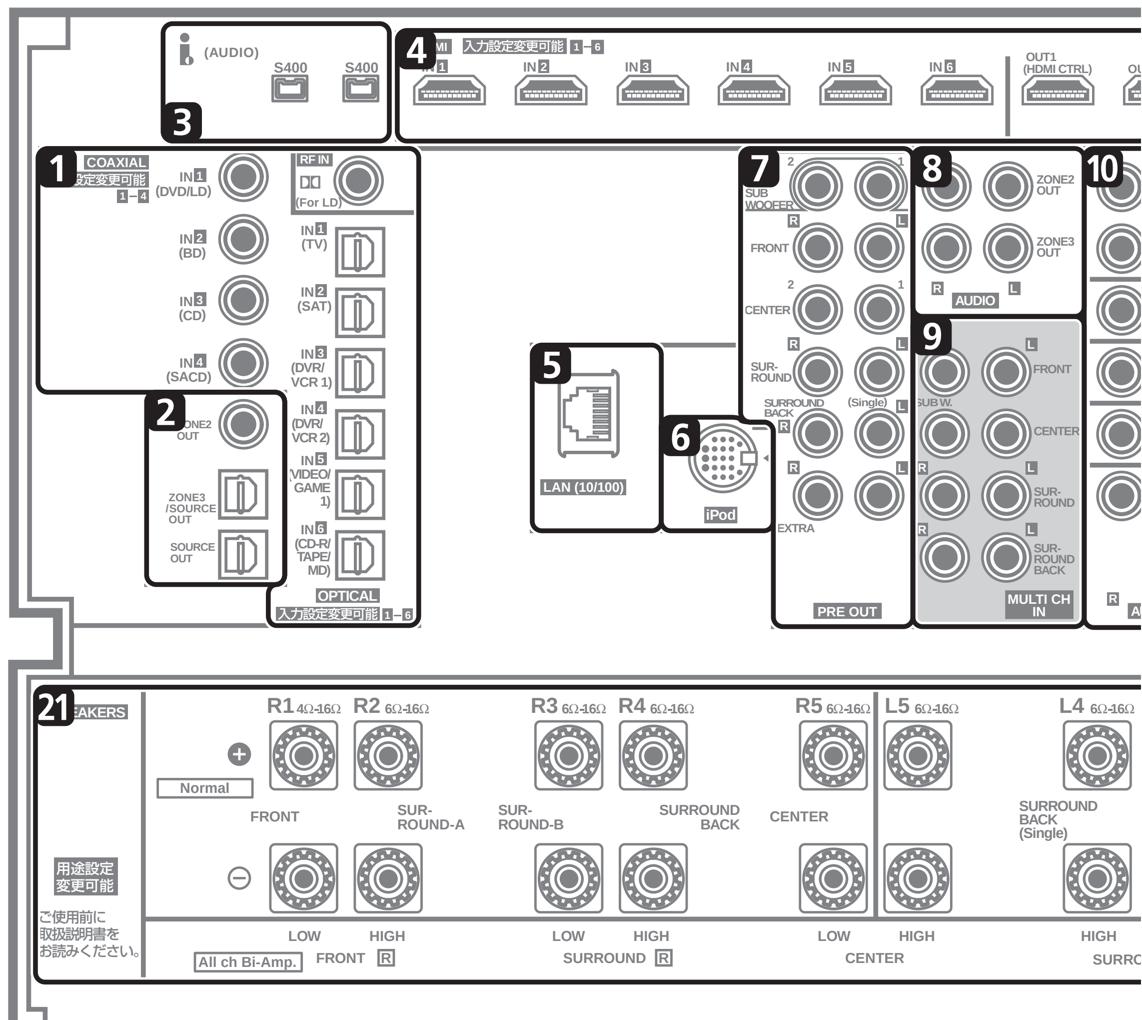
数字ボタン
トラック、チャプター、チャンネル選択に使用します。
クリア:入力した数字などをクリアします。
決定:入力した数字などを決定します。

リモコンボタンおよび表示部の照明



本機のリモコンは、ボタン操作したときやリモコンモード切り換えスイッチを切り換えたとき、一部のボタンおよびLCD表示部の照明が点灯します。リモコン照明ボタンを押すことでも点灯し、もう一度押すと消灯します。暗いお部屋で操作するときに便利です。
ボタン操作で照明を点灯させたくないときは、リモコン照明ボタンを5秒間押し続け、LCD画面に「LIGHT_M2」と表示させます。元に戻すときはリモコン照明ボタンを5秒間押し続け、LCD画面に「LIGHT_M1」と表示させます。

リアパネル



① **デジタル音声入力端子（→39ページ）**
端子に表示された機器と違う機器を接続するときはデジタル音声入力端子の設定が必要です。（→111ページ）

② **デジタル音声出力端子（→39ページ）**

③ **i.LINK端子（→77ページ）**

④ **HDMI入出力端子（→32、80ページ）**
HDMI1～6以外の入力で再生したいときは入力端子の設定が必要です。（→111ページ）
HDMI OUT2端子でモニターと接続するときは出力設定が必要です。（→80ページ）

⑤ **LAN（10/100）端子（→59ページ）**

⑥ **iPod入力端子（→73ページ）**
付属のiPodケーブルを接続します。

⑦ **プリアウト端子（→38ページ）**

⑧ **マルチゾーン音声出力端子（→122ページ）**

⑨ **マルチチャンネル入力端子（→76ページ）**

⑩ **アナログ音声入出力端子（→38ページ）**

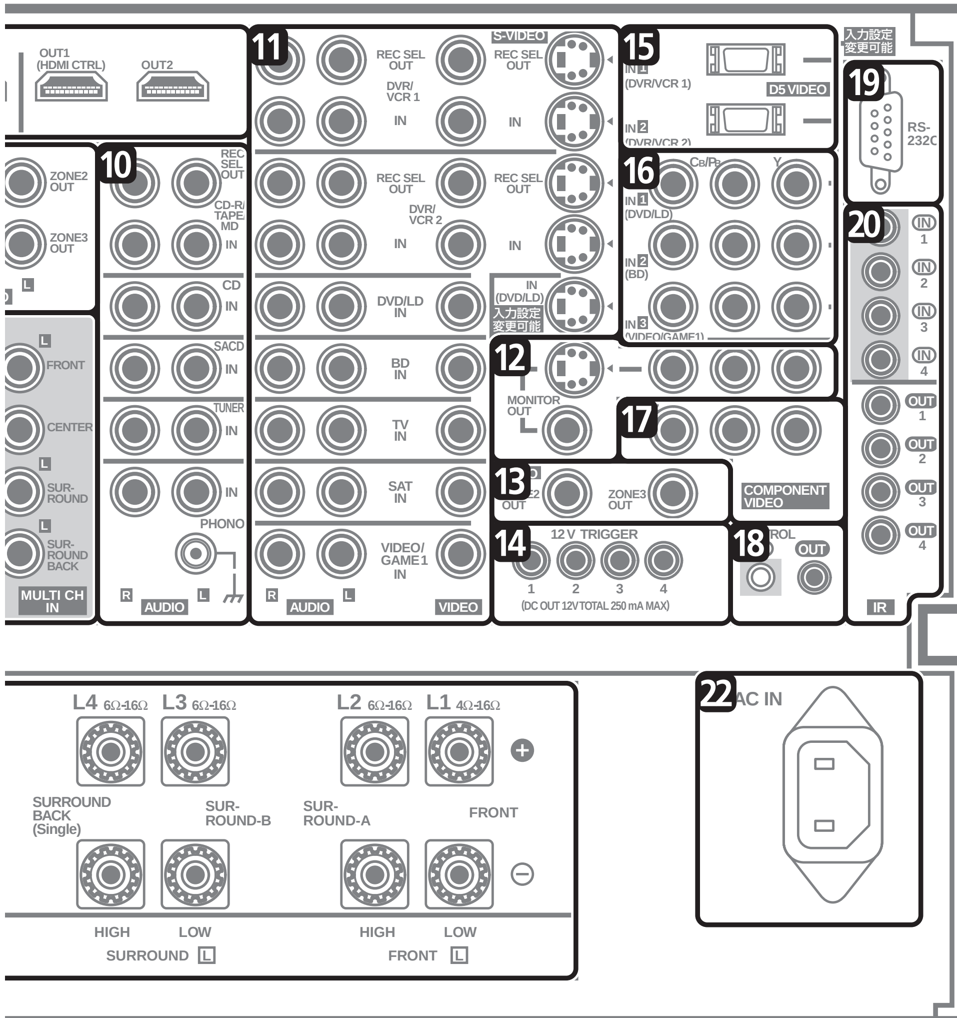
⑪ **アナログ音声入出力/ビデオ入出力端子（→33～36ページ）**

⑫ **モニター出力端子（→33ページ）**

⑬ **マルチゾーン映像出力端子（→122ページ）**

⑭ **12 V TRIGGER端子（→134ページ）**

⑮ **Dビデオ入力端子（→37ページ）**
端子に表示された機器と違う機器を接続するときはコンポーネント/D入力端子の設定が必要です。（→111ページ）



⑯ **コンポーネントビデオ入力端子(→37ページ)**
端子に表示された機器と違う機器を接続するときはコンポーネント/D入力端子の設定が必要です。(→111ページ)

⑰ **マルチゾーンコンポーネントビデオ出力端子(→122ページ)**

⑱ **コントロール入出力端子(→127ページ)**

⑲ **RS-232C端子**
PCと接続するための端子です。

⑳ **マルチゾーン用IR入出力端子(→127ページ)**

㉑ **スピーカー端子**
スピーカーインピーダンス6 Ω～16 Ω(R1とL1端子は4 Ω～16 Ω)のスピーカーを使用できます。

㉒ **AC IN端子(→40ページ)**
必ず一番最後に接続してください。

⚠ 注 意

製品の仕様により、本体部やリモコン（付属の場合）のスイッチを操作することで表示部がすべて消えた状態となり、電源プラグをコンセントから抜いた状態と変わらなく見える場合がありますが、電源の供給は停止していません。製品を電源から完全に遮断するためには、電源プラグ（遮断装置）をコンセントから抜く必要があります。製品はコンセントの近くで、電源プラグ（遮断装置）に容易に手が届くように設置し、旅行などで長期間ご使用にならないときは電源プラグをコンセントから抜いてください。火災の原因となることがあります。

スピーカーの接続

「ホームシアター入門」(→11ページ)で接続したスピーカー配置を変更するときのみ以下の説明をご覧ください。
また、新たにスピーカーの配置／使用パターンを選び、接続を変更するときは、接続後に「スピーカー出力端子の設定」(→90ページ)を行ってから、もう一度「オートMCACC」(→14ページ)を必ず行ってください。

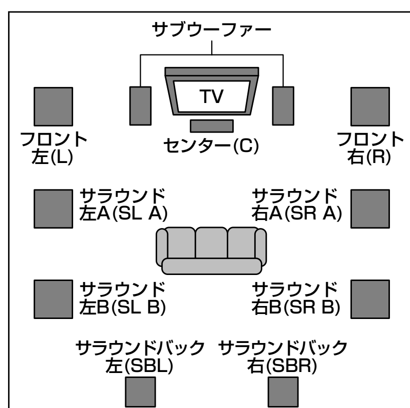
スピーカーの配置/使用パターンを選ぶ

本アンプは10 chのスピーカー端子を装備しており、お客様のお好みに合わせたスピーカー配置/使用パターンを選択できます。以下の5つのパターンによってスピーカーの接続端子が異なりますので、事前に1つを選んでから接続、設定、再生操作へとお進みください。
お手持ちのスピーカーが2 本だけの場合でも、すべてのパターンを選択することができます。今後サラウンド接続やバイアンプ接続したい場合は、今後使用してみたいパターンを選択し、スピーカー接続後や変更後に「オートMCACC」を行うことで最適な再生環境になります。

スピーカー配置/使用パターン1

ノーマルサラウンド接続(工場出荷時の設定)

サラウンド重視



特長：
ステレオ再生の2 chから、ホームシアターの基本となる5.1 chや7.1 ch、さらに本機では9.2 chまでの接続が可能です。9.1 ch(9.2 ch)接続では、サラウンドスピーカーを左右2本ずつ並べて配置し、映画館のようなスピーカー配置を実現します。また、SACDやDVDオーディオなどの高音質マルチチャンネル音楽ソースと映画の両方にこだわった使い方も可能です。

使用スピーカー：
最大で合計9本(フロント×2、センター×1、サラウンド×4、サラウンドバック×2)

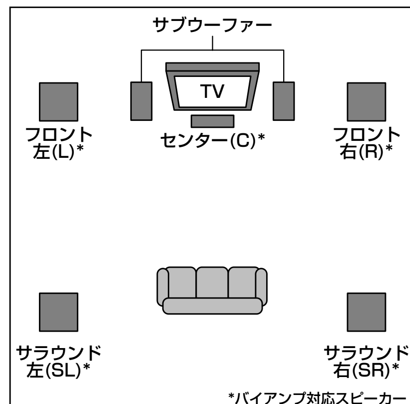
適したリスニングルーム：
どのようなリスニングルームにも対応できますが､9.2 chのスピーカー配置を行うときはスピーカーを配置できる広いスペースが理想です。

スピーカー出力端子の設定：[ノーマル]

スピーカー配置/使用パターン2

5.2 ch バイアンプ接続

高音質重視



特長：
フロント、センター、サラウンドの全chを高音質(バイアンプ)で再生します。各スピーカーそれぞれ2 ch分のパワーアンプを使用するバイアンプ方式のため、他のパターンに比べスピーカーの数が少なく、最大5.2 chまでの再生となりますが、最も高音質でお楽しみいただくことができます。

使用スピーカー：
バイアンプ対応スピーカーが合計5本(フロント×2、センター×1、サラウンド×2)

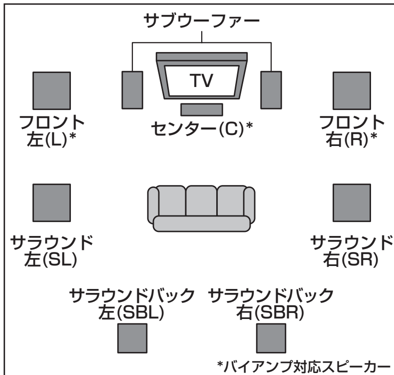
適したリスニングルーム：
どのようなリスニングルームにも対応できます。

スピーカー出力端子の設定：[All Ch Bi-Amp]

スピーカー配置/使用パターン3

サラウンド＋高音質

7.2 ch フロントバイアンプ接続



特長：
フロント、センタースピーカーを高音質（バイアンプ）で再生しつつ、最大7.2 chまでのサラウンド再生を実現します。

使用スピーカー：
合計7本（フロント（バイアンプ対応）×2、センター（バイアンプ対応）×1、サラウンド×2、サラウンドバック×2）

適したリスニングルーム：
リスニングポジションの後ろまたは上にサラウンドバックスピーカーを配置できるスペースがある

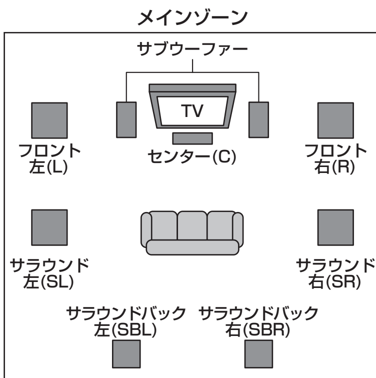
スピーカー出力端子の設定：[Front Bi-Amp]

スピーカー配置/使用パターン4

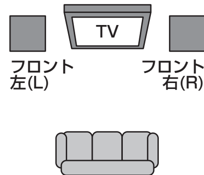
7.2chサラウンド＋マルチゾーン

7.2 ch ＋ゾーン2 接続

メインゾーン



ゾーン2



特長：
メインゾーンで最大7.2 ch再生を行いつつ、ゾーン2でメインゾーンとは別の機器を再生します。

使用スピーカー：
合計9本（フロント×4、センター×1、サラウンド×2、サラウンドバック×2）

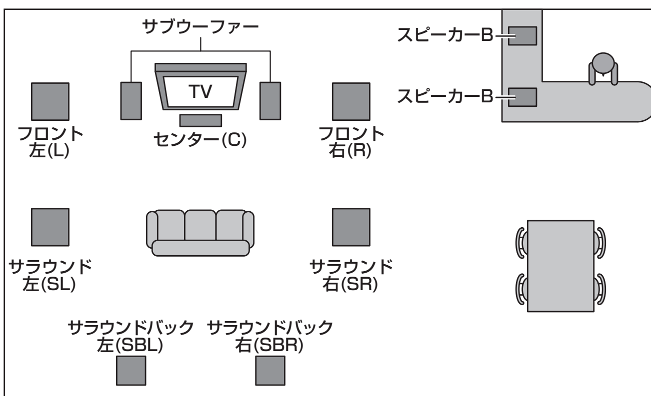
適したリスニングルーム：
リスニングルームが2つある環境など

スピーカー出力端子の設定：
[7.2ch ＋ ZONE 2]

スピーカー配置/使用パターン5

7.2chサラウンド＋スピーカーB

7.2 ch ＋スピーカーB 接続



特長：
通常のリスニングルームで最大7.2 ch再生を行いつつ、別の場所（キッチンなど）でも同じ機器の音声をステレオ再生することができます。また、映画用（マルチチャンネル再生）と音楽用（ステレオ再生）で別のフロントスピーカーを使用することもできます。

使用スピーカー：
合計9本（フロント×4、センター×1、サラウンド×2、サラウンドバック×2）

適したリスニングルーム：
メインのリスニングルーム＋キッチンなどの環境

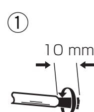
スピーカー出力端子の設定：
[7.2ch ＋ Speaker B]

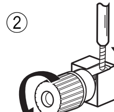
スピーカー配置/使用パターンが決まりましたら、 次ページ「スピーカーの配置と接続を行う」へお進みください。

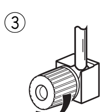
スピーカーの配置と接続を行う

各スピーカーは接続の前に配置しておくことをお勧めします。接続には市販のスピーカーコードをご使用ください。機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

■SPEAKER（スピーカー）端子

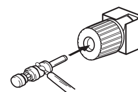






① 線をねじる。
② スピーカー端子を緩め、スピーカーコードを差し込む。
③ スピーカー端子を締めつける。

バナナプラグを接続することもできます（詳しくはプラグの説明書をお読みください。）

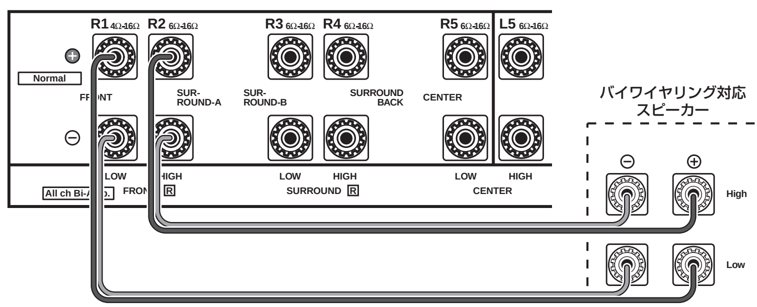



注意

- インピーダンスが6 Ω～16 Ω（R1とL1端子は4 Ω～16 Ω）のスピーカーをご使用ください。
- スピーカーと本機の＋／－を合わせて正しく接続してください。
- スピーカーコードを接続するときは、芯線をしっかりねじり、スピーカー端子からはみ出していないことを確認してください。芯線がリアパネルに接触したり、＋／－が接触すると、保護回路が働いて電源がスタンバイ状態になることがあります。

■バイアンプ接続について

バイアンプ接続を行うときはバイワイヤリング対応スピーカーをBi-Amp接続する必要があります。HIGHとLOWを合わせて正しく接続してください。



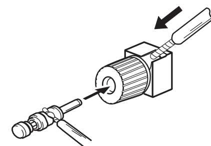
ネットワークが着脱できるスピーカーの場合、ネットワークが外れた状態では効果が得られませんのでご注意ください。


注意

スピーカーのBi-Amp接続をするときはアンプへの悪影響を防ぐため、スピーカーに付属されているHigh-Lowのショート金具は必ず外してください。
詳しくはスピーカーの取扱説明書もご覧ください。

Bi-wire（ バイワイヤ接続の場合）

本機では、Bi-AmpではなくBi-wireでの接続も可能です。スピーカー端子に、バイワイヤリング対応スピーカーのHighとLowの2本を並列に接続してください。

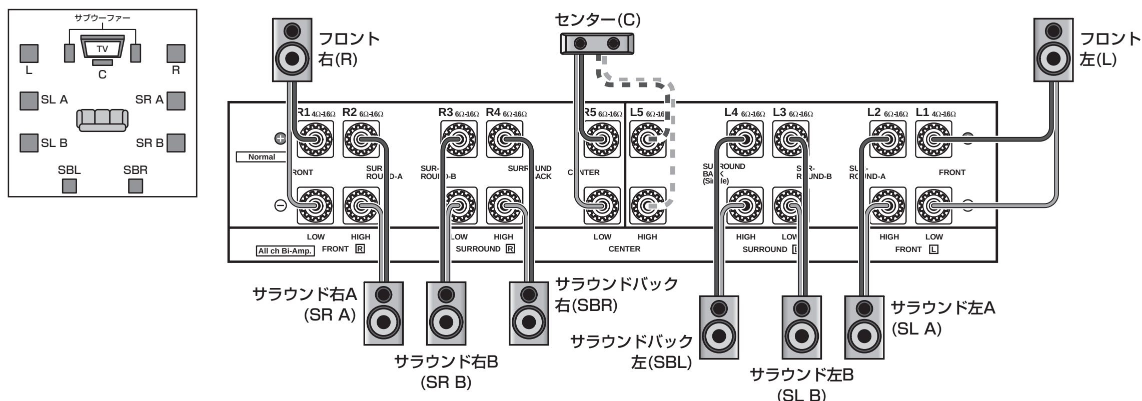

1本はバナナプラグを使うと便利です


注意

この方法で異なる2つのスピーカーを接続しないでください。

ノーマルサラウンド接続(工場出荷時の設定)

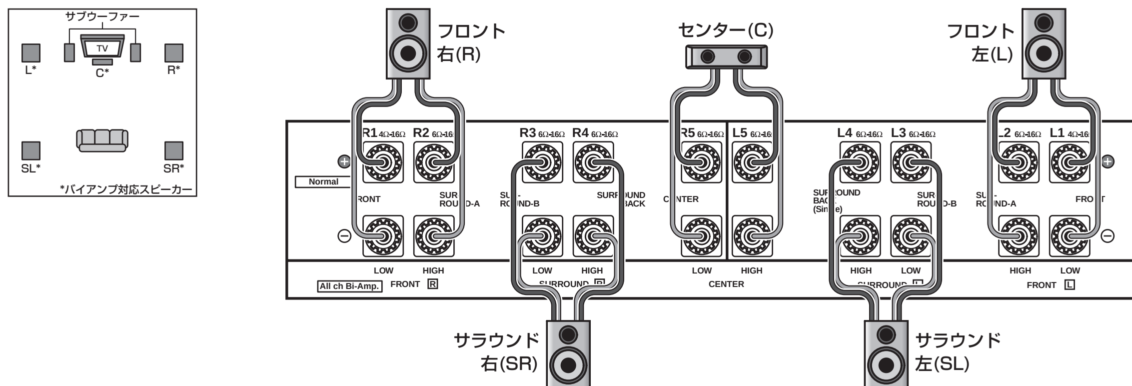
サラウンドバックスピーカーを1本だけ接続するときはL4(Single)端子側に接続してください。
サラウンドスピーカーを2本しか接続しないときは、L2(SL A)とR2(SR A)端子に接続してください。



センタースピーカーがバイアンプに対応しているときは、バイアンプ接続を行うことで高音質な再生を行うことができます。

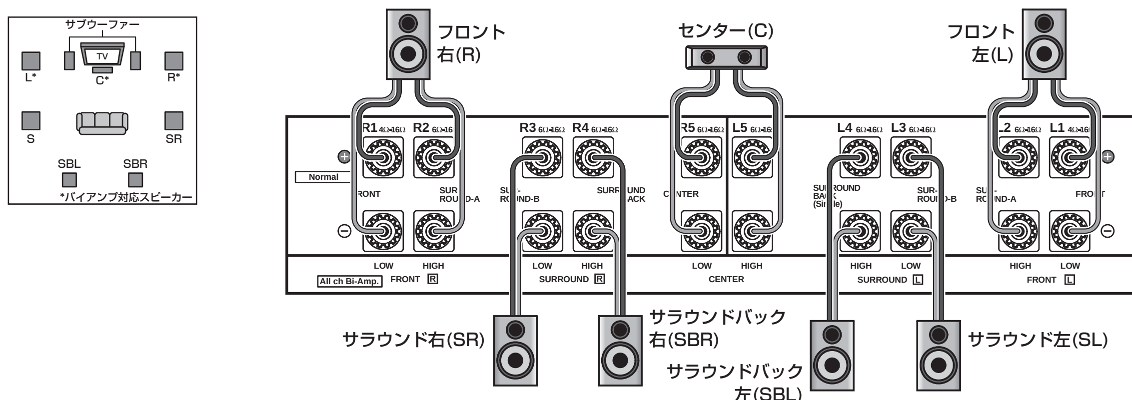
5.2 ch バイアンプ接続

スピーカーはすべてバイアンプ対応スピーカーをバイアンプ接続してください。



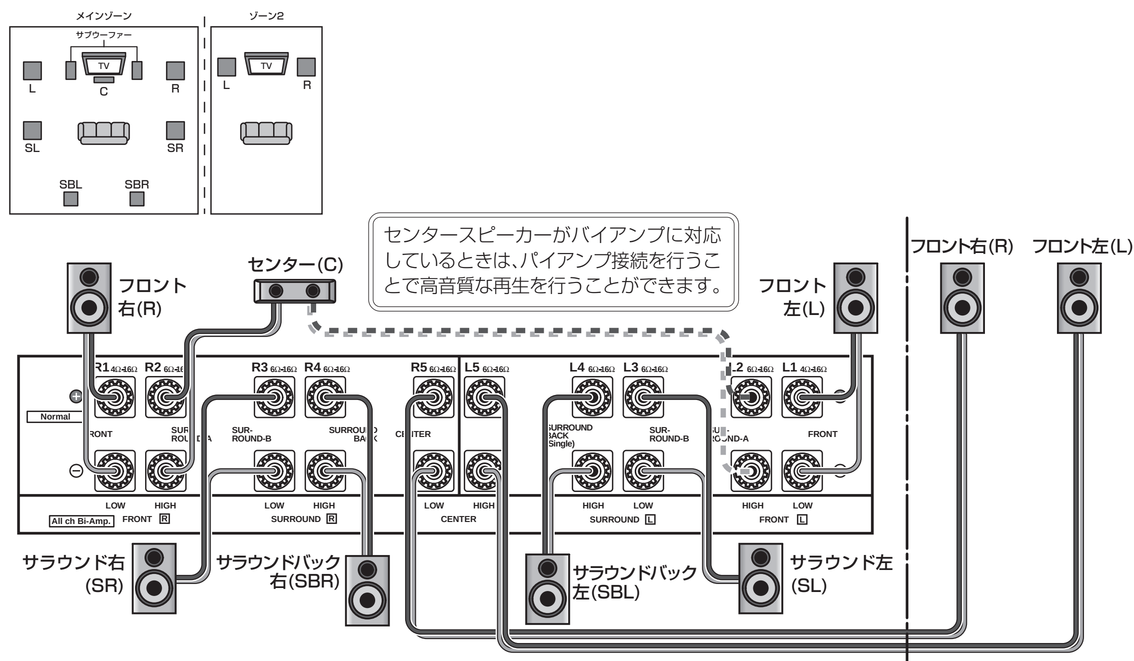
7.2 ch フロントバイアンプ接続

サラウンドバックスピーカーを1本だけ接続するときはL4(Single)端子側に接続してください。
フロント、センタースピーカーはバイアンプ対応スピーカーをバイアンプ接続してください。



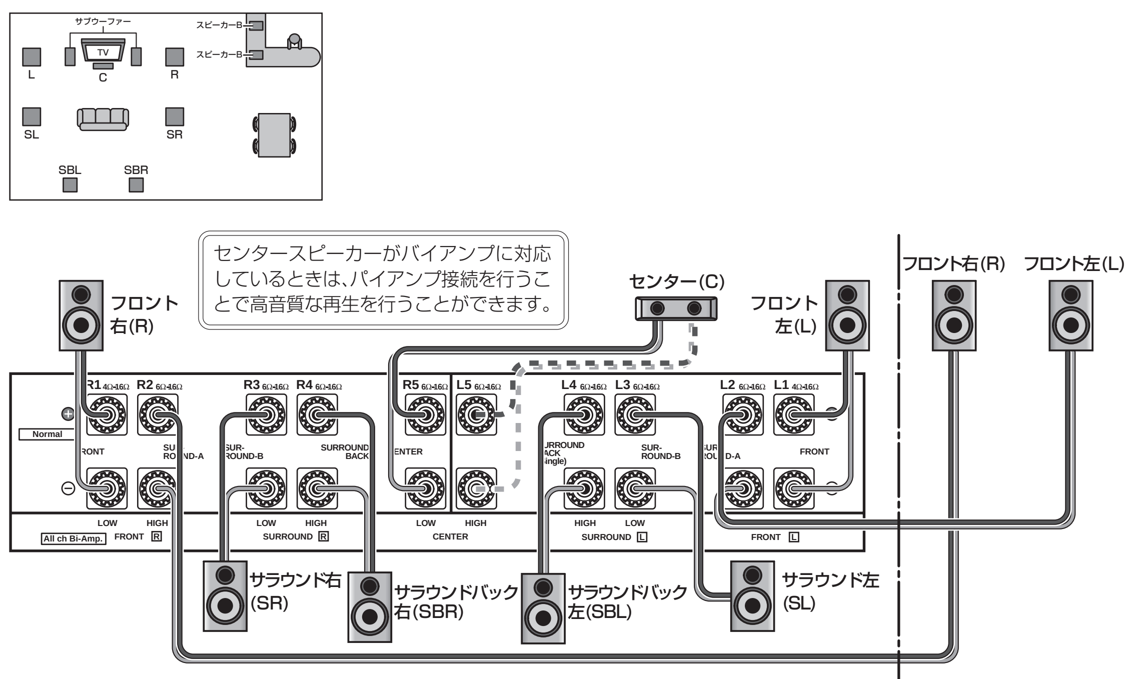
7.2 ch +ゾーン2 接続

サラウンドバックスピーカーを1本だけ接続するときはL4(Single)端子側に接続してください。



7.2 ch +スピーカーB 接続

サラウンドバックスピーカーを1本だけ接続するときはL4(Single)端子側に接続してください。



映像機器の接続について（パイオニアビデオコンバーター）

本機は入力された映像信号を異なる種類の信号に変換できるビデオコンバーターを搭載していますので、以下のように映像コードの組み合わせを選ぶことができます。各接続コード/ケーブルについては「接続コードについて」（→148ページ）をご覧ください。

映像をテレビに表示する

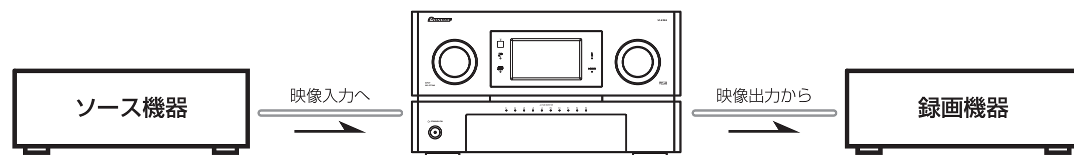
ソース機器からの映像信号について、出力可能な出力端子は以下のとおりです。

ソース機器
本機の
映像入力へ
本機の
モニター出力から
テレビ
（モニター）

ソース機器との接続端子
テレビモニターとの接続端子
高画質
HDMI IN
COMPONENT VIDEO IN
または
D5 VIDEO IN
S-VIDEO IN
VIDEO IN
HDMI OUT
COMPONENT VIDEO
MONITOR OUT
S-VIDEO
MONITOR OUT
VIDEO
MONITOR OUT
映像出力可能
D1（480i）信号のみ映像出力可能

映像を録画する

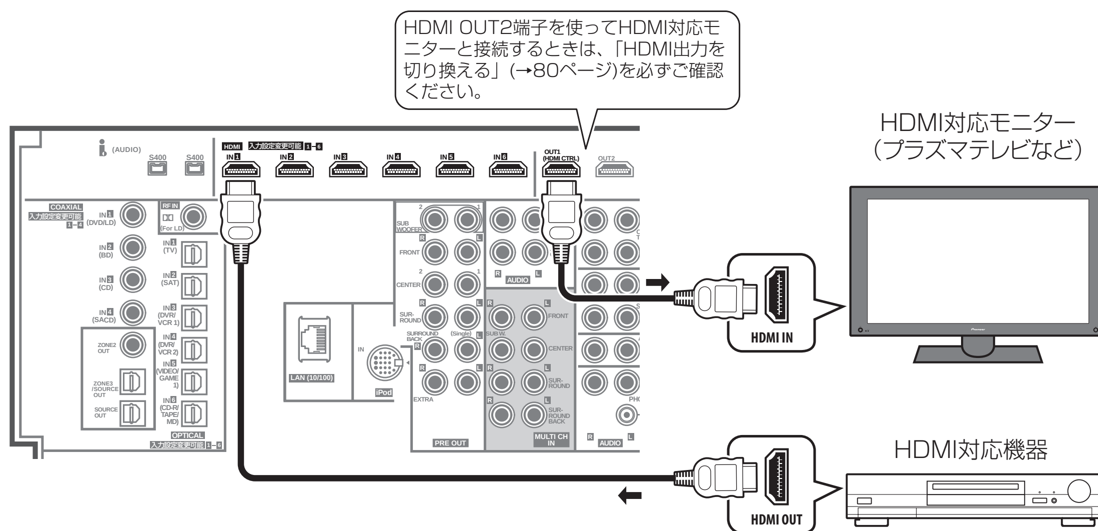
ソース機器からの映像信号を録画するには必ず同じコードで接続します。



- テレビによっては、Sビデオ入力とコンポジット入力の両方を接続していると、信号の有無にかかわらず常にSビデオ入力が優先され、コンポジット端子でのみ接続している機器の映像を見ることができない場合があります。詳しくはテレビの取扱説明書をご覧ください。
- 入力された信号によっては、ビデオコンバーターが働かずに映像が出力されないことがあります。その場合はビデオコンバーターの設定をOFFにして、入力機器とテレビの両方を同じタイプのコードで接続してください。（→56ページ）

HDMI対応機器の接続

HDMIとはHigh-Definition Multimedia Interfaceの略です。パソコンディスプレイなどで使われているDVI (Digital Video Interface)端子を拡張したテレビ向けのデジタルインターフェースの規格です。HDMI対応機器とHDMI対応のプラズマテレビなどを接続することで、圧縮されていないデジタル映像と音声(ドルビーデジタル（ドルビーデジタルプラスやドルビーTrueHDも含む）、DTS（DTS-HD Master Audioも含む）、MPEG-2 AAC、SACDまたはリニアPCM)を1本のケーブルで伝送できます。接続にはHDMIケーブルをお使いください。
HDMI INに入力された映像信号にはビデオコンバーター機能が働きませんので、必ずHDMI OUTからHDMI対応のプラズマディスプレイなどに接続してください。



HDMI IN 1に接続したHDMI機器を再生するときは、HDMIボタンまたは入力切換ボタンで本機の入力をHDMI IN 1に切り換えます（本体のINPUT SELECTORでも選ぶことができます）。また、HDMI INに入力された映像/音声信号を他の入力に割り当てることができます。詳しくは「入力端子の設定」（→111ページ）をご覧ください。

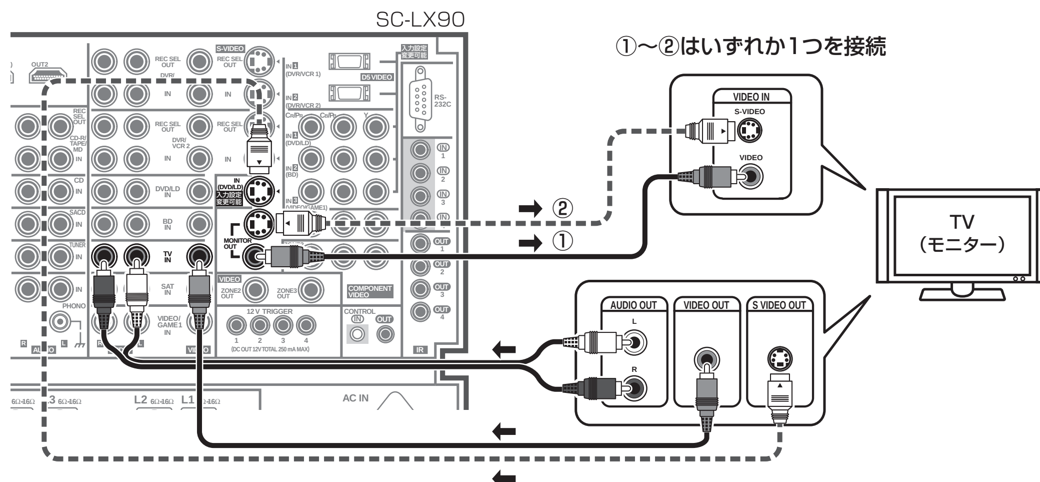
本機はHDMI機器との接続を目的として設計されています。DVI機器に接続した場合、DVI機器によっては正常に動作しない場合があります（HDCPに対応していないDVI機器（パソコンのディスプレイなど）には接続できません）。
本機のHDMIインターフェースは以下の規格に基づいて設計されています。
- High-Definition Multimedia Interface Specification

HDMI、HDMIロゴ、およびHigh-Definition Multimedia InterfaceはHDMI Licensing LLCの商標または登録商標です。

- HDCPに対応していない機器を接続すると「HDCP ERROR」と表示されます。HDCPに対応した機器を接続したときにもこの表示が出ることがありますが、映像がとぎれなく出力されれば不具合ではありません。
- SACD、ドルビーデジタルプラス、ドルビーTrueHD、DTS-HD Master Audio信号にも対応しておりますが、出力機器がそれらのフォーマットに対応している必要があります。

TV(モニター)の接続

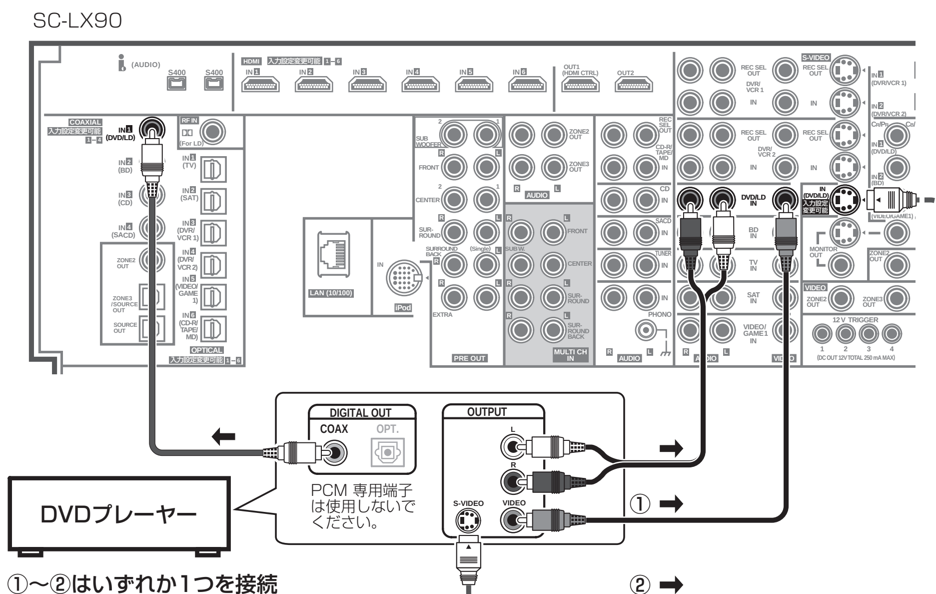
「映像機器の接続について」(→31ページ)をご覧になり、接続方法を決めてください。
各接続コード/ケーブルについては「接続コードについて」(→148ページ)をご覧ください。
HDMI端子で接続するときは「HDMI対応機器の接続」(→32ページ)を、コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/Dビデオ接続」(→37ページ)をご覧ください。
Sビデオ端子で接続するときは、入力端子の設定が必要です(→111ページ)。



TV(モニター)の1つの入力に、Sビデオやコンポーネントビデオなど数種類のコードを複数同時に接続すると、映像が乱れたり汚く映ることがあります。詳しくはTV(モニター)の取扱説明書をご覧ください。

DVDプレーヤーの接続

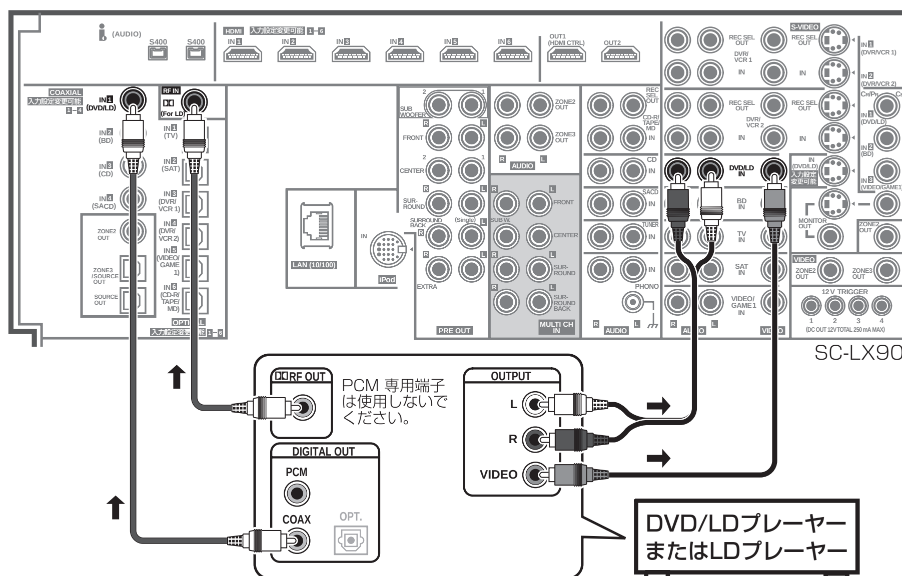
「映像機器の接続について」(→31ページ)をご覧になり、接続方法を決めてください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コードについて」(→148ページ)をご覧ください。
HDMI端子で接続するときは「HDMI対応機器の接続」(→32ページ)を、コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/Dビデオ接続」(→37ページ)をご覧ください。



- 図とは異なる方法でデジタル接続するときは、入力端子の設定が必要です(→111ページ)。

DVD/LDコンパチブルプレーヤーまたはLDプレーヤーの接続

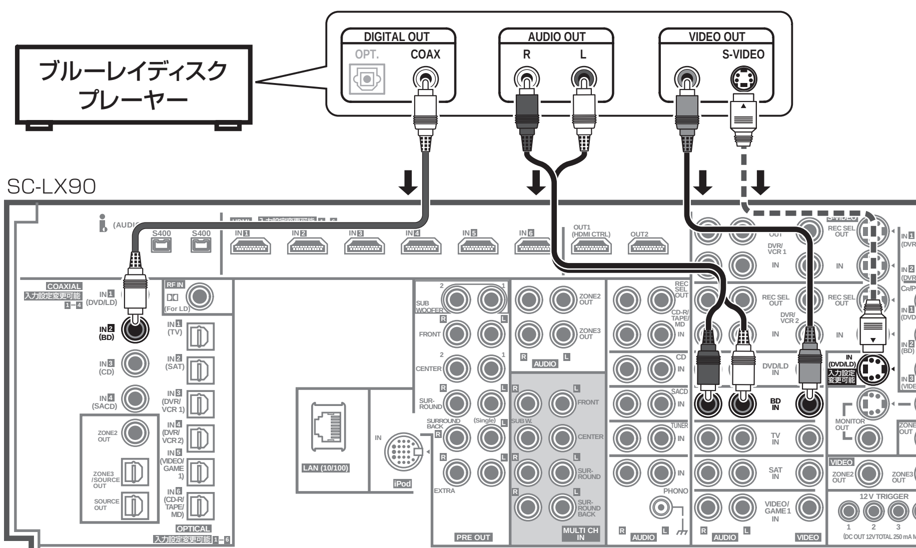
DVD/LDプレーヤーまたはLDプレーヤーにDDRF出力端子がある場合は、RF IN端子も接続します。これはドルビーデジタルLDソフトの再生に必要です。また、LDのアナログオーディオ信号はデジタル出力されませんのでアナログオーディオ接続も行ってください。



- 図とは異なる方法でデジタル接続するときは、入力端子の設定が必要です（→111ページ）。
- RF IN端子の接続は同軸ケーブルで行います。
- RF IN端子に接続した機器を再生するときは、リモコンの音声切換ボタンで入力信号をDDRFに切り換えてください（DVD/LD入力以外でDDRF信号を楽しむためには入力端子の設定が必要です）（→111ページ）。

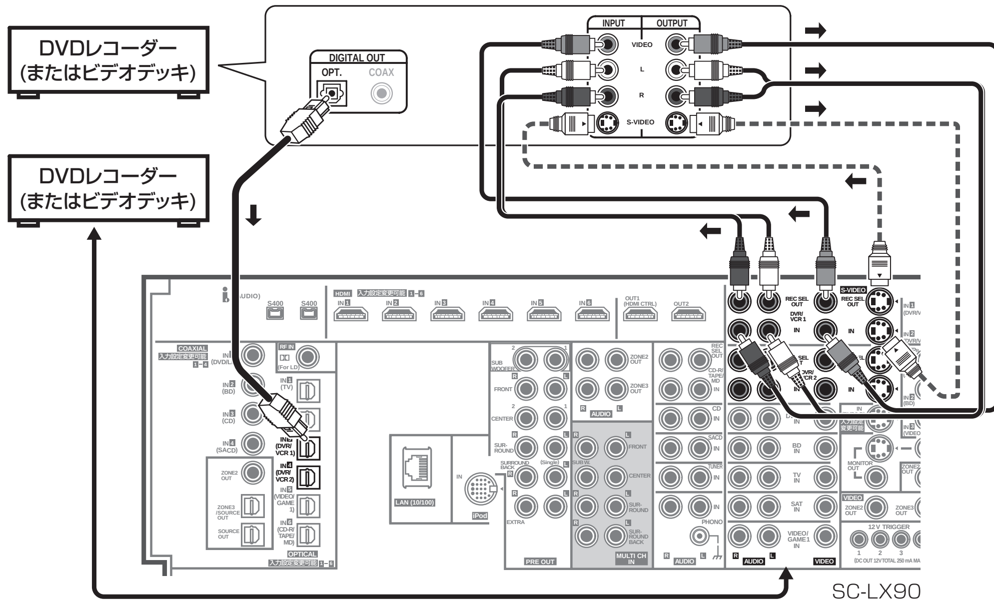
ブルーレイディスクプレーヤーの接続

「映像機器の接続について」（→31ページ）をご覧になり、接続方法を決めてください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コードについて」（→148ページ）をご覧ください。
HDMI端子で接続するときは「HDMI対応機器の接続」（→32ページ）を、コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/Dビデオ接続」（→37ページ）をご覧ください。
下図と異なる方法でデジタル接続するときは、入力端子の設定が必要です（→111ページ）。
Sビデオ端子で接続するときは、入力端子の設定が必要です（→111ページ）。



DVDレコーダーやビデオデッキの接続

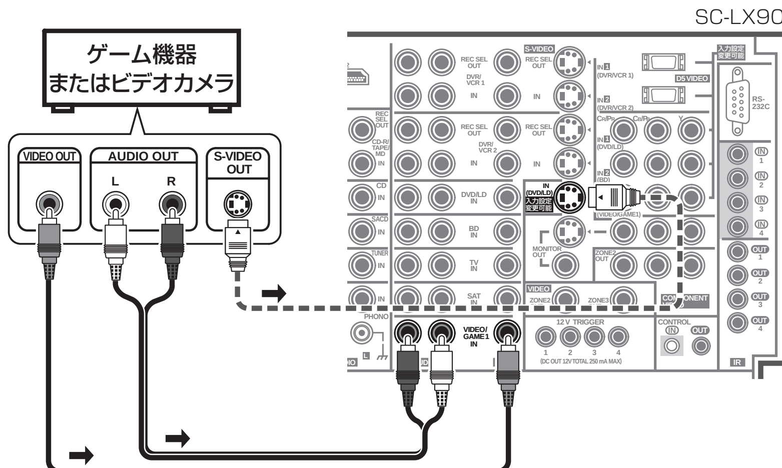
「映像機器の接続について」（→31ページ）をご覧になり、接続方法を決めてください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コードについて」（→148ページ）をご覧ください。
HDMI端子で接続するときは「HDMI対応機器の接続」（→32ページ）を、コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/Dビデオ接続」（→37ページ）をご覧ください。
録画をすることを前提とする場合は、ソース機器と録画機器の映像信号をコンポジットかSビデオのどちらかに統一して接続する必要があります。また音声信号についてもアナログ接続する必要があります。



DVR/VCR 2端子の接続は、DVR/VCR 1と同様に接続してください。

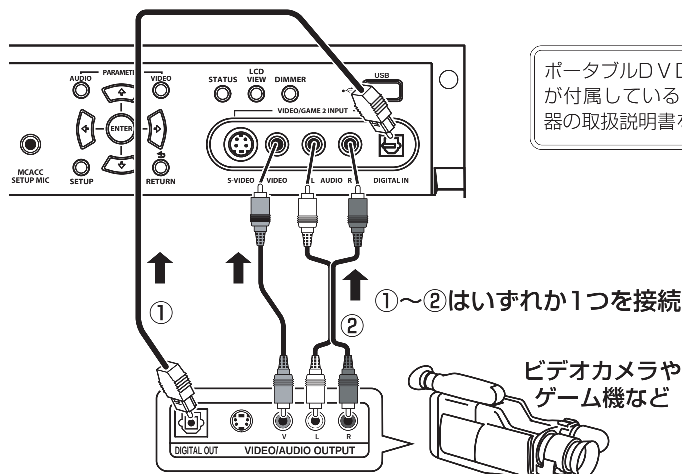
ビデオカメラやゲーム機器の接続

「映像機器の接続について」（→31ページ）をご覧になり、接続方法を決めてください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コードについて」（→148ページ）をご覧ください。
HDMI端子で接続するときは「HDMI対応機器の接続」（→32ページ）を、コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/Dビデオ接続」（→37ページ）をご覧ください。
Sビデオ端子で接続するときは、入力端子の設定が必要です（→111ページ）。



前面端子を使った接続

フロントパネルドア内のVIDEO/GAME 2 INPUTを使って各機器を接続できます。この機器を再生するときは、入力ファンクション選択でVIDEO 2を選んでください。

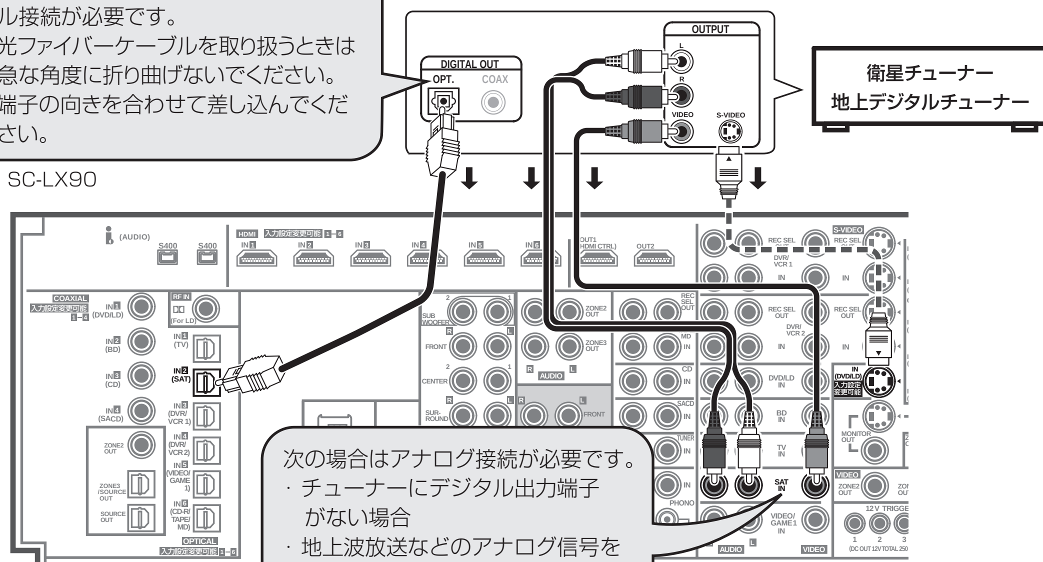


ポータブルＤＶＤプレーヤーなどは、専用の接続コードが付属している場合があります。詳しくは接続する機器の取扱説明書をご覧ください。

地上デジタル/衛星チューナーの接続

「映像機器の接続について」(→31ページ)をご覧になり、接続方法を決めてください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コードについて」(→148ページ)をご覧ください。
HDMI端子で接続するときは「HDMI対応機器の接続」(→32ページ)を、コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/Dビデオ接続」(→37ページ)をご覧ください。
Sビデオ端子で接続するときは、入力端子の設定が必要です(→111ページ)。
同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は入力端子の設定が必要です(→111ページ)。

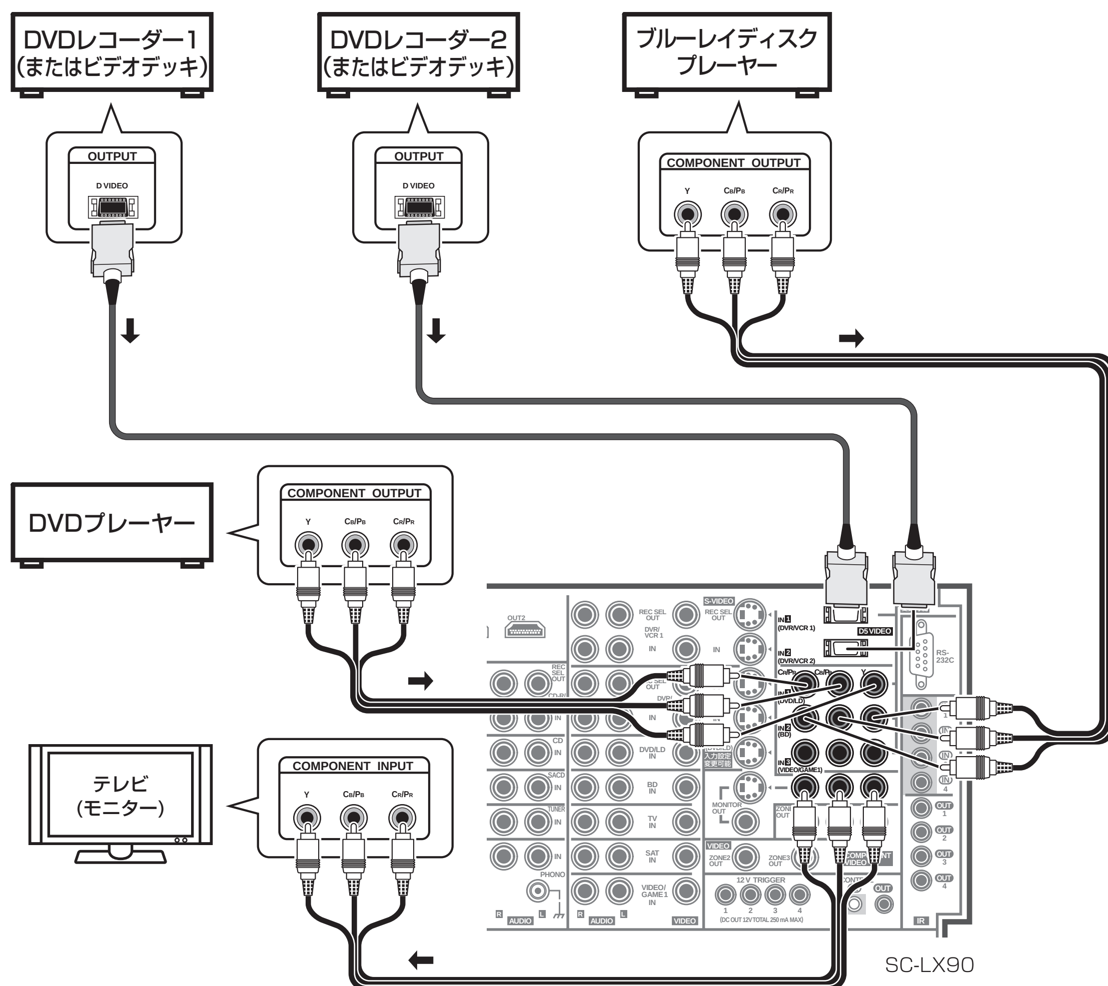
MPEG-2 AAC信号を再生するにはデジタル接続が必要です。
・光ファイバーケーブルを取り扱うときは急な角度に折り曲げないでください。
・端子の向きを合わせて差し込んでください。



次の場合はアナログ接続が必要です。
・チューナーにデジタル出力端子がない場合
・地上波放送などのアナログ信号を本機を通して楽しみたいとき

映像信号のコンポーネント/Dビデオ接続

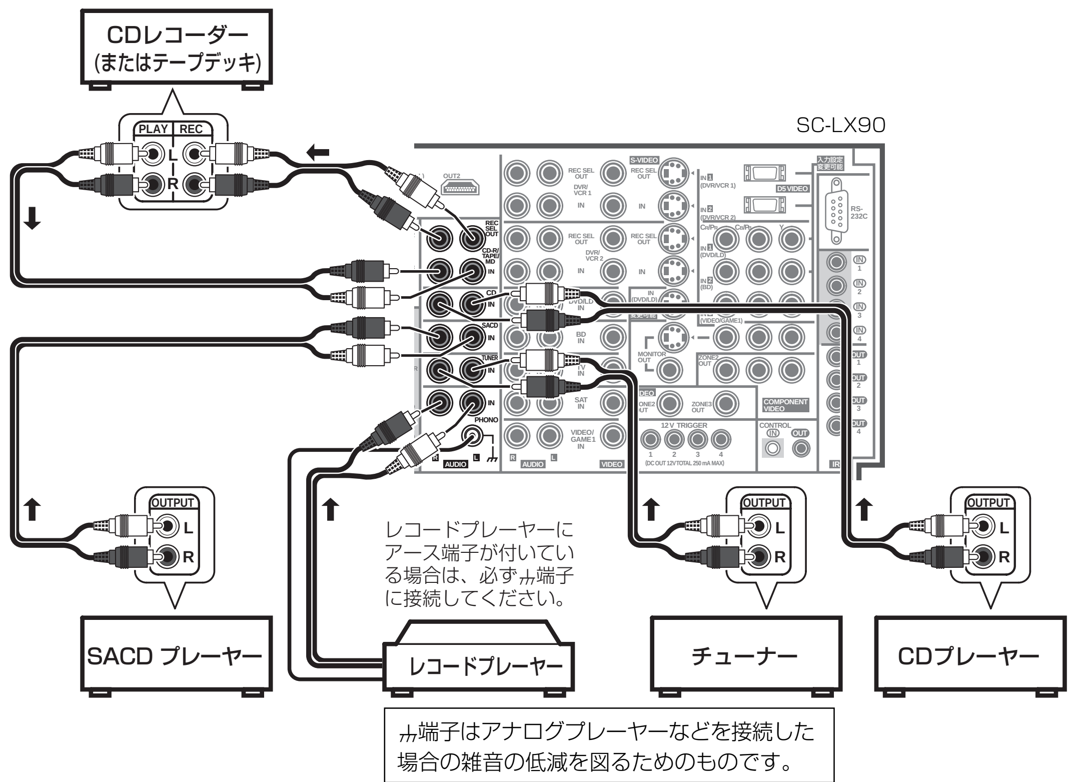
コンポーネント端子やD端子で接続すると、コンポジットビデオやSビデオ端子で接続したときよりも高品位な映像品質をお楽しみいただくことができます。「映像機器の接続について」(→31ページ)をご覧になり、接続方法を決めてください。コンポーネント端子やD端子で接続するときは、入力端子の設定が必要です(→111ページ)。録画をすることを前提とする場合は、ソース機器と録画機器の映像信号をコンポジットかSビデオのどちらかに統一して接続する必要があります。また音声信号についてもアナログ接続する必要があります。



- コンポーネント端子やD端子で接続するときは、DVDプレーヤー側でコンポーネントビデオの出力設定が必要な場合があります。

アナログ音声機器の接続

デジタル出力のあるCDプレーヤーやCDレコーダーでは、さらに「デジタル音声機器の接続」(→39ページ)もできます。



注意 PHONO端子にレコードプレーヤー以外の機器またはイコライザー内蔵レコードプレーヤーを接続しないでください。大音量を出力し、スピーカーなどを破損する恐れがあります。

カセットデッキを設置する場所によっては、再生したときに雑音などが発生する場合があります。これはアンプのトランスによるリーケージフラックス(漏れ磁束)の影響によるものです。このようなときには、設置する場所を変えるか、アンプから離して設置してください。

プリアウトを使ったパワーアンプの接続

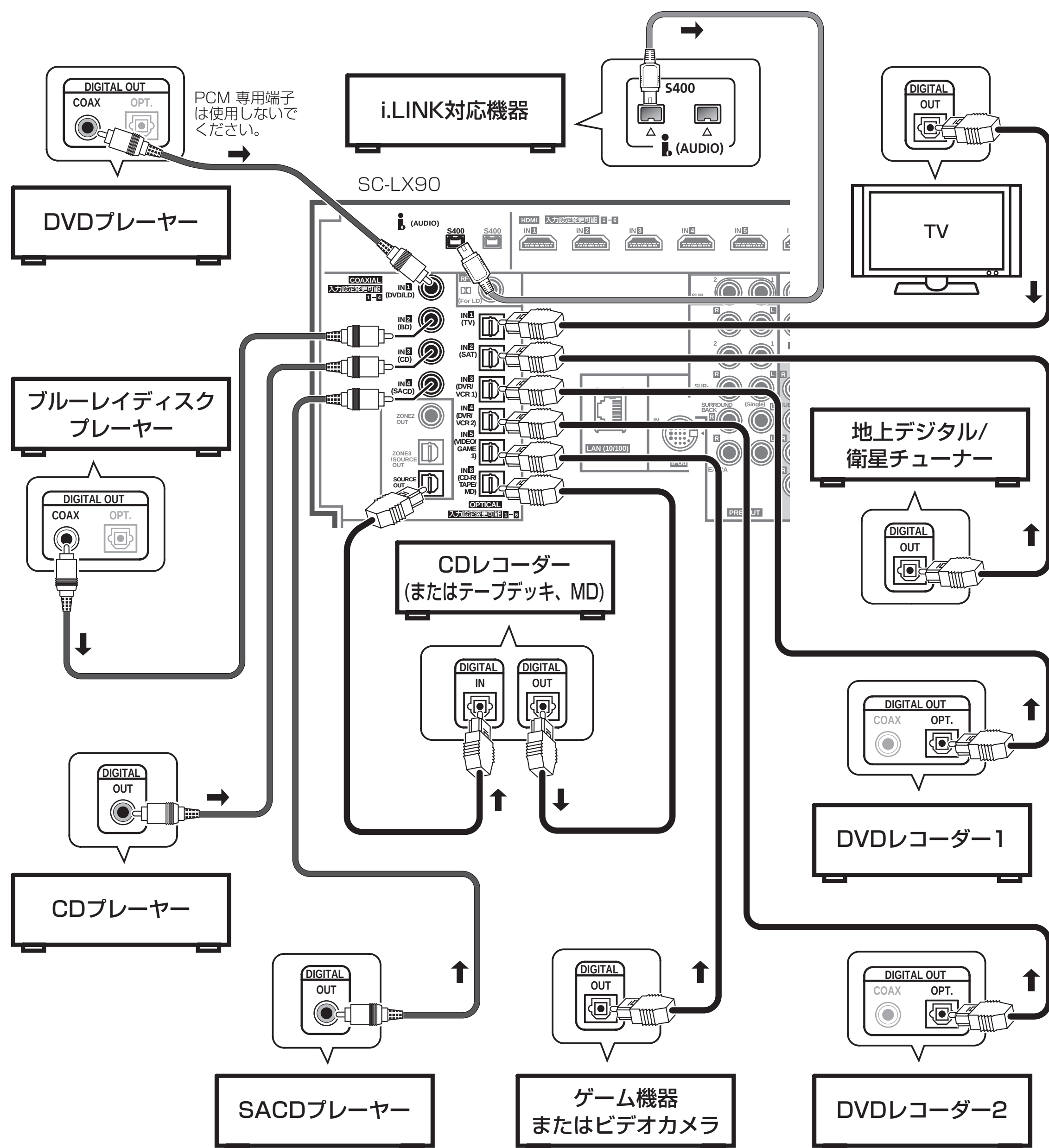
スピーカー出力端子の設定(→90ページ)と連動して、PREOUT端子のSURROUND BACKおよびEXTRAから出力される音声が以下のように変わります。他のパワーアンプなどを接続する場合はご注意ください。

スピーカー出力端子の設定	PREOUT SURROUND BACK端子からの出力音声	PREOUT EXTRA端子からの出力音声
[ノーマル]	サラウンドバックチャンネル音声	サラウンド Bチャンネル音声
[All Ch Bi-Amp]	無し	無し
[Front Bi-Amp]	サラウンドバックチャンネル音声	無し
[7.2 ch + ZONE 2]	サラウンドバックチャンネル音声 (ZONE2 ONのときのみ)	無し
[7.2 ch + Speaker B]	サラウンドバックチャンネル音声	ダウンミックスされた2 chの音声

この接続を行った場合、個々のアンプの能力やボリューム位置などにより音場補正を正確に行うことができない場合があります。

デジタル音声機器の接続

ドルビーデジタルやDTSソフトを再生するには、デジタル接続が必要です。接続は同軸ケーブルまたは光ファイバーケーブルで行います(1つの機器に対してどちらか一方のみで接続します)。
HDMI端子で接続するときは「HDMI対応機器の接続」(→32ページ)をご覧ください。



- どのデジタル入力端子をどの機器に使用するかは変更することができます。工場出荷時の設定(リアパネル表記)と異なる接続を行う場合は入力端子の設定(→111ページ)で設定の変更を行ってください。
- HDMI入力端子やi.LINK入力端子から入力した信号はデジタル出力端子からは出力されません。
- ホームメディアギャラリー入力の音声はデジタル出力端子からは出力されません。

電源コードの接続

すべての接続が終了したら、電源コードを家庭用電源コンセント(AC 100 V)に接続します。

電源コードのつなぎかた

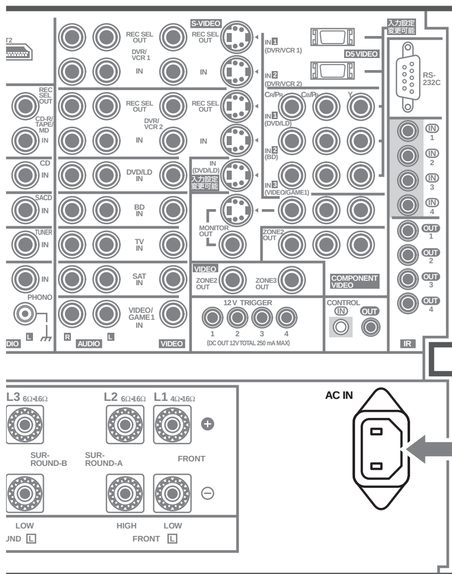
本機の電源コードは極性管理されています。音質向上のため、極性を合わせせることをお勧めします。下図のように電源プラグのNマークのある側をコンセントの幅の広い方(アース側)に合わせて差し込んでください。

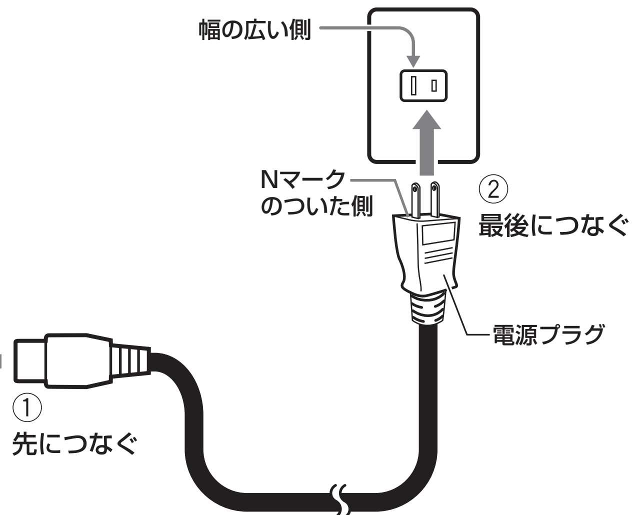


- **本機の電源コードは着脱式になっていますが、付属しているコード(電流容量15 A、本機側2Pプラグインソケット方式)以外の電源コードはご使用にならないでください。**
- 本機のAC INLETのアース端子は本機のシャーシに接続されていません。

- 電源プラグをコンセントに接続すると本機の電源が入ります。この際、15秒間のHDMIに関する初期化動作を行います。初期化中はHDMIインジケーターが点滅しますので、点滅が終了してから本機の操作を行ってください。「HDMIコントロール設定」(→129ページ)を「OFF」にすることで、この処理は行われなくなります。
- 旅行などで長期間本機を使用しない場合は、必ず電源コンセントから電源プラグを抜いておいてください。長期間、電源プラグを抜いた状態でも、本機で設定した各種設定がリセットされることはありません。
- 電源プラグを抜くときは必ず本体をスタンバイ状態にしてからプラグを抜いてください。

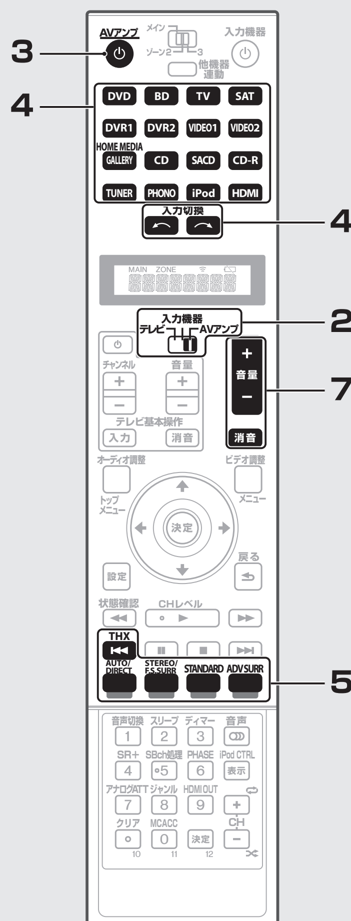
SC-LX90

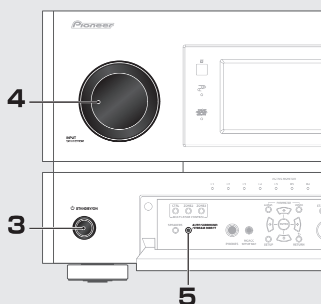


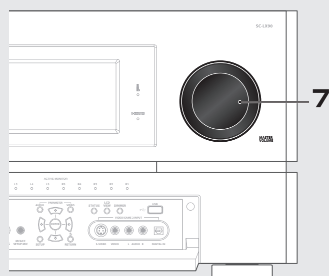


アンプから音を出す　～基本再生～

接続した機器を再生するときの手順です。本機では、「音声入力信号の切り換え」(→42ページ)で入力信号を選んで、「リスニングモードでいろいろな音を楽しむ」(→43ページ)でリスニングモードを選ぶことが主な操作です。







1　再生する機器の電源を入れる。

2　リモコンをAVアンプ操作モードにする。

入力機器　テレビ　AVアンプ

3　本機の電源を入れる。

AVアンプ

(本体の場合は、⏻STANDBY/ONを押します。)

4　再生する機器を選ぶ。

入力切換

ボタンを押すたびに入力機器が切り換わります(本体の場合は、INPUT SELECTORで選択します)。マルチコントロールボタンで直接選択することもできます。

また、必要に応じて音声入力信号の種類を選びます。「音声入力信号の切り換え」(→42ページ)

5　お好みのリスニングモードを選ぶ。

THX　AUTO/DIRECT　STEREO/F.S.SURR　STANDARD　ADV SURR

「リスニングモードでいろいろな音を楽しむ」(→43ページ)

6　再生機器の再生を開始する。

7　音量を調節する。

＋　音量　－　消音

－80 dB(最小値)から＋12 dB(最大値)の範囲で調節できます。

(本体の場合は、MASTER VOLUMEで調節します)

一時的に音を消したいときは消音ボタンを押します。もう一度押すか音量を調節することで解除します。

音量について

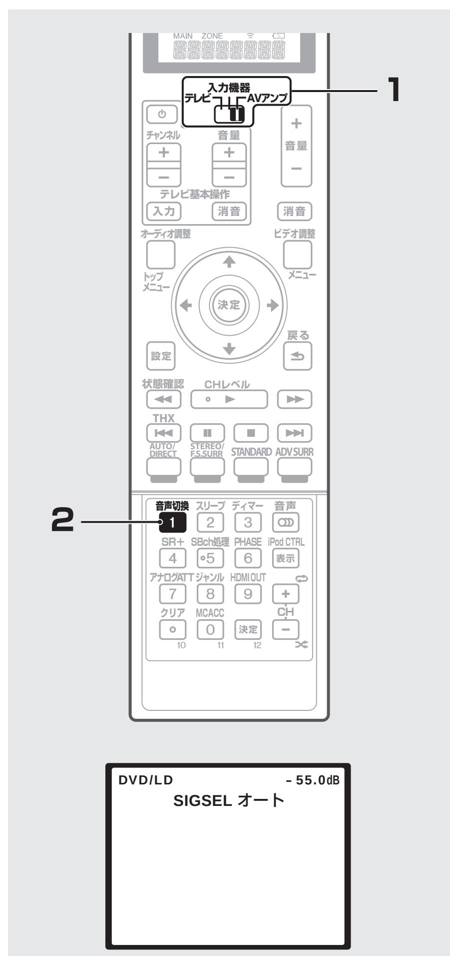
- MCACCなどにより正確にチャンネルレベルを補正した場合、0 dBが映画館での再生音量とほぼ同等になります。
  (0 dBは大音量です。近隣住宅や小さなお子様などへのご配慮をお願いします)

本機の対応フォーマット

- デジタル(光／同軸)入出力端子経由の対応信号
  ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AAC、WMA 9Pro、PCM(サンプリング周波数:32 kHz、44.1 kHz、48 kHz、88.2 kHz、96 kHz)
- HDMI端子およびi.LINK端子経由の対応信号
  上記のすべて、ドルビーTrueHD、ドルビーデジタルプラス、DTS-EXPRESS、DTS-HD Master Audio、SACDおよびDVDオーディオ(192 kHz含む)

音声入力信号の切り換え

本機では各入力についてアナログとデジタルの入力信号を切り換えることができます。



1 入力機器 テレビ AVアンプ 1　**リモコンをAVアンプ操作モードにする。**

2 音声切換 1　**再生したい入力信号を選択する。**

音声切換ボタンを押すたびに、以下のように切り換わります。

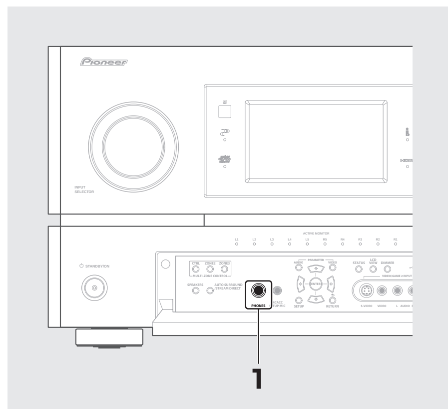


- オートにしたときは、i.LINK→HDMI→RF→デジタル→アナログの優先順位で自動的に入力信号を選択します（i.LINK、HDMI、RFは「入力端子の設定」でそれぞれが割り当てられている入力のときのみ選択できます）。
- オートが選択されているとCDなどのPCM音声を再生したときに曲の頭が切れることがあります。その場合はPCMを選択してください。
- PCM選択時、i.LINK→HDMI→デジタルの優先順位で選択されます（それぞれの「入力端子の設定」で割り当てている場合のみ）。ただしPCM音声専用のため、PCM以外の信号では音が出ずにノイズが出ることがあります。
- HDMI選択時、「HDMI音声出力の設定」（→53ページ）で「THROUGH」を設定していると、音声は本機からではなくテレビから出力されます。

- デジタル入力端子およびi.LINK、HDMIが割り当てられていない機器の音声入力は、アナログに固定されています。
- i.LINK入力設定（→111ページ）をしていないi.LINK機器を再生する場合は、音声切換はi.LINKに固定されます。
- 非対応のデジタル信号は再生できません。その場合は（アナログ接続して）音声入力は、アナログを選択してください。
- カラオケ機器のマイク音声、およびアナログオーディオのみ収録されているLDの音声はデジタル出力されません。これらを再生するには必ずアナログを選択してください。

- 音声切換ボタンでアナログを選択した状態で DTS対応のLDを再生すると、DTSの原信号がそのまま再生されるため、ノイズが発生します。入力信号は必ずデジタルを選択してください。
- DVDプレーヤーの機種によっては、再生できるデジタル信号に制限があります（DTS信号を出力しないなど）。詳しくは、お使いのDVDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

ヘッドホンで聴く



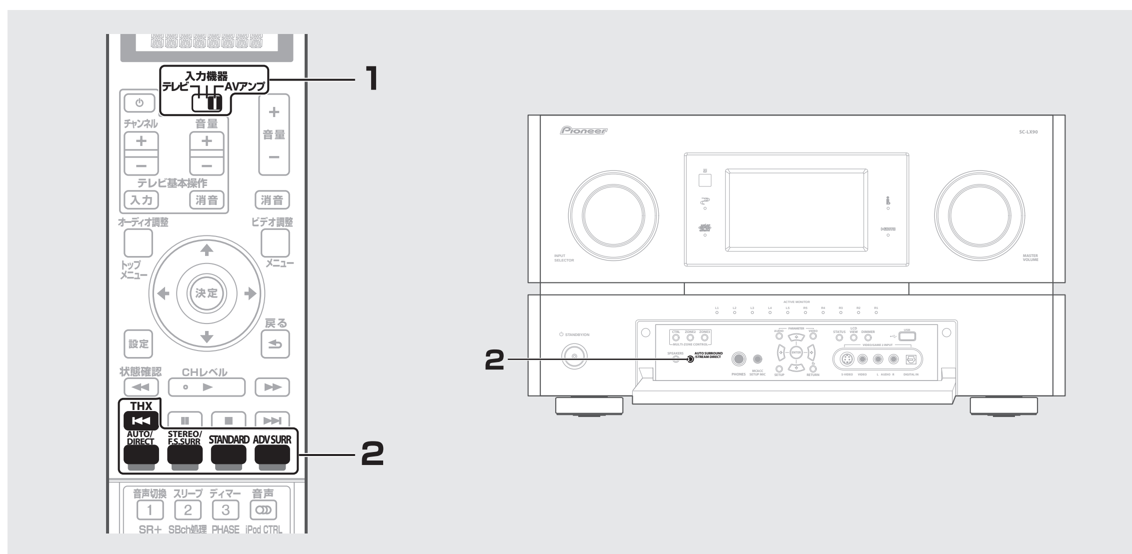
1 ヘッドホンをPHONES端子に差し込む。

差し込むとスピーカーから音は出なくなります。

- リスニングモードは「STEREO」または「PHONES SURROUND」のみ選択できます。
- MCACCはOFFになり、MCACCインジケーターも消灯します。
- 各リスニングモードの効果は2 chにダウンミックスされます。
- ヘッドホンを差し込むとスピーカーから音は出なくなります。
- MULTI CH IN入力のときは、ダウンミックスされた音声をヘッドホンから出力します。
- ヘッドホンを差し込んでいるときはシステムセットアップを行うことはできません。

リスニングモードでいろいろな音を楽しむ

再生機器からの信号にいろいろな音場効果を加えることができます。



リモコン				
THX	AUTO/ DIRECT	STEREO/ F.S.SURR	STANDARD	ADV SURR
本体				
AUTO SURROUND /STREAM DIRECT				

1 入力機器 テレビ AVアンプ リモコンをAVアンプ操作モードにする。

2 リスニングモードを選ぶ。

タイプによっては、ボタンを押すたびにモードの種類を切り換えて選択できます。
それぞれのリスニングモードについて次ページの設定が選べます。

モードのタイプ	ボタン	概要	選択肢	用途
HOME THX	リモコン THX	映画の再生に適します。デコード処理後THX独自技術を付加することで、映画館や収録スタジオの音場が再現されます。 ＊ THX時は、「オーディオ調整機能」の一部使用が制限されます。 *入力信号や設定により、リスニングモードの選択肢が変わります。*	■2 ch信号入力時 Pro Logic IIx MOVIE Pro Logic Neo:6 CINEMA Pro Logic IIx MUSIC Neo:6 MUSIC Pro Logic IIx GAME THX ULTRA2 GAMES ■マルチチャンネル信号入力時 THX Surround EX Pro Logic IIx MOVIE THX ULTRA2 CINEMA Pro Logic IIx MUSIC THX ULTRA2 MUSIC THX ULTRA2 GAMES	 映画 古い映画 映画 音楽 音楽 ゲーム ゲーム 映画/音楽 映画 映画 音楽 音楽 ゲーム
STANDARD SURROUND	リモコン STANDARD	サラウンド再生のためのデコードを行います。 2 chソースはマトリックス･サラウンド･デコードをします。 *入力信号や設定により、リスニングモードの選択肢が変わります。*	■2 ch信号入力時 Pro Logic IIx MOVIE Pro Logic IIx MUSIC Pro Logic IIx GAME Pro Logic Neo:6 CINEMA Neo:6 MUSIC Neural THX ■マルチチャンネル信号入力時 Pro Logic IIx MOVIE Pro Logic IIx MUSIC Dolby Digital EX DTS-ES DTS Neo:6	 映画 音楽 ゲーム 古い映画 映画 音楽 音楽 映画 音楽 映画/音楽 映画/音楽 映画/音楽
ADVANCED SURROUND	リモコン ADV SURR	デコード処理とパイオニア独自の技術を組み合わせたサラウンド再生モードです。 *数種類からの選択が可能です。* *（デコード処理を変更することはできません。）*	ACTION DRAMA SCI-FI MONOFILM ENTERTAINMENT SHOW EXPANDED THEATER TV SURROUND ADVANCED GAME SPORTS CLASSICAL ROCK/POP UNPLUGGED EXTENDED STEREO PHONES SURROUND	アクション映画 ドラマ SF映画 古い映画 ミュージカル/映画 映画/音楽 TV放送 ゲーム スポーツ クラシック 音楽 アコースティック 音楽 ヘッドホン使用時
STEREO/ FRONT STAGE SURROUND	リモコン STEREO/ F.S.SURR	すべての信号を2 ch（最大2.2 ch）で再生します。 *通常のステレオ再生とフロントスピーカーとサブウーファーのみでサラウンド再生を行うフロントサラウンド･アドバンスの選択が可能です。*	STEREO FRONT STAGE SURR FOCUS FRONT STAGE SURR WIDE	音楽 映画/音楽 映画/音楽
AUTO SURROUND/ STREAM DIRECT	リモコン AUTO/ DIRECT 本体 AUTO SURROUND /STREAM DIRECT	入力信号に収録されたチャンネル数に応じて、再生チャンネル数を自動的に選択します。 （工場出荷時はAUTO SURROUNDが選ばれています）	AUTO SURROUND DIRECT PURE DIRECT	すべてのソース すべてのソース アナログ信号、 PCMソース、 SACD

より詳しくは「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」（→149ページ）をご覧ください。

HOME THX および STANDARD SURROUNDモードについて

以下4つの要素が複雑に関係するため、選択肢は場合によりさまざまに変化します。

「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→149ページ)にその組み合わせ表があります。

- スピーカー出力端子の設定(→90ページ)
- 入力信号の種類
- 接続(設定)したサラウンドバックスピーカーの本数(→105ページ)
- SBch処理の設定(→50ページ)

より詳しくは、「デジタル音声フォーマットについて」(→140ページ)をご覧ください。

- ヘッドホン挿入時はHOME THXモードを選択することができません。

ADVANCED SURROUNDモードについて

- WMA9 Pro(96 kHz)、信号入力時、ADVANCED SURROUNDモードは選択できません。
- より詳しくは、「ADVANCED SURROUNDモードの種類と効果」(→151ページ)をご覧ください。

STEREOモードについて

- 設定や入力ソースにより、サブウーファーからも音が出力される場合があります。

AUTO SURROUND/STREAM DIRECTモードについて

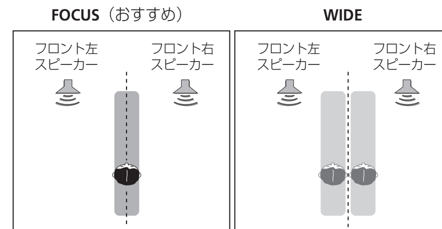
入力信号に収録されたチャンネル数に応じて、再生チャンネル数を自動的に選択します。

- CDなどの2 ch信号入力時→　ステレオ再生
- ⅮⅮサラウンド信号入力時→　ⅮⅮPro Logic IIx MOVIEなど
- デジタル5.1 ch信号入力時→　ⅮⅮデジタル、DTSなど
- 6.1 ch再生検出信号付きデジタルマルチch信号入力時 → ⅮⅮPro Logic IIx MOVIE、Dolby Digital EX、DTS ES

FRONT STAGE SURROUND(フロントサラウンド・アドバンス)について

FRONT STAGE SURR FOCUSまたはFRONT STAGE SURR WIDEを選ぶことで、左右のフロントスピーカーとサブウーファーのみで自然なサラウンド再生を行います。それぞれの効果は以下のとおりです。

- FRONT STAGE SURR FOCUS：臨場感のある自然なサラウンド効果が得られます。フロントスピーカーから等距離の直線上(前後は移動可能)で視聴してください。
- FRONT STAGE SURR WIDE：FOCUSモードよりも横に広い範囲でサラウンド効果が得られます。お二人で横に並んで視聴するときに適しています(この場合、オートMCACC(→14ページ)でオートセットアップを行うことで、より自然なサラウンド効果が得られます)。



「AUTO SURROUND」、「DIRECT」、「PURE DIRECT」の3種類について、詳しくは「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→149ページ)をご覧ください。

- スピーカー出力端子の設定を「7.2 ch＋Speaker B」に設定しているとき、PURE DIRECTモードでは、Speaker Bからは音が出ません。
- PURE DIRECTモードでDVDオーディオを再生すると、チャンネルが入れ替わってしまったり、あるチャンネルだけ音が出なくなるなど、正しく再生されないことがあります。その場合はDIRECTやAUTO SURROUNDに切り換えてください。
- PURE DIRECTモードでPCM以外のソースを再生すると、再生直前にノイズが出ることがあります。この場合はDIRECTかAUTO SURROUNDにすることをお勧めします。

デコードとは

デジタル信号処理回路などにより、圧縮記録されたデジタル信号を、もとの信号に変換させる技術です。また、2 chの音源をマルチch化させたり、5.1 ch信号を6.1 chや7.1 chに伸長させる技術もデコード(マトリックス・デコード)と呼ぶことがあります。

AUTO SURROUND/STREAM DIRECT 選択時の音の設定や機能対応表

以下の表で○のついている設定や機能は、設定されているとおりの内容が対応されることを表しています。○のついていない設定や機能は対応していないことを表し、（　）で記載されている内容は強制的にその設定になることを表します。

	AUTO SURROUND	DIRECT	PURE DIRECT		
			圧縮音声信号/PCMマルチch入力時	アナログ信号入力時*1	PCM2ch/DSD信号入力時*2
スピーカーシステム	○	○	○		
スピーカー出力レベル	○	○	○	○	○
スピーカーまでの距離	○	○	○		
Acoustic Cal EQ	○	○	(OFF)		
定在波制御	○	○	(OFF)		
PHASE CONTROL	○	○	(OFF)		
FULL BAND PHASE CONTROL	○	○	(OFF)		
サウンドレトリバー機能	○	(OFF)	(OFF)		
Xカーブ	○	○	(OFF)		
Boundary Gain Compensation	○	○	○		
サウンドディレイの設定	○	○	○		
SRC	○	○	○		○
アナログATT	○	○	−		
DIGITAL SAFETY	○	○	(OFF)		
SBch処理	○	(オート)	(オート)		
バーチャルサラウンドバックモード	○	(OFF)	(OFF)		
デジタルノイズリダクション機能	○	(OFF)	(OFF)		
ミッドナイト/ラウドネスモード	○	(OFF)	(OFF)		
トーンコントロール	○	(0 dB)	(0 dB)		
ダイアログエンハンスメント機能	○	(OFF)	(OFF)		
ダイナミックレンジコントロールの設定	○	(OFF)	(OFF)		
LFE ATT	○	○	○		
Surr B ディレイ	○	○	○		
SACDゲインの設定	○	○	−		

*1　アナログ信号がDSPを経由しないで直接アンプに入力されるモードです。（ANALOG DIRECT）

*2　・PCM信号がDSPを経由しないで直接D/A変換され、アンプに入力されるモードです。（PCM DIRECT）
　　・PCM DIRECTまたはSACD DIRECT選択時、入力された信号は本機でダウンミックス処理を行うことができません。ただし、センタースピーカーの設定が[NO]の場合には、センターch信号をフロント左/右にアナログで振り分けています。

- DIRECTとPURE DIRECTモード選択時は、SBch処理が常にAUTOに設定されるため、AUTO SURROUNDとはデコード状態が変わることがあります。詳しくは「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」（→149ページ）をご覧ください。
- マルチチャンネル信号入力時、すべてのスピーカーから音を出したいときはAUTO SURROUNDモードにして、SBch処理をONに設定することをお勧めします。

位相乱れの補正

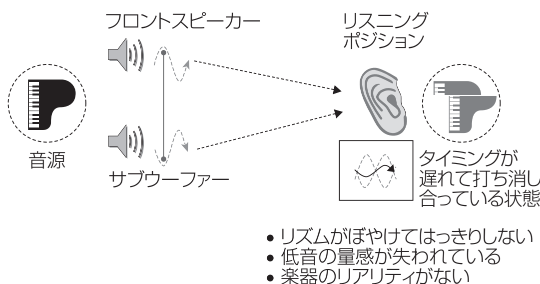
音の入り口から出口までの時間と位相を精密に管理することで、従来にない高音質なサウンドが実現できます。この「時間と位相を管理する」トータルコンセプトがパイオニアオリジナルの「フェイズコントロール」です。
本機にはAVアンプで発生している低域の位相乱れ（群遅延）を補正する「PHASE CONTROL」機能と、スピーカーで発生している全帯域にわたる位相乱れ（群遅延）を補正する「FULL BAND PHASE CONTROL」機能を搭載しています。

- 工場出荷時は、PHASE CONTROL機能がONの状態です。オートMCACC（「リスニング環境を測定して最適な設定をする」（14ページ））を行うか、「システム設定メニュー」の「FULL BAND PHASE CTRL」（101ページ）を行うと、測定後FULL BAND PHASE CONTROL機能は自動的にONになります。FULL BAND PHASE CONTROLをONにすることで、PHASE CONTROL機能もONになるので、通常はFULL BAND PHASE CONTROL：ONでのご使用をお勧めします。
- 位相とは2つの音波の時間的関係を表しています。2つの音波の山と山が合っている状態を位相が合っている、合っていない状態を位相がズレていると言います。

低域の位相乱れを補正する（PHASE CONTROL）

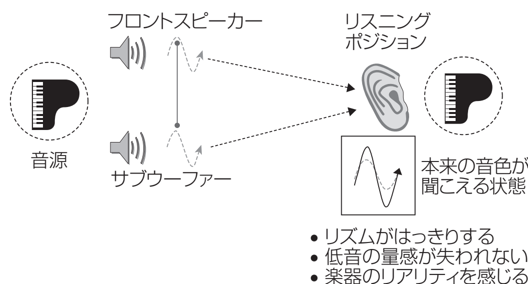
マルチチャンネル再生する際、LFE（超低域）信号や各チャンネルに含まれる低音成分はサブウーファーや他の最適なスピーカーに振り分けられる処理がされます。しかし、この処理には原理上、位相がズレてしまう周波数（群遅延）が発生し、低域だけが遅れて聞こえたり他のチャンネルとの干渉により低音の打ち消し合いが発生してしまうなどの問題があります。本機では、PHASE CONTROLをONにすることで、原音に忠実な力強い低音を再現できます。

PHASE CONTROL OFF

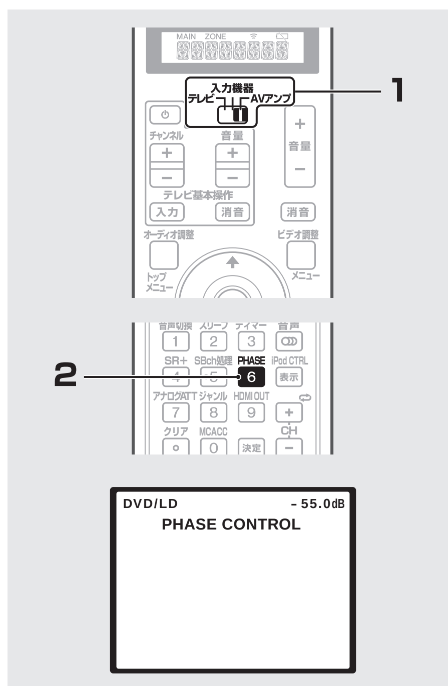


- リズムがぼやけてはっきりしない
- 低音の量感が失われている
- 楽器のリアリティがない

PHASE CONTROL ON



- リズムがはっきりする
- 低音の量感が失われない
- 楽器のリアリティを感じる



1 入力機器 テレビ AVアンプ
リモコンをAVアンプ操作モードにする。

2 PHASE 6
PHASE CONTROLを選ぶ。
PHASE CONTROLインジケーターが点灯します。
ボタンを押すごとにONとOFFが切り換わります。

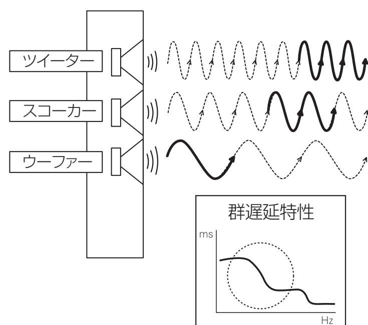
- PHASE CONTROL機能はヘッドホン使用時にも効果があります。
- サブウーファー本体にPHASE切換スイッチがついているときはプラス側（0°側）に設定してください。ただし、本機のPHASE CONTROLをONにしても効果がわかりにくいときは、サブウーファーの固体差が考えられますので、効果の大きい方を選んでください。また効果がわかりにくいときはサブウーファーの向きや場所を少しずつ変えてみることもお勧めします。
- サブウーファー内蔵のLowpassフィルタスイッチをOFFにしてください。OFFにできないサブウーファーの場合はカットオフ周波数を高く設定してください。
- スピーカーの距離を正しく設定しないと、PHASE CONTROLの効果が正しく出ない場合があります。
- 以下のときはPHASE CONTROLモードをONにできません。
  - PURE DIRECTモードのとき
  - 「オーディオ調整機能」のHDMI音声出力を「THROUGH」に設定しているとき

全帯域にわたる位相乱れを補正する(FULL BAND PHASE CONTROL)

FULL BAND PHASE CONTROLはスピーカーの周波数位相特性を測定し、補正する機能です。一般的なオーディオ用のスピーカーでは、複数のスピーカーユニットで周波数帯域を分割して再生します。たとえば代表的な3wayスピーカーの場合、ツイーターで高域、スコーカー(ミッドレンジ)で中域、ウーファーで低域音声を出力します。この際、スピーカーは広帯域にわたって周波数振幅特性(いわゆるF特)がフラットになるよう設計されていますが、周波数位相特性はフラットにならないことが多く、音声信号再生時、高域に対して低域が遅れるという群遅延(帯域間での位相特性のズレ)が発生します。本機ではスピーカーから出力されたテスト信号を付属のマイクで測定することによってスピーカーの周波数位相特性を解析し、音声信号再生時の周波数位相特性がフラットになるように補正します(L/Rでペアになっているスピーカー1組に対して同じ補正を行います)。

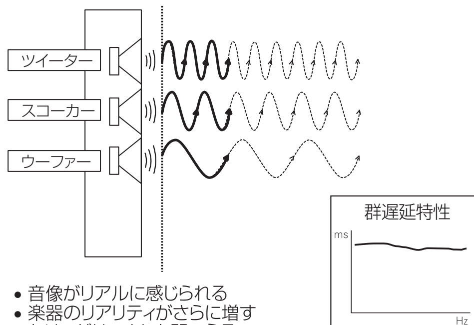
FULL BAND PHASE CONTROL OFF

位相乱れ(群遅延)の影響で、高音域に対して低音域が遅れている(スピーカー構成によってはこの遅れ度合いもバラバラなので、音のつながりにも影響する)。

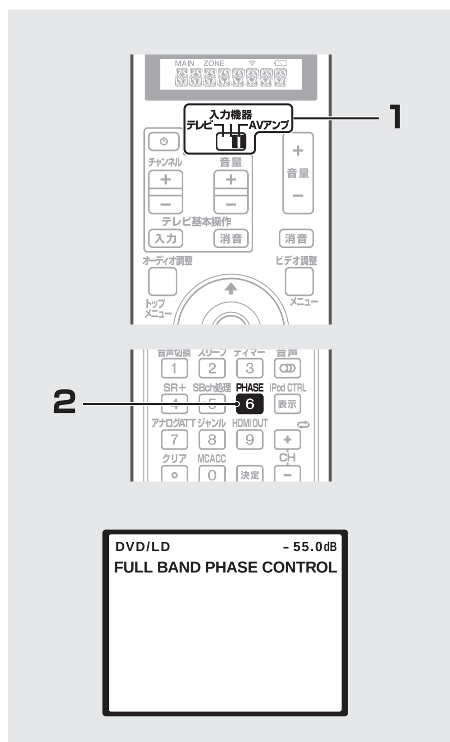


FULL BAND PHASE CONTROL ON

位相乱れ(群遅延)を補正することで帯域間の遅延時間差が縮まり、全帯域のタイミングがそろう(各チャンネル間のタイミングもそろうので音のつながりも向上する)。



- 音像がリアルに感じられる
- 楽器のリアリティがさらに増す
- セリフがはっきりと聞こえる
- 各チャンネル間の音のつながりが良くなる
- ボーカルの口元の動きまで感じることができる



1 入力機器 テレビ AVアンプ

リモコンをAVアンプ操作モードにする。

2 PHASE 6

FULL BAND PHASE CONTROLを選ぶ。

PHASE CONTROLとFULL BAND PHASE CONTROLの機能がONになります。 PHASE CONTROLインジケーターが点灯します。

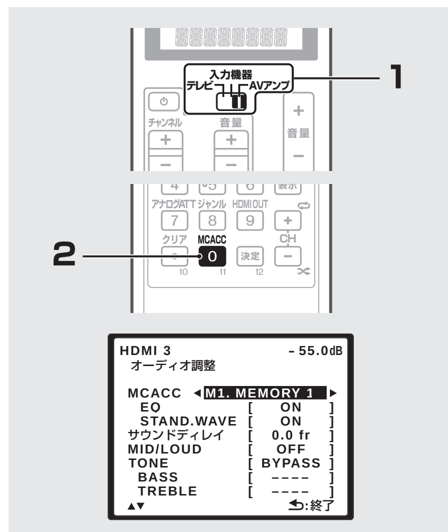
ボタンを押すごとにONとOFFが切り換わります。

- スピーカーの周波数位相特性を解析するための測定は、オートMCACC(「リスニング環境を測定して最適な設定をする」(14ページ))を行うか、「システム設定メニュー」の「FULL BAND PHASE CTRL」(101ページ)を行ってください。オートMCACCをカスタムで行う際はALLを選択してください。測定を行っていない状態では「FULLBAND PHASE」を選択することはできません。
- FULL BAND PHASE CONTROLは周波数位相特性のみを補正しており、周波数振幅特性(F特)には影響を与えません。
- サブウーファーはFULL BAND PHASE CONTROLの補正対象外です。また、原理的に群遅延が発生しないスピーカー(フルレンジスピーカー)や可聴帯域外の超高音域(スーパーツイーターなど)も補正対象外です。
- 測定後は、測定されたスピーカーの群遅延特性と補正後のターゲットとなる特性をOSD画面にグラフ表示することができます(101ページ)。また、PCと接続することで、より詳細なスピーカーの群遅延特性と補正後の群遅延特性を3Dグラフで表示することも可能です(100ページ)。
- 以下のときはFULL BAND PHASE CONTROLモードをONにすることができません。
  - ヘッドホンを挿入しているとき
  - PURE DIRECTモードのとき
  - 「オーディオ調整機能」のHDMI音声出力を「THROUGH」に設定しているとき

いろいろな状況に合わせた機能を選択/調整する

いろいろな状況ごとに最適な音場補正の設定を選択する

「オートMCACC」や「マニュアルMCACC」であらかじめ設定した音場補正(MCACC MEMORY)を選択します。



1 リモコンをAVアンプ操作モードにする。

2 MCACC MEMORYを選ぶ。

押すたびにMCACC MEMORYが切り換わります。
MCACC MEMORY 1〜6のいずれかを選択しているときは、MCACCインジケーターが点灯します。

- スピーカーシステムの設定はすべてのMCACC MEMORYで共通の設定です。
- 工場出荷時は「M1:MEMORY1」に設定されています。
- MCACCボタンを押してから⇦/⇨ボタンで選ぶこともできます。
- ヘッドホン使用時には効果がありません。

いろいろな状況に合わせた音場補正で最適なサウンドを楽しむ

MCACCではリスニングポジションにおける音場補正を行うので、映画を観る位置とゲームをする位置、音楽を聴くときのソファーの位置など、それぞれのリスニングポジションに応じて異なる補正を行う必要があります。各ポジションであらかじめ音場補正された、それらのMCACC MEMORYを選択することで、最適なサウンドをお楽しみいただくことができます。

活用例

たとえば、以下の状況に応じた音場補正をそれぞれのMCACC MEMORYへ事前に設定しておき、MCACCボタンを押してMCACC MEMORYを合わせるだけで、それぞれの状況に応じた音場補正が適用されます。

- 映画はモニターから離れた位置で観たい
- ゲームはモニターの近くで楽しみたい
- 普段のリスニングポジションとは違う位置のソファーで音楽を聴きたい

手順例



上記の「活用例」と「手順」を参考にして、さまざまな音場補正の設定をMCACC MEMORYに保存して名前を変更することができます。たとえば、同じリスニングポジションでも「SYMMETRY」、「ALL CH ADJUST」、「FRONT ALIGN」のEQ補正を聞きくらべたいときは、同じリスニングポジションでそれぞれの補正を行い、「MCACCメモリーの名称変更」(→103ページ)で「SYMMETRY」、[ALL ADJ]、[F.ALIGN]と名前を変更します。その後、それぞれのMCACC MEMORYを選択することで聞きくらべることができます。

サラウンドバックch処理を切り換える

サラウンドバックスピーカーを接続しているときに、サラウンドバックch音声の処理を切り換えます。また、サラウンドバックスピーカーを接続していないときは、仮想のサラウンドバック音声を創り出します。設定項目は以下のとおりです。

サラウンドバックスピーカーを接続しているとき

SBch OFF：サラウンドバックchへのデコード処理は行わず、 サラウンドバックchから音声は出力されません。

SBch ON：常にサラウンドバックchへのデコード処理を付加するため、最大の出力チャンネル数でお楽しみいただけるモードです。

SBch オート：入力信号の種類を検出し、サラウンドバックch信号を検出したときのみサラウンドバックスピーカーからデコード処理された音声を出力します。ソフトに最も忠実な再生となります。

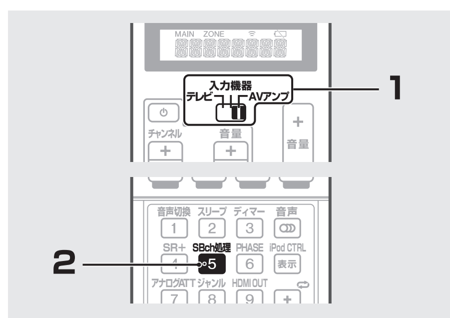
サラウンドバックスピーカーを接続していないとき

VIRTUAL SB OFF：仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出しません。

VIRTUAL SB ON：リスニングモードによって、仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出します。

VIRTUAL SB オート：入力信号やリスニングモードによって、仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出します。

入力信号、リスニングモードの種類や組み合わせによって、サラウンドバックスピーカーからの音の出力が異なります。詳しくは「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→149ページ)の表をご覧ください。



1 リモコンをAVアンプ操作モードにする。

2 SBch処理モードを選択する。

ボタンを押すたびに、ONとオートおよびOFFが切り換わります。

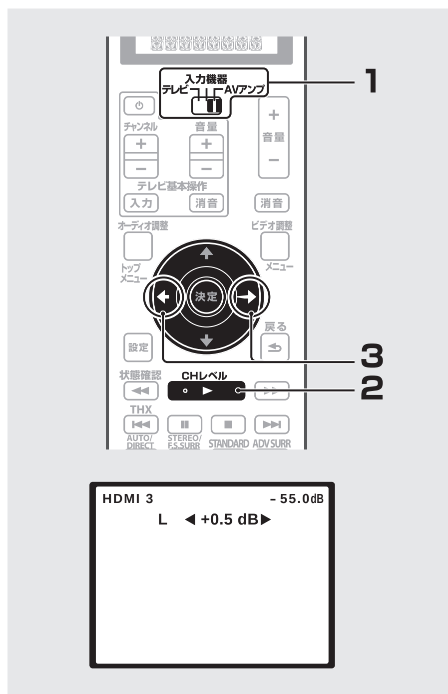
- 以下のときはSBch処理モード(またはバーチャルサラウンドバックモード)を切り換えることができません。
  - 「スピーカー設定」(→105ページ)で、サラウンドスピーカーがNO(無し)に設定されている、または「スピーカー出力端子の設定」(→90ページ)でALL Ch Bi-Ampが選ばれているとき
  - 「オーディオ調整機能」のHDMI音声出力の設定が「THROUGH」に設定されているとき
  - ヘッドホンを挿入しているとき
  - STREAM DIRECTモードのとき
  - STEREOまたはフロントサラウンド・アドバンスモードが選択されているとき
- サラウンドchが収録されていないソース(シーン)では、仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出すことはできません。

サラウンドバックchを再生環境に応じて使い分ける

サラウンドバックch処理の切り換えとスピーカーシステムの切り換えを組み合わせて活用することで、DVDオーディオやSACDなどの高音質マルチch音楽ソース用のスピーカー構成と、THX推奨の映画鑑賞用のスピーカー構成を切り換えることができます。詳しくは「再生環境に応じてスピーカーシステムを切り換える(応用編)」(→83ページ)をご覧ください。

再生中にスピーカーの出力レベルを調整する

再生している音を聴きながら、チャンネルごとに出力レベルを調整できます。



1 リモコンをAVアンプ操作モードにする。

2 スピーカーのチャンネルを選択する。

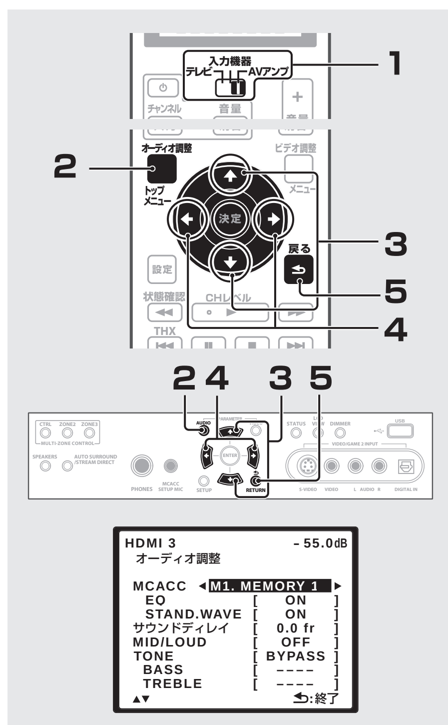
ディスプレイに「L ◄ +0.5 dB►」などと表示されます。押すたびにチャンネルが切り換わります。

3 出力レベルを調整する。

−10.0 dBから+10.0 dBの範囲内で、0.5 dB間隔で調整できます。

オーディオ調整機能を使用する

ここでは次ページの表にある音声に関する「設定項目」をお好みで設定します。それぞれの機能の内容をご確認のうえ、お好みで設定する項目を選んで設定を行ってください。



- 入力信号や本機の設定などによって調整をすることができない項目があります。その場合は設定項目として表示されません。

1 リモコンをAVアンプ操作モードにする。

2 オーディオ調整機能にする。

3 設定項目を選ぶ。

次ページの表の設定項目からお好みで調整したい項目を選びます。

4 手順3で選んだ項目の調整を行う。

以下の表の設定内容のとおりにお好みで調整します。

5 オーディオ調整機能を終了する。

●：工場出荷時の設定

設定項目	設定・効果の内容	表示と設定
MCACC [M1.MEMORY 1] MCACCメモリー ※ 1, 2, 4	MCACC MEMORYの選択 （MCACCメモリーの名称変更(→103ページ)をしているときは変更した名前で表示されます）	●MCACC : M1.MEMORY 1 M1.MEMORY 1～M6.MEMORY 6 ○MCACC : OFF
EQ [ON] 周波数特性の補正 ※ 2, 4, 10	選択されているMCACC MEMORYの周波数特性の補正のON/OFF設定。 それぞれのMEMORYごとに設定できます。	●EQ : ON ○EQ : OFF
STAND.WAVE [ON] 定在波制御 ※ 4, 10	選択されているMCACC MEMORYの定在波制御の効果のON/OFF設定。 それぞれのMEMORYごとに設定できます。	●STAND.WAVE : ON ○STAND.WAVE : OFF
サウンドディレイ [0.0fr] サウンドディレイの調整 ※ 10	音声全体の遅延時間の調整 （DVDソフトなどで、映像の動きの方がセリフなどの音声より遅れている場合、音声全体を遅らせることで、映像の動きと音声とを合わせることができます）	●サウンドディレイ : 0.0 fr 0.0 frame～6.0 frameまで（0.1間隔） ・ 1frame＝1/30秒 （NTSC）
MID/LOUD [OFF] ミッドナイト/ラウドネスモード ※ 4, 5, 6, 7, 10, 11	夜間や小音量再生でも、音量に応じて効果を調整し、聴き取りやすくする機能 MIDNIGHT:マルチチャンネル再生向き LOUDNESS:2チャンネル再生向き	●MID/LOUD : OFF 両機能ともにOFF ○MIDNIGHT : ON ○LOUDNESS : ON
TONE [BYPASS] トーンコントロール ※ 4, 6, 7, 8, 10, 11	「低音の調整」「高音の調整」をする/しないの設定	●TONE : BYPASS（OFF） ○TONE : ON
BASS [----] 低音の調整 （トーンコントロール ON時のみ）	低音のレベル調整	●BASS : 0dB －6dB～＋6dB（1dB間隔）
TREBLE [----] 高音の調整 （トーンコントロール ON時のみ）	高音のレベル調整	●TREBLE : 0dB －6dB～＋6dB（1dB間隔）
S.RETRIEVER [OFF] サウンドレトリバー機能 ※ 4, 6, 7, 10, 11	MP3 などの圧縮音声は圧縮処理される際、削除されてしまう部分が発生します。サウンドレトリバー機能をONにすると、DSP処理によってその削除されてしまった部分を補い、音の密度感、抑揚感を向上させます。	●S.RETRIEVER : OFF ○S.RETRIEVER : ON
DNR [OFF] デジタルノイズリダクション機能 ※ 4, 6, 7, 10, 11	雑音が多く含まれるソフトのノイズを低減する機能（→54ページ「デジタルノイズリダクション」参照）	●DNR : OFF ○DNR : ON
DIALOG E [OFF] ダイアログエンハンスメント機能 ※ 4, 6, 7, 10, 11	センター成分の定位感の調整機能 （映画やドラマのセリフ、または音楽のボーカルを際立たせ、より聴き取りやすい音にします）	●DIALOG E : OFF ○DIALOG E : ON
SRC [ON] サンプリングレートコンバート機能 ※ 11	デジタル音声信号への、ダイナミックレンジの拡大と周波数方向の広帯域化をする機能 （PCM 16bitまたは圧縮音声20 bitを24 bitに再量化し、データ処理時にサンプリング周波数を上げることで、より滑らかで繊細な音楽表現を可能にします）	●SRC : ON ○SRC : OFF

●：工場出荷時の設定

設定項目	設定・効果の内容	表示と設定
DUAL MONO [CH1] デュアルモノラル音声の設定	1+1デュアルモノラル信号入力時、どちらの音声を再生させるかの設定（→54ページ「1+1デュアルモノラル信号とは」参照）	●DUAL MONO : CH1 ○DUAL MONO : CH2 ○DUAL MONO : CH1 CH2（左右同時再生）
DRC [オート] ダイナミックレンジコントロールの設定 ※ 4, 7, 10	音量の最も小さい部分と最も大きい部分の圧縮比率の調整 （ダイナミックレンジを圧縮すると、音量を下げて映画などを楽しむ場合でも、微小な音が聞き取りやすくなりますが、大きい音量で楽しむときは、OFFにすることをお勧めします。）	●DRC : オート（ドルビーTrueHD信号に対してのみ圧縮） ○DRC : MAX（最大圧縮） ○DRC : MID ○DRC : OFF（圧縮無し :高音質再生）
LFE [0dB] LFEアッテネーターの設定	ドルビーデジタルやDTS 音声には、LFE（超低域音声成分）が含まれていることがあります。LFE レベルが大きくて、スピーカーからの音声に歪みが生じるときは、LFE レベルをアッテネート（減衰）します。	●LFE : 0 dB −5 dB、−10 dB、−15 dB −20 dB、OFFから選択
Surr B ディレイ [0msec] サラウンドBスピーカーのディレイ調整 ※ 4, 10, 15	サラウンドスピーカーを左右に2本ずつ並べて配置したときに、サラウンドBに対してディレイ（遅延）処理を加えることができます。ディレイ値を調整することにより、より自然なサラウンド感が得られる音場に調整することができます。詳細は「サラウンドBスピーカーの調整（Surr B ディレイ）」(→55ページ)をご覧ください。	●Surr B ディレイ : 0 msec 0 msec〜20 msecの間で選択（1 msec間隔）
SACDゲイン [0dB] SACDゲインの設定 ※ 3, 4, 10	SACDを歪みなく再生するための調整 （工場出荷時の「0dB」は、高レベルで記録されているディスクを再生しても音が歪まない設定になっています。「+6dB」に設定すると、SACDのデジタル処理に+6dBのゲインを持たせ、SACDディスクの情報をより忠実に引き出すことができ、高音質再生が可能になります。）	●SACDゲイン : 0 dB 0 dB:音声が歪む場合 +6 dB:高音質再生を望む場合
HDMI音声出力 [AMP] HDMI音声出力の設定 ※ 14	HDMI INに入力された音声を、どのように再生するかの設定 「THROUGH」に設定したときは本機からは音が出なくなります。	●HDMI音声出力 : AMP 本機と接続したスピーカーで再生 ○HDMI音声出力 : THROUGH HDMI OUTと接続したテレビ（プラズマディスプレイなど）で再生
オートディレイ [OFF] オートディレイ (オートリップシンク)の設定 ※ 13	HDMIどうしで接続された機器に対する機能で、音声と映像の遅延時間を自動で調整し、映像の動きと音声を自動で合わせます。	●オートディレイ : OFF ○オートディレイ : ON
センター幅 [3] センター幅の調整 （ﾛﾛPLIIx MUSIC時のみ） ※ 4, 6, 7, 9	センターチャンネルの音声を左右のフロントスピーカーにどの程度振り分けるかの調整 （音色の不一致を緩和して、音楽再生に適した音場を創り出すことができます。）	●センター幅 : 3 0〜7 0:センタースピーカーからのみ再生 7:すべて左右のフロントスピーカーに振り分け
ディメンション [0] ディメンションの調整 （ﾛﾛPLIIx MUSIC時のみ） ※ 4, 6, 7	音場の強さのバランス調整 （お好みの音場を創り出すことができます。）	●ディメンション : 0 −3〜+3 −3:後方の音場が強くなる +3:前方の音場が強くなる
パノラマ [OFF] パノラマ調整 （ﾛﾛPLIIx MUSIC時のみ） ※ 4, 6, 7	前方の音場を左右に大きく回り込ませ、サラウンドchにつなげるような効果を加える機能（正確な定位よりも雰囲気を楽しむための機能です。）	●パノラマ : OFF ○パノラマ : ON

●：工場出荷時の設定

設定項目	設定・効果の内容	表示と設定
センターイメージ　[　----　] **センターイメージの調整** **（Neo:6 CINEMAまたは Neo:6 MUSIC時のみ）** ※ 4, 6, 7, 9	センターチャンネルの音声を左右のフロントスピーカーにどの程度振り分けるかの調整 （音色の不一致が緩和された音楽再生に適した音場を創り出すことができます。）	●センターイメージ : Neo:6 CINEMA 10 : Neo:6 MUSIC　3 0～10 0:ほぼすべて左右のフロントスピーカーに振り分け 10:主にセンタースピーカーから再生
エフェクト　[　----　] **ADVANCED SURROUND モードの効果の調整** ※ 4, 6, 7	現在選択しているADVANCED SURROUNDの各モードの残響音効果などの調整	●エフェクト : 50 10～90 （EXTENDED STEREOのみ90が初期値）

※1　MCACC OFFを選択すると、スピーカーシステム設定以外のすべての補正項目が工場出荷時と同じ状態になります。
※2　MCACC OFFまたはEQ OFFを選択するとMCACCインジケーターが消灯します。
※3　MULTI CH IN入力では選択できません。
※4　HDMI音声出力の設定が「THROUGH」のときは選択できません。
※5　トーンコントロールがONのときはOFFになります。
※6　リスニングモードがHOME THXモードのときは選択できません。
※7　リスニングモードがSTREAM DIRECTモードのときは選択できません。
※8　ミッドナイト/ラウドネスモードをONにするとBYPASS (OFF)になります。
※9　「スピーカー設定」（→105ページ）で、センタースピーカーがNO（無し）に設定されているときは選択できません。
※10 リスニングモードがPURE DIRECTモードのときは調整できません。
※11 各入力ごとに設定できます。
※12 ダイナミックレンジコントロール対応のドルビーデジタル、ドルビーデジタルプラス、ドルビーTrueHD、DTS、DTS-HD Master Audio信号にのみ効果があります。
※13 HDMIで接続されたリップシンク対応のディスプレイにのみ有効です。ONに設定しても音声全体の遅延時間が改善されないときは、OFFに設定して「サウンドディレイの調整」（上記）を手動で調整してください。
※14 アンプ連動モードを使用しているときは切り換えることができません（→130ページ）。
※15 以下の場合はSurr B ディレイを選択できません（また、値を設定していても効果がOFFになります）。
- スピーカー出力端子の設定が「ノーマル」以外の場合
- スピーカー設定でサラウンドB（Surr B）を「無し（NO）」に設定している場合
- スピーカーシステムA/Bの切り換えが、「A＋B ON」以外の場合
- ヘッドホンを使用しているとき

1+1デュアルモノラル信号とは

モノラルの音声チャンネルを2つ持つデジタル信号の名称です。
- BSデジタル放送(MPEG-2 AAC)のモノラルの二カ国語放送や音声多重放送など
- 二カ国語放送などをDVDレコーダーのドルビーデジタル・デュアルモノラルモードで録画したもの
- ステレオの二カ国語放送などはデュアルモノラルとは異なるフォーマットになります。
- 録画モードの名称は機器によって異なります。詳しくはDVDレコーダーの取扱説明書をご覧ください。

デジタルノイズリダクション

- 以下の場合は、ON にしてもノイズが十分に低減されないことがあります。
  - 突然のノイズ
  - 極端に大きいノイズ
  - 高い周波数成分を非常に多く含む信号
  - もともとノイズの少ない録音状態の良い信号
- 各音源に対し、デジタルノイズリダクションは以下のような改善効果があります。

ステレオ再生時
- アナログ入力...10 dB ～18 dB
- i.LINK入力...10 dB ～15 dB
- デジタル入力.....10 dB ～15 dB
- ADVANCED、STANDARD、96 kHz 再生時....6 dB ～10 dB

- ストリームダイレクトモードがONになっているときやHOME THXモードでは使用できません。

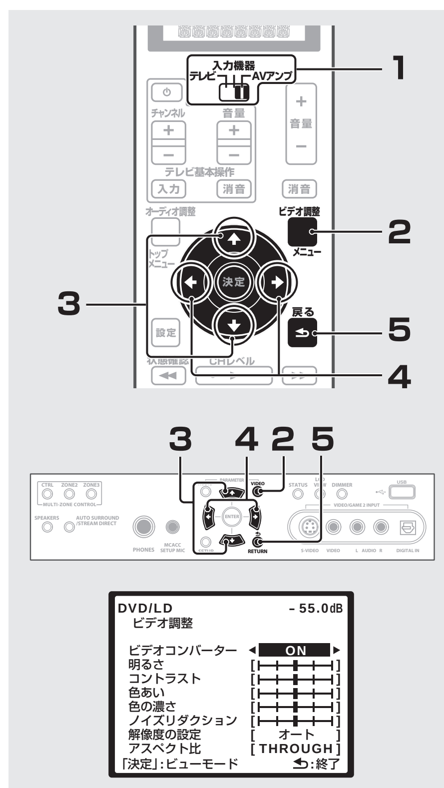
サラウンドBスピーカーの調整(Surr B ディレイ)

サラウンドスピーカーをアレイ配置にすることにより、視聴位置を広げることができます。その結果、前後左右のつながりの良い音場が形成されますが、設置位置や視聴位置によってはアレイ配置したスピーカーにディレイ差を与えることでより自然なサラウンド感が得られる場合があります。そのような場合、オーディオ調整機能の「Surr B ディレイ」(→53ページ)でアレイ配置しているサラウンドBチャンネルに対し、ディレイ(遅延)処理を加えて微調整することができます。0 msから最大20 msまで、1 ms単位の細かい設定が可能です。映画や音楽などを再生しながら調整し、より自然なサラウンド感が得られるようにお好みのディレイ値を設定してください。

以下の場合はSurr B ディレイを選択できません(また、値を設定していても効果がOFFになります)。
- スピーカー端子の出力設定が「ノーマル」以外の場合
- スピーカー設定でサラウンドB(Surr B)を「無し(NO)」に設定している場合
- スピーカーシステムA/Bの切り換えが、「A+B ON」または「OFF」以外の場合
- ヘッドホンを使用しているとき
- PURE DIRECTモードのとき
- 「オーディオ調整機能」のHDMI音声出力を「THROUGH」に設定しているとき

ビデオ調整機能を使用する

ここでは以下の表にある映像に関する「設定項目」をお好みで設定します。それぞれの機能の内容をご確認のうえ、お好みで設定する項目を選んで設定を行ってください。



- 選ばれている入力や入力している信号、本機の設定などによっては調整をすることができない項目があります。その場合は設定項目として選択できません。
- すべての項目について、入力ごとに設定できます。

1 入力機器 テレビ AVアンプ

リモコンをAVアンプ操作モードにする。

2 ビデオ調整 メニュー

ビデオ調整機能にする。

3 決定

設定項目を選ぶ。

以下の表の設定項目からお好みで調整したい項目を選びます。
設定項目を選んだ後に決定ボタンを押すと、実際に画面を見ながら調整できます(映像信号によっては画面を見ながらの調整ができないことがあります)。

4 決定

手順3で選んだ項目の調整を行う。

以下の表の設定内容のとおりにお好みで調整します。

5 戻る

ビデオ調整機能を終了する。

●：工場出荷時の設定

設定項目	設定・効果の内容	表示と設定
ビデオコンバーター [ON] ビデオコンバーターの設定	HDMI以外の映像入力信号をMONITOR OUTに対してビデオコンバートする機能（ソース機器とテレビモニターを違う種類のコードで接続していても、映像を出力することができる便利な機能です）	●ビデオコンバーター：ON ○ビデオコンバーター：OFF
明るさ [├┼┼╋┼┼┤] 画質の明るさ調整 ※ 1	画面全体の明るさ調整	●明るさ：0 −10（暗い）〜+10（明るい）
コントラスト [├┼┼╋┼┼┤] 画質のコントラスト調整 ※ 1	画面の最も明るい部分と最も暗い部分との明るさの比率調整	●コントラスト：0 −10（比率最小）〜+10（比率最大）
色あい [├┼┼╋┼┼┤] 画質の色あい調整 ※ 1	緑色と赤色のバランス調整	●色あい：0 −10（緑強調）〜+10（赤強調）
色の濃さ [├┼┼╋┼┼┤] 彩度の調整 ※ 1	色の濃さを調整	●色の濃さ：0 −10（薄い）〜+10（濃い）
ノイズリダクション [├┼┼╋┼┼┤] ノイズリダクションの設定 ※ 1	映像のざらつきを抑える設定	●ノイズリダクション：0 −10、−5、0、+5、+10
解像度の設定 [オート] 解像度の設定 ※ 1, 2, 3, 4	入力信号を出力する際の解像度の設定	●解像度の設定：オート ○解像度の設定：PURE ○解像度の設定：480i ○解像度の設定：480p ○解像度の設定：720p ○解像度の設定：1080i ○解像度の設定：1080p
アスペクト比 [THROUGH] アスペクト比の設定 ※ 1	モニター出力映像のアスペクト比（縦横比）の設定 （THROUGHは入力した映像信号をそのまま出力します。NORMALは上下または左右に黒帯を付加し、ZOOMは画像を拡大して出力します。）	●アスペクト比：THROUGH ○アスペクト比：NORMAL ○アスペクト比：ZOOM

※1　ビデオコンバーターの設定がONのときのみ調整できます。
※2　テレビ（モニター）が対応していない解像度に設定した場合は映像が出なくなります。また、コピープロテクト信号により、映像が出なくなることがあります。そのときは設定を変更し直してください。
※3　「オート」を選択するとHDMIで接続されたテレビ（モニター）の能力に合わせて自動的に解像度が選ばれます。また、「PURE」を選択すると、入力された解像度そのままで出力されます（このとき、入力された映像端子と同じ種類の映像出力端子からのみ映像を出力します）。
※4　HDMI出力、コンポーネント出力に有効な設定です。

ホームメディアギャラリーを使用する

本機はLAN端子やUSB端子を装備しており、それらの端子を使うことで以下の機能をお楽しみいただくことができます。

パソコン*にためた動画/音楽/画像ファイルを本機で再生

パソコン*などに保存されているたくさんのファイルを本機で再生することができます。お手持ちのネットワーク機器の取扱説明書とあわせてご確認ください。

* パソコン以外にも、DLNA1.0に準拠したメディアサーバー機能を持つ機器(たとえば、ネットワーク型ハードディスクやネットワーク対応のオーディオシステムなど)であれば保存されているファイルを本機で再生することができます。

USBメモリーに保存されているファイルを本機で再生

フォルダー/ファイルリスト画面を表示し、再生したい曲をダイレクトで再生することができます。

ホームメディアギャラリーをお楽しみいただくためのステップ

ネットワーク上のファイルを再生する場合

ステップ1 「LAN端子でネットワークに接続する」(→59ページ)

▼

ステップ2 「接続しているサーバーに本機を認証させる」(→60ページ)

▼

ステップ3 「ネットワークの設定を行う」(→70ページ)
接続するルーターにDHCPサーバー機能がない場合のみ設定が必要

▼

ステップ4 「ホームメディアギャラリー入力で再生する」(→60ページ)

USBメモリーを再生する場合

ステップ1 「USB端子にUSBメモリーを接続する」(→59ページ)

▼

ステップ2 「ホームメディアギャラリー入力で再生する」(→60ページ)

再生できるネットワーク機器について

本機は下記の機器に保存されているネットワーク上のファイルを再生できます。

- OS がMicrosoft Windows XP Service Pack 2で、Windows Media Connect がインストールされているパソコン
- OS がMicrosoft Windows Vista またはXP Service Pack 2で、Windows Media Player 11がインストールされているパソコン
- DLNA1.0に準拠したメディアサーバー(パソコンやネットワーク型ハードディスクなど)

ネットワーク上の機器に保存されている動画/音楽/画像などのファイルを再生するには、**ルーターのDHCPサーバー機能がONになっている**必要があります。DHCPサーバー機能がないルーターの場合はネットワークの設定を行わなければネットワーク上のファイルの再生ができません。詳しくは「ネットワークの設定を行う」(→70ページ)をご確認ください。

ホームメディアギャラリーの再生

- 本機は下記の技術を使ってネットワーク上の機器に保存されているファイルを再生します。各技術の詳細については「用語解説」もあわせてご覧ください。
  ― Windows Media Player 11
  ― Windows Media Connect
  ― Windows Media DRM
  ― DLNA
- 接続している機器の性能や状態によって再生が停止したり、正しく再生できないことがあります。
- ネットワークの通信が混雑していると、ファイルが表示されない、または再生できないことがあります。ネットワーク上の機器と接続するときは100BASE-TXのご利用をお勧めします。
- ネットワーク上の複数の機器が同じファイルを同時に再生すると再生が停止することがあります。
- 接続している機器にインターネットセキュリティーソフトウェアなどがインストールされているとネットワークに接続できないことがあります。
- 当社は本機とネットワーク上で接続している機器の不具合やファイルまたはデータの破損などに関して一切の責任を負いかねますのであらかじめご了承ください。接続している機器のメーカーにお問い合わせください。
- USBメモリーに記録されている写真ファイルを再生すると画像が乱れることがあります。この場合、写真ファイルをPCサーバーに保存し、PCサーバーから再生することで解決することがあります。

再生できるファイルフォーマットについて

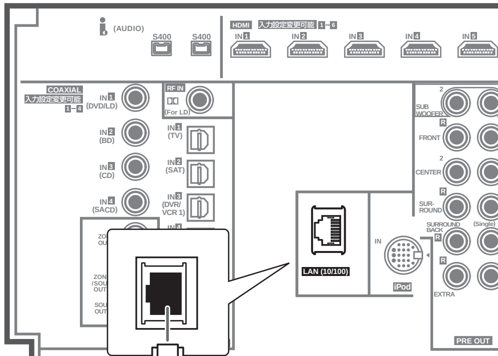
本機のホームメディアギャラリー入力は以下のファイルフォーマットに対応しています。ファイルフォーマットについて詳しくは「対応フォーマットの詳細」(→72ページ)をご覧ください。

ファイルの種類	種別	拡張子
動画	MPEG PS MPEG-2 TS WMV MPEG4	.mpg、.mpeg、.mpe、.m2p (サーバーからの出力にのみ対応) .asf、.wmv .mp4
音楽	MP3 MPEG-4 AAC LPCM WAV WMA	.mp3 .m4a (サーバーからの出力にのみ対応) .wav .wma
画像	JPEG BMP PNG TIFF GIF	.jpg、.jpeg .bmp .png .tif、.tiff .gif

- 本機が対応している形式のファイルでも再生できないことがあります。
- 接続している機器の種類やソフトウェアのバージョンによって働かない機能があります。
- 対応しているファイルの形式は接続している機器(サーバー)によって異なります。接続している機器が対応していない形式のファイルは表示されません。詳しくはお使いの機器(サーバー)のメーカーにお問い合わせください。
- MPEG Audio Layer-3(MP3)音声復号化技術は、Fraunhofer IIS および Thomson multimediaからライセンスされています。
- MPEG-2 TSおよびLPCMファイルはサーバーから出力された場合にのみ対応しています。USBメモリーに保存されたMPEG-2 TSおよびLPCMファイルを再生することはできません。
- サーバーによっては本機が対応していないフォーマットを変換(トランスコード)して出力できるものもあります。詳しくはサーバーの取扱説明書をご確認ください。

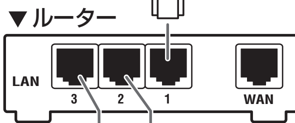
LAN端子でネットワークに接続する

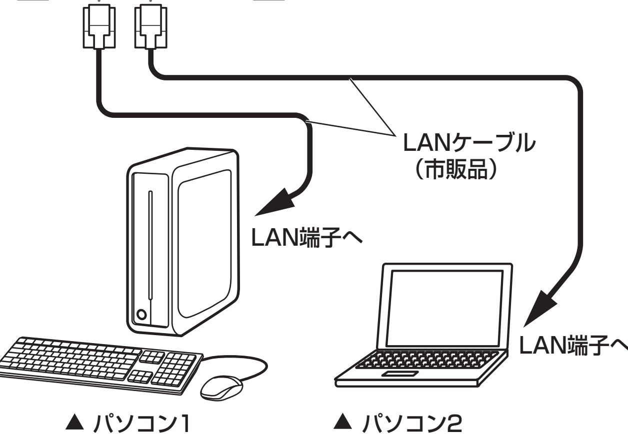
SC-LX90



LANケーブル
（市販品）

▼ルーター





LANケーブル
（市販品）

LAN端子へ

LAN端子へ

▲ パソコン1　　▲ パソコン2



機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

LAN端子を使ってネットワークに接続することで、パソコンなどのネットワーク上の機器に保存されているファイルをお楽しみいただくことができます。
本機のLAN端子とルーター（DHCPサーバー機能付きなど）のLAN 端子をストレートLANケーブル（CAT-5以上）で接続します。
ルーターのDHCPサーバー機能をオンにします。ルーターにDHCPサーバー機能がない場合はネットワークを手動で設定する必要があります。詳しくは「ネットワークの設定を行う」（→70ページ）をご覧ください。

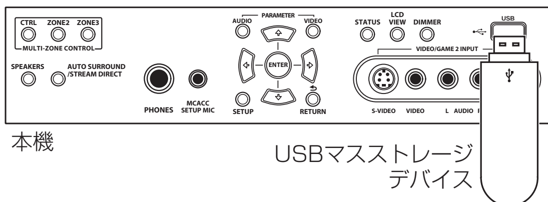
- Windows Media ConnectまたはWindows Media Player 11をお使いの場合、本機では著作権保護のかかっている音楽ファイルも再生することができます。

LAN端子の仕様

LAN（10/100）端子
.... 1系統、10BASE-T/100BASE-TX

USB端子にUSBメモリーを接続する

お手持ちのUSBメモリーを本機に接続することで、USBメモリーに記録されている動画や音楽、画像ファイルなどを本機で再生することができます。



本機

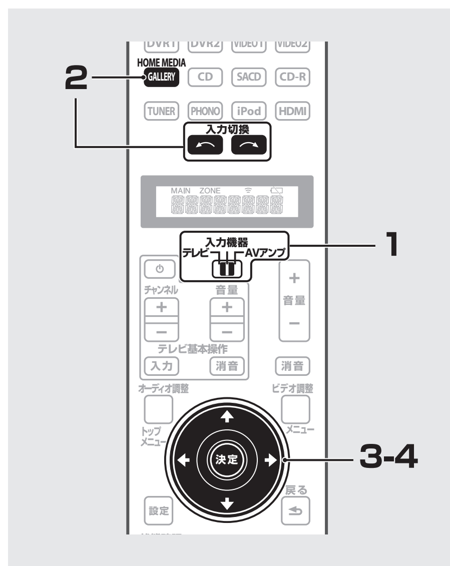
USBマスストレージ
デバイス

- 本機とパソコンをUSBケーブルで接続して音楽ファイルを再生することはできません。本機が対応しているUSBメモリーは、外付ハードディスクや携帯フラッシュメモリー、マルチカードリーダー、デジタルカメラ、デジタルオーディオ再生機（FAT16、FAT32、NTFSのフォーマットに対応）などのUSBマスストレージクラスに属する機器です。
- 本機ではすべてのUSBメモリーの再生、および電源の供給を保証できない場合があります。また、本機と接続したことで、USBメモリーのファイルが万が一損失した場合、当社は一切の責任を負うことができませんので、あらかじめご了承ください。

接続しているサーバーに本機を認証させる

ホームメディアギャラリーを使ってサーバーに保存されているファイルを再生するには、あらかじめサーバーが本機を認証（許可）している必要があります。認証（許可）方法は接続しているサーバーによって異なります。詳しくはサーバーの取扱説明書をご確認ください。

ホームメディアギャラリー入力で再生する

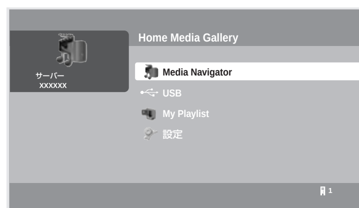


- ファイルを再生するときは、「再生準備中」と表示されてから再生を始めます。ファイルによっては数秒表示されることがあります。
- 手順3で、サーバーを複数台接続している状態で、はじめてMedia Navigatorを選択するとサーバー選択画面が表示されますので、再生したいサーバーを選んでから手順4へお進みください。また、次回からは選んだサーバーへ自動で接続されます。毎回サーバーを選択したいときは、「最後にアクセスしたサーバーに自動接続」の設定を変更します。詳しくは「便利機能設定を行う」（→71ページ）をご覧ください。
- Windowsのネットワーク環境で、ドメインが構成されている場合、ドメインにログオンしているとパソコンに接続できません。ドメインではなくローカルマシンにログオンしてください。
- 可変ビットレート（VBR）で圧縮されたファイルも再生できますが、経過時間が正しく表示されないことがあります。
- 5分間何も操作がないときはスクリーンセーバー機能が働きます。動画や画像のスライドショー再生中はスクリーンセーバー機能は働きません。スクリーンセーバー機能を解除するときは何かボタンを押します。

1 リモコンを入力機器操作モードにする。

2 HOME MEDIA GALLERYボタンを押して入力をホームメディアギャラリーにする。

ネットワークに接続するため、多少時間がかかることがあります。起動後は以下の画面が表示されます。



3 再生したいカテゴリーを選んで決定する。

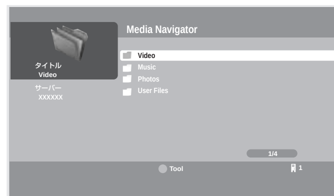
カテゴリーは以下の中から選びます。
選んだカテゴリーによってフォルダーやファイルなどのリストが表示されます。
Media Navigator：ネットワーク上のサーバー
USB：USBメモリー
My Playlist：登録されたお気に入りのファイル

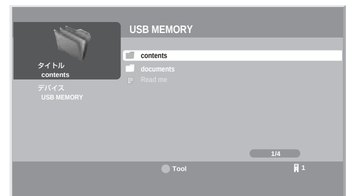
4 再生したいフォルダーやファイルなどを選んで決定する。

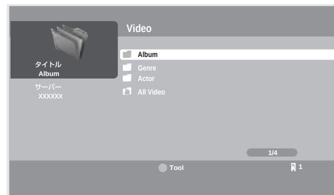
⬆⬇ボタンで画面をスクロールできます。前の画面に戻るには**戻る**ボタンを押します。選んだ項目が動画/音楽/画像ファイルの場合、それぞれの再生画面が表示され、再生が始まります。

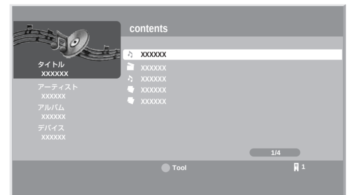
Media Navigatorの場合

USBの場合









再生できるのは マークのついているファイルです。⬆⬇、**決定**ボタンでそれらを選びます。

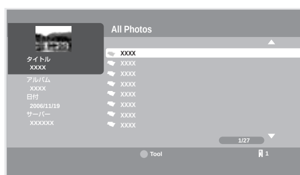
5 **手順4を繰り返して、再生したいファイルを再生する。**

本機のリモコンでいろいろな操作ができます。詳しくは64ページをご覧ください。

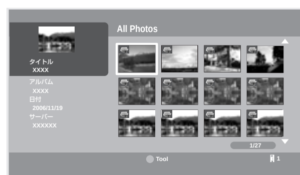
フォルダー/ファイルリスト画面の表示のしかたを切り換える

60ページの手順3で再生したいカテゴリーを選ぶとフォルダー/ファイルリスト画面が表示されます。
フォルダー/ファイルリスト画面の表示のしかたを「リスト」、「サムネイル」、「情報付きサムネイル」の3種類から選んで切り換えることができます。それぞれの画面表示例は以下のとおりです。

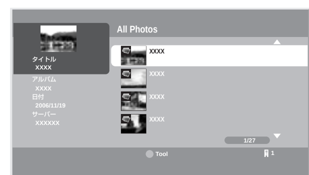
■ リスト画面



■ サムネイル画面



■ 情報付きサムネイル画面

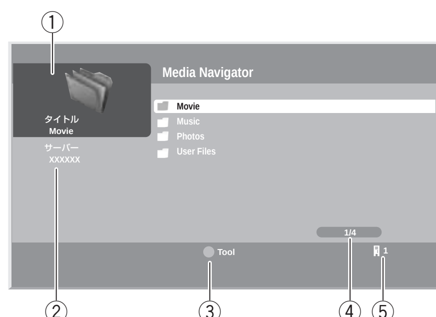


フォルダー/ファイルリスト表示中に ADV SURR を押して、ツールメニューから「表示切換」を選び、表示のしかたを選びます。詳しくは「ツールメニュー機能を使用する」（→67ページ）をご確認ください。

Media Navigator(ネットワーク上の機器)でのファイル再生について

■ Media Navigatorリスト画面について

Media Navigatorを選択すると以下の画面が表示されます。



① 選ばれているカテゴリー/フォルダー/ファイルのサムネイル表示
② 選ばれているサーバーの名前
③ キーガイド
④ ファイル*番号/総ファイル*数
⑤ 接続(認証)されているサーバーの数

＊ カテゴリーやフォルダーが選ばれているときは、それらの番号/総数が表示されます。

- 本機は最後に接続したサーバーを記憶し、次回起動時は自動で前回のサーバーへ接続するため、サーバーリスト画面が表示されません。毎回サーバーを手動で選択したいときは、「便利機能設定」の「最後にアクセスしたサーバーに自動接続」の設定を変更します(→71ページ)。

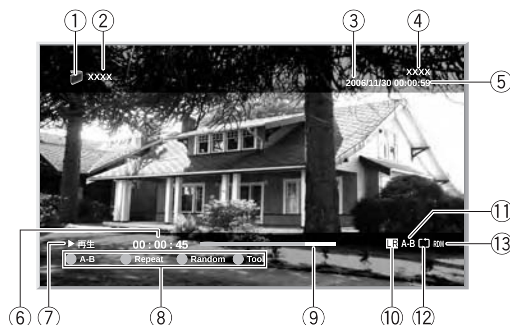
■ 再生画面について

ファイルの再生を行うと以下の画面が表示されます(ファイルによってはすべての項目が表示されないことがあります)。

- サーバーによっては再生経過時間が正しく表示されないことがあります。

動画ファイル再生画面

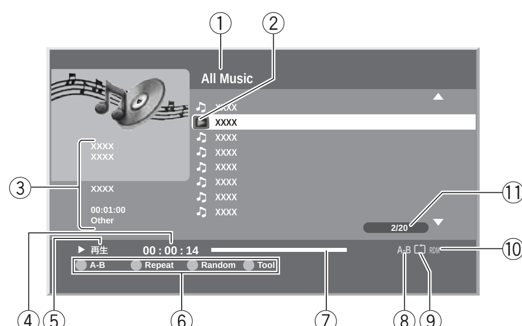
表示ボタンを押すと以下の情報が表示されます(情報によっては何度かボタンを押す必要があります)。



① 動画アイコン
② タイトル(ファイル名)など
③ 日付
④ アルバム名など
⑤ 再生時間
⑥ 再生経過時間
⑦ 再生状態表示
⑧ キーガイド*
⑨ 経過表示バー
⑩ 音声表示
⑪ A-Bリピートモード表示
⑫ リピートモード表示
⑬ ランダムモード表示

＊ Randomが表示されるのはプレイリスト再生時または「連続再生」(→67ページ)を選んでいるときだけです。

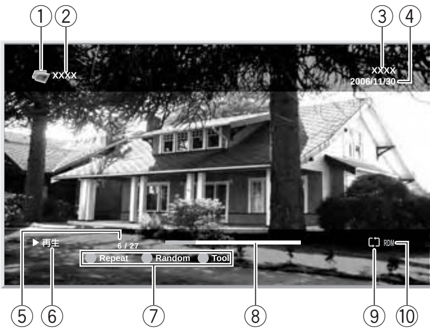
音楽ファイル再生画面



① フォルダー名
② 再生中アイコン
③ 詳細表示
④ 再生経過時間
⑤ 再生状態表示
⑥ キーガイド
⑦ 経過表示バー
⑧ A-Bリピートモード表示
⑨ リピートモード表示
⑩ ランダムモード表示
⑪ 再生している曲番号/総曲数

画像ファイル再生画面

表示ボタンを押すと以下の情報が表示されます



① 画像アイコン
② ファイル名
③ フォルダー名など
④ 日付
⑤ 再生している画像番号/フォルダー内の総画像数*
⑥ 再生状態*
⑦ キーガイド
⑧ 経過表示バー*
⑨ リピートモード表示
⑩ ランダムモード表示

＊ スライドショー再生時のみ表示されます。
（→66ページ）

USBメモリーの再生について

1つのフォルダー内で最大99999までのフォルダーやファイルを表示、再生することができます。

- フォルダー内の最後のファイルが再生を終了すると再生が停止します。
- 容量の大きいUSBメモリーを接続したときは、読み込みに多少時間がかかることがあります。
- 著作権保護のかかったファイルは再生することができません。

プレイリストの再生について

■ プレイリストについて

お気に入りの音楽ファイルや動画、画像ファイルなどを1つのプレイリストに最大100まで登録することができます。登録できるのはネットワーク上の機器に保存されているファイルのみです。USBメモリーに保存されたファイルは登録できません。

Windows Media DRMについて

Windows Media デジタル著作権管理(DRM)(以下、WMDRM)は、コンピューター、デジタルオーディオプレーヤー、ネットワーク機器などの再生を防いだり、デジタルコンテンツを安全に配信するためのプラットフォームです。ホームメディアギャラリーのネットワークオーディオではWMDRM 10 for networked devices に基づいて機能します。WMDRM で保護されたコンテンツはWMDRM の機能を有するメディアサーバーと接続したときのみ再生できます。コンテンツ所有者は、著作権を含む知的所有権を保護するためにWindows Media デジタル著作権管理テクノロジー(WMDRM)を使用します。本製品は、WMDRM で保護されたコンテンツにアクセスするためにWMDRM ソフトウェアを使用します。WMDRM ソフトウェアがコンテンツの保護に失敗した場合、コンテンツ所有者は保護されたコンテンツの再生やコピーのためにWMDRM を使用しているソフトウェアの能力を無効にするよう、マイクロソフトに要請することがあります。無効化は、保護されていないコンテンツには影響を与えません。保護されたコンテンツに対するライセンスをダウンロードするときは、マイクロソフトがそのライセンスと一緒に失効リストを含ませることがあることに同意する必要があります。コンテンツ所有者は、それらのコンテンツのアクセスに対してWMDRM をアップグレードすることを要求することがあります。もしもアップグレードを断ると、アップグレードを要求するコンテンツへアクセスすることができなくなります。
本製品は、米国Microsoft Corporation の知的所有権により保護されています。米国Microsoft Corporation の許可を得ずにこの技術を本製品以外で使用または頒布することは禁じられています。

動画/音楽/画像ファイル再生のいろいろな操作

動画/音楽/画像ファイル再生画面でのボタン操作

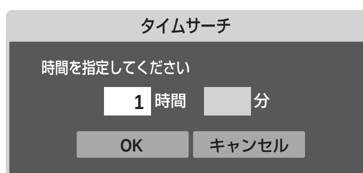
	動画	音楽	画像
決定	再生（再生中は一時停止）	選択されているファイルの再生（ファイル再生中は一時停止）	選択されているファイルの再生またはスライドショー再生の開始（スライドショー再生中は一時停止）
◀ ▶	早送り/早戻し（押すたびに速度が切り換わります）	←	———
▲ ▼	⬆：15秒早戻し ⬇：15秒早送り	リストの選択	———
▲ ◀	———	———	1つ前の画像の表示
▶ ▼	———	———	次の画像の表示
○ ▶	再生	←	スライドショー再生の開始
❚❚	一時停止	←	スライドショー再生の一時停止
■	停止	←	画像再生を停止して前の画面に戻る
▶▶ ◀◀	早送り/早戻し（押すたびに速度が切り換わります）	←	◀◀：表示している画像を左90°回転します（押すたびに左90°ずつ回転します）
AUTO/DIRECT 青	A-Bリピート再生の設定（1度押すとAが設定されもう一度押すとBが設定され、AとBの間をリピート再生します。もう一度押すと解除されます）	←	▶▶ / AUTO/DIRECT 青：表示している画像を右90°回転します（押すたびに右90°ずつ回転します）
STEREO/F.S.SURR 赤	リピート再生の設定	←	スライドショー再生中のリピート再生の設定
STANDARD 緑	ランダム再生の設定	←	スライドショー再生中のランダム再生の設定
ADV SURR 黄	ツールメニューの表示	←	←
表示	再生しているファイルの情報を表示	———	再生しているファイルの情報を表示
音声	音声の切り換え（「L+R」「L」または「R」の切り換え）	———	———
戻る	停止（リスト画面のときは前の画面に戻ります）	前の画面に戻る	再生しているファイルまたはスライドショー再生を停止して前の画面に戻る

- サーバーの種類やバージョンによっては操作できないことがあります。
- ファイルの種類によっては操作できないことがあります。

指定した時間から再生する(タイムサーチ)

(動画)、(音楽)ファイルのみ

1. 再生中または一時停止中に ADV SURR を押し、⬆⬇で「タイムサーチ」を選んで決定する。
2. ⬆⬇⬅➡で「時間」または「分」を選んで決定する。
3. 数字ボタンで「時間」または「分」を入力して決定する。



4. ⬇で「OK」を選んで決定する。
   指定した時間から再生が始まります。
   「キャンセル」を選ぶとタイムサーチを中止します。

- サーバーの種類やバージョンによっては指定した時間から再生できないことがあります。

スロー再生する

(動画)ファイルのみ

・ 再生中または一時停止中に ADV SURR を押し、⬆⬇で「スロー再生」を選んで決定する。
  - スロー再生が始まります。
  - でスロー再生の速度を切り換えることができます。
  - か を押すとスロー再生を解除します。

プレイリストにファイルを登録する

1. プレイリストに追加したいファイルを選択または再生する。
2. ADV SURR を押し、⬆⬇で「プレイリスト登録」を選んで決定する。
   「プレイリスト選択」画面が表示されます。
3. ⬆⬇でどのプレイリストに登録するかを選んで決定する。



4. ⬇で「OK」を選んで決定する。
   選んだファイルがプレイリストに登録されます。
   「キャンセル」を選ぶとプレイリストへの登録を中止します。

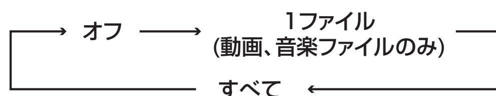
指定した箇所を繰り返し再生する(A-Bリピート再生)

(動画)、(音楽)ファイルのみ

1. 再生中に AUTO/DIRECT を押して始点(A)を選ぶ。
2. 終点(B)で AUTO/DIRECT を押し、繰り返し聞く箇所を指定する。
   A-Bリピートモード表示が点灯し、指定した箇所を繰り返し再生します。通常の再生に戻すときには AUTO/DIRECT をもう一度押します。

同じファイルや再生しているリストを繰り返し再生する(リピート再生)

1. 再生中に STEREO/F.S.SURR を押してリピート再生を選ぶ。
   ボタンを押すたびに以下のように切り換わります。



- 画像ファイルはスライドショー再生時のみリピート再生できます。

いつもと違う順番で再生する(ランダム再生)

1. 再生中に STANDARD を押してランダム再生を選ぶ。
   ボタンを押すたびにOnとOffが切り換わります。

- 画像ファイルはスライドショー再生時のみランダム再生できます。

再生を中断した場面から再生を再開する(レジューム再生)

(動画)ファイルのみ(Media Navigatorのみ)

再生を中断した場面から再度再生を始めることができます。再生を中断したファイルを再び再生すると「レジューム」か「通常再生」を選ぶ画面が表示されます。ここで、「レジューム」を選ぶと前回中断した場面から、「通常再生」を選ぶと最初から再生されます。
ファイルの再生を中断したあと、他のファイルを再生してしまうと、再生位置はリセットされてしまいます。

- レジューム再生できないファイルもあります。
- 中断した場面から多少時間がずれることがあります。

ホームメディアギャラリーの再生

スライドショー時のBGM設定を行う

(画像)ファイル再生時に有効

スライドショー再生をしながら、プレイリストに登録された音楽ファイルを再生することができます。プレイリストへの音楽ファイルの登録のしかたは「プレイリストにファイルを登録する」(→65ページ)をご覧ください。

1. **Media Navigator、USBまたはMy Playlistから再生したい画像ファイルを選んで決定する。**
   画像ファイル再生画面になります。
2. **ADV SURR を押してツールメニューを表示させ、⬆⬇で「BGM設定」を選んで決定する。**
   BGM設定画面が表示されます。



3. **⬆⬇で再生したいプレイリストを選んで決定する。**
4. **⬆⬇で「BGM 有効」、「BGM 有効(シャッフル)」または「BGM 無効」を選んで決定する。**
5. **⬆⬇でBGMの設定を選んで決定する。**
   「BGM 有効」:選んだプレイリストの曲を順番に再生します。
   「BGM 有効(シャッフル)」:選んだプレイリストの曲をランダムに再生します。
   「BGM 無効」:BGMを再生しません。
6. **⬇で「OK」を選んで決定する。**

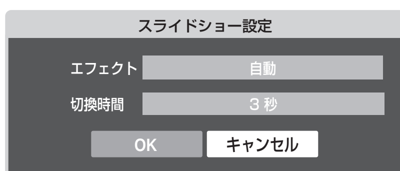
- 音楽ファイルを再生中にスライドショー再生を行ったときは再生中の音楽ファイルがそのまま再生されます。

スライドショーに関する設定を行う

(画像)ファイル再生時に有効

スライドショー再生時の画像の切り換え効果や1枚の写真の表示時間を設定します。

1. **Media Navigator(フォルダー/ファイルリスト)画面表示中に ADV SURR を押してツールメニューを表示する。**
2. **⬆⬇で「スライドショー設定」を選んで決定する。**



3. **⬆⬇で「エフェクト」を選んで決定する。**
4. **⬆⬇で「自動」「ホワイトアウト」「ブラックアウト」「なし」のいずれかを選んで決定する。**
   「自動」:下記「ホワイトアウト」と「ブラックアウト」の効果を画像ごとに自動で切り換えます。
   「ホワイトアウト」:白い画面にフェードアウトしたあと、次の画像がフェードイン表示されます。
   「ブラックアウト」:黒い画面にフェードアウトしたあと、次の画像がフェードイン表示されます。
   「なし」:フェードアウト、フェードイン機能を使用せずに画像を切り換えます。
5. **⬆⬇で「切換時間」を選んで決定する。**
6. **⬆⬇でお好みの表示時間を選んで決定する。**
7. **⬇で「OK」を選んで決定する。**

- インターバルの設定時間よりも長く画像が表示されることがありますが、これは本機が次の画像を取り込んでいる時間です。この間はボタン操作を行えませんので少しお待ちください。

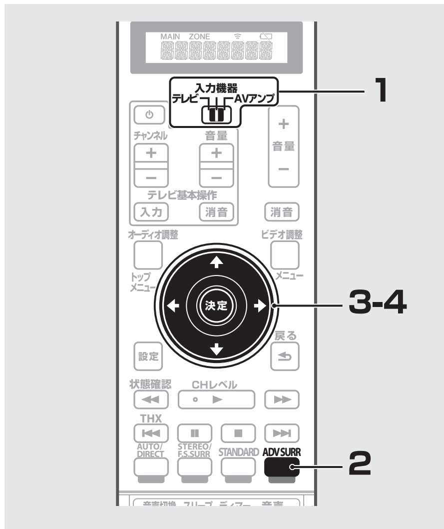
スライドショー 再生を開始する

(画像)ファイル再生時に有効

1. **再生したい画像ファイルのあるフォルダーを⬆⬇⬅➡で選び、決定する。**
2. **⬆⬇⬅➡で再生したい画像ファイルを選んで決定する。**
   選んだ画像ファイルを再生します。
3. **決定または ▶ を押してスライドショー再生を開始する。**
   - ➡⬇で次の画像へ進み、⬅⬆で前の画像へ戻ります。
   - ⏸ でスライドショーを一時停止できます。
4. **■ または 戻る を押してスライドショーを終了する。**
   前の画面に戻ります。

ツールメニュー機能を使用する

ここでは以下の表にあるホームメディアギャラリーに関する「設定/操作項目」をお好みで設定できます。それぞれの機能の内容をご確認のうえ、お好みで項目を選んで設定を行ってください。



1 リモコンを入力機器操作モードにする。

2 黄色ボタンを押してツールメニューを表示する。

3 設定/操作項目を選んで決定する。

以下の表からお好みで設定/操作したい項目を選びます。

4 手順3で選んだ項目の設定/操作を行う。

以下の表の内容を確認のうえ、操作します。

設定/操作項目	設定・効果の内容	選択できる画面
最新の状態に更新	新しく起動したサーバーと接続するために、ネットワーク状態を更新します。	サーバーリスト画面
サーバー削除	選んだサーバーをリストから削除します。	サーバーリスト画面
USBデバイス一覧	USBデバイスリスト画面を表示します。	フォルダー/ファイルリスト画面(USBデバイスのみ)
連続再生*1	選んだファイルに続けて動画ファイルを再生します。	フォルダー/ファイルリスト画面
詳細情報表示*1	選んだファイルの詳細情報を表示します。	フォルダー/ファイルリスト画面
並べ替え（→68ページ）	リストに表示されるフォルダーやファイルの順番を入れ替えます。	フォルダー/ファイルリスト画面
絞り込み（→68ページ）	特定の用語をフォルダー/ファイルリストの中から検索します。	Media Navigator画面、フォルダー/ファイルリスト画面
スライドショー設定（→66ページ）	スライドショーに関する設定を行います。	すべての画面で選択できます。
プレイリスト登録*1（→65ページ）	選んだファイルをプレイリストへ登録します。	フォルダー/ファイルリスト画面、動画/音楽/画像ファイル再生画面
サーバー選択（→68ページ）	サーバーリスト画面を表示します。	Media Navigator画面、フォルダー/ファイルリスト画面
再生停止*2	ファイルの再生を停止します。	Media Navigator画面、プレイリスト画面、フォルダー/ファイルリスト画面、音楽/画像ファイル再生画面

ホームメディアギャラリーの再生

設定/操作項目	設定・効果の内容	選択できる画面
名前変更（→69ページ）	プレイリストの名前を変更します。	プレイリスト画面
表示切換（→61ページ）	画面表示のしかたを切り換えます。「リスト」、「サムネイル」、「情報付きサムネイル」のいずれかを選びます。	フォルダー/ファイルリスト画面
タイムサーチ（→65ページ）	動画または音楽ファイル再生画面で指定した時間から再生をはじめます。	動画/音楽ファイル再生画面
スロー再生（→65ページ）	動画ファイル再生をスロー再生します。	動画ファイル再生画面
BGM設定（→66ページ）	画像ファイルをスライドショー再生しているときのBGMに関する設定を行います。	画像ファイル再生画面
移動（→69ページ）	プレイリスト内のファイルの順番を変更します。	ファイルリスト画面
プレイリストから削除*[1]（→69ページ）	選んだファイルをプレイリストから削除します。	ファイルリスト画面

*[1] 再生できるファイルを選んでいるときのみ
*[2] 音楽ファイルを再生しているときのみ

サーバーを選択する

本機のホームメディアギャラリー入力では、前回接続したサーバーを記憶し、毎回自動でそのサーバーに接続します。他にも接続可能なサーバーがネットワーク上に存在するときは、それらのサーバーに切り換えることができます。

1. 「Media Navigator」を選んで決定する。
   前回接続したサーバーに接続します。
2. ADV SURR を押してツールメニューを表示する。
3. ⬆⬇で「サーバー選択」を選んで決定する。
   接続できるサーバーのリストが表示されます。
4. ⬆⬇で接続したいサーバーを選んで決定する。
   Media Navigator画面になります。

- 前回接続したサーバーがネットワーク上で見つからないときは、そのサーバー名がうすく表示されます。

絞り込み機能でコンテンツを探す

検索したい文字を入力してコンテンツを探すことができます。

1. 「Media Navigator」を選んで ADV SURR を押してツールメニューを表示する。
2. ⬆⬇で「絞り込み」を選んで決定する。
3. ⬆で条件を選んで決定する。



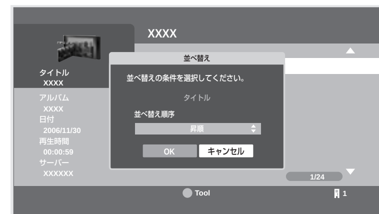
4. 「キーボード入力」で検索したいワードを入力する。
5. ⬆⬇で「OK」を選んで決定する。
   検索を中止するときは「キャンセル」を選びます。
6. ⬇で「OK」を選んで決定する。
   入力したワードの検索結果が表示されます。
7. 戻る を押して絞り込み機能を終了する。

- 「絞り込み」機能はサーバーが対応していないと正しく動作しません。また、検索したい文字はアルファベットのみの対応です。

並べ替え

フォルダーやファイルリストの順番を変えることができます。

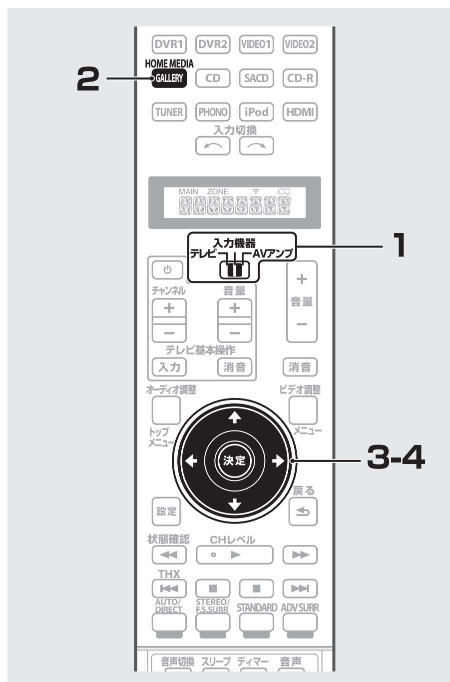
1. 「Media Navigator」を選んで ADV SURR を押してツールメニューを表示する。
2. ⬆⬇で「並べ替え」を選んで決定する。
   「並べ替え」画面が表示されます。
3. ⬆で「並べ替え順序」を選んで決定する。
4. ⬆⬇で「昇順」または「降順」を選んで決定する。



5. ⬇で「OK」を選んで決定する。
   手順4で選んだ順番に設定されます。
6. 戻る を押して並べ替え機能を終了する。

プレイリストを編集する

プレイリストの名前を変更したり、プレイリスト内のファイルの順番を移動させたり削除することができます。



1 リモコンを入力機器操作モードにする。

2 ホームメディアギャラリー入力にする。

3 「My Playlist」を選んで決定する。

「Movie Playlist」、「Music Playlist」、「Photo Playlist」の選択画面になります。

4 編集したいプレイリストを選んで決定する。

「名前変更」、「移動」、「プレイリストから削除」のそれぞれの操作にお進みください。

プレイリストの名前を変更する

上記手順1～4を行う。

1. ⬆⬇で名前を変更したいプレイリストを選ぶ。
2. ADV SURR を押してツールメニューを表示する。
3. ⬆⬇で「名前変更」を選んで決定する。
   「名前変更」画面が表示されます。
4. ⬆で「プレイリスト名」を選んで決定する。
5. 「キーボード入力」で変更したい名前を入力する。



6. ⬆⬇で「OK」を選んで決定する。
   キーボード入力画面が終了します。
7. ⬇で「OK」を選んで決定する。
   プレイリストの名前が変更されます。

プレイリスト内のファイルの順番を変える

上記手順1～4を行う。

1. ⬆⬇でファイルの順番を変えたいプレイリストを選んで決定する。
2. ADV SURR を押してツールメニューを表示する。
3. ⬆⬇で「移動」を選んで決定する。
4. ⬆⬇で 移動させたいファイルを選んで決定する。
   選んだファイルが黄色く反転表示されます。
5. ⬆⬇で移動させたい位置を選んで決定する。
   反転表示が消え、ファイルが移動されます。
6. 手順4～5を繰り返す。
7. 戻る を押す。
   「変更を確定しますか？」と表示されます。
8. ⬅で「OK」を選んで決定する。
   ファイルの移動が完了し、もとのプレイリスト画面に戻ります。

プレイリスト内のファイルを削除する

上記手順1～4を行う。

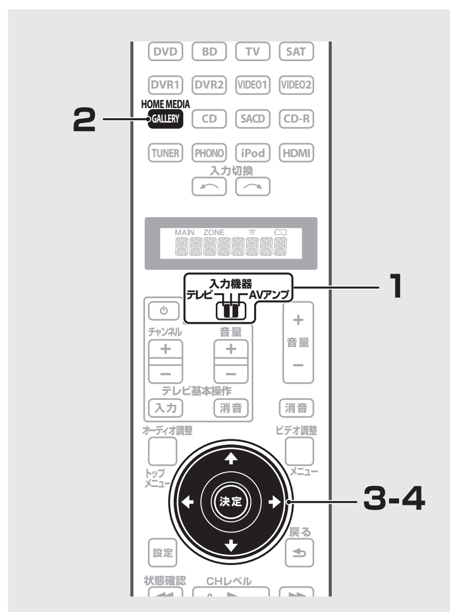
1. ⬆⬇でファイルを削除したいプレイリストを選んで決定する。
2. ⬆⬇で削除したいファイルを選ぶ。
3. ADV SURR を押してツールメニューを表示する。
4. ⬆⬇で「プレイリストから削除」を選んで決定する。
5. ⬅で「OK」を選んで決定する。
   選択したファイルがプレイリストから削除されます。

ネットワークの設定を行う

本機のネットワーク設定で設定できる全項目です。

設定項目	内容		参照ページ
ネットワーク設定	DHCPサーバー機能がないネットワークに接続しているときのみ、この設定を行います。IP Address、Subnet Maskの入力を行います。		71ページ
便利機能設定	最後にアクセスしたサーバーに自動接続	サーバーリスト画面を表示するかどうかの設定	71ページ
	サーバー/USBが一つの場合は自動接続	1台のサーバーまたはマルチリーダーではないUSBデバイスのとき、サーバー/USBデバイスリスト画面をスキップするかどうかの設定	71ページ
設定リセット	ホームメディアギャラリーに関するすべての設定を工場出荷時の状態に戻します。		71ページ
ソフトウェア更新	ホームメディアギャラリー入力用ソフトウェアを更新します。		72ページ
Home Media Gallery バージョン	ホームメディアギャラリー入力用ソフトウェアのバージョンを確認します。		72ページ

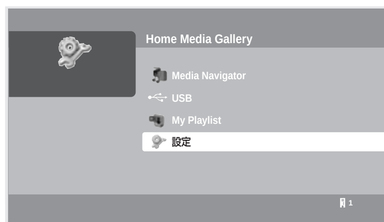
ネットワーク設定の手順



1 リモコンを入力機器操作モードにする。

2 ホームメディアギャラリー入力にする。

3 「設定」を選んで決定する。



4 設定したい項目を選んで決定する。



以下、それぞれの設定にお進みください。

ネットワークの設定を行う

本機のLAN端子と接続したルーターがブロードバンドルーター（DHCPサーバー機能内蔵）の場合、DHCPサーバー機能をONにするだけで、ネットワークの設定を行う必要はありません。DHCPサーバー機能がないネットワークに接続しているときのみ以下のネットワークの設定を行います。設定の際はプロバイダー、またはネットワーク管理者からの設定値を確認してから設定してください。ネットワーク上の機器の取扱説明書もあわせてご覧ください。

IP Address:
入力するIP アドレスは下記の範囲で設定してください。下記以外のIP アドレスではネットワーク上のファイルを再生することができません。
CLASS A: 10.0.0.1 ～ 10.255.255.254
CLASS B: 172.16.0.1 ～ 172.31.255.254
CLASS C: 192.168.0.1 ～ 192.168.255.254

Subnet Mask:
xDSLモデムやターミナルアダプターを直接本機に接続している場合は、プロバイダーから書面などで通知されたサブネットマスクを入力します。通常は255.255.255.0が入ります。

70ページの手順1～3を行う。

1. **⬆⬇で「ネットワーク設定」を選んで決定する。**
2. **⬆で「IPアドレスの自動取得」を選んで決定する。**
3. **⬆⬇で「しない」を選んで決定する。**
   「する」を選ぶとIPアドレスは自動で設定されます。この場合、手順8へお進みください。
4. **⬆⬇⬅➡で「IPアドレス」の入力箇所を選んで決定する。**
5. **数字ボタンでIPアドレスを入力して決定する。**
6. **⬆⬇⬅➡で「サブネットマスク」の入力箇所を選んで決定する。**
7. **数字ボタンでサブネットマスクを入力して決定する。**
8. **⬇で「OK」を選んで決定する。**
   再起動の画面が表示されます。
9. **もう一度決定ボタンを押す。**
   設定が完了します。再起動が行われ、ホームメディアギャラリー入力に戻ります。

便利機能設定を行う

「最後にアクセスしたサーバーに自動接続」と「サーバー/USBが一つの場合は自動接続」の2つの設定があります。両機能ともに工場出荷時はオンの状態です。
「最後にアクセスしたサーバーに自動接続」機能は最後にアクセスしたサーバーを記憶し、次からはサーバーリスト画面を表示せずに直接サーバーへ接続する機能です。
「サーバー/USBが一つの場合は自動接続」機能は、USBデバイスリストまたはサーバーリスト画面を表示せず、常に1つのUSBデバイスまたはサーバーへアクセスします。マルチリーダーではないUSBデバイスや複数台サーバーを接続していない場合などは、毎回USBデバイスリスト画面またはサーバーリスト画面をスキップするので便利です。

70ページの手順1～3を行う。

1. **⬆⬇で「便利機能設定」を選んで決定する。**
2. **⬆⬇で「最後にアクセスしたサーバーに自動接続」または「サーバー/USBが一つの場合は自動接続」を選んで決定し、それぞれオン、オフを選ぶ。**
   ✓はオンを表します。
3. **⬇で「OK」を選んで決定する。**

ホームメディアギャラリーの設定を工場出荷時に戻す

70ページの手順1～3を行う。

1. **⬆⬇で「設定リセット」を選んで決定する。**
   「購入時の状態に値をリセットします。リセットを行うと、以前に設定した値は全てクリアされます。」というメッセージが表示されます。
2. **⬅で「リセット」を選んで決定する。**
   再起動の画面が表示されます。
3. **もう一度決定ボタンを押す。**
   初期化が行われ、再起動します。

ホームメディアギャラリーの再生

ホームメディアギャラリー入力用ソフトウェアを更新する

ソフトウェア更新に関する情報を弊社ホームページ上で公開することがあります。
http://pioneer.jp/support/
上記アドレスから単品コンポーネントに関するお客様サポートまたはソフトウェアダウンロード情報をご確認ください。

ホームメディアギャラリー入力用ソフトウェアのバージョンを確認する

70ページの手順1～3を行う。

1. **⬆⬇で「Home Media Galleryバージョン」を選んで決定する。**
   現在のソフトウェアのバージョンが表示されます。
2. **もう一度決定ボタンを押す。**
   前の画面に戻ります。

対応フォーマットの詳細

本機が対応している拡張子については「再生できるファイルフォーマットについて」(→58ページ)をご覧ください。

- USBメモリーに保存されているデジタル著作権管理(DRM/WMDRM)で保護されたファイルは再生できません。
- デジタル著作権管理(DRM/WMDRM)で保護されたファイルは、DRM/WMDRMに対応したメディアサーバーと接続したときのみ再生できます。

動画ファイルの対応フォーマット

MPEG-1/2 PS
1280 x 720(720p)ピクセルまで
MPEG-2 TS/TTS
1280 x 720(720p)ピクセルまで
WMV(著作権保護なし)
1280 x 720(720p)ピクセルまで
WMV(著作権保護あり)
720 x 480(480p)ピクセルまで
MPEG-4
1280 x 720(720p)ピクセルまで

音楽ファイルの対応フォーマット

MPEG-1 オーディオレイヤー3(MP3)
サンプリング周波数：48 kHz まで
ビットレート：320 kbps まで
チャンネル数：2 ch まで
MPEG-4 AAC(AAC LC)
サンプリング周波数：48 kHz まで
ビットレート：320 kbps まで
チャンネル数：2 ch まで
リニアPCM(LPCM)
サンプリング周波数：8 kHz ～ 64 kHz
量子化ビット数：16 bit
チャンネル数：2 ch まで
WAV
サンプリング周波数：8 kHz ～ 64 kHz
量子化ビット数：16 bit
チャンネル数：2 ch まで
Windows Media Audio 9(WMA9)
サンプリング周波数：48 kHz まで
ビットレート：768 kbps まで
チャンネル数：2 ch まで
Windows Media Audio 9 Professional (WMA9 Pro)
サンプリング周波数：48 kHz まで
ビットレート：768 kbps まで
チャンネル数：6 ch まで*

＊　マルチチャンネル音声は2 chにダウンミックスされます。

画像ファイルの対応フォーマット

JPEG
解像度：
- 8192×8192 ピクセルまで（YUV444, YUV422, YUV420）
- 1280×768 ピクセルまで（RGB,グレースケール）

（プログレッシブJPEGには対応していません。）
BMP
解像度：無制限
PNG
解像度：2048×1024 ピクセルまで
TIFF
解像度：2048×1024 ピクセルまで
圧縮形式：無圧縮, ZIP, LZW, Packbits, Huffman RLE, CCITT Fax 3/4
GIF
解像度：2048×1024 ピクセルまで
（アニメーションGIFには対応していません。）

iPodをつないで再生する

本機とiPodを接続して、iPodの音楽や映像を本機で楽しむことができます。
本機とiPodを接続して入力をiPodにしたとき、「Error I3」と表示された場合は、本機のiPod操作モードを切り換える必要があります。この場合は、「iPodの操作モードを切り換える」(→75ページ)をご覧になり、「Type 2」に切り換えることで、本機でiPodの操作ができるようになります。

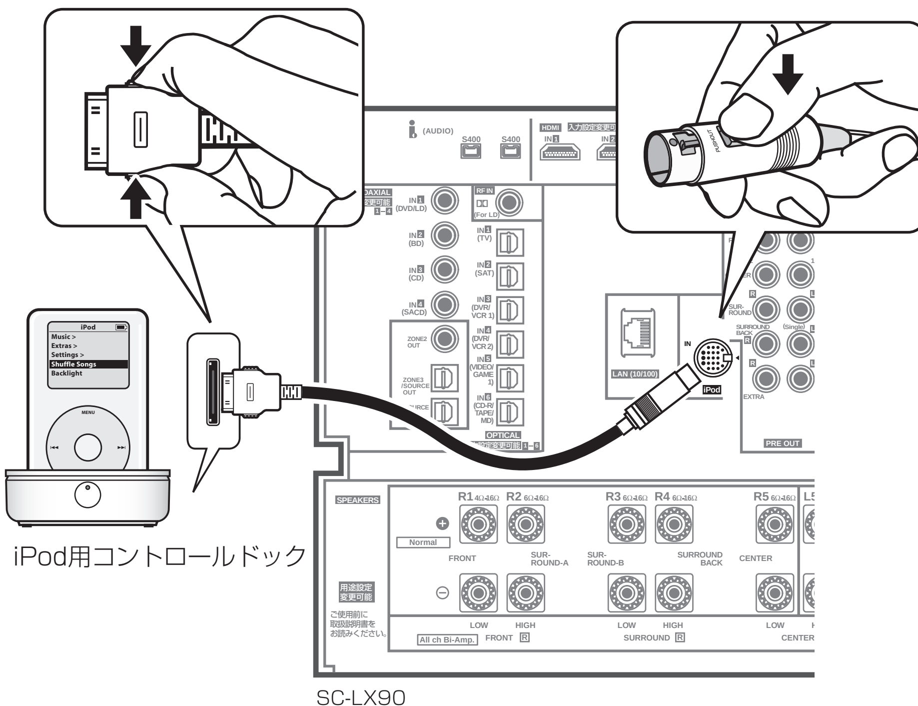
- 本機は、第4世代以降のiPod®やiPod mini、iPod nanoの音声および映像に対応しています。ただし、モデルによっては一部機能が制限されます。
- 第2世代以前のiPod nanoは映像を外部に出力しないため、iPod nanoの映像を本機で再生することはできません。
- 第5世代以降のiPodおよびiPod nanoを接続すると、iPodから音声がデジタル(LPCM)伝送されるため、より高音質で再生することができます。
- 本機はVideo Browseに対応したiPodと接続することでビデオコンテンツの再生を行うことができます。
- iPodのソフトウェアが古いと正常に動作しないことがあります。必ず最新のiPodソフトウェアでお使いください。
- ゾーン2またはゾーン3でのOSD表示は英数字のみとなります。英数字以外の文字がiPodに記録されている場合、その文字は「#」で表示されます。
- iPodは、著作権のないマテリアル、または法的に複製・再生を許諾されたマテリアルを個人が私的に複製・再生するために使用許諾されるものです。著作権の侵害は法律上禁止されています。
- パイオニア製品からiPodのイコライザを操作することはできません。本機にiPodを接続する前に、iPodのイコライザを「オフ」に設定することをお勧めします。
- 本機とiPodを組み合わせてご使用の際、iPodのデータに不具合が生じても、データの補償はいたしかねますのであらかじめご了承ください。
- 付属のiPodケーブルは、本機専用品です。本機以外の機種には使用しないでください。

iPodの接続


注意

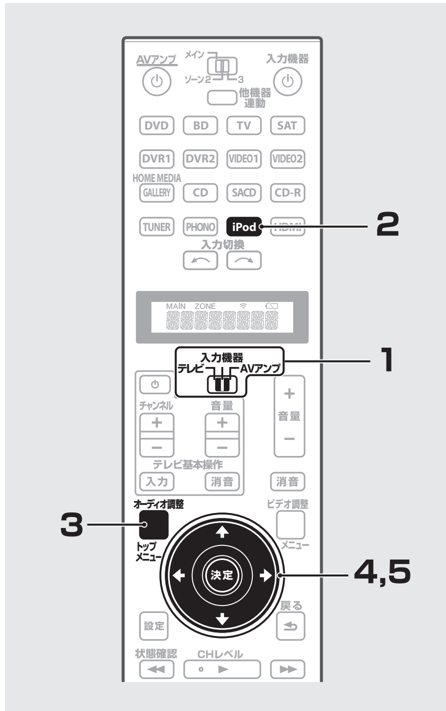
機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

接続には本機に付属のiPodケーブルをご使用ください。別売りのiPod用コントロールドック(IDK-90C)と接続することもできます(このときIDK-90Cに付属のiPodケーブルは使用せずに本機に付属のiPodケーブルをご使用ください)。



iPodは、米国およびその他の国々で登録されたApple Inc.の商標です。

iPodの音楽やビデオを再生する



ボタン	機能
	再生
	一時停止
	早送り/早戻し
	リスト画面のページ送り/戻し
戻る	前のメニューに戻る/再生画面をリスト画面に切り換える
	リストの選択（再生画面では再生または一時停止）
	頭出し
CH	リピート再生の設定
CH	シャッフル再生の設定
トップメニュー	トップメニューを表示
	目的のリストまでカーソルをスクロール(Audiobookを再生中は再生の速さを変更します。Faster⟺Normal⟺Slower)
iPod CTRL 表示	iPod本体操作の有効/無効を切り換える

1 入力機器 テレビ AVアンプ

リモコンを入力機器操作モードにする。

2



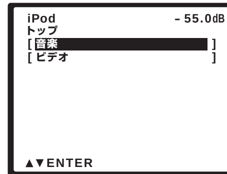
入力を「iPod」にする。

ディスプレイに「Loading」と表示され、iPodが正しく接続されているかどうか確認します。iPodの画面には「Pioneer」または「✓」が表示され、iPod本体を操作することはできなくなります。
「Loading」表示が消えて「Pause」状態になりましたら手順 3へお進みください。

3 オーディオ調整 トップメニュー

トップメニューを表示する。

Video Browseに対応しているiPodのトップメニュー例



Video Browseに対応していないiPodのトップメニュー例



4

（Video Browse対応の場合）「Music」または「Video」のいずれかを選んで決定する。

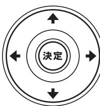
カテゴリーのリストが表示されるので、もう一度再生したいカテゴリーを選んで決定してから手順5へお進みください。

（Video Browseに対応していない場合）再生したいカテゴリーを選んで決定する。

以下の中から選びます。

プレイリスト	Podcasts
アーティスト	ジャンル
アルバム	作曲者
曲	オーディオブック
	曲をシャッフル

5



再生したいリスト（ジャンル、アルバムなど）を選んで決定する。

⬅➡ボタンでリストのページを切り換え、⬆⬇ボタンでリストを選択します。

6 **手順5を繰り返して、聞きたい曲を再生する。**

本機のリモコンでも左記の操作ができます。

iPodのいろいろな再生

同じ曲や聞いているリストを繰り返し聞く（リピート再生）

リピート再生は、次の中から選ぶことができます。

設定	リピート再生の内容
1曲	再生中の曲を繰り返し再生します。
すべて	再生中のリストを繰り返し、再生します。

CH＋ボタンを押すたびに以下のように切り換わります。



いつもと違う曲順で聞く（シャッフル再生）

シャッフル再生は次の中から選ぶことができます。

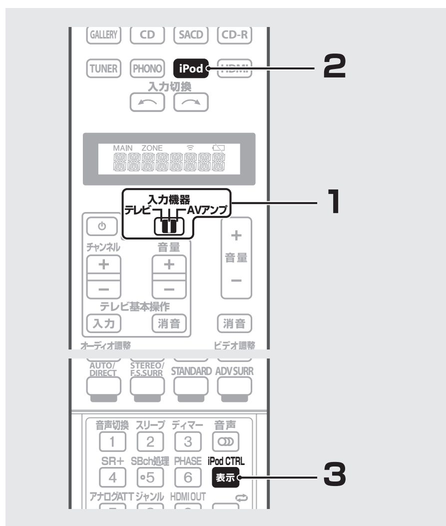
設定	シャッフル再生の内容
曲	再生中のリスト内の曲をシャッフル再生します。
アルバム	アルバムをランダムに選び、そのアルバム内の曲を順番通りに再生します。

CH－ボタンを押すたびに以下のように切り換わります。



- 音楽メニューで「曲をシャッフル」を選択すると、自動でシャッフル再生を「曲」に設定し、再生を開始します。

iPod本体の操作に切り換える



1 入力機器 テレビ AVアンプ　**リモコンを入力機器操作モードにする。**

2 iPod　**入力を「iPod」にする。**

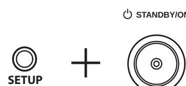
3 iPod CTRL 表示　**iPod 本体での操作モードに切り換える。**

iPod CTRLボタンを押すと本機での操作ができなくなります。iPod本体でコンテンツの選択操作を行います。
iPod CTRLボタンをもう一度押すと本機での操作が可能になります。

iPodの操作モードを切り換える

本機にはiPodの操作モードが2つあります。通常は工場出荷時の「Type 1」でご使用いただけますが、iPodのモデルによっては「Type 2」に切り換えないと本機で操作できないことがあります。iPod接続時、「Error I3」が表示されたときは以下の操作で「Type 2」へ切り換えてください。

① 本機が STANDBY モードのときに SETUP ボタンを押しながら STANDBY/ON ボタンを押します



② LCD 画面で「iPod mode ◂Type 1▸」を選びます

③ ⇦/⇨ で「Type 1」または「Type 2」を選んで ENTER ボタンを押します

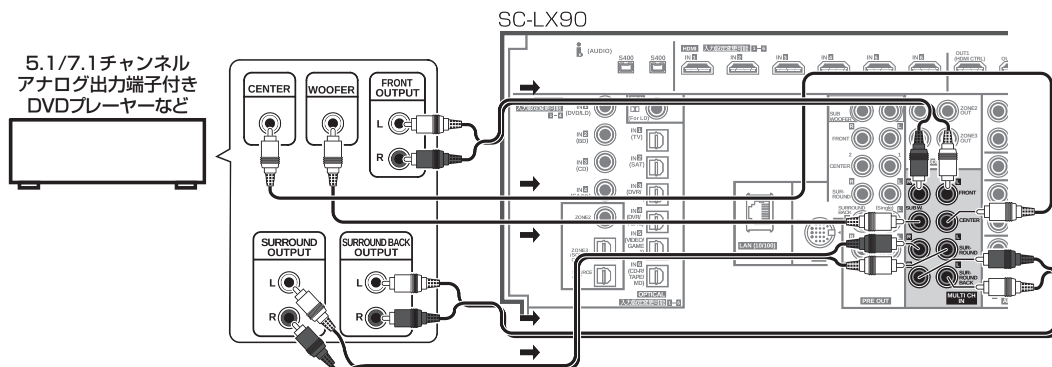


- 「Type 2」に設定するとVideo Browse機能が使用できなくなります。

マルチチャンネルアナログ信号を再生する

ソース機器の5.1 ch/7.1 chアナログ出力端子と本機のMULTI CH IN端子を接続して、マルチチャンネルアナログ信号を再生することができます。HDMIやi.LINKを使用しないでDVDオーディオやSACDを再生させる場合や、本機の対応フォーマット(→41ページ)以外のマルチチャンネル信号を再生させたいときに効果的です。

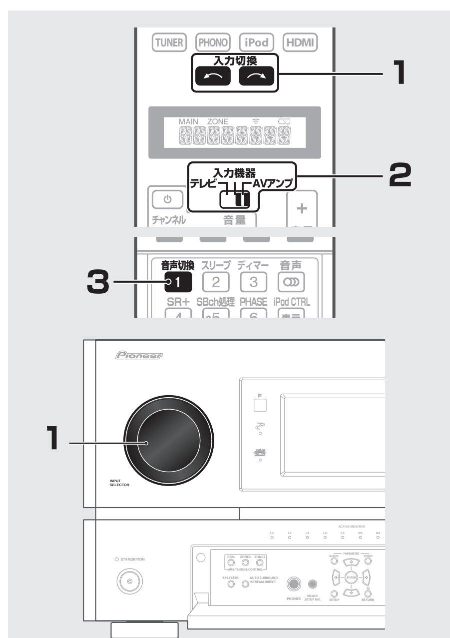
マルチチャンネルアナログ接続



- ソース機器によっては、5.1 ch/7.1 chアナログ出力の各種設定があるものもあります。出力のON/OFF設定はONにしてください。また、出力チャンネルの設定がある場合は、本機に接続しているスピーカーの数に合わせてください。詳しくはソース機器の取扱説明書をご覧ください。

マルチチャンネルアナログ再生する

MULTI CH IN入力では、接続している機器によって入力信号のチャンネル数を切り換えることができます。たとえば、MULTI CH IN端子に2 chの音声信号のみ入力しているときは音声切換ボタンで再生チャンネル数を「2 CH」に切り換えます。



1 入力切換

MULTI CH IN入力にする。

ボタンを押すたびに(本体はINPUT SELECTORを回すと)、入力が切り換わります。

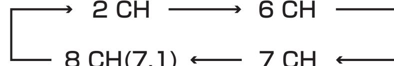
2 入力機器 テレビ AVアンプ

リモコンをAVアンプ操作モードにする。

3 音声切換 1

再生したい入力信号のチャンネル数を選択する。

ボタンを押すたびに以下のように切り換わります。



- DVDプレーヤーによってはサブウーファーチャンネルのアナログ出力レベルが小さいものがあります。この場合は「その他の設定」の「マルチチャンネル入力設定」で、サブウーファーの入力レベルを10 dB上げることができます。詳しくは「マルチチャンネル入力を設定する」(→114ページ)をご覧ください。
- MULTI CH IN入力で映像を同時に再生することができます。詳しくは「マルチチャンネル入力を設定する」(→114ページ)をご覧ください。

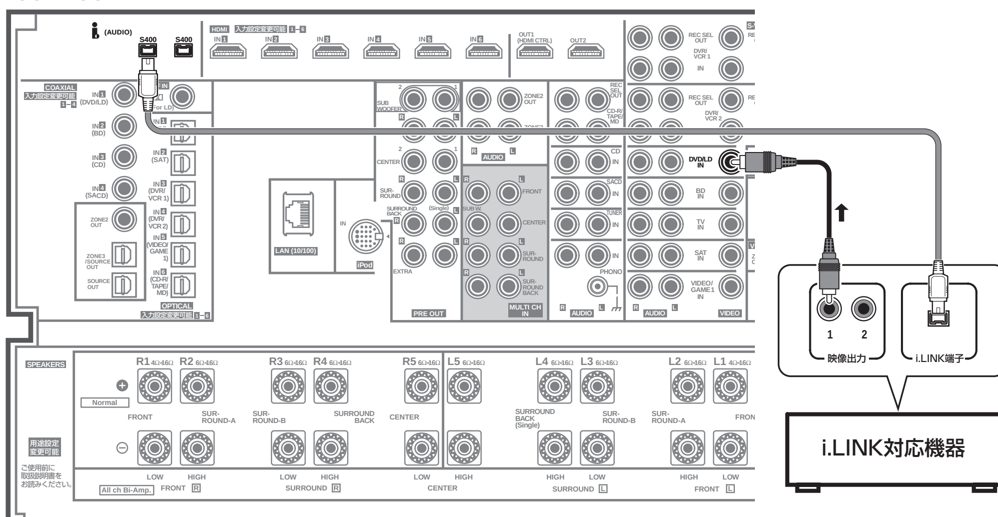
i.LINKで接続した機器を再生する

本機のi.LINK端子は AUDIO(A&Mプロトコル)に対応しているため、DVDオーディオやSACDなどの高品位デジタル・マルチチャンネル音声もi.LINKケーブル1本だけで伝送が可能です。また本機では、i.LINK接続したSACDやCDの再生を行うとき、デジタル音声をジッターレスで伝送することができます。

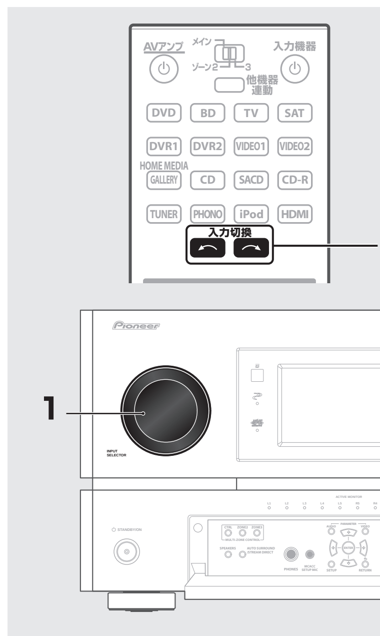
i.LINK対応機器の接続

接続には、S400対応の4ピンi.LINKケーブルを使用してください(→148ページ)。
i.LINK AUDIOインターフェースでは映像信号は伝送されないため、ビデオ機器は映像系の接続も必要になります。「映像機器の接続について」(→31ページ)をご覧ください。
必要に応じてプレーヤーの出力設定を行ってください。詳しくは、プレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

SC-LX90



i.LINK機器を再生する



1



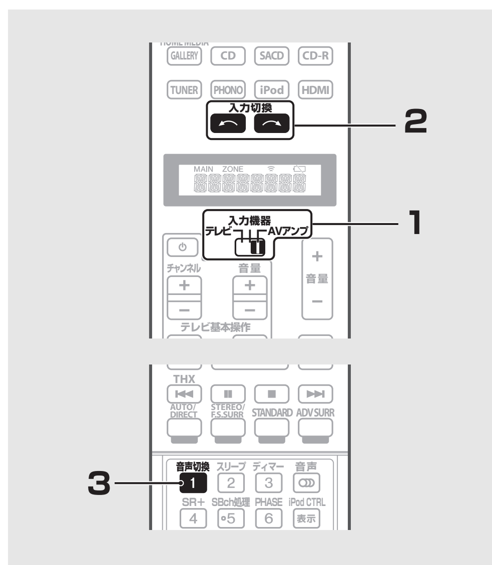
i.LINK機器の入力ファンクションにする。

ボタンを押すたびに(本体はINPUT SELECTORを回すと)、入力が切り換わります。

- 映像のあるソースを再生するには、必ず入力端子の設定でi.LINK接続した機器を入力ファンクションに割り当てることが必要です(→111ページ)。そのうえで、映像ケーブルを接続した入力ファンクションを選びます(→41ページ)。

接続した機器間で録音／録画をする

本機を通して録音/録画を行う場合、入出力それぞれの機器は同じタイプのコードで接続されている必要があります。REC OUT端子には、音声のアナログ/デジタル、映像のコンポジット/Sビデオ信号の間の相互変換を行っていないため、接続コードのタイプを一致させてください。
REC SEL OUT端子と接続した録音/録画機器で録音/録画を行うには、「ZONEオーディオ設定」の「ZONE 3 / RECSEL出力」を「RECSEL」にする必要があります。詳しくは「マルチゾーンの設定」(→124ページ)をご覧ください。
ZONE3/SOURCE OUT端子から出力される録音用デジタル音声信号は「RECOUT」の設定や、マルチゾーンの設定によって変わります。



1 入力機器 テレビ AVアンプ　リモコンをAVアンプ操作モードにする。

2 入力切換　録音/録画するソースを選ぶ。

3 音声切換 1　入力信号を選択する。
デジタル録音するときは、デジタルを選択します。詳しくは「音声入力信号の切り換え」(→42ページ)をご覧ください。

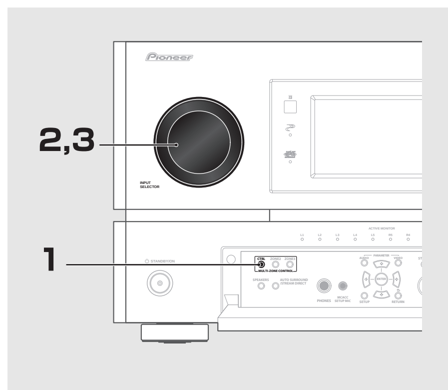
4 録音/録画機器の録音/録画を開始する。

5 録音/録画するソースを再生する。

- RECOUTの設定(「録音/録画しながら別の入力の機器を再生する」→次ページ参照)がソースになっていないと、ここでの方法で録音することはできません。また、ZONE2 ONのときやZONE2＆3 ON、ZONE3 ONのときにも、同様にここでの方法では録音できませんので、マルチゾーンの設定をOFFにしてください。
  SOURCE OUT端子を使用することでRECOUTやマルチゾーンの設定に関係なく、ここでの方法で録音することができます。
- 本機の音量、チャンネルレベル、オーディオ調整機能、ビデオ調整機能、サラウンドの設定などは、録音信号には効果がありません。
- 市販ソフトの録音／録画は、個人で楽しむ場合を除いて、著作権法上認められていません。また、コピーガード信号により録音／録画のできないものもあります。
- デジタル録音について、ソフトによってはコピー回数制限のあるものがあります。詳しくは録音機器の取扱説明書をご覧ください。
- MCACC測定中は、録音／録画を行わないでください。
- MULTI CH IN端子に入力された音声は、フロントL、Rの2 chのみ録音することができます。

録音/録画しながら別の入力の機器を再生する

本機では録音/録画しながら、別の入力の機器を同時に再生することができます。たとえばCD入力の音楽を録音しながら、DVD/LD入力の映画を楽しむことができます。録音/録画をはじめる前にこの操作を行ってください。



1 CTRL

録音/録画モードの選択にする。

「RECOUT ソース」と表示されるまで繰り返しボタンを押します。

2 INPUT SELECTOR

「RECOUT」と表示されている間に、録音/録画したい入力にする。

たとえば「RECOUT CD」を選びます。
「RECOUT CD」表示が消えたら手順3へお進みください。

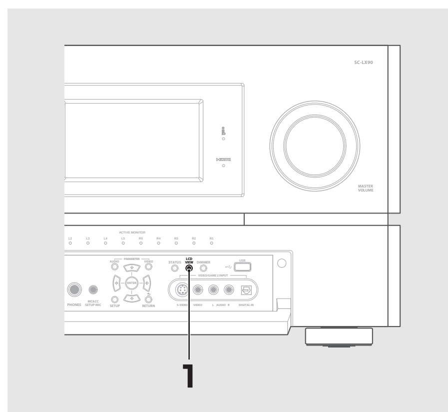
3 INPUT SELECTOR

再生したい入力を選ぶ。

たとえば「ＤＶＤ／ＬＤ」入力を選びます。「DVD/LD」入力の映画を楽しみながら「CD」の音楽録音を同時に行うことができます。

LCD画面の表示のしかたを切り換える

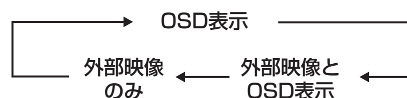
LCD画面に表示させる内容を3つのパターンから選択することができます。工場出荷時は「OSD表示」に設定されていて、「外部映像とOSD表示」および「外部映像のみ」を選択できます。



1 LCD VIEW

LCD 画面の表示内容を切り換える。

ボタンを押すたびに以下のように切り換わります。



- 各入力ごとに設定できます。ただし、設定できるのはVIDEO入力端子を持つ入力(DVD/LD、BD、TV、SAT、DVR/VCR1、DVR/VCR2、VIDEO/GAME1、VIDEO/GAME2)と、iPod(映像を再生しているときのみ)およびMULTI CH IN(VIDEO INPUT設定がOFF以外のとき)です。
- ビデオ調整機能(→55ページ)の設定によってはLCD画面に外部映像が表示されないことがあります。
- HDMIで入力している映像をLCD画面に表示することはできません。

アナログ入力信号の歪みを低減する

アナログ音声信号が過度に入力され(フロントLCD画面にANALOG INPUT OVERと表示され)音が歪んでしまうとき、入力信号レベルを下げて歪みを低減することができます。

1 入力機器 テレビ AVアンプ

リモコンをAVアンプ操作モードにする。

2 アナログATT 7

アナログATTボタンを押す。

押すたびにANALOG ATT ONとANALOG ATT OFFが切り換わります。

フロントパネル表示部の明るさを調整する

フロントパネル表示部の明るさを4段階に調整することができます。

1 入力機器 テレビ AVアンプ

リモコンをAVアンプ操作モードにする。

2 ディマー 3

お好みの明るさに調整する。

押すたびに表示部の明るさが4段階で切り換わります。本体のDIMMERボタンでも切り換えることができます。

- 明るさを一番暗い設定にしたときは、STANDBYインジケーターを残して、すべてを消灯します。
- 設定した明るさにかかわらず、何かの操作をしたときや、入力信号のフォーマットが変わったときなどは明るく点灯し、数秒後に元の明るさに戻ります。
- エラー表示や禁止メッセージは、この設定にかかわらず明るく表示されます。

スリープタイマーを設定する

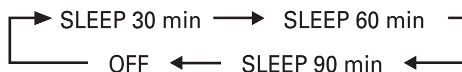
1 入力機器 テレビ AVアンプ

リモコンをAVアンプ操作モードにする。

2 スリープ 2

スリープボタンを押してタイマーを設定する。

押すたびにスリープタイマーの時間が以下のように切り換わります。



- スリープタイマーを設定したあとにスリープボタンを1 回押すと、残り時間が表示できます。
- マルチゾーン機能(→122ページ)がONのときに、スリープタイマーを設定するとすべてのゾーンの電源が同時に切れます。

HDMI 出力を切り換える

HDMI出力端子(HDMI1またはHDMI2)から映像/音声を出力するとき、HDMI OUT1とHDMI OUT2のどちらの端子から出力するかを設定します。
HDMI OUT1端子はHDMIコントロール機能に対応しています。

1 入力機器 テレビ AVアンプ

リモコンをAVアンプ操作モードにする。

2 HDMI OUT 9

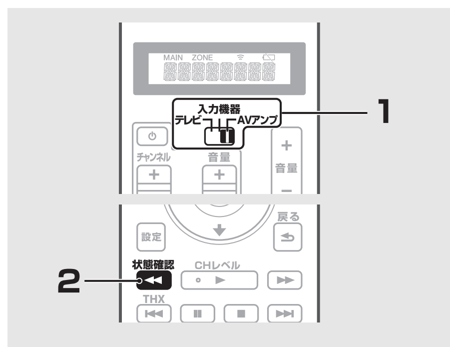
HDMI出力を切り換えます。

「お待ちください...」と表示されている間、しばらくお待ちください。
この間、⏻STANDBY/ON以外の操作ができなくなります。
押すたびに「HDMI OUT1」と「HDMI OUT2」が切り換わります。

- HDMI出力を切り換えるとアンプ連動モード(→130ページ)は解除されます。アンプ連動モードを使いたいときはHDMI OUT1に切り換え、プラズマテレビのリモコンでアンプ連動モードを選択します。

再生中の音声などの設定内容を確認する（ステータス画面）

リモコンの状態確認ボタンを押すことで、音声の入力・出力情報/映像の入力・出力情報/マルチゾーンの状況/本体の設定情報を確認することができます。それぞれの情報は4つの画面に分けられ、テレビ画面および本体のLCD画面に表示されます。以下の情報は各入力ごとに確認することができます。



1 入力機器 テレビ AVアンプ **リモコンをAVアンプ操作モードにする。**

2 状態確認 **設定内容を確認する。**

ボタンを押すたびに以下の5つの確認画面が切り換わります。

音声の入力情報

```
DVD/LD                -55.0dB
   STATUS AUDIO INPUT
<AUDIO INPUT >
        DOLBY DIGITAL
L   C   R      44.1 kHz
SL  S   SR     448 kbps
SBL SB  SBR    DN31
   ((LFE))     Emphasis
SIGSEL：オート [デジタル]
```

入力信号
入力チャンネル
入力切換設定と入力信号

音声の出力情報

```
DVD/LD                -55.0dB
   STATUS AUDIO OUTPUT
<AUDIO OUTPUT >
        ノーマル
L1  2   3   4   5  5  4   3   2   1R
L  SLA SLB SBL  C  SBR SRB SRA R
                          VSB
```

出力チャンネル
出力方式

映像の入力･出力情報

```
DVD/LD                -55.0dB
   STATUS VIDEO
<VIDEO INFORMATION>
入力         ： 720p / 60Hz
出力         ：1080i / 60Hz
アスペクト比 ： 4:3
選択信号     ：S-VIDEO
```

入力信号
出力信号
出力信号のアスペクト
映像信号を入力している端子

マルチゾーンの状況

```
DVD/LD                -55.0dB
   STATUS ZONE
<ZONE INFORMATION>
ZONE 2 ON  : BDP
ZONE 3 OFF : iPod
RECOUT     : ---
```

ゾーン2設定と入力
ゾーン3設定と入力
RECOUT設定

本体の設定情報

```
DVD/LD                -55.0dB
   STATUS SYSTEM
<SYSTEM INFORMATION>
MCACC      M1: MEMORY 1
ANALOG ATT: OFF
SLEEP        : 28min
SR+          : OFF
```

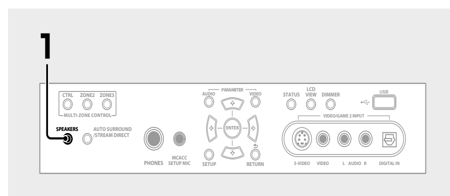
MCACCメモリー
アナログATT
スリープタイマー
SR+の設定

ステータス画面オフ

```
DVD/LD                -55.0dB
   STATUS OFF
```

スピーカーシステムを切り換える

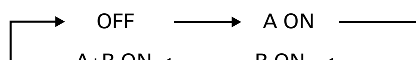
スピーカーシステムA/Bを切り換えると、再生されるスピーカーが切り換わります。必要に応じて使用するスピーカーシステムを選択してください。



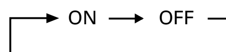
1 SPEAKERS **スピーカーシステムを切り換える。**

「スピーカー出力端子の設定」(→90ページ)によって選択できるモードが換わります。
ボタンを押すたびに、以下のように切り換わります。

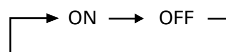
「ノーマル」に設定している場合



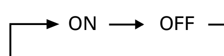
「All Ch Bi-Amp」に設定している場合



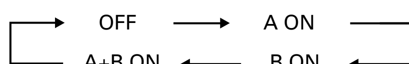
「Front Bi-Amp」に設定している場合



「7.2ch ＋ ZONE 2」に設定している場合



「7.2ch ＋ Speaker B」に設定している場合



ヘッドホンをPHONES端子に差し込んでいる間は自動的にOFFに切り換わります。

各スピーカーシステム選択時の出力音声について

「ノーマル」に設定している場合

「SP：A＋B ON」：サラウンドはAとBに接続したスピーカーの両方から出力されます。

「SP：A ON」：サラウンドはAに接続したスピーカーのみ出力されます。Bに接続したスピーカーは出力されません。

「SP：B ON」：サラウンドはBに接続したスピーカーのみ出力されます。Aに接続したスピーカーは出力されません。

「7.2 ch ＋ Speaker B」に設定している場合

「SP：A ON」：スピーカー端子L2、R2以外に接続されたすべてのスピーカーから出力されます（サラウンド再生が可能です）。

「SP：B ON」：スピーカー端子L2、R2に接続されたスピーカーからのみ出力されます（2 chステレオ再生のみ可能です）。

「SP：A＋B ON」：上記AとBの音声が同時に出力されます。

「A ON」を選んだときはBの音声はPREOUT端子から出力されません。同様に、「B ON」を選んだときはAの音声はPREOUT端子から出力されません。「A＋B ON」または「OFF」を選んだときはAとB両方の音声がPREOUT端子から出力されます。

「Front Bi-Amp」および「All Ch Bi-Amp」に設定している場合

「SP：ON」：すべてのスピーカーから出力されます。

「7.2 ch ＋ ZONE 2」に設定している場合

「SP：ON」： スピーカー端子L5、R5以外に接続されたスピーカーからメインゾーンで選択されている音が出力されます。スピーカー端子L5とR5に接続されたスピーカーからZONE2で選択されている音が出力されます。

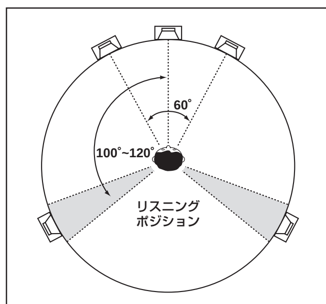
上記の全設定共通

「SP：OFF」： スピーカーから出力されません。ただし、「スピーカー出力端子の設定」(→90ページ)を「7.2 ch＋ZONE 2」に設定しているときはZONE2の音声のみ出力されます（プリアウト端子からは常に音声が出力されているため、サブウーファーからは音が出る場合があります）。

再生環境に応じてスピーカーシステムを切り換える（応用編）

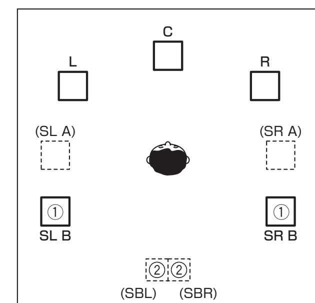
本機では、スピーカーシステムA/Bの切り換えと、サラウンドバックch処理の切り換え（→50ページ）を組み合わせて使うことにより、ITU-R推奨のスピーカー配置で高音質マルチch音楽ソース（DVD-Audio/SACD）を聴く場合と、THX推奨のスピーカー配置で映画を鑑賞する場合のスピーカーシステムを切り換えて使うことができます。ただし、9.1 ch（または9.2 ch）のスピーカー接続（ノーマルサラウンド接続）を行い、「スピーカー出力端子の設定」が「ノーマル」に設定されている必要があります。

高音質マルチch音楽ソース（DVD-Audio/SACD）用のスピーカーシステムにする



ITU-R BS.775-1

ITU-R（国際電気通信連合の無線通信部門）の勧告に基づく配置法です。DVDオーディオやSACDのミキシング・スタジオでは、基本的にこの配置法を採用していますが、サラウンドスピーカーを135° の位置に想定して収録している場合もあります。



① スピーカーシステムの切り換え

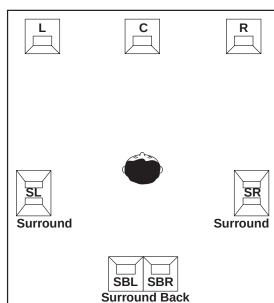
➡**B ON** を選択します。
（SL AとSR AはOFFとなり、サラウンドB（音楽鑑賞用のスピーカー）からのみ出力されます。）

② サラウンドバック ch の切り換え

➡**SBch OFF** を選択します。

上記設定により、ITU-R 推奨スピーカー配置（5.1 chまたは5.2 ch）で高音質マルチ ch 音楽ソースを楽しむことができます。

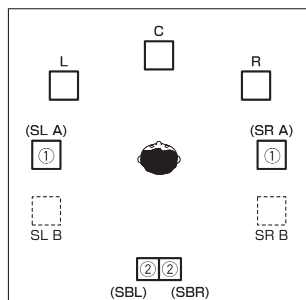
映画ソース用のスピーカーシステムにする



THX の推奨するスピーカー配置

サラウンドバックスピーカーは隣接させ、それぞれリスニングポジションから等距離となるように設置します。





① スピーカーシステムの切り換え

➡**A ON** を選択します。
（SL BとSR BはOFFとなり、サラウンドA（ダイポール型スピーカー）からのみ出力されます）

② サラウンドバック ch の切り換え

➡**SBch ON** を選択します。

上記設定により、THX の推奨するスピーカー配置（7.1 chまたは 7.2 ch）で映画を鑑賞することができます。

本機で設定できること

本機のシステム設定で設定できる全項目です。

	システム設定項目		詳細項目	内容	参照ページ
1	オートMCACC（サラウンドの自動設定）		ALL / スピーカーシステム保持	音場補正の全項目を自動測定	14
			スピーカーシステム	スピーカーシステムの自動設定	85
			スピーカー出力レベル	スピーカー出力レベルの自動設定	85
			スピーカーまでの距離	スピーカーまでの距離の自動設定	86
			EQ Pro. & 定在波制御	残響特性を考慮した周波数特性の自動補正および定在波の自動制御	86
			FULL BAND PHASE CTRL	スピーカーの位相乱れの自動補正	101
2	スピーカー出力端子の設定		——	SPEAKERS端子の用途設定	90
3	マニュアルMCACC（詳細なサラウンドの設定）	a	出力レベルの微調整	聴感による各チャンネルの出力レベルの微調整	91
		b	スピーカーまでの距離の微調整	聴感による各スピーカーまでの距離の微調整	92
		c	スピーカー位置の精密調整	各スピーカーの位置の精密調整	93
		d	定在波制御	定在波制御の設定	94
		e	EQの調整	聴感による周波数特性補正カーブの調整	95
		f	EQプロフェッショナル	1 残響特性の測定 2 残響特性の確認 3 アドバンスドEQセットアップ（残響特性を考慮した音場補正）	96
4	FULL BAND PHASE CTRL（スピーカーの位相乱れの補正）	a	測定	スピーカーの位相乱れの自動補正	101
		b	群遅延特性の確認	群遅延特性（補正前/補正ターゲットの表示）	101
5	データ管理（MCACC MEMORYのデータ管理）	a	MCACCデータチェック	MCACCメモリーの確認	102
		b	MCACCメモリーの名称変更	MCACCメモリーの名前を変更	103
		c	MCACCメモリーのコピー	MCACCメモリーのコピー	103
		d	MCACCメモリーの消去	MCACCメモリーを消去	104
		e	パソコンへの転送	残響特性、群遅延特性およびMCACCパラメーター（測定値）のPCへのデータ転送	100
6	マニュアルスピーカー設定（サラウンドの手動設定）	a	スピーカー設定	スピーカー接続の有り無し、低域再生能力などの設定	105
		b	スピーカー出力レベル	聴感による各チャンネルの出力レベルの設定	107
		c	スピーカーまでの距離	各スピーカーまでの距離の設定	108
		d	X-Curve	部屋の大きさに合わせた高音域の減衰カーブの設定	108
		e	THXオーディオ設定	サラウンドバックスピーカー間の距離の設定	109
7	入力端子の設定		——	各入力の音声入力や映像入力の切換、入力名の変更、12 V TriggerのON/OFFなどの設定	111, 112 134
8	OSD言語設定		——	OSD画面の表示言語の設定	113

システム設定項目		詳細項目		内容	参照ページ
9	その他の設定	a	マルチチャンネル入力設定	マルチチャンネル入力の設定	114
		b	ZONEビデオ設定	マルチゾーン機能での映像設定	124
		c	ZONEオーディオ設定	マルチゾーン機能での音声設定	124
		d	SR+設定	パイオニアプラズマテレビとの連動設定	133
		e	HDMIコントロール設定	HDMIコントロール機能に対応したパイオニア製品と連動動作するための設定	129
		f	i.LINKチェック	i.LINK機器の接続状況確認	115
		g	表示イメージ	LCD画面の表示設定	116

リスニング環境の設定について　～サラウンド再生のための設定～

本機のAdvanced MCACCとは

Advanced MCACC(Multi Channel ACoustic Calibration system)とは

MCACC(Multi Channel ACoustic Calibration system)は、「スタジオと同等の調整」を「一般家庭」において「簡単かつ高精度」に行うことを目標に、当社研究所で開発されたものです。
映画制作のスタンダードであるルーカスフィルム社と、音楽レコーディング業界の最高峰エアースタジオ社(ロンドン)といった、実際の制作現場の技術者との徹底的なヒアリングと、当社の長年の研究成果の相乗効果により実現されました。Advanced MCACCはこの機能をさらに高め、視聴環境の残響特性を測定し、それに適した周波数特性の補正を行うことで、これまでよりも一層スタジオ環境に近づいた、高精度な音場の自動解析、最適補正が可能となりました。さらに、これまで排除が困難であった定在波を独自の方法で音響解析し、その影響を軽減する定在波制御機能を搭載しています。



以下、MCACCの詳細について説明します。

スピーカーシステムの設定

ソースに含まれる音声成分のすべてを再生するための基本設定です。この設定が正しく行われないと、サウンドトラックの特定チャンネルに収録された音声が再生されなかったり、低域成分が欠落してしまう、などの不具合が発生する場合があります。スピーカー接続の有り/無しや低域再生能力などを設定し、このような問題を回避します。
スピーカーシステムの設定はすべてのMCACC MEMORYに共通の設定となります。

スピーカー出力レベルの設定

リスニングポジションでの各チャンネルの音量レベルを一定に合わせる設定です。「スピーカーまでの距離の設定」と同様に、音の定位感や移動感を正確に再現することが目的です。この設定が正しく行われないと、いわゆる「バランスの悪い音」になってしまいます。これまでは聴感での設定が一般的でしたが、この方法では正確な設定は不可能です。プロのスタジオ・エンジニアは、ミキシング作業前に必ず専用の音圧測定器で測定を行い、バランスの微調整を施します。本機ではMCACCによって、このプロレベルの精密な調整を誰でも簡単にできるようになりました。

音の詳細設定

スピーカーまでの距離の設定

実際には距離を設定することで各チャンネル間の遅延（ディレイ）を算出・補正しています。マルチチャンネル再生では特に重要で、音の定位感や移動感を正確に再現するために必要です。オートMCACCでは、メジャーなどによる実測に比べてサブウーファーまでの距離がやや遠めに設定されることがありますが、それは電気的な遅延も含めた補正となっているので問題ありません。
本機ではスピーカー距離が1 cm単位で補正されるため、より正確な遅延補正が可能です。

定在波制御

オーディオの世界で問題となる定在波は、音波が壁などで反射し、もとの音波と干渉することで発生します。定在波は特定の低域周波数に極端なピークなどが発生したとき音質に悪影響を与えますが、定在波制御フィルターを自動または手動で設定することで、リスニングポイントにおいて定在波の影響を受けないサウンドをお楽しみいただくことができます。本機の「多点測定」機能では複数のリスニングポイントにおける定在波を測定することもできます。

残響特性の測定

リスニングルームの残響特性を測定します。本機のMCACC機能で残響特性を考慮した補正を行ったときは、補正後の部屋の残響特性を測定することもできます。

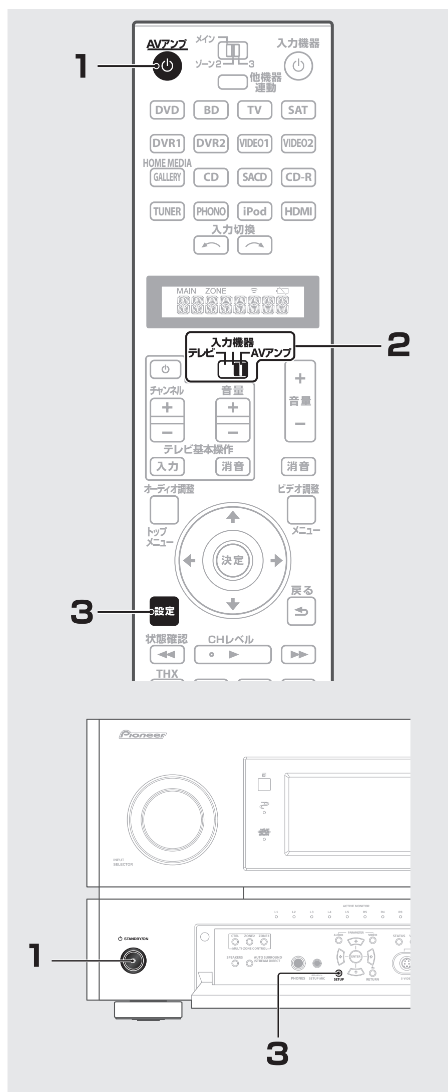
視聴環境の周波数特性の補正 (Aco Cal EQ Pro.)

「視聴環境の周波数特性の補正」とは、リスニングポイントでの視聴環境トータルの周波数特性（以下、F特）の補正を意味します。全チャンネルに同じ種類のスピーカーを使用しても、リスニングポイントでは音色が違って聞こえます。これは、設置場所・設置方法・壁面・内装など、さまざまな影響により実際のF特が違ってしまうためです。
本機の「視聴環境の周波数特性の補正」では、リスニングルーム固有のF特まで含めた補正をすることで、各チャンネルの音のつながりが飛躍的に向上し、これまでにない実像感やリアルな移動感を再現します。スタジオや映画館などにおいてはこの補正は絶対に欠かせないものです。これがホームシアターとの大きな差でしたが、当社の研究により、一般家庭環境におけるF特の補正には最も有効であるエンベロープ補正方式を採用し、この差を埋めることを可能にしました。
また、本機では視聴環境の残響特性を考慮したF特補正(Aco Cal EQ Pro.)を標準的に行っており、EQ補正のカーブも「SYMMETRY」、「ALL CH ADJUST」、「FRONT ALIGN」と3タイプあります。通常のオートMCACCによる測定（→14ページ）では「SYMMETRY」の補正のみが行われます。オートMCACCでカスタム設定をすると、一度の測定で複数タイプのEQ補正を行い、それぞれ別のMCACC MEMORYに保存させることができます（→88ページ）。それぞれの補正カーブの特長は以下のとおりです。お好みに応じてお使いください。

- SYMMETRY－L/Rでペアになっているスピーカー1組ごとの周波数特性をフラットに補正します（センターなどペアでないスピーカーは個別に補正します）。位相特性を重視した補正をしたい場合におすすめです。
- ALL CH ADJUST－全チャンネルの周波数特性をそれぞれ個別にフラットに補正します。周波数特性を重視した補正をしたい場合におすすめです。
- FRONT ALIGN－フロント以外のスピーカーをフロントの特性に合わせこむ補正をします（フロントスピーカーは補正しません）。フロントスピーカーの特性を重視した補正をしたい場合におすすめです。

システム設定の手順

電源を入れてメニュー画面に進むまでの手順です。ここから各設定の操作に進めます。



1 AVアンプ **本機の電源を入れ、テレビの電源も入れる。**

テレビは本機の出力映像が表示されるようにしておきます。

2 入力機器 テレビ AVアンプ **リモコンをAVアンプ操作モードにする。**

3 設定 **システム設定にする。**

テレビ画面にシステム設定メニューが表示されます。



システム設定の操作には下記のボタンを使います。

リモコンボタン	本体ボタン	用途
設定	SETUP	システム設定を開く／閉じる
決定	ENTER	カーソル移動と設定値の変更 選択項目を決定する
戻る	RETURN	1つ前の画面に戻る

- ヘッドホン使用中は、システム設定は表示できません。
- 約3分間放置するとシステム設定画面には自動的にスクリーンセーバー機能が働きます。
- 入力がiPodまたはHOME MEDIA GALLERYになっているときは、システム設定を行うことができません。また、ZONE2、ZONE3がONのときもシステム設定を行うことはできません。
- 一度登録した設定内容は本機に記憶されるため、システムを使用するたびに設定し直す必要はありません。ただし、スピーカーシステムの構成や配置を変更したり、新しくスピーカーを追加したときには、設定し直す必要があります。
- システム設定中は電源を切らないでください。電源を切るときはシステム設定を終了してください。
- システム設定中はZONE2およびZONE3の音声が消音されます。

オートMCACCをより詳細に測定／設定する

オートセットアップ(オートMCACC)の基本的な使用方法は「ホームシアター入門」ステップ2 設定する(→14ページ)をご覧ください。
オートMCACCの[カスタム]を選ぶと、下記の項目をより詳細に設定することができます。

「カスタムメニュー」:
どの項目をオートで設定するかを選択します。[ALL]はFULL BAND PHASE CONTROLを含んだすべての項目、[スピーカーシステム保持]はスピーカーシステムの設定とFULL BAND PHASE CONTROL以外の項目を、それ以外はそれぞれの項目のみのオート設定となります。また、[スピーカーシステム]と[FULL BAND PHASE CTRL]は、[ALL]で測定するたびに測定結果が更新されます。[ALL]での測定後にリスニングポイントを変えて測定したいときは、[スピーカーシステム保持]で測定してください。

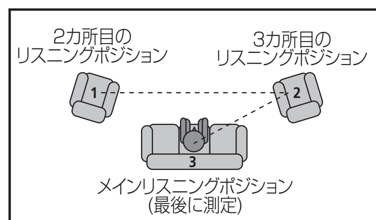
「SYMMETRY」、「ALL CH ADJ」、「FRONT ALIGN」:
(「カスタムメニュー」が[ALL]、[スピーカーシステム保持]に選択されているときのみ設定可)
EQ補正カーブ(視聴環境の周波数特性の補正)ごとに測定/設定値の保存先を選びます(MEMORY内のデータは上書きされます。各補正カーブの説明は86ページをご覧ください)。各EQの保存先をそれぞれ設定すれば、一度の測定で複数タイプのEQ補正が行えます。SYMMETRYは常に測定しますが他の2つは測定させないことも可能です。

「THXスピーカー」:
(「カスタムメニュー」が[ALL]、[スピーカーシステム]に選択されているときのみ設定可)
THX認証のスピーカーシステムを使用しているときは[YES]を選択します。このとき[スピーカーシステム]はすべてのスピーカーがSMALL(小)になります。

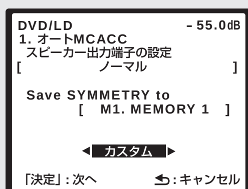
「MCACC」:
(「カスタムメニュー」が[スピーカー出力レベル]、[スピーカーまでの距離]または[EQ Pro. & 定在波制御]に選択されているときのみ設定可)
測定/設定値の保存先を選びます(MEMORY内のデータは上書きされます)。

「EQタイプ」:
(「カスタムメニュー」が[EQ Pro. & 定在波制御]に選択されているときのみ設定可)
EQ補正カーブ(視聴環境の周波数特性の補正)を1つ選択します(各EQ補正カーブの説明は86ページをご覧ください)。

「定在波制御 多点測定」:
(「カスタムメニュー」が[EQ Pro. & 定在波制御]に選択されているときのみ設定可)
[YES]にすることでメインのリスニングポジションとそれ以外のリスニングポジション2カ所(計3カ所)の定在波制御を行うことができます。設定の手順はOSD画面に従って、右のイラストのようにメインポジションでの測定が最後になるようにセットアップ用マイクを設置していきます。リスニングポジションを1カ所でお楽しみいただくときは[NO]にすることをお勧めします。



2

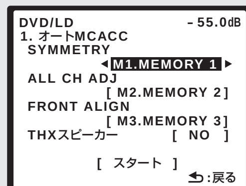


1 14ページの手順1～2までを行う。

2 [カスタム]を選んで決定する。

3





3 カスタムメニューで測定したい項目を選び、項目ごとの詳細設定やMEMORYの保存先などを選択する。

カスタムメニュー	[ALL]、[スピーカーシステム保持]、[スピーカー設定]、[スピーカー出力レベル]、[スピーカーまでの距離]、[EQ Pro. & S-Wave]
保存先	[MEMORY 1～6]
THXスピーカー	[NO]、[YES]
EQタイプ	[SYMMETRY]、[ALL CH ADJUST]、[FRONT ALIGN]
STAND.WAVE 多点測定	[NO]、[YES]

4 [スタート]を選んで決定する。

カスタムメニューで選択した項目の自動測定に進みます。
「MCACCデータチェック」の画面が表示されたら自動測定は終了です。
測定結果を確認してください（「測定/設定結果を確認する」→17ページ）。
測定が終わりましたら、必ずセットアップ用マイクを本機から抜いてください。

- オートMCACCの[デモ]を選ぶと、オートMCACCのデモモードになります。デモモードはセットアップ用マイクを使用せずに開始することが可能で、スピーカーを接続していればテストトーンも出力されます。デモモードでの測定内容は本機の設定に反映されず、エラーも発生しません。デモモードを終了させるには、戻るボタンを押してください。戻るボタンを押すまでデモモードは繰り返されます。
- 「カスタムメニュー」で[ALL]を選択した場合のみ、「FULL BAND PHASE CONTROL」も自動的に補正します。[スピーカーシステム保持]の場合は「FULL BAND PHASE CONTROL」の補正は行われません。
- 「Aco Cal EQ Pro.」（周波数特性の補正）と「定在波制御」の効果は、それぞれのMCACC MEMORYでON/OFFを切り換えることができます。詳しくは「オーディオ調整機能を使用する」（→51ページ）をご覧ください。
- 各スピーカーと視聴環境との相互作用によって、まれにオートMCACCの測定が正しく行われないことがあります。その場合は手動で設定を調整することをお勧めします。

スピーカーの使用用途を選択する ～スピーカー出力端子の設定～

ここでは10 ch分あるスピーカー端子の使用用途を設定します。以下の項目から選択します。各設定項目の詳しい説明は「スピーカーの配置／使用パターンを選ぶ」（→26ページ）をご覧ください。

[ノーマル]：フロント、センター（バイアンプ可能）、サラウンドA、サラウンドB、サラウンドバックチャンネルスピーカーシステム用です。最大で9.2 chまでの再生が可能です。工場出荷時の設定です。

[All Ch Bi-Amp]：フロント、センター、サラウンドのすべてのチャンネルをバイアンプで再生します。最大で5.2 chまでの再生が可能です。

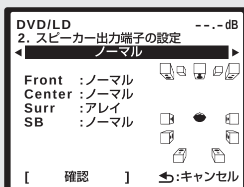
[Front Bi-Amp]：フロント、センターチャンネルをバイアンプで再生します。サラウンド、サラウンドバックチャンネルを接続して、最大で7.2 chまでの再生が可能です。

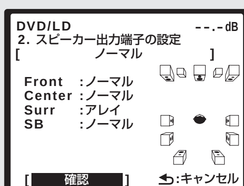
[7.2ch+ZONE 2]：本機のある部屋での7.2 ch再生とは別の部屋で別の入力をステレオ再生することができます。

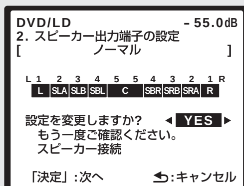
[7.2ch+Speaker B]：メインの7.2 ch再生の音を、メインとは別に2 chダウンミックスしてステレオ再生することができます。

- スピーカー出力端子の設定を変更する際は、先に「スピーカーの接続」（→26ページ）を変更してから設定の変更を行うことをお勧めします。
- スピーカー出力端子の設定を変更すると、すべてのMCACCメモリーの設定が消去されます。スピーカーの接続とスピーカー出力端子の設定を変更したときは、もう一度オートMCACCを行ってください（→14ページ）。

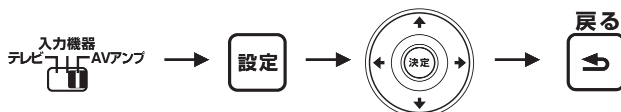
1


2


3


4


システム設定で使用するボタン



1 [2. スピーカー出力端子の設定]を選んで決定する。

スピーカー保護のために本機の音量が最小になります。「ノーマル」と「All Ch Bi-Amp」、「Front Bi-Amp」、「7.2ch＋ZONE 2」、「7.2ch＋Speaker B」の選択画面が表示されます。詳しい説明は上記をご覧ください。

2 「ノーマル」か「All Ch Bi-Amp」、「Front Bi-Amp」、「7.2ch＋ZONE 2」、「7.2ch＋Speaker B」のいずれかを選択する。

3 [確認]を選んで決定する。

選択した項目によるスピーカー端子の並びが表示されます。

4 出力端子の並びを確認し、[YES]を選んで決定する。

選んだ項目で設定されます。「キャンセル」を選ぶと項目は反映されません。

5 戻るボタンを押す。

スピーカーの出力設定を終了します。

[All Ch Bi-Amp]を選ぶと、サラウンドバックスピーカーについての各種設定を行うことはできません。

プリアウト出力について

上記設定に連動して、プリアウト端子のEXTRA chから出力される音声が以下のようになります。

[ノーマル]のとき：
サラウンド Bチャンネルの音声

[7.2ch＋Speaker B]のとき：
ダウンミックスされた2 chの音声

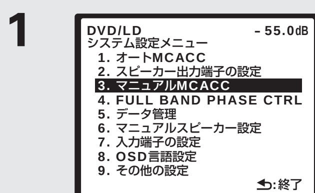
リスニング環境をお好みに調整する ～マニュアルMCACC～

マニュアルMCACCでは、設定をより詳細に手動で調整することができます。それぞれの調整を行う前に、リモコンの操作切換スイッチをAVアンプにしてからMCACCボタンを押して、調整したいMCACC MEMORYを選んでからそれぞれの調整を行ってください。MCACC MEMORYがOFFの状態でマニュアルMCACCを選択すると、MCACC MEMORYの選択画面になります。この場合、調整したいMCACC MEMORYを選択し、調整項目へとお進みください。
設定にはセットアップ用マイクを使用する項目もあります。マイクの接続のしかたは、14～15ページをご覧ください。マイクを接続する際は、設定ボタンを押してシステム設定画面が表示されている状態で差し込んでください（システム設定画面が表示されていない状態でマイクを差し込むとオートMCACCのスタート画面になります）。

出力レベルの微調整 (Fine Channel Level)

フロント左スピーカーを基準としてその他のチャンネルレベルを調整します。選択したチャンネルとそのチャンネルに対して基準となるもう1つのチャンネルからテストトーンが再生されますので、両方のテストトーンが同じ大きさに聞こえるように調整します。

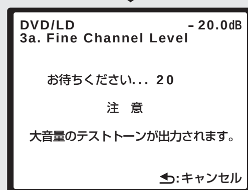
1



2



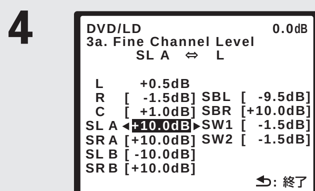




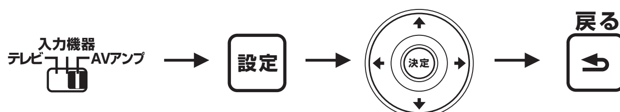
3



4



システム設定で使用するボタン



1 [3. マニュアルMCACC]を選んで決定する。

2 [Fine Channel Level]を選んで決定する。

スピーカー出力レベルの微調整を行う画面になります。


注意

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0.0 dBになり、テストトーンが再生されます。

3 フロント左チャンネルのレベルを調整して決定する。

フロント左チャンネルからテストトーンが出力されます。
音圧計をお持ちの場合は、フロント左の音圧レベルをCウェイト／スローモードで75 dB SPLに調整してください。

4 フロント右チャンネルから順番にレベルを調整する。

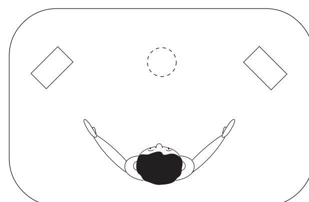
選択したチャンネルとそのチャンネルに対して基準となるチャンネルから交互にテストトーンが出力されます。両方のテストトーンが同じ大きさになるように調整します。
－10.0 dBから＋10.0 dBの範囲内で、0.5 dB間隔で調整することができます。

5 戻るボタンを押す。

スピーカー出力レベルの微調整を終了します。

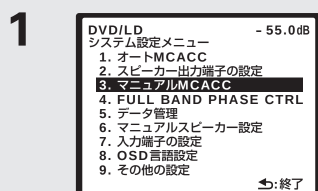
サブウーファーからのテストトーンは周波数が低いため、実際のレベルよりも小さく聞こえる場合があります。

スピーカーまでの距離の微調整 (Fine SP Distance)



フロント左スピーカーを基準としてその他のスピーカーの距離を調整します。選択したチャンネルとそのチャンネルに対して基準となるもう1つのチャンネルからテストパルスが再生されます。その2つのスピーカーに対してリスニングポジションから右図のように向き、2つのテストパルスの聞こえるポイントが中央に定位するように数値を調整します。このときさらに細かく中央に定位させたいときは、スピーカーの位置を数cm単位で動かしたり、向きを少し動かすことでポイントを中央に定位させることができます。なお、サブウーファーのテストパルスは他chと音色が異なります。サブウーファーの音がはっきり聞こえるように調整してください。また、サブウーファーの調整はお持ちのスピーカーの低域再生能力によって、設定値を上下したりスピーカーの位置を変えても聞こえ方の変化がわかりにくい場合があります。

1



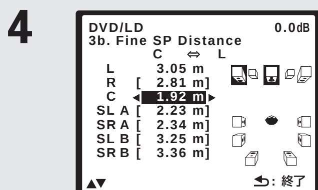
2



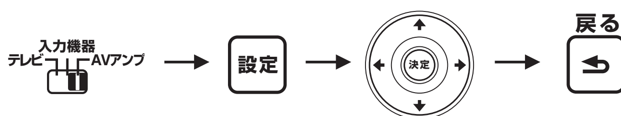
3



4



システム設定で使用するボタン



1 [3. マニュアルMCACC]を選んで決定する。

2 [Fine SP Distance]を選んで決定する。

スピーカーまでの距離の微調整を行う画面になります。

3 フロント左チャンネルのスピーカーまでの実測距離を入力して決定する。

4 フロント右チャンネルから順番にスピーカーまでの距離を調整する。

選択したチャンネルとそれに対して基準となるスピーカーからテストパルスが出力されます。スピーカーの組み合わせはLCD画面でハイライトされます。
0.01 mから9.00 mの範囲内で、0.01 m間隔で設定できます。



テストパルスは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0.0 dBになりテストパルスが再生されます。

5 戻るボタンを押す。

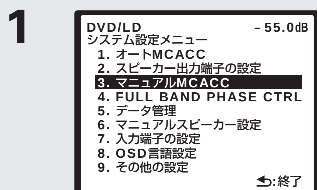
スピーカーまでの距離の微調整を終了します。

- テストパルスの聞こえるポイントがどうしても中央に定位しないときは、スピーカーと本機の⊕、⊖端子が正しく接続されているかを確認してください。⊕と⊖が逆に接続されていると中央に定位しません。
- サブウーファーの距離を合わせるポイントは、テストパルス3発目の音の余韻ができるだけ中央へ抜けていくように調整します。音の余韻が左右どちらかに流れて聞こえる場合はサブウーファーの距離設定や位置をさらに微調整すると効果的です。

スピーカー位置の精密調整 (Precision Distance)

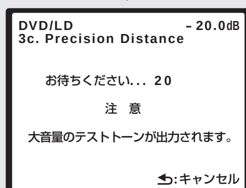
この機能を使う前に、「オートMCACC」(→14ページ)を行ってください。オートMCACCのスピーカー距離補正によってスピーカーまでの距離は1 cm精度で補正されます。ここでは距離の数値を補正するのではなく、各スピーカーそのものの位置を動かし、微調整します(サブウーファーは調整の対象外です)。マイクからの入力が画面に表示されるので、ゲージが最大になるように各スピーカーの位置を微調整してください。従来は熟練した専門業者が聴覚により行っていた微細な距離調整を、モニター上に表示されるゲージを見ながら簡単に調整できます。

1

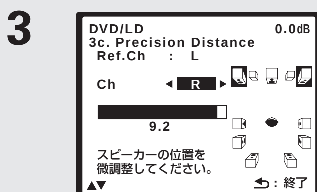


2





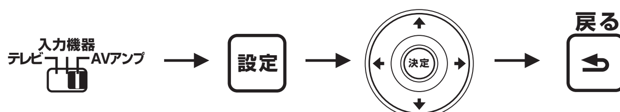
3



スピーカーまでの距離調整とは

距離の調整は、映像の「ピント合わせ」によく似ています。ピントが合っていない映像はどこで見てもぼやけて見えますが、ピントが合った映像は遠くからでも見ることができます。音の焦点も同じで、ある一点(マイクを置いたリスニングポジション)に音源からの到達時間をしっかり合わせることで、リスニングポジション一点だけでなくマルチチャンネル環境における音場全体を正しく形成します。

システム設定で使用するボタン



1 **[3. マニュアルMCACC]を選んで決定する。**

2 **[Precision Distance]を選んで決定する。**

スピーカーの位置の微調整を行う画面になります。
セットアップ用マイクを接続してから決定します。


注意

テストパルスは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0.0 dBになり、テストトーンが再生されます。

3 **フロント右チャンネルから順番にスピーカーの位置を微調整する。**

選択したチャンネルとそれに対して基準となるスピーカーからテストパルスが出力されます。
選択しているスピーカーの位置を動かし、微調整します。画面を見ながらスピーカーの位置をマイクに対して2 cm程度前後に動かし、ゲージと数字が最大になるように微調整してください。また、調整するチャンネルによって基準となるチャンネルが変わっていくので、基準チャンネルのスピーカーは動かさないでください。
ゲージは最大で10.0まで上げることができます(10.0にならない場合は、最大値が出る位置にスピーカーを調整してください)。

4 **戻るボタンを押す。**

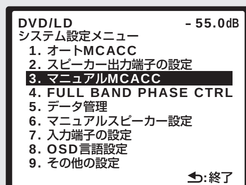
スピーカーの位置の精密調整を終了します。

- オートMCACCを行った位置と異なる位置にマイクを設置すると正しく調整できないことがあります。その場合はオートMCACCのカスタムメニューで「スピーカーまでの距離」(→88ページ)を行い、マイク位置をそのままの状態にしてここでの調整を行うことをお勧めします。
- ここでの調整はオートMCACCでは調整できない1 cm以下の誤差を調整する機能なので、オートMCACCによる距離補正後でも「0.0」と表示されることがありますが、その場合でも最適な調整が行うことができます。また、ここでの精密調整完了後に再度オートMCACCを行うと1 cm精度での補正に戻ってしまいますのでご注意ください。
- オートMCACCと同じように、できるだけ静かな環境で調整してください。また調整中に突発的なノイズなどが入力されたときは「0.0」と表示されます。
- R chから順番どおりに調整しないと、すべてのチャンネルの距離はそろいません。
- スピーカーを動かす際は、スピーカーが倒れたりしないように十分にご注意ください。
- ここでの調整を行ったあとに、スピーカーまでの距離の微調整(Fine SP Distance)(→92ページ)のテストパルスを聞くと調整した効果が確認できます(調整前よりも各スピーカー間のテストパルスが中央に定位します)。その際には距離の値を変えないようにご注意ください。

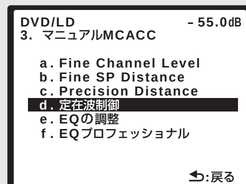
定在波フィルターの調整（定在波制御）

オーディオの世界で問題となる定在波は、音波が壁などで反射し、もとの音波と干渉することで発生します。定在波は特定の低域周波数に極端なピークなどが発生したとき音質に悪影響を与えます。定在波の影響はスピーカーの位置やリスニングポジションによっても変化します。ここでは実際に音楽ソースなどの再生音を聴きながら、定在波の影響を制御します。

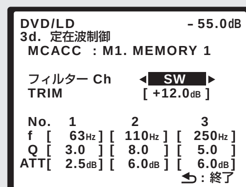
1



2



3



- 音声入力でHDMIを選んでいるときは、実際に音を聞きながらの補正を行うことはできません。
- オーディオ調整機能の「定在波制御」の項目を「定在波制御　OFF」にしているMCACC MEMORYでここでの設定を行うと、自動で「定在波制御　ON」に切り換わります（→52ページ）。

システム設定で使用するボタン



1　**[3. マニュアルMCACC]を選んで決定する。**

2　**[定在波制御]を選んで決定する。**

定在波制御のフィルター設定画面になります。

3　**[フィルターCh]を選ぶ。**

どのチャンネルの定在波を制御するか選択します。
各チャンネルごとに用意された、3つのフィルターで定在波の影響を制御します。
[MAIN]：センタースピーカーとサブウーファー以外のすべてのチャンネル
[Center]：センターチャンネルのみ
[SW]：サブウーファーのみ

4　**フィルターNo.1からNo.3について、各項目を調整する。**

f：各フィルターの中心周波数を、63 Hz～250 Hzの範囲で調整します。
Q：各フィルターの帯域幅を2.0～9.8の範囲内、0.2間隔で調整します。数値が大きくなるほど帯域幅はより狭くなります。
ATT：各フィルターの減衰量を、0.0 dB～12.0 dBの範囲内、0.5 dB間隔で設定します。
（「TRIM」はサブウーファーのレベルを－12.0 dB～+12.0 dBの範囲内、0.5 dB間隔で調整します。手順3で[SW]を選んだときのみ調整することができます）

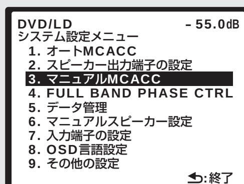
5　**戻るボタンを押す。**

定在波制御の設定を終了します。

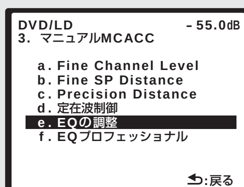
チャンネルごとの周波数特性の補正（EQの調整）

補正カーブを手動で調整します。下記の調整を行う前にMCACCボタンでどのMCACC MEMORYのEQ値を調整するか選んでおきます。

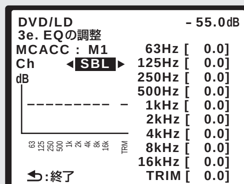
1



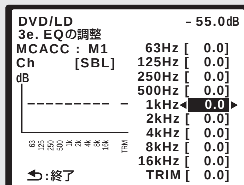
2



3

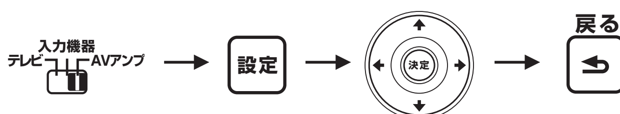


4



- オーディオ調整機能の「EQ」（周波数特性の補正）の項目を「EQ OFF」にしているMCACC MEMORYでここでの設定を行うと、自動で「EQ ON」に切り換わります。（→52ページ）

システム設定で使用するボタン



1 [3. マニュアルMCACC]を選んで決定する。

2 [EQの調整]を選んで決定する。

補正カーブの調整画面になります。


注意

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0.0 dBになりテストトーンが再生されます。

3 調整したいチャンネルを選ぶ。

4 調整したい周波数帯域を選んで調整する。

－12.0 dBから＋12.0 dBの範囲内で、0.5 dB間隔で調整することができます。

- 調整中に「OVER!」がディスプレイに表示されたときは、その帯域または他の帯域のレベルが高すぎるので、「OVER!」表示が消えるまで、さまざまな帯域のレベルを下げてください。
- 「スピーカーシステムの設定」でSMALL（小）に設定されたチャンネルは「63 Hz」を選ぶことはできません。
- 「TRIM」では、それぞれの帯域を調整することで、変わってしまった全体的なレベルのバランスを再調整します。

5 手順3～4を繰り返して、各チャンネルの周波数帯域を調整する。

6 戻るボタンを押す。

チャンネルごとの周波数特性の補正を終了します。

部屋の残響特性の測定と残響を考慮した補正（EQプロフェッショナル）

残響特性とは視聴環境における音の響き方のことです。ここでは残響特性の測定と確認、それに適した周波数特性の補正などをそれぞれ個別に行うことができます。チャンネルごとに響き方が異なったり、周波数ごとに響き方が異なるような視聴環境では[アドバンスドEQセットアップ]が特に効果を発揮します。
残響特性は部屋の形状や内装、スピーカーの設置状況などによって変化するため、この機能は理想的な視聴環境を創るための目安としてもご利用いただけます。また、周波数特性の補正後における視聴環境の残響特性をパソコン画面上で詳しく確認することも可能です。

残響特性の測定
視聴環境の残響特性をおよそ1～3分程度で測定します。
現状の部屋の残響特性を測定するときは、[残響特性の測定]を選んだあと、「EQ オフ」を選択してから測定してください。
残響特性を考慮した補正を行っているときは、補正後の部屋の残響特性を測定することもできます。
その場合は補正したMCACC MEMORYを選び、[残響特性の測定]を選んだあと、「EQ オン」を選択してから測定してください。

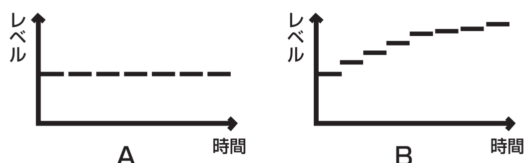
残響特性の確認
測定された残響特性の詳細をOSD画面（テレビ画面）で確認することができます。

アドバンスドEQセットアップ（上級者向けEQ設定）
OSD画面（テレビ画面）に表示される残響特性を参考にしながら、周波数特性の補正を行うための「時間軸上の位置」をお好みで選択し補正を行います。

- [アドバンスドEQセットアップ]は、以前に測定したオートMCACC（→14ページ）の補正カーブに上書きしてしまいますのでご注意ください。過去のデータを残したいときは、別のMCACC MEMORYを選んでから[アドバンスドEQセットアップ]を行ってください。
- [アドバンスドEQセットアップ]は周波数特性の補正についての自動設定です。オートMCACCと違い、スピーカーシステム、スピーカーまでの距離、スピーカー出力レベルなどの設定は行いませんので、[アドバンスドEQセットアップ]を行う前に「オートMCACC」（→14ページ）を行うことをお勧めします。
- 「オートMCACC」の[カスタム]で、「カスタムメニュー」を[ALL]、[スピーカーシステム保持]、[EQ Pro. & 定在波制御]のいずれかで設定したときは、すでに部屋の残響特性の測定から最適な補正時間位置の設定、周波数特性の補正を自動的に行い、理想的な視聴環境に補正されています。
- 「オートMCACC」（→14ページ）後や「残響特性の測定」のあとに「残響特性の確認」を行うと、定在波制御の設定値によって残響特性のグラフに違いが出ることがあります。「オートMCACC」では定在波を制御した状態で残響測定しているため、定在波の影響を排除した残響特性グラフが表示されます。それに対して「残響特性の測定」では定在波を制御せずに残響測定するため、定在波を含めた残響特性グラフをご覧いただけます。お部屋の残響特性そのもの（定在波もそのままの状態）を確認したいときは、「残響特性の測定」を行うことをお勧めします。

残響特性グラフの見方

このグラフは、スピーカーから一定のテストノイズを出力し続けた時のマイク入力レベルの時間変移を示したものです。まったく残響がない場合は下図Aのようになりますが、残響がある場合、徐々に音響パワーが累積されて下図Bのようになります。



- 低い周波数帯域は群遅延特性の影響で0［ms］付近の立ち上がりが鈍くなる場合があります。
- 各スピーカーの「距離と能力の差」による「ディレイとレベル差」は、グラフを見やすくするため、補正されたものを表示します。周波数特性に関しては補正しないで表示します。

アドバンスドEQセットアップでの補正時間位置の決め方

[残響特性の測定]で測定された残響特性の詳細を参考に、補正時間位置をご自身で選択します。
まずは[残響特性の確認]または[アドバンスドEQセットアップ]のOSD画面か、パソコン上で残響特性グラフを確認(→100ページ)し、以下の1～3のパターンを参考に補正時間位置を決めます。
従来のMCACCによるEQ補正では、図1のようにマイク入力のデータ取得時間が80～160[ms]の固定になっていました。それに対して、よりプロフェッショナルなEQ補正ができる本機のEQプロフェッショナルでは、残響音の悪影響を受けないようにするため、0～80[ms]の中の1ポイント(20[ms]幅)を選択できます。
各周波数、各チャンネルで、残響特性カーブの形状の差が大きい場合は、蓄積された残響音の悪影響を防ぐために、早めの時間位置を選択することで、直接音(初期反射音を含む)の不ぞろいのみを補正することができます。残響カーブのどこかの周波数帯に突発的な変化のない、早めの時間帯(たとえば30～50[ms])を選択します。

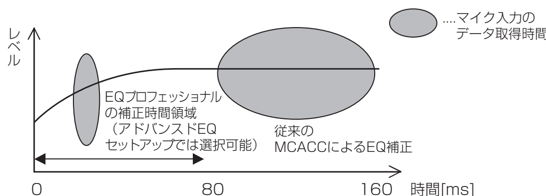


図1　EQプロフェッショナルと従来のMCACC EQの比較

この機能は上級者向けの機能になります。補正時間位置の設定およびアドバンスドＥＱセットアップをすべて自動で行いたい場合は「オートMCACC」の[ALL]、[スピーカーシステム保持]または[EQ Pro. & 定在波制御]で測定してください。

ケース１)周波数ごとに残響特性が異なる場合

図2は、低域が大きく響き、高域はあまり響かないという特性の例です。この場合従来のEQ補正は80～160[ms]のデータを取得していたため、低域の残響音の蓄積により、「低域が大きく、高域が小さい」と判断し、EQのカーブは高域を上げ気味に補正していました。しかし、スピーカーから直接耳に届く約40[ms]以内の特性は、高域も十分な音量が出ていますので、遅い時間位置で補正してしまうと高域がきつく感じることがありました。このような場合にはスピーカーからの直接音を補正する意味で、アドバンスドEQセットアップで30～50[ms]くらいを指定すると、スピーカーからの直接音(初期反射音を含む)がフラットになり、聴きやすい音場になります。

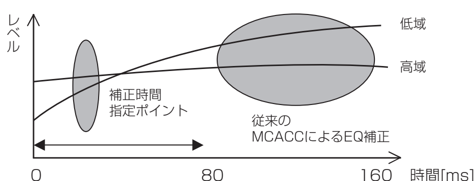


図2　周波数ごとに残響特性が異なる場合の例

ケース2)チャンネルごとに残響特性が異なる場合

図3は、チャンネルごとに残響特性が異なっている場合の例です。このような場合、 従来のEQ補正は80～160[ms]のデータを取得していたため、スピーカーから音が放射されてから80[ms]以降に徐々に各チャンネルの音色がそろってくるように補正していました。一方、音像の定位感や移動感、音色のつながりは、残響音ではなく、各スピーカーからの直接音(初期反射音を含む)に左右されます。このような場合は、アドバンスドEQセットアップで30～50[ms]くらいを指定して補正をすると、直接音の特性がそろった理想的な音場でお楽しみいただけるようになります。

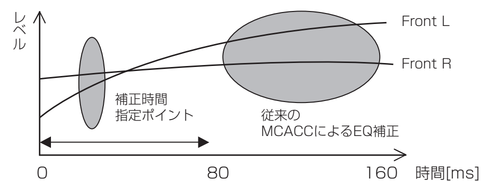


図3　チャンネルごとに残響特性が異なる場合の例

ケース3)全体的に残響特性が似ている場合

図4のように、各周波数、各チャンネルの残響特性が似ているような場合には、残響特性が悪影響を及ぼすことはありません。このような場合は30～50[ms]ではなく、アドバンスドEQセットアップで60～80[ms]くらいを指定して補正することをお勧めします。直接音と残響音をすべて含んだトータルでの補正が行われ、理想的な音場空間を再現することができます。

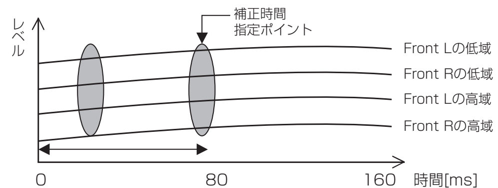


図4　周波数ごと、およびチャンネルごとに残響特性が似ている場合の例

本機能の有効活用

本機の「残響特性測定およびグラフ表示機能」は、視聴環境整備のツールとしてお使いいただけます。スピーカーのL/R(左右)で特性が大きく異なる場合は、片側の設置に問題があったり、左右の壁の反射が大きく影響している、などが考えられます。設置の見直しや吸音材の使用効果などを何度も確認しながらより理想的な視聴環境を創ることができます。

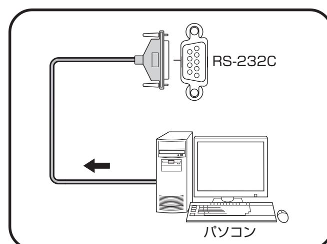
音の詳細設定

残響特性の結果をパソコンのモニター画面で確認したい場合には、測定前にあらかじめ本機とパソコンを接続する必要があります。使用できるパソコンの環境については100ページをご覧ください。

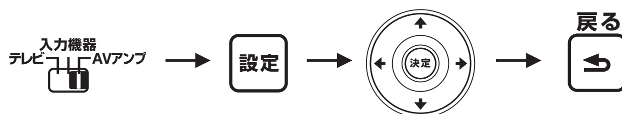
RS-232Cケーブルで接続してください。ケーブルはメス—メスのクロスタイプを使用します。詳細はダウンロードしたPC アプリケーションの取扱説明書をご覧ください。



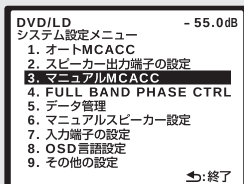
接続するときは、本機とパソコンの主電源を必ずOFFにしてください。



システム設定で使用するボタン



1



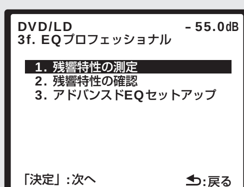
1 [3. マニュアルMCACC]を選んで決定する。

2



2 [EQプロフェッショナル]を選んで決定する。

3



3 [残響特性の測定]を選んで決定する。

4



4 [EQ OFF]を選ぶ。

残響特性を考慮した補正を行った状態の部屋の残響特性を測定/確認したいときは、あらかじめ補正を行ったMCACC MEMORYを選んだうえで[EQ オン]を選びます。

5 マイクを接続して残響特性の測定の準備をする。

- 付属の測定用マイクを接続して、リスニングポジションに設置してください。（TVモニターの近くには設置しないでください。）
- 測定中は静かにしてください。
- スピーカーとリスニングポジションの間にある障害物を取り除いてください。

6



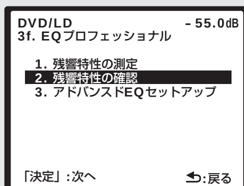
6 [スタート]を選んで決定する。

残響特性の測定になります。測定にはおよそ1～3分程度かかります。

測定終了後、測定結果をOSD画面で確認するときは手順7へ、測定結果を確認せずに周波数特性の補正を行うときは手順11へお進みください。

パソコンのモニター画面で確認するときは戻るボタンを2回押してシステム設定メニューに戻してから「各種測定結果のPC表示機能」（→100ページ）へお進みください。

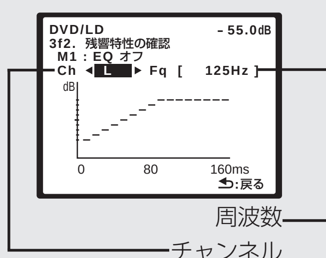
7



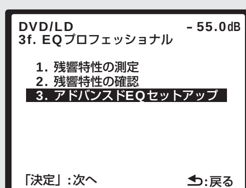
7 [残響特性の確認]を選んで決定する。

残響特性の測定結果確認画面になります。

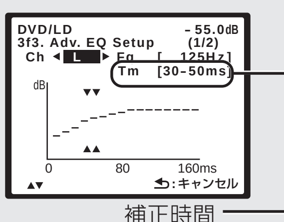
8



11



12



14



- OSDのdB表示(縦軸の目盛り)は2 dBごとに区切られています。

8 測定結果を確認したいチャンネル、周波数を選ぶ。

9 手順8を繰り返して各チャンネルにおける各周波数の残響特性の測定結果を確認する。

10 戻るボタンを押す。

残響特性の測定結果確認画面を終了します。

- 残響特性の詳細をご覧になった結果、チャンネルごとまたは周波数ごとに響き方が異なるときは手順11へお進みください。
- 部屋の残響特性を改善したいときはここで吸音材の調整などを見直し、視聴環境の整備を行ってください。そのあと、再度その効果を確認することをお勧めします。
- 残響特性が特にバラつきなく測定されているときは理想的な残響特性が得られていますので、手順11へお進みください。このとき、手順12の補正時間位置を[60－80ms]に指定することをお勧めします。

11 [アドバンスドEQセットアップ]を選んで決定する。

補正時間位置を指定する画面になります。

12 補正時間位置を指定する。

チャンネルと周波数を切り換えながら残響特性カーブを参考にして、補正時間位置を指定します。補正時間位置の決め方は「アドバンスドEQセットアップでの補正時間位置の決め方」(→97ページ)をご覧ください。補正時間位置は各チャンネル、各周波数で共通です。チャンネルと周波数の切り換えは参考にする残響特性カーブの切り換えです。

13 ⇩を押して画面を切り換え、必要に応じて「EQタイプ」と「STAND.WAVE 多点測定」を設定する。

それぞれの詳しい説明は88ページをご覧ください。

14 [スタート]を選んで決定する。

手順12で選んだ時間帯の音で周波数特性の補正を自動で行います。測定にはおよそ1～4分程度かかります。

15 戻るボタンを押す。

部屋の残響特性の測定と残響を考慮した補正(EQプロフェッショナル)を終了します。

各種測定結果のPC表示機能

本機では部屋の残響特性のほかに、FULL BAND PHASE CONTROLによるスピーカーの群遅延特性(→48、101ページ)およびMCACCパラメーター(測定値)をパソコンに転送して表示することができます。ご確認いただくには、以下の条件を満たしている必要があります。

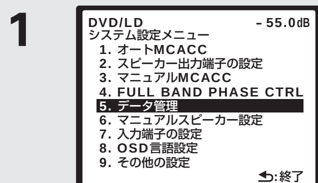
パソコン本体
- OS(オペレーティング・システム)がMicrosoft®「Windows® XP」(Service Pack 2)または「Windows® 2000」のいずれかであること。
- CPUがPentium 3/300 MHz以上かAMD K6/300 MHz以上(または100 %互換性のあるCPU)であること
- メモリーが128 MB以上であること
- 画面解像度が800×600ドット以上であること
- インターネットに接続可能であること
- RS-232Cポートを搭載していること(COMポートの接続についてはパソコンのメーカーへお問い合わせください)

RS-232Cケーブル
- メス-メス：クロスタイプ(インターリンク、リバースタイプなど)を使用すること。詳細はダウンロードしたPCアプリケーションの取扱説明書をご覧ください。

専用アプリケーション・ソフトおよび専用の取扱説明書
- 下記URLでお客様登録をしたあと、ダウンロードのサイトへ進み、ダウンロードしてください。
  http://pioneer.jp/support/

- ノートPCなどRS-232C端子がないパソコンの場合は、市販のUSB－RS-232C変換ケーブル(USB-シリアルケーブル)を使い、USB経由で接続することも可能です。

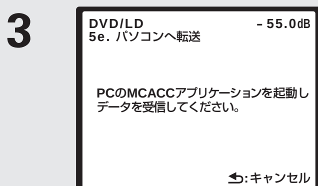
1



2



3



Microsoft®、Windows® XPおよびWindows® 2000は米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標または商標です。

データ通信の前に本機の設定で、一度オートMCACC［ALL］(→14、88ページ)を行った状態でRS-232Cケーブルを接続し、「残響特性の測定」(→98ページ)を行ってください。

1　[5. データ管理]を選んで決定する。

2　[パソコンへ転送]を選んで決定する。

パソコンへのデータ転送待ち画面になります。

3　パソコンの電源を入れて専用のPCアプリケーションを起動してください。

PCアプリケーションの取扱説明書の指示に従い、データ転送を行います。
パソコン表示用の残響特性データは、再度残響特性の測定を行うと上書きされます。また本機の電源を切ることでも残響特性データはメモリーから消去されますので、測定後はすみやかにパソコンへデータ送信し、保存しておくことをお勧めします。

4　戻るボタンを押す。

パソコンへのデータ転送を終了します。

- 残響特性の表示は、最後に測定した残響特性が「EQ OFF」であれば周波数特性の補正前、「EQ ON」であれば周波数特性の補正後の表示をご覧いただけます。詳しくは専用アプリケーションの取扱説明書をご覧ください。
- 群遅延特性とMCACCパラメーターのデータは本機の電源を切ってもメモリーから消去されないため、電源OFF後でもデータ転送させることができます。

スピーカーの位相乱れを補正する ～FULL BAND PHASE CTRL～

スピーカーの周波数位相特性を測定し補正する機能です。スピーカーから出力されたテスト信号を付属のマイクで測定することによってスピーカーの周波数位相特性を解析します。音声信号再生時の、全チャンネルの周波数位相特性がフラットな特性になるように補正します。詳しい説明は「全帯域にわたる位相の乱れ（群遅延）を補正する(FULL BAND PHASE CONTROL)」(→48ページ)をご覧ください。

ここではスピーカーの周波数位相特性のみを測定する場合について説明します。オートMCACC[ALL]（→14、88ページ）を行っているときはここでの補正は既に行われています（再度ここでの設定を行うと前の設定は上書きされます）。

設定にはセットアップ用マイクを使用します。マイクの接続のしかたは、14～15ページをご覧ください。また、マイクを接続する際は、設定ボタンを押してシステム設定画面が表示されている状態で差し込んでください。システム設定画面が表示されていない状態でマイクを差し込むとオートMCACCのスタート画面になります。

1



2

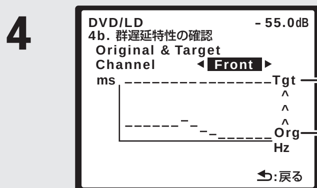


3





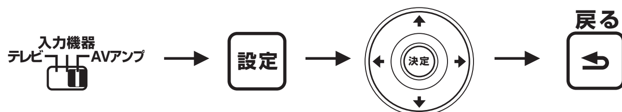
4



補正前のスピーカー群遅延特性

補正後にターゲットとなるスピーカー群遅延特性

システム設定で使用するボタン



1 [4. FULL BAND PHASE CTRL]を選んで決定する。

2 [測定]を選んで決定する。

3 マイクを接続し、[スタート]を選んで決定する。

スピーカーの位相乱れを測定し、補正します。測定が終わりましたら手順4へ進みます。

4 [群遅延特性の確認]を選んで決定する。

測定したスピーカーの補正前の群遅延特性と補正後ターゲットとなる群遅延特性を表示します。
⇦/⇨でチャンネルを切り換えることができます。

5 戻るボタンを押す。

[群遅延特性の確認]を終了します。

6 戻るボタンを押す。

スピーカーの群遅延補正を終了します。

- [測定] を選んで決定し、スピーカーの位相乱れを補正するとFULL BAND PHASE CONTROL機能が自動でONになります。
- PCと接続することで、より詳細なスピーカーの群遅延特性と補正後の群遅延特性を3Dグラフで表示することが可能です（→100ページ）。
- サブウーファーはFULL BAND PHASE CONTROLの補正対象外です。また、原理的に群遅延が発生しないスピーカー（フルレンジスピーカー）や可聴帯域外の超高音域（スーパーツイーターなど）も補正対象外です。

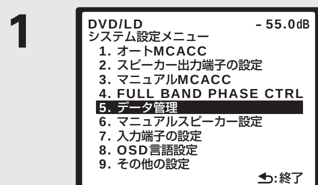
MCACC MEMORYのデータ管理をする ～データ管理～

「オートMCACC」や「マニュアルMCACC」で設定された各種設定内容や設定値を確認、コピー、消去することができます。またMCACC MEMORYに名前をつけることもできます。

設定データを確認する（MCACCデータチェック）

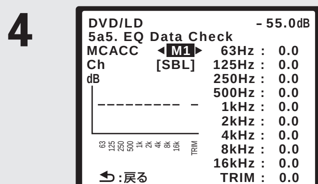
「オートMCACC」や「マニュアルMCACC」で設定された以下の各設定項目の内容や設定値を確認することができます。

スピーカー設定　：スピーカーシステムの設定
スピーカー出力レベル　：スピーカー出力レベルの設定
スピーカーまでの距離　：スピーカーまでの距離の設定
定在波制御　：定在波制御フィルター設定
Acoustic Cal EQ　：視聴環境の周波数特性の補正値
FULL BAND PHASE CTRL ： スピーカーの群遅延特性（補正前と補正後ターゲット）

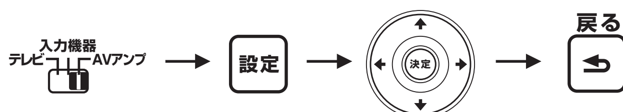
1


2


3


4


システム設定で使用するボタン



1 [5. データ管理]を選んで決定する。

2 [MCACCデータチェック]を選んで決定する。

確認したい設定の項目の選択画面になります。

3 確認したい設定項目を選んで決定する。

4 必要に応じて確認したいMCACC MEMORYやChなどを選ぶ。

ソースを再生しながらMCACC MEMORYを変えることで、各MEMORYの設定値を確認しながらそのサウンドの変化を確認することができます。
他の設定項目を確認するときは戻るボタンを押して手順3へ戻ります。

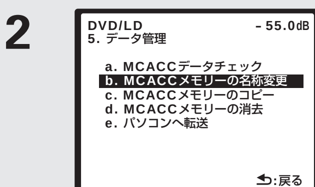
5 戻るボタンを押す。

[MCACCデータチェック]を終了します。

設定データの名前を変更する（MCACCメモリーの名称変更）

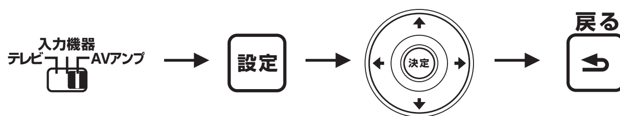
MCACC MEMORY1～6の名前を変更することができます。たとえば、映画を楽しむ視聴位置で音場補正を行ったときは「MOVIE」、ゲームを楽しむ視聴位置であれば「GAME」のように変更することができます。
変更したい設定データの名前は以下の中から選びます。
[SYMMETRY] [ALL ADJ] [F.ALIGN] [MOVIE] [MUSIC] [GAME] [PARTY][SOFA] [SEAT]

1


2


3


システム設定で使用するボタン



1 **[5. データ管理]を選んで決定する。**

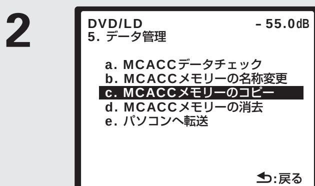
2 **[MCACCメモリーの名称変更]を選んで決定する。**
名前を変更したいMCACC MEMORYの選択画面になります。

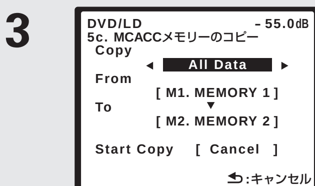
3 **名前を変更したいMCACC MEMORYを選んで名前を変更する。**
他にも名前を変更したいMCACC MEMORYがあるときは選んで変更します。

4 **戻るボタンを押す。**
[MCACCメモリーの名称変更]を終了します。

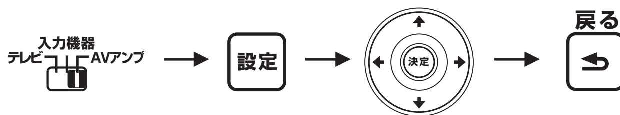
設定データをコピーする（MCACCメモリーのコピー）

「オートMCACC」や「マニュアルMCACC」で設定されたMCACC MEMORYを他の5つのMEMORYのいずれかにコピーすることができます。MCACC MEMORYは全部で6つまで設定することができます。

2


3


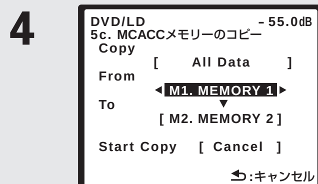
システム設定で使用するボタン



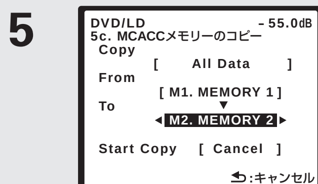
1 **[5. データ管理]を選んで決定する。**

2 **[MCACCメモリーのコピー]を選んで決定する。**
コピーしたいMCACC MEMORY（From）とコピーされるMCACC MEMORY（To）の選択画面になります。

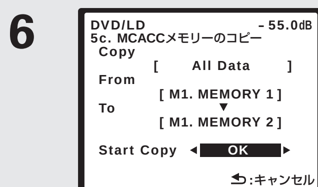
4



5



6



3 コピーする内容を選ぶ。

[All Data]を選ぶと、コピーされるMCACC MEMORYのすべての内容をコピーします。
[レベルと距離のデータ]を選ぶと、コピーされるMCACC MEMORYのスピーカー出力レベルとスピーカーまでの距離の設定のみコピーします。

4 コピーしたいMCACC MEMORYを選ぶ。

5 コピー先のMCACC MEMORYを選ぶ。

6 [OK]を選んで決定する。

設定内容のコピーが開始されます。
[Cancel]を選ぶとコピーは行われません。
「完了しました」と表示されたらコピーは終了です。

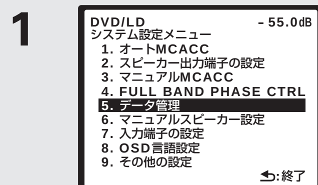
7 戻るボタンを押す。

[MCACCメモリーのコピー]を終了します。

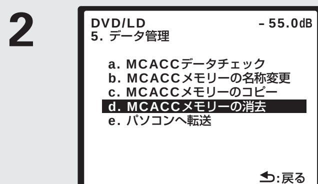
設定データを消去する (MCACCメモリーの消去)

6つあるMCACC MEMORYの中から必要のないMEMORYを消去します。

1



2



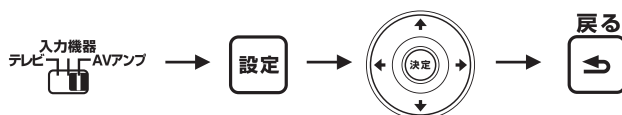
3



4



システム設定で使用するボタン



1 [5. データ管理]を選んで決定する。

2 [MCACCメモリーの消去]を選んで決定する。

消去したいMCACC MEMORYの選択画面になります。

3 消去したいMCACC MEMORYを選ぶ。

4 [OK]を選んで決定する。

手順3で選んだMCACC MEMORYの消去を開始します。[Cancel]を選ぶと消去は行われません。
「完了しました」と表示されたら消去は終了です。

5 他にも消去したいMCACC MEMORYがあるときは手順2〜4を繰り返す。

6 戻るボタンを押す。

[データ管理]を終了します。

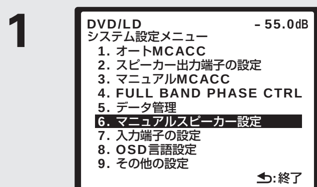
スピーカーの音を調整する ～マニュアルスピーカー設定～

「リスニング環境を測定して最適な設定をする(オートMCACC)」(→14ページ)でオートセットアップを行った場合はすでに設定されています。必要に応じてお好みで再設定できます。

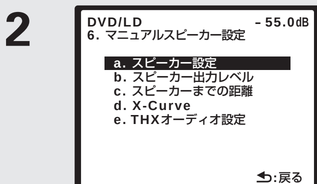
スピーカー接続と低音再生能力を設定する(スピーカー設定)

各チャンネルに接続されたスピーカーの有無や低域再生能力の大小を設定することで、再生するソースの全音域を最適なチャンネルへ配分します。お持ちのスピーカーシステムや視聴環境などに合わせて正しく設定してください。[SMALL](小)に設定されたスピーカーがあるとき、何Hz以下の低音域を他のスピーカー(サブウーファーを含む)で再生するか、またはLFE信号の何Hz以下の低音域を再生するかをX.OVER(クロスオーバー周波数)の設定で行います。サブウーファーの再生する音域成分については、106ページをご覧ください。

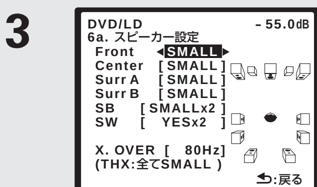
1



2

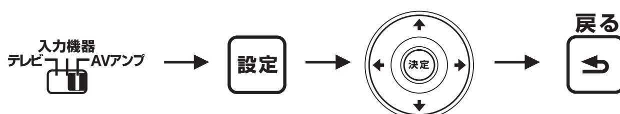


3



- THX認証のスピーカーシステムをご使用の際は、すべて[SMALL]に設定してください。
- 工場出荷時、クロスオーバー周波数は80 Hzに設定されています。
- THXスピーカーをご使用の場合、クロスオーバー周波数は80 Hzに設定してください。
- それぞれのスピーカーの性能によりますが、小型スピーカーを使用している場合、クロスオーバー周波数は200 Hzに設定することをお勧めします。

システム設定で使用するボタン



1 [6. マニュアルスピーカー設定]を選んで決定する。

2 [スピーカー設定]を選んで決定する。

スピーカーシステムの設定になります。

3 それぞれのスピーカーについて、それらのサイズや再生能力に合わせて設定する。

「スピーカー出力端子の設定」(→90ページ)によって選べるスピーカーは異なります。各項目の意味と設定方法については次ページの説明をご覧ください。

Front (フロント)	[LARGE] [SMALL]
Center (センター)	[LARGE] [SMALL] [NO]
Surr A (サラウンドA) (スピーカー出力端子の設定をノーマルに設定しているときのみ)	[LARGE] [SMALL] [NO]
Surr B (サラウンドB) (スピーカー出力端子の設定をノーマルに設定しているときのみ)	[LARGE] [SMALL] [NO]
Surr (サラウンド)	[LARGE] [SMALL] [NO]
SB (サラウンドバック)	[LARGE×2] [LARGE×1] [SMALL×2] [SMALL×1] [NO]
SW (サブウーファー)	[YES×2] [YES×1] [PLUS×2] [PLUS×1] [NO]
X.OVER (クロスオーバー周波数)	[50Hz] [80Hz] [100Hz] [150Hz] [200Hz]

4 戻るボタンを押す。

[スピーカー設定]を終了します。

音の詳細設定

スピーカーシステム設定の目安

スピーカーシステム組み合わせ可能一覧

Front (フロント)	[**SMALL**]		[LARGE]		
Center (センター)	[**SMALL**] [NO]		[LARGE] [SMALL] [NO]		
Surr A (サラウンドA) (スピーカー出力端子の設定をノーマルに設定しているときのみ)	[**SMALL**]	[NO]	[LARGE]	[SMALL]	[NO]
Surr B (サラウンドB) (スピーカー出力端子の設定をノーマルに設定しているときのみ)	[**SMALL**]	[NO]	[LARGE]	[SMALL]	[NO]
Surr (サラウンド)	[**SMALL**]	[NO]	[LARGE]	[SMALL]	[NO]
SB (サラウンドバック)	[**SMALL ×2**/ ×1] [NO]	[NO]	[LARGE ×2/ ×1] [SMALL ×2/ ×1] [NO]	[SMALL ×2/ ×1] [NO]	[NO]
SW (サブウーファー)	[**YES ×2**/ ×1]		[YES ×2/ ×1] [NO] [PLUS ×2/ ×1]		

太字：工場出荷時の設定

[SMALL]　：低域再生能力が十分ではない小型スピーカー
（低音域は他の[LARGE]スピーカーやサブウーファーから出力）

[LARGE]　：低域再生能力のあるフルレンジ・スピーカー

[×2/×1]　：サラウンドバックスピーカーまたはサブウーファーの接続本数（2本または1本）

[YES]　：サブウーファーを接続している場合

[PLUS]　：フロント/センターの低域成分を、サブウーファーからも同時に出力させる低域の再生量がもっとも多いモード
常に(2 ch再生時でも)サブウーファーから低域が出力されるため、量感のある重低音をお好みの方におすすめの設定(詳しくは下図参照)

[NO]　：接続していない場合（該当chの成分は他のスピーカーより出力）

サブウーファーの[PLUS]はオートセットアップでは設定されません。お好みに応じて設定を変更してください。

サブウーファーの再生する音域成分

フロント、センタースピーカーの設定によってサブウーファーの再生する音域成分は以下のようになります。

フロント／センタースピーカー	サブウーファー	LFE(超低域効果音)成分	低域成分	中･高域成分
SMALL	YES			
LARGE	YES			
LARGE	NO			
LARGE	PLUS			

サブウーファーの再生音域

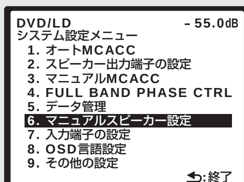
フロント/センターの再生音域

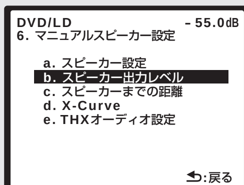
クロスオーバー周波数(工場出荷時：80 Hz)
お手持ちのスピーカーに合わせて設定してください

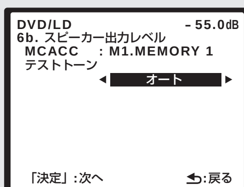
- サブウーファー[PLUS]に設定した場合、サブウーファーの低域成分とフロントの低域成分の打ち消し合いが発生し、十分な低音の効果が発揮されないことがあります。このような場合は、オートMCACCでスピーカーまでの距離の設定を行い(→14ページ)、PHASE CONTROL またはFULL BAND PHASE CONTROLモードを「ON」にしてください(→47ページ)。

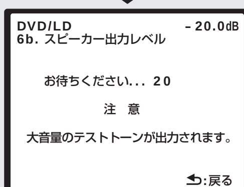
テストトーンを聞いて出力レベルを調整する（スピーカー出力レベル）

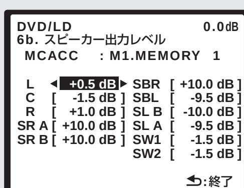
リスニングポジション（視聴位置）での各チャンネルの音量レベルが一定にそろうように調整します。実際に出力されるテストトーンを耳で確かめながら手動で各スピーカーの出力レベルを調整します。音圧計をお持ちの場合は、音圧レベルをCウェイト/スローモードで75 dB SPLに調整してください。
MCACC MEMORYがOFFの状態で「スピーカー出力レベル」を選択すると、MCACC MEMORYの選択画面になるので、手動調整したいMCACC MEMORYを選んでください。

1


2


3


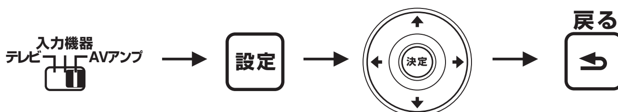


4




上記操作でも各チャンネルレベルの調整を行うことができます。CHレベルボタンを押すたびにチャンネルが切り換わります。（この場合OSD表示はされません）

システム設定で使用するボタン



1 [6. マニュアルスピーカー設定]を選んで決定する。

2 [スピーカー出力レベル]を選んで決定する。

スピーカー出力レベルの設定になります。

3 設定方法を選んで決定する。

[マニュアル]：テストトーンを出力するスピーカーを手動で切り換えて調整します。
[オート]：テストトーンを出力するスピーカーが自動で切り換わります。


注意

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0.0 dBになり、テストトーンが再生されます。

4 それぞれのチャンネルレベルを調整する。

－10.0 dBから＋10.0 dBの範囲内で、0.5 dB間隔で調整することができます。

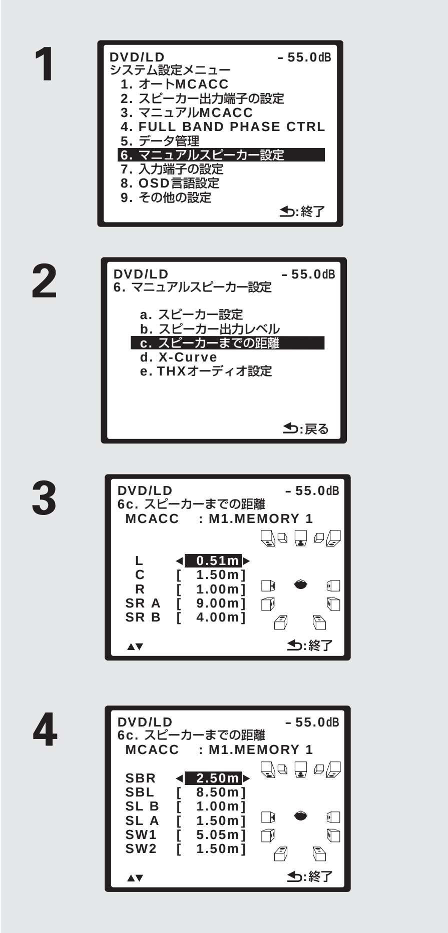
サブウーファーからのテストトーンは周波数が低いため、実際のレベルよりも小さく聞こえる場合があります。

5 戻るボタンを押す。

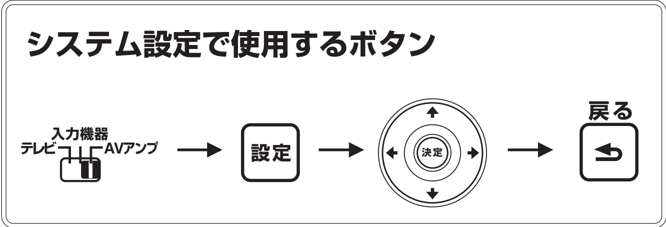
[スピーカー出力レベル]を終了します。

スピーカーまでの距離を調整する（スピーカーまでの距離）

リスニングポジション（視聴位置）からスピーカーまでの距離を設定することにより、各チャンネルの遅延時間が自動的に算出され、リスニングポジションで適切なサラウンド効果を得ることができます。手動で設定する場合は、それぞれのスピーカーから視聴位置までの距離を測り、ここで指定してください。
MCACC MEMORYがOFFの状態で「スピーカーまでの距離」を選択すると、MCACC MEMORYの選択画面になるので、手動調整したいMCACC MEMORYを選んでください。



システム設定で使用するボタン



1 [6. マニュアルスピーカー設定]を選んで決定する。

2 [スピーカーまでの距離]を選んで決定する。

スピーカーまでの距離の設定になります。

3 設定するスピーカーを選んでスピーカーまでの距離を設定する。

0.01 mから9.00 mの範囲内で、0.01 m間隔で設定できます。

> サラウンドバックスピーカーを2本接続した場合は、それらの設置（「SBR」と「SBL」）および設定をリスニングポジションから等距離にしますと、THXモードの効果が最大限に発揮されます。

4 戻るボタンを押す。

[スピーカーまでの距離]を終了します。

> より正確な距離の調整は、「スピーカーまでの距離の微調整」（→92ページ）および「スピーカー位置の精密調整」（→93ページ）をご覧ください。音像や定位感がさらに向上します。

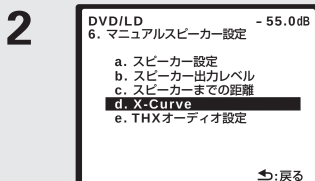
広い部屋での高音域を抑制する（X-Curve）

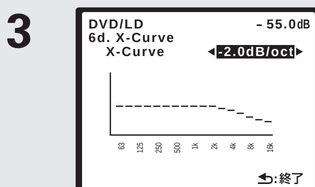
広い視聴環境では、聴感上高域がきつく聞こえてしまう傾向があります。Xカーブは高域（2 kHz以上）の周波数を減衰させるカーブで、減衰の傾きは−0.5 dB/oct〜−3.0 dB/oct（0.5 dBステップ）の6種類から選択可能です。以下の表を目安に、部屋の広さや聴感によって、自由に調節してください。
この補正は周波数特性の補正には影響しません。

部屋の広さによる減衰カーブの目安

部屋の広さ	~36 m^2	~48 m^2	~60 m^2	~72 m^2	~300 m^2	~1000 m^2
減衰カーブ	−0.5 dB/oct	−1.0 dB/oct	−1.5 dB/oct	−2.0 dB/oct	−2.5 dB/oct	−3.0 dB/oct

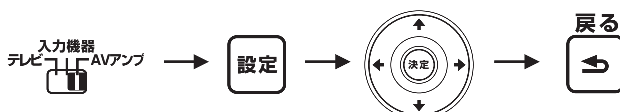
1


2


3


- THXモードでは、Xカーブと同じような、高域を補正するRe-Equalizationという機能が働くため、Xカーブの設定は無効になります。

システム設定で使用するボタン



1 [6. マニュアルスピーカー設定]を選んで決定する。

2 [X-Curve]を選んで決定する。

聴感上の高域補正になります。

3 ⬅➡ボタンで高域減衰カーブを調整する。

−0.5dB／octから−3.0dB／octを0.5 dBステップの6段階で調整することができます。
[OFF]を選択するとX-CurveはFLATになり聴感上の高域は補正されません。

4 戻るボタンを押す。

[X-Curve]を終了します。

THXオーディオ設定を行う

ここでは以下の THX オーディオに関する設定を行います。

THX Loudness Plus：
ONにすることで、音量を下げた状態でもサラウンド感を損なうことなく再生します。詳しくは「THX」（→144ページ）をご覧ください。

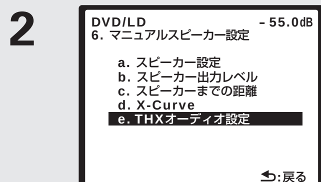
Boundary Gain Compensation：
THX Ultra2準拠のサブウーファーなど、超低域再生能力のあるサブウーファーを家庭で使用すると建物の共鳴や定在波の発生などにより、極端に低音が響く音質となってしまいます。このようなサブウーファーをお使いの方は、「Boundary Gain Compensation」を[ON]にすると、低域成分が補正されます。詳しくは「THX」（→144ページ）をご覧ください。「スピーカー設定」（→105ページ）でサブウーファーを「無し」で設定したときは、この項目は選択できません。

サラウンドバックスピーカー間の距離
THX Ultra2規格で新規に開発されたASA（Advanced Speaker Array）技術を用いた、THX Ultra2 CinemaとTHX Ultra2 Music Mode、THX Ultra2 Games Modeに最適な効果をもたらすための設定です。サラウンドバックスピーカー間の距離（0 m〜0.3 m、0.3 m〜1.2 m、1.2 m以上の3段階）に応じて処理を変化させます。THXの推奨するスピーカー配置は次ページの「THXの推奨するスピーカー配置」の図のとおりです。「スピーカー設定」（→105ページ）でサラウンドバックスピーカーを[NO]または[×1]で設定したときは、この項目は選択できません。また、「スピーカー出力端子の設定」（→90ページ）を「All Ch Bi-Amp」に選択したときも、この項目は選択できません。

1



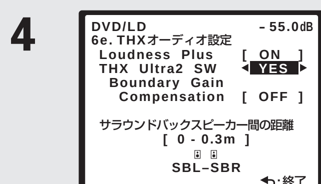
2



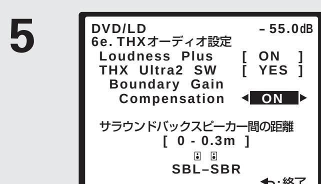
3



4



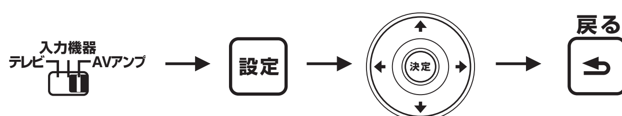
5



6



システム設定で使用するボタン



1 [6. マニュアルスピーカー設定]を選んで決定する。

2 [THXオーディオ設定]を選んで決定する。

THXオーディオ設定になります。

3 「Loudness Plus」の[ON]または[OFF]を選択する。

4 THX Ultra2 SWで[YES]を選び「Boundary Gain Compensation」を選ぶ。

[NO]を選んだ場合、「Boundary Gain Compensation」を選択することはできません。

5 [ON]か[OFF]のどちらかを選択する。

6 サラウンドバックスピーカー間の距離を選ぶ。

[0−0.3m]、[>0.3−1.2m]、[1.2m<]のいずれかを選びます。

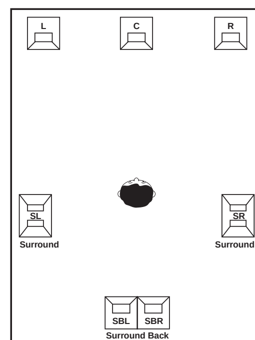
7 戻るボタンを押す。

[THXオーディオ設定]を終了します。

THXの推奨するスピーカー配置

サラウンドバックスピーカーは隣接させ、それぞれリスニングポジションから等距離となるように設置します。

ダイポール型スピーカー



THX Ultra2 準拠のサブウーファーとは

従来のTHX準拠サブウーファーの低域特性は、35 Hz以下を12 dB/octaveで減衰させています。これは小さい部屋では壁面の影響で空間利得が生じ、35 Hz以下の周波数が自然と持ち上がってしまうためです。双方の特性(サブウーファー特性と空間利得)により、20 Hzまでフラットな周波数特性となります。

2001年に認可を開始したTHX Ultra2準拠のサブウーファーは20 Hzまで低域特性を伸ばしています。よって、リスナーとサブウーファーの位置によっては、低域周波数帯の聴感レベルが極端に大きくなる可能性があります。その場合はBoundary Gain CompensationをONにすることにより、壁面の影響によって生じた低域の空間利得を補正し、聴感レベルをフラットにします。

リアパネル端子に入力した音声/映像信号を設定する ～入力端子の設定～

各入力ファンクションごとに割り当てる音声信号と映像信号の入力端子を変更することができます。以下の接続を行ったときは必ずここで設定してください。工場出荷時の設定は右下の表のとおりです。○は工場出荷時は設定されていませんが、割り当てることができる入力端子です。×は割り当てることができません。

- **リアパネルのデジタル音声入力端子とSビデオ映像入力端子に記載された工場出荷時の設定と異なる接続をしたとき。**
  →デジタル音声入力の設定（Digital In）
  →Sビデオ映像入力の設定（S-Video In）
- **HDMI1～6端子に接続したHDMI対応機器をHDMI1～6入力以外の入力で再生したいとき。**
  →HDMI入力の設定（HDMI Input）

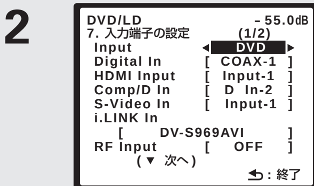
> - 「HDMIコントロール設定」（→129ページ）を「ON」にしているときはHDMI端子をHDMI以外の入力に割り当てることはできません。

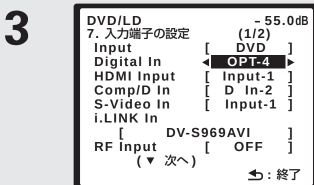
- **コンポーネントビデオ映像入力端子またはD5ビデオ映像入力端子に記載された工場出荷時の設定と異なる映像機器を接続したとき。**
  →コンポーネント/Dビデオ映像入力の設定（Comp/D In）
- **i.LINK端子にi.LINK対応機器を接続し、映像も同時に見たいとき。**
  →i.LINK入力の設定（i.LINK In）
- **RF**
  →RF入力の設定（RF Input）

入力ファンクション	入力端子				
	Digital	i.LINK	HDMI	Comp/D	S-Video
DVD/LD	COAX 1	○	○*	Comp 1	IN 1
BD	COAX 2	○	○*	Comp 2	○
TV	OPT 1	○	○*	○	○
SAT	OPT 2	○	○*	○	○
DVR/VCR 1	OPT 3	○	○*	D IN 1	固定
DVR/VCR 2	OPT 4	○	○*	D IN 2	固定
VIDEO/GAME 1	OPT 5	○	○*	Comp 3	○
VIDEO/GAME 2	固定	×	○*	×	固定
HDMI 1	×	×	HDMI-1	×	×
HDMI 2	×	×	HDMI-2	×	×
HDMI 3	×	×	HDMI-3	×	×
HDMI 4	×	×	HDMI-4	×	×
HDMI 5	×	×	HDMI-5	×	×
HDMI 6	×	×	HDMI-6	×	×
CD	COAX 3	○	×	×	×
SACD	COAX 4	○	×	×	×
CD-R/TAPE/MD	OPT 6	○	×	×	×
MULTI CH IN	×	×	○*	×	×
TUNER	割り当てることができない入力です。				
PHONO					
iPod					
HOME MEDIA GALLERY					
i.LINK					

* HDMIコントロールの設定がONのときは設定できません。

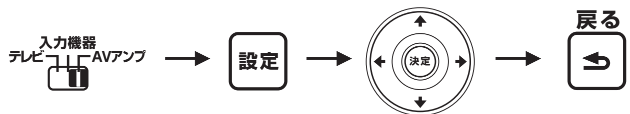
1


2


3


> - 別の入力ファンクションで、同じ入力端子を選択することはできません。同じ入力端子を選んだときは、先に設定されていた入力ファンクションの設定がOFFに切り換わります。
> - コンポーネント端子の使用については、「映像機器の接続について」（→31ページ）をご覧ください。
> - 割り当てたi.LINK対応機器のi.LINKケーブルを外したり、電源をオフした場合は、その機器の製品型番の前に「＊」が表示されます。
> - 同じ入力ファンクションで複数の機器を選択することはできません。

システム設定で使用するボタン



1 ［7. 入力端子の設定］を選んで決定する。

2 変更したい入力ファンクションを選ぶ。

3 変更したい設定を選んで割り当てたい入力端子を設定する。

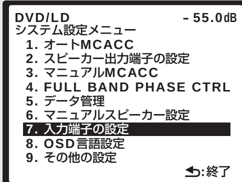
詳しくは上記の説明をご覧ください。
たとえば、光デジタル端子（IN4）を使ってDVDプレーヤーを接続したときは、「Digital In」の［COAX-1］を［OPT-4］に変更します。また、D5 VIDEO IN1に入力した映像信号を再生したいときは「Comp/D In」の設定を［D In-1］に設定します。
プラズマテレビの映像入力と本機の音声入力を合わせたいときは133ページの「プラズマテレビの入力連動設定～PDP In (SR+)～」をご覧ください。

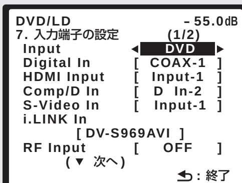
4 戻るボタンを押す。

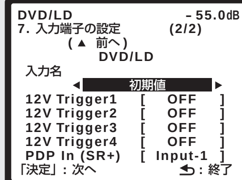
［入力端子の設定］を終了します。
システム設定を終了するときは、設定 を押します。

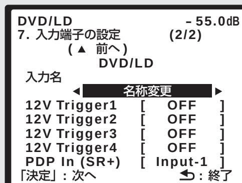
ディスプレイに表示される入力名を変更する

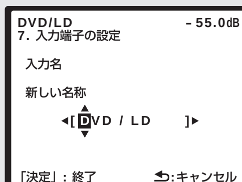
ディスプレイに表示される入力名を変更することができます。BD入力を選択すると、工場出荷時の設定では「BD」と表示されますが、この表示を自由に変更することができます。たとえば、接続した機器の名称（BDP-LX70）などに変更すれば、どこの入力ファンクションにどんな機器が接続されているのかを簡単に確認することができます。

1


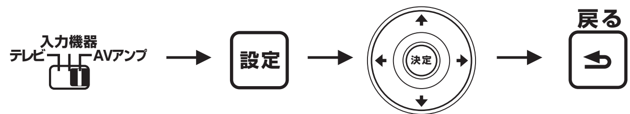
2


3


4


5


システム設定で使用するボタン



1 [7. 入力端子の設定]を選んで決定する。

2 名前を変更したいファンクションを選ぶ。

3 (▼ 次へ)に従って次のページを表示させる。

⬇ボタンを押して(2/2)ページを表示させます。

4 「入力名」で[名称変更]を選んで決定する。

工場出荷時に戻したいときは[初期値]を選んで決定します。

5 ⬅➡ボタンでカーソルを動かして⬆⬇ボタンで入力する文字を選ぶ。

入力できる文字は以下のとおりです。

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
0123456789
!”#$%&’()*+,–./:;<=>?@[\ ]^_{I}~（スペース）

⬆⬇ボタンを押し続けると文字がスクロールします。

6 手順5を繰り返して入力ファンクション名を入力する。

7 決定ボタンを押して入力ファンクション名を決定する。

他にも名前を変更したい入力ファンクションがある場合は、手順2〜6を繰り返します。

8 戻るボタンを押す。

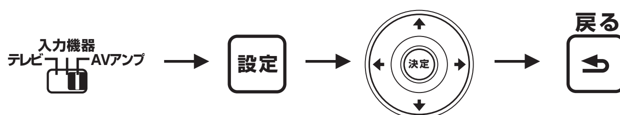
[入力端子の設定]を終了します。
システム設定を終了するときは、設定 を押します。

OSD画面の表示言語を変更する ～OSD言語設定～

OSD画面の表示言語を変更することができます。工場出荷時は日本語に設定されています。変更できる言語は以下のとおりです。
[英語]、[フランス語]、[ドイツ語]、[スペイン語]、[ロシア語]、[日本語]。



システム設定で使用するボタン



1 [8. OSD言語設定]を選んで決定する。

2 変更したい言語を選ぶ。

3 「OK」を選んで決定する。
OSD画面の表示言語が変更されます。

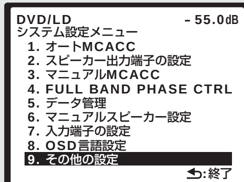
4 戻るボタンを押す。
[OSD言語設定]を終了します。
システム設定を終了するときは、設定 を押します。

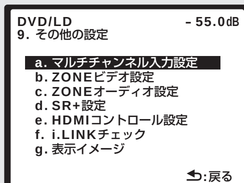
- [ドイツ語]、[ロシア語]を選択した場合、HOME MEDIA GALLERY入力のOSD画面は英語となります。

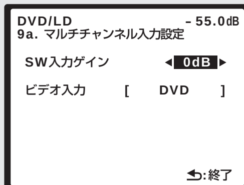
その他の設定をする ～その他の設定～

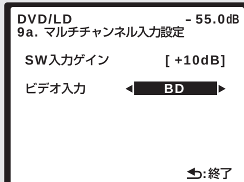
マルチチャンネル入力を設定する

マルチチャンネル入力でのサブウーファーレベルを上げることができます。また、マルチチャンネル入力を選択しているときに、他の入力の映像を見ることができます。ここではどの映像入力をマルチチャンネル入力に割り当てるかを設定します。

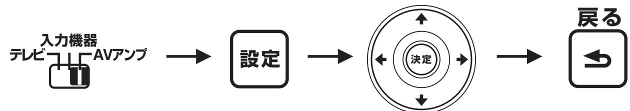
1


2


3


4


システム設定で使用するボタン



1 [9. その他の設定]を選んで決定する。

2 [マルチチャンネル入力設定]を選んで決定する。

マルチチャンネル入力の設定になります。

3 「SW入力ゲイン」を「＋10dB」にする。

サブウーファーの出力レベルが10 dB上がります。収録されているそのままのレベルで出力したいときは「0dB」にします。

4 「ビデオ入力」の映像入力を選択する。

マルチチャンネル入力のときに、ここで割り当てられた映像入力を見ることができます。ここで割り当てられる映像入力は、「DVD/LD」、「BD」、「TV」、「SAT」、「DVR/VCR 1」、「DVR/VCR 2」、「VIDEO/GAME 1」、「VIDEO/GAME 2」のいずれかです。

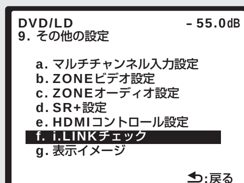
5 戻るボタンを押す。

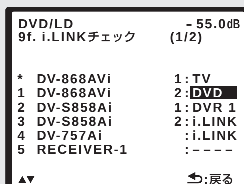
[マルチチャンネル入力設定]を終了します。

接続しているi.LINK対応機器を確認する ～i.LINKチェック～

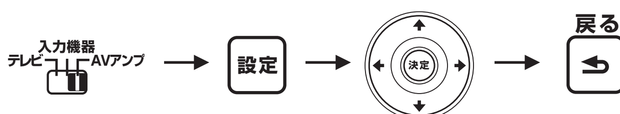
i.LINK対応機器を本機に接続し、「入力端子の設定」で入力を割り当てているときは、この設定でどの入力ファンクションにどのi.LINK対応機器が接続されているかを確認することができます。i.LINK端子に接続された機器がない場合は、この設定を選択することはできません。

1


2


3


システム設定で使用するボタン



1 [9. その他の設定]を選んで決定する。

2 [i.LINKチェック]を選んで決定する。

3 ⇧⇩ボタンで設定を確認する。

- 割り当てられていないi.LINK対応機器については、「i.LINK」と表示されます。
- i.LINK AUDIO以外のi.LINK対応機器に接続した場合は、「－－－－」と表示され、入力ファンクションを割り当てることはできません。
- 割り当てたi.LINK対応機器のi.LINKケーブルを外したり、電源を切った場合は、その機器の製品型番の前に「＊」が表示されます。

4 戻るボタンを押す。

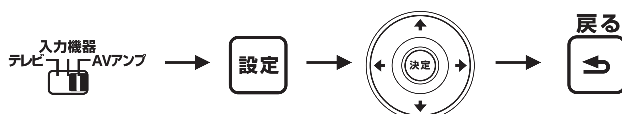
[i.LINKチェック]を終了します。

OSD表示の背景パターンを選択する ～表示イメージ～

OSD画面の背景色を選ぶことができます。以下の2つのパターンから選択します。
Type 1：青色系の背景色となります。
Type 2：黒色系の背景色となります。



システム設定で使用するボタン



1 [9. その他の設定]を選んで決定する。

2 [表示イメージ]を選んで決定する。
OSDの背景色の選択になります。

3 ⇦⇨で背景色パターンのタイプを選ぶ。
Type 1とType 2が切り換わります。

4 戻るボタンを押す。
[表示イメージ]を終了します。

5 もう一度戻るボタンを押す。
[その他の設定]を終了します。
システム設定を終了するときは、設定 を押します。

他機器を操作するためのリモコン設定をする

付属のリモコンを使って、本機以外のパイオニア製品や他社の機器(ビデオデッキ、テレビ、DVD、CDプレーヤーなど)を操作することができます。お手持ちの機器のプリセットコードがリモコンに登録されている場合は、該当するコードを呼び出すだけで操作できるようになります。また、プリセットコード非対応の機器でも、その機器に付属のリモコンから直接登録(学習)することが可能です。

他機器のリモコン信号を本機のリモコンに呼び出す(プリセットコード設定)

本機付属のリモコンには、複数のAV機器(他社製品を含む)のリモコンコードが登録されています。登録する機器のブランド名から検索することが可能です。
各ボタンの役割は「リモコンで他機器を操作する」(→118ページ)をご覧ください。

1 他機器連動 ＋ 設定

他機器連動ボタンを押しながら設定ボタンを押す。

リモコンに「SETUP」が表示されます。
設定を中止するには他機器連動ボタンを2秒間押し続けます。
1分間何も操作がないときは設定が中止されます。

2 決定

「PRESET」を選んで決定する。

「EXIT」を選んで決定すると設定を終了します。

3 DVD BD TV SAT DVR1 DVR2 VIDEO1 VIDEO2 HOME MEDIA GALLERY CD SACD CD-R TUNER PHONO iPod HDMI

または

入力機器 テレビ AVアンプ

決定

操作したい機器のマルチコントロールボタンを選んで決定する。

「テレビ基本操作」ボタンで操作したいテレビのプリセットコードを登録するときは、リモコン操作モード切り換えスイッチをテレビにしてから決定します。

4 決定

登録する機器のブランド名の頭文字を選んで決定する。

たとえば、パイオニアを登録するときは、「P」を選びます。

5 決定

登録する機器のブランド名を選んで決定する。

6 決定

登録する機器とコード番号を選んで決定する。

たとえば、DVDプレーヤーの場合は「DVD」、コード番号が複数あるときはそれぞれのコード番号で試してみてください。入力機器⏻ボタンを押して、その機器の電源を入／切できれば正しいものが選ばれたことになります。
「OK」が表示されて、登録が終了します。

7 他機器連動

他機器連動ボタンを2秒間押し続けて、プリセットコード設定を終了する。

- iPodボタン、HOME MEDIA GALLERYボタンにはプリセットコードを登録することができません。
- プリセットのコード番号は、数字が大きいほど新しい機器に対応しています。
- 正しく設定できているようでも、一部のボタンのみ違うコード番号も複数あります。実際に操作できるかを確認してください。
- すべてのモデルには対応していませんので、使用できない機能は学習させてください(→119ページ)。もとの機器に入っていない機能は動作しません。

パイオニア製の他機器コードに関する諸注意
- HDD内蔵DVDレコーダーの4コードはPIONEER DVR 487、488、489、493に対応しています。
- 05年夏以前に発売されたプラズマテレビをお持ちの方は、679、667、638(地上波対応)や639(BSデジタル対応)など、必要に応じてお試しください。一部海外向けのコードも内蔵されているため、TVの10 ch/11 ch/12 chが誤作動するものもあります。

現在設定されているコード番号の確認
- 登録後に、そのプリセットコードを確認できます。手順2で「READ ID」を選んで決定すると、登録されているブランド名とコード番号が約3秒間表示されます。

リモコンで他機器を操作する

- 以下のリモコン操作を行うには、あらかじめ操作したい機器のリモコンコードを登録しておく必要があります。詳しくは「他機器のリモコン信号を本機のリモコンに呼び出す（プリセットコード設定）」（→117ページ）をご覧ください。
- 実際に操作を始める前に操作切換スイッチを「入力機器」に合わせてから操作したい機器の他機器操作ボタンを押して、リモコンをその機器の操作モードにしてください。各機器の詳しい機能については、それぞれの取扱説明書をご覧ください。
- 機種によっては操作できないボタンもあります。

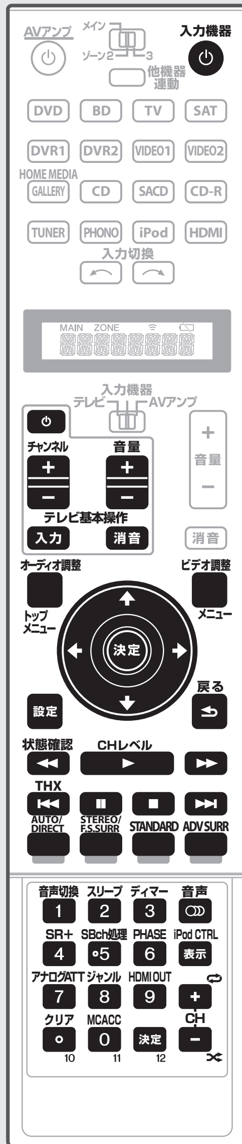
機能 ボタン	DVDプレーヤー BDプレーヤー LDプレーヤー	DVDレコーダー	ビデオデッキ	CDプレーヤー CDVプレーヤー MDレコーダー カセットデッキ	テレビ CATV BS/CSデジタルチューナー 地上デジタルチューナー	チューナー
入力機器⏻	電源の入／切（スタンバイ）					
⏮	前チャプター （トラック）頭出し				ページ戻る （CATVのみ）	MPX
⏭	次チャプター （トラック）頭出し				ページ進む （CATVのみ）	
⏸	一時停止					
▶	再生					
▶▶	早送り					
◀◀	早戻し					
■	停止					
数字ボタン	メニュー画面の操作	チャンネルの選択	チャンネルの選択	チャプター（トラック）の選択	チャンネルの選択	周波数/ ステーションの選択
決定(12)	[LDプレーヤー] A/B面の切り換え	12	12		12	クラス（A, B, C） の選択
トップメニュー	トップメニューの表示					AM/FM切換
メニュー	ディスクのメニュー画面の表示				メニュー画面の選択	
⬇⬆⬅➡ + 決定	各メニュー画面の操作					⬇⬆：周波数選択 ⬅➡： ステーション選択
設定	HOME MENU 画面の表示				HOME MENU 画面の表示	
CH +/–	チャンネルの選択				チャンネルの選択	
音声	音声（言語）の選択				音声切換	
表示	表示の切換				表示の切換	表示の切換
AUTO/ DIRECT		[HDD内蔵 DVDレコーダー] HDD操作の選択			地上アナログ放送の選択	
STEREO		[HDD内蔵 DVDレコーダー] DVD操作の選択			地上デジタル放送の選択	
戻る	戻るまたはEXITの選択				戻るまたは EXITの選択	戻る
クリア	[DVD/BD プレーヤー] CLEAR [LDプレーヤー] +10	10/0			10	ダイレクト選局
STANDARD		[ビデオ一体型HDD/ DVDレコーダー] VCR操作の選択			BSデジタル放送の選択	
ADV SURR					CSデジタル放送の選択	

* DVDプレーヤーによっては10以上を選ぶとき＋10方式ではなく、ENTER方式で番号を決める機種がありますが、その機種も本機リモコンでは＋10ボタンで操作することができます。

好きなボタンに他機器の操作を記憶させる(学習モード)

他機器のリモコンの操作を本機のリモコンに直接学習させることができます。プリセットコードを登録しただけでは使用できない操作などは、以下の手順で追加登録(学習)してください。

手順4　学習可能なボタン

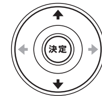


上記イラストの強調表示されているボタンに登録(学習)が可能です。
ただし、「テレビ基本操作」ボタンは、リモコン操作モード切り換えスイッチをテレビに合わせたときのみ登録(学習)できます。

1 

他機器連動ボタンを押しながら設定ボタンを押す。

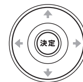
「SETUP」が表示されます。設定を中止するには他機器連動ボタンを2秒間押し続けます。1分間何も操作がないときは設定が中止されます。

2 

「LEARNING」を選んで決定する。

「EXIT」を選んで決定すると設定を終了します。

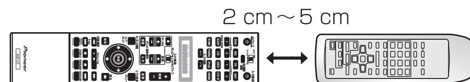
3 



操作したい機器のマルチコントロールボタンを選んで決定する。

「PRES KEY」が点滅します。

4 **本機器と他機器のリモコンを向かい合わせて、記憶させたい本機のボタンを押す。**



「PRES KEY」が点灯します。
学習できるボタンについては左図をご覧ください。

5 **記憶させたい他機器のリモコンのボタンを、数秒押して離す。**

「OK」が表示されて、登録(学習)が終了します。
「ERROR」が表示された場合は、手順4からやり直してみてください。

6 **同じ他機器リモコンについて登録(学習)を続けるには、手順4～5を繰り返す。**

別の他機器リモコンを登録するには、手順7へ進み、いったん終了してからもう一度行ってください。

7 

他機器連動ボタンを2秒間押し続けて、学習モードを終了する。

- iPodボタンとHOME MEDIA GALLERYボタンには登録(学習)することができません。
- 登録(学習)できる操作の数はパイオニアフォーマットで、およそ200コードです。
- 手順4～5は、強い蛍光灯の下やTVの前で行わないでください。異なるコードが登録されてしまうことがあります。

リモコンの登録操作の解除と設定全解除

特定のボタンに登録された操作のみを解除する

1 他機器連動 ＋ 設定

他機器連動ボタンを押しながら設定ボタンを押す。

「SETUP」が表示されます。
設定を中止するには他機器連動ボタンを2秒間押し続けます。

2 決定

「ERASE」を選んで決定する。

3 DVD BD TV SAT DVR1 DVR2 VIDEO1 VIDEO2 HOME MEDIA GALLERY CD SACD CD-R TUNER PHONO iPod HDMI 決定

解除したい機器のマルチコントロールを選んで決定する。

「PRES KEY」が点滅します。

4 消去したい操作ボタンを2秒間押し続ける。

「OK」が表示されて、消去が終了します。

5 他機器連動

他機器連動ボタンを2秒間押し続けて、登録解除を終了する。

リモコンに設定されたプリセットコードと学習させた他機器の操作を解除する

リモコンに設定された各種設定をすべてリセットし、工場出荷時の状態に戻します。

1 他機器連動 ＋ 設定

他機器連動ボタンを押しながら設定ボタンを押す。

「SETUP」が表示されます。
設定を中止するには他機器連動ボタンを2秒間押し続けます。

2 決定

「RESET」を選んで決定する。

「RESET」が点滅します。

3 決定

決定ボタンを2秒間以上押し続ける。

「NOW RST」と表示され、リセットが完了すると「OK」と表示され、設定が解除されます。
「ERROR」と表示されたときはもう一度手順1からやり直してください。

- プリセットコード設定(→117ページ)を行うことでマルチコントロールに学習した内容はすべて解除されます。すべてのマルチコントロールボタンをリセットせずに一部のマルチコントロールボタンをリセットするときに便利です。

マルチコントロールボタンの入力切換を解除する(ダイレクトファンクション)

ダイレクトファンクションはマルチコントロールボタンを押したときに、本機の入力ファンクションを連動して切り換えるかを設定する機能です。オフにすると入力ファンクションは切り換わらず、リモコンの操作ボタンの機能だけが切り換わります。工場出荷時はすべてオンになっています。

1 他機器連動 ＋ 設定

他機器連動ボタンを押しながら設定ボタンを押す。

「SETUP」が表示されます。
設定を中止するには他機器連動ボタンを2秒間押し続けます。

2 決定

「DIRECT F」を選んで決定する。

3 DVD BD TV SAT DVR1 DVR2 VIDEO1 VIDEO2 HOME MEDIA GALLERY CD SACD CD-R TUNER PHONO iPod HDMI 決定

操作したい機器のマルチコントロールボタンを選んで決定する。

4 決定

手順3で選んだ機器について、ダイレクトファンクションのON、OFFを選んで決定する。

「OK」が表示されます。

5 他機器連動

他機器連動ボタンを2秒間押し続けて、ダイレクトファンクションの設定を終了する。

リモコンに表示される入力名を変更する　～リネーム機能～

リモコンディスプレイに表示される入力ファンクション名を変更することができます。たとえば、DVDレコーダーを2台お持ちの場合、DVR1とDVR2のそれぞれを機器の名称（例：「DVR-DT90」など）に変更することができます。各入力ファンクション（他機器操作ボタン）ごとに接続された機器やメーカー名などを入力すれば、どの入力ファンクション（他機器操作ボタン）にどんな機器が接続されているのかを簡単に確認することができます。

1 他機器連動 ＋ 設定

他機器連動ボタンを押しながら設定ボタンを押す。

「SETUP」が表示されます。
設定を中止するには他機器連動ボタンを2秒間押し続けます。

2 決定

「RENAME」を選んで決定する。

3 DVD BD TV SAT DVR1 DVR2 VIDEO1 VIDEO2 HOME MEDIA GALLERY CD SACD CD-R TUNER PHONO iPod HDMI 決定

名前を変更したい入力ファンクション（他機器操作ボタン）を選んで決定する。

リモコンディスプレイが入力ファンクション名の変更画面になります。

4 決定

「NAME EDT」を選んで決定する。

名前をもとに戻したいときは「NAME RST」を選びます。

5 決定

⇧/⇩ボタンで入力する文字を選んで、⇦/⇨ボタンでカーソルを左右に動かす。

入力できる文字は以下のとおりです。
ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
0123456789\ /* +– (スペース)
最大8文字まで入力することができます。

6 決定

入力を終了する。

リネーム機能を終了します。
手順2へ戻ります。
設定を終了するには他機器連動ボタンを2秒間押します。

別の部屋で本機の音や映像を再生する ～マルチゾーン機能～

本機を操作して、本機のある部屋(メインゾーン)とは別の部屋(サブゾーン)で本機につないだ機器の再生を楽しめます(マルチゾーン機能)。本機ではメインゾーンとは別にZONE2とZONE3の2つのシステムを構築することができます。メインゾーンとサブゾーンで同時に同じソースを再生することはもちろん、別々のソースを再生することもできます。スピーカーの使用パターンで「7.2 ch+ZONE2」を選択しているときは、スピーカー端子からの音声出力もできます。ZONE2とZONE3へ出力できる信号については以下のとおりです。

	ビデオ出力	Sビデオ出力	コンポーネント ビデオ出力	アナログ音声 出力	デジタル音声 出力
ZONE2	○ (VIDEO ZONE2 OUT)	×	○ (COMPONENT VIDEO ZONE2 OUT)	○ *1 (AUDIO ZONE2 OUT)	○ (COAXIAL ZONE2 OUT)
ZONE3	○ (VIDEO ZONE3 OUT)	×	×	○ *2 (AUDIO ZONE3 OUT)	○ (OPTICAL ZONE3/SOURCE OUT)

*1 iPodを含むすべてのアナログ信号を出力します
*2 iPodを含むすべてのアナログ信号を出力しますが、iPodの操作モードが「Type 1」のときはiPodの音声が出力されません。

- ZONE2で再生できる音声はステレオ(アナログ)音声で、HDMIやi.LINKで入力された音声は再生できません。MULTI CH IN入力はフロントL、Rの2 chのみの再生となります。また、リスニングモードやトーンコントロールなどの各種音声機能は使えません。
- IRレシーバーがあるときは、IR IN端子にIRレシーバーを接続してさらにIR OUT端子に機器をつなぐと、その機器もIRレシーバーで操作することができます。
- ZONE2またはZONE3でホームメディアギャラリー入力を選択すると、メインゾーンのホームメディアギャラリー画面の画質が劣化することがあります。

2つめの部屋のマルチゾーン接続(ZONE2)

ZONE2端子を使ったマルチゾーン接続

本機に別のアンプとテレビモニターを図のように接続します。
COMPONENT VIDEO ZONE2 OUT 端子を使ってコンポーネントビデオ接続を行うこともできます。

サブゾーンの機器
(ZONE2)

本機(メインゾーン)

ZONE2 OUT
ZONE3 /SOURCE OUT
SOURCE OUT
ZONE2 OUT
ZONE3 OUT
AUDIO
R
L
VIDEO
ZONE2 OUT
ZONE3 OUT
12 V TRIGGER
1 2 3 4
DIGITAL IN
AUDIO IN

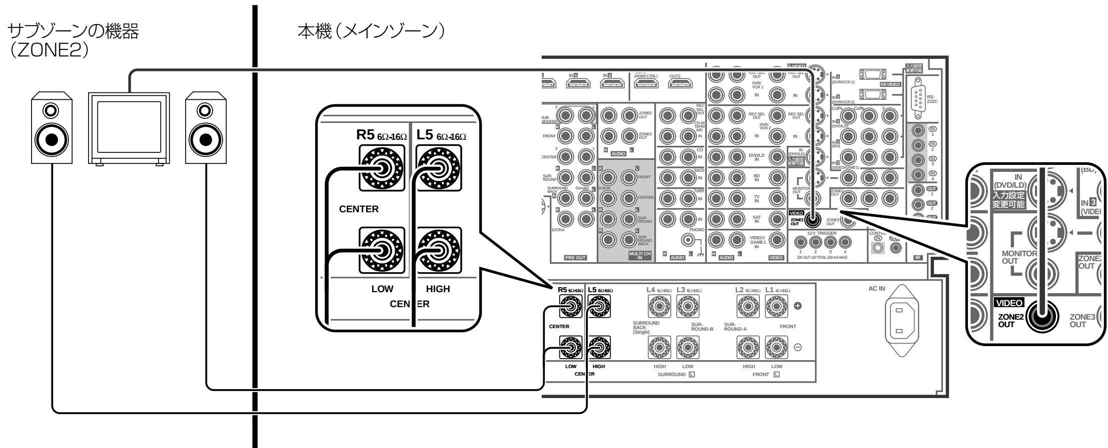
スピーカー端子を使用したマルチゾーン接続

本機にテレビモニターとスピーカーを図のように接続します。
COMPONENT VIDEO ZONE2 OUT 端子を使ってコンポーネントビデオ接続を行うこともできます。

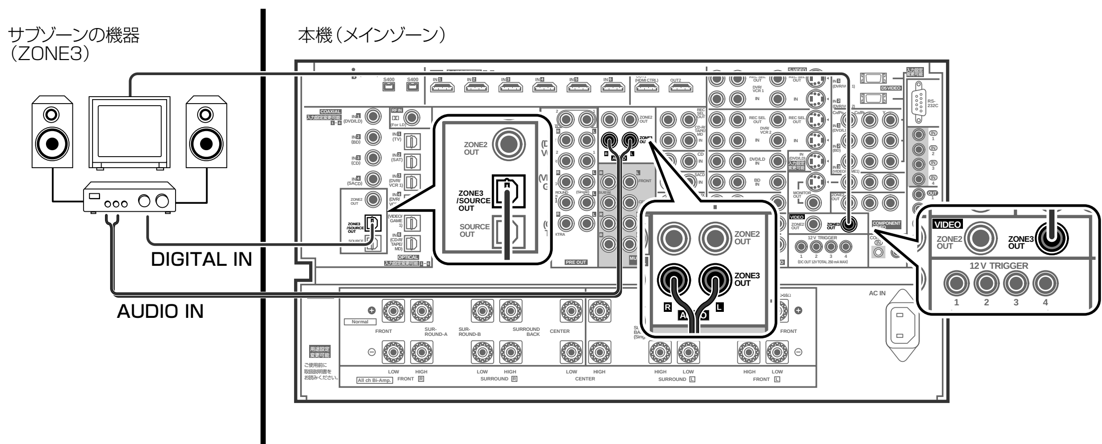
・スピーカーの接続(→28ページ)
「7.2ch＋ZONE2接続」を行ってください。

・スピーカー出力端子の設定(→90ページ)
「7.2ch＋ZONE2」を選択してください。

・スピーカーシステムの切り換え(→82ページ)
スピーカーシステムはAまたはOFFになります。



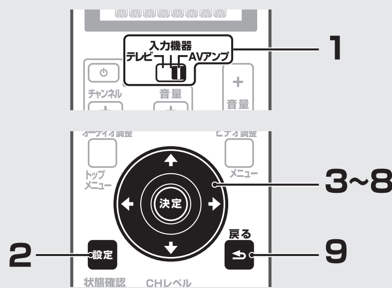
3つめの部屋のマルチゾーン接続（ZONE3）

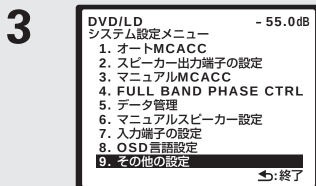


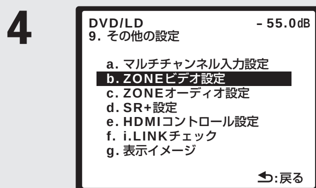
- DIGITALのZONE3/SOURCE OUTは、入力端子の設定でDigital Inが割り当てられている入力が出力されます。
- ZONE3がOFFのとき、DIGITALのZONE3/SOURCE OUTからはメインゾーンで選ばれている入力ファンクションの音声が出力されます。このとき選ばれている入力ファンクションの入力端子の設定でDigital In がOFFになっているときは音声は出力されません。
- 「ZONEオーディオ設定」のZONE3/REC SEL 出力(→124ページ)で「RECSEL」を選択しているときは、ZONE3をONにすることはできません。

マルチゾーンの設定

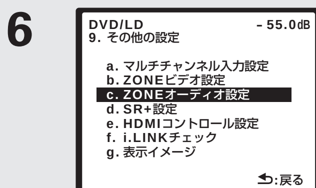
本機のシステムセットアップでサブゾーンのビデオコンバート設定(ZONEビデオ設定)および音声出力設定(ZONEオーディオ設定)を行います。



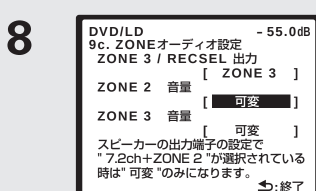












1 リモコン操作切換スイッチをAVアンプにする。

リモコンがAVアンプ操作モードになります。
システムセットアップ画像を表示するためには、テレビの電源を入れて入力を切り換えてください。

2 設定ボタンを押す。

システム設定メニューが表示されます。

3 [9. その他の設定]を選んで決定する。

4 [ZONEビデオ設定] を選んで決定する。

ZONE2のビデオコンバーター機能の設定になります。

5 ZONE 2 ビデオコンバーターのON、OFFを選択する。

ON：コンポジットまたはSビデオ映像入力信号をCOMPONENT VIDEO ZONE2 OUTまたはVIDEO ZONE2 OUTに対してビデオコンバートします。入力機器とZONE2のテレビモニターを違う種類のコードで接続していても映像を出力できるようになります。コンポーネント映像入力信号はCOMPONENT VIDEO ZONE2 OUTからのみ出力されます。

OFF：ZONE2の映像出力をビデオコンバートしません。この場合、入力機器とZONE2のテレビモニターは同じコード(コンポジットまたはコンポーネント)で接続してください。

6 [ZONEオーディオ設定] を選んで決定する。

7 ZONE 3 / RECSEL 出力について、適切な項目を選択する。

ZONE 3：AUDIO ZONE3 OUT端子から音声を出力します。

RECSEL：CD-R/TAPE/MD OUT、DVR/VCR1 OUT、DVR/VCR2 OUT端子から音声を出力します。
詳しくは「録音/録画しながら別の入力機器を再生する」(→79ページ)をご覧ください。

8 ZONE 2 音量およびZONE 3 音量について、適切な項目を選択する。

可変：本機で音量の調整をする場合(サブゾーンのアンプをパワーアンプとして音声出力する場合)に選びます。

固定：サブゾーンのアンプを使って音量の調整をする場合に選びます。(本機のサブゾーン側の音量は最大になります)



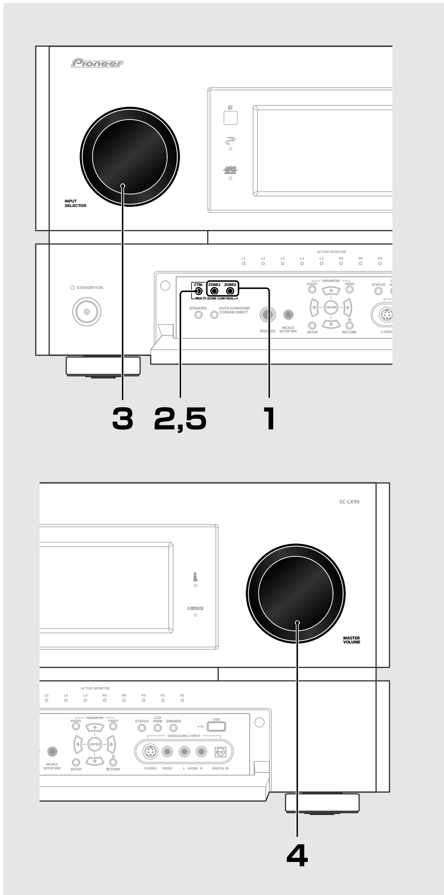
「固定」を選んだ場合、本機の音量は最大で固定されます。大音量での出力を避けるため、必ずサブルームのアンプを使って適切な音量に調整してください。

9 **戻るボタンを押す。**

マルチゾーンの設定を終了します。
システム設定を終了するときは、設定 を押します。

- 手順8の音量の設定で、[固定]はスピーカー出力端子の設定が[7.2ch+ZONE 2]のときは選択することができません。

本機でマルチゾーンの操作をする



1 **ZONE2またはZONE3を押して視聴したいマルチゾーン(部屋)を選ぶ。**

ボタンを押すたびにONとOFFが切り換わります。
ZONE2とZONE3を両方ONにすることもできます。

2 **CTRLを押して操作したいマルチゾーンを選ぶ。**

押すたびにメインゾーン操作とサブゾーン操作が切り換わります。ZONE 2とZONE3の両方をONにしているときはZONE2とZONE3を切り換えることができます。

10秒間操作がないと自動的にマルチルームコントロールモードが終了します。

3 **INPUT SELECTORで入力ファンクションを切り換える。**

たとえば、手順2でZONE2を選び、手順3でDVR/VCR1の音声と映像を選ぶと、DVR/VCR1入力の音声と映像をZONE2で楽しむことができます。

4 **MASTER VOLUMEダイヤルで音量を調整する。**

−80 dBから0 dBの範囲で調整できます。
ただし「ZONE 2 音量」または「ZONE 3 音量」が「固定」のときは0 dBに固定されます。

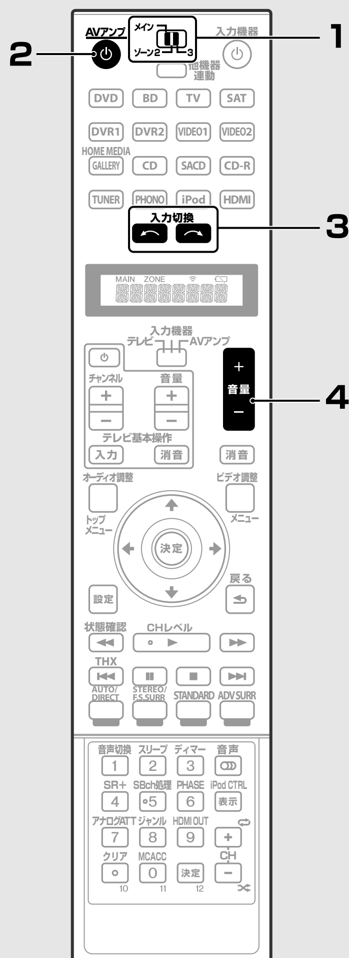
5 **CTRLを押す。**

マルチゾーンの操作を終了します。

6 **選んだ機器の再生をする。**

- ZONE 3を使用するときは、「ZONEオーディオ設定」(→124ページ)の「ZONE 3/RECSEL 出力」を「ZONE 3」にしてください。「RECSEL」に設定されているとZONE 3から音は出ません。
- マルチゾーン機能では、電源の入／切もメインゾーンとサブゾーンで別になります。
- マルチゾーンの設定で [固定] が選ばれているとき、本機では音量を調整できません。
- スリープ機能が働くとメインゾーンとサブゾーンの両方の電源がスタンバイになります。
- システム設定中は、マルチゾーン操作はできません。

リモコンでマルチゾーンの操作をする



1 マルチゾーン操作切換スイッチをゾーン2またはゾーン3にする。

ゾーン2にするとリモコンがZONE2の操作モード、ゾーン3にするとZONE3の操作モードに切り換わります。
メインゾーン操作モードに戻すときはメインゾーンに切り換えます。

2 マルチゾーン機能の電源を入れる。

3 入力ファンクションを切り換える。

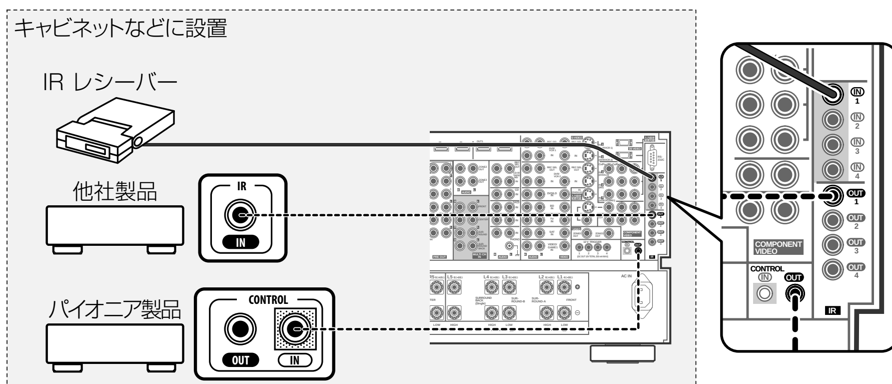
入力切換ボタンで機器を選びます。

4 音量＋/－ボタンで音量を調整する。

- 本機のリモコンで操作できるボタンは以下になります。
  AVアンプ ⏻ ：本機の電源切り換え
  入力切換 ：入力ファンクションの選択
  音量＋/－ ：音量調整（ただし、システムセットアップの「ZONEオーディオ設定」で[固定] が選ばれているときは調整できません。）
- パイオニア製アンプをサブゾーンで使用している場合、本機のリモコン操作で同時にアンプが動作してしまいます。IRレシーバーでのマルチルーム操作をするときは、アンプのリモコン受光部を覆い隠すなどの対策をとってください。

IRレシーバーを使って集中コントロールする

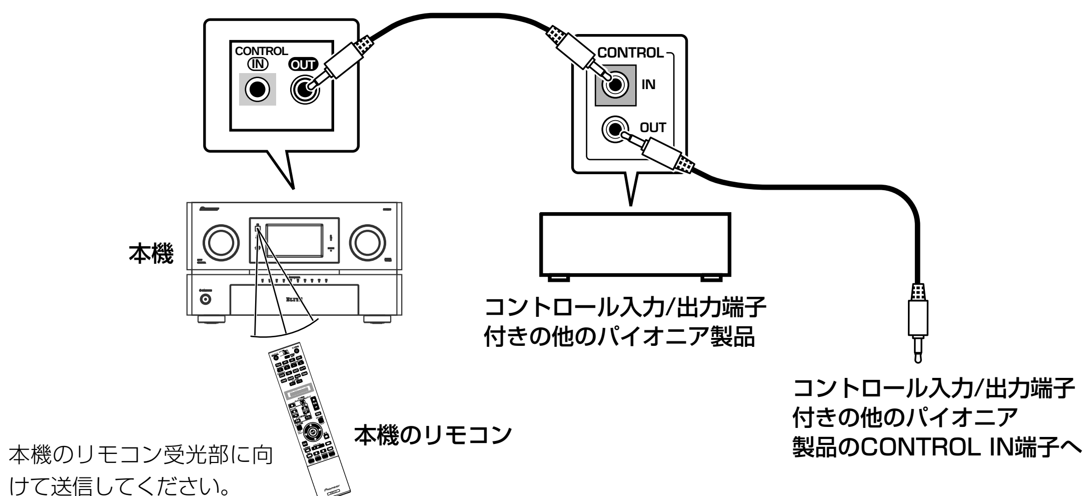
ステレオ機器などをキャビネット内などのリモコン信号が届かない場所に設置している場合でも、市販のIRレシーバーを使用して、リモコンでシステムの操作ができます。本機や接続した機器（パイオニア製品だけでなく、他社製品も含む）が操作できます。本機では最大4台までの機器とIRレシーバーを使った接続が可能です。マルチルームのリモコン操作などにも使用できます。



- IR接続は、IR端子を装備している機器を使用してください。
- 接続に必要なケーブルの種類については、IRレシーバーに付属の取扱説明書をご覧ください。
- IRレシーバーのリモコン受光部に蛍光灯から強い光が直接照射されている場合は、リモコン操作ができないことがあります。
- 他社製品ではIRという名称が使用されていない場合があります。お使いの機器に付属の取扱説明書で確認してください。
- フロントパネルのリモコン受光部とIRレシーバーのリモコン受光部が同時に受信した場合は、IRレシーバーが優先されます。

他のパイオニア製品をつないで集中コントロールする

コントロール入力/出力端子の付いた複数のパイオニア機器を、本機のリモコン受光部を使って集中コントロールすることができます。リモコン受光部を持たない機器や、受光部が信号を受けられないところに設置した機器もリモコン操作が可能になります。



- 本機のCONTROL IN端子にコントロールコードを接続すると、リモコンを本機に向けて直接操作することはできません（リモコン信号受光部が機能しなくなります）。
- 接続には市販のモノラルミニプラグコード（抵抗なし）をお使いください。
- コントロール端子の接続をする場合は、必ずオーディオコード、映像ケーブルまたはHDMIケーブルの接続もしてください。デジタル接続だけでは、システムコントロールは正しく動作しません。

HDMIコントロール機能でHDMI機器を連動動作する

HDMIコントロール機能に対応したパイオニア製プラズマテレビやブルーレイディスクプレーヤーなどを、HDMIケーブルで本機と接続することでこれらの機器との連動動作を実現します。HDMIコントロール機能で連動できる動作について、詳しくはそれぞれの取扱説明書をご覧ください。

- HDMIコントロール機能に対応していない機器ではここでの機能を使用することができません。
- パイオニア製ではない機器とは正しく連動動作できないことがあります。

HDMIコントロール機器を接続する

本機にはプラズマテレビのほかに、最大6台のHDMI機器を接続して連動動作させせることができます。接続にはHDMIケーブルをご使用ください。一部のHDMIケーブルではHDMIコントロール機能が動作しない場合があります。接続のあとは「HDMIコントロール設定」(→129ページ)を行ってください。

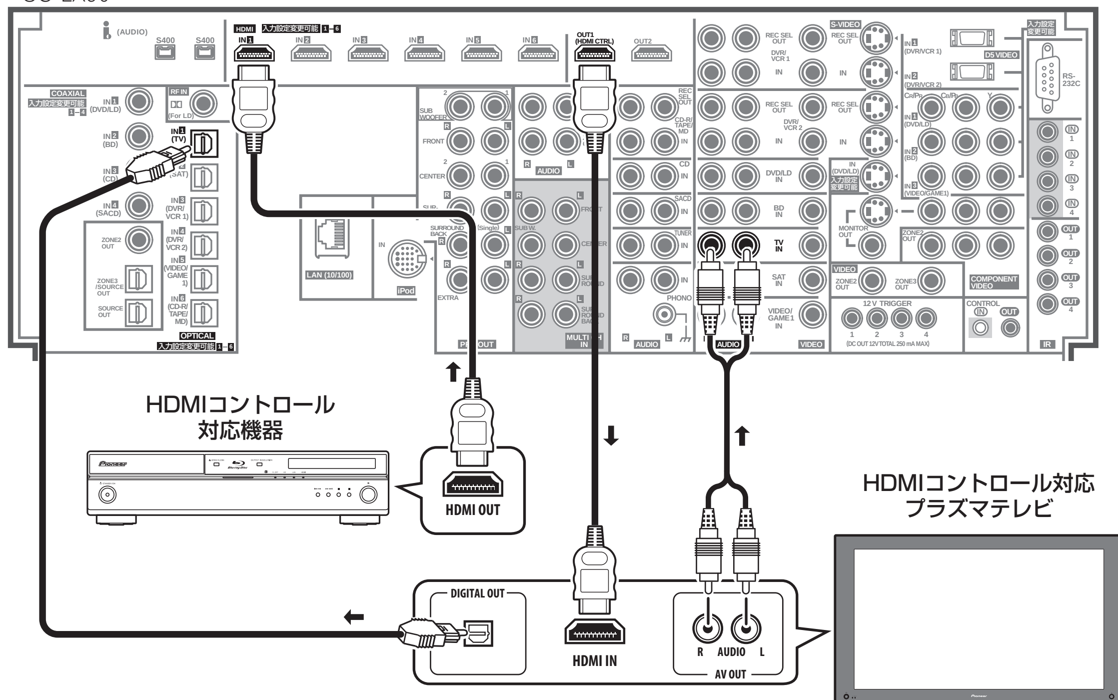

注意

機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

- HDMIコントロール機器の接続終了後、電源コードをコンセントに差し込むと本機の電源が入ります。この際、15秒間のHDMIに関する初期化動作を行います。初期化中はHDMIインジケーターが点滅しますので、点滅が終了してから本機の操作を行ってください。「HDMIコントロール設定」(→129ページ)を「OFF」にすることで、この処理は行われなくなります。
- 本機のHDMIコントロール機能を十分に発揮するために、HDMI機器は本機に接続してください。HDMI機器が本機ではなくプラズマテレビに直接接続されると、HDMIコントロール機能が働かないことがあります。

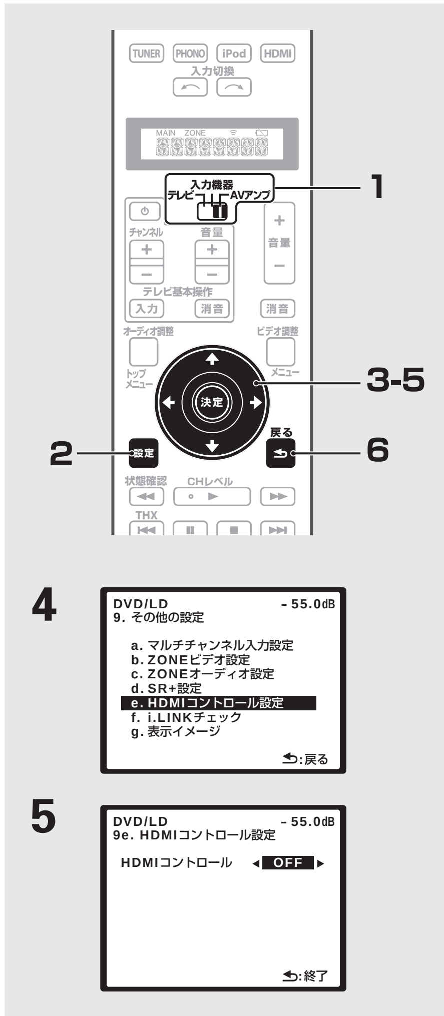
HDMIコントロールについてのご注意

- 本機とプラズマテレビは直接接続してください。本機以外のアンプやAVコンバーター(HDMIスイッチ)などに接続してから本機に接続すると、誤動作の原因となります。
- 本機のHDMI入力にはソース機器(ブルーレイディスクプレーヤーなど)を直接接続してください。本機以外のアンプやAVコンバーター(HDMIスイッチ)などを接続すると誤動作の原因となります。
- HDMIコントロール機能を使用するとき、本機とプラズマテレビの接続にはHDMI OUT1端子をご使用ください。HDMI OUT2端子にHDMIコントロール対応機器を接続すると、誤作動することがありますので、この場合はHDMIコントロール対応機器のHDMIコントロール設定をOFFにしてください。



HDMIコントロールモードを設定する

本機のHDMIコントロール機能を有効にするかの設定を行います。
本機の設定以外にも、本機と接続するHDMIコントロール機能に対応した機器の設定も必要です。詳しくはそれぞれの取扱説明書をご覧ください。



1 **リモコン操作切換スイッチをAVアンプにする。**
リモコンがAVアンプ操作モードになります。
システムセットアップ画面を表示するためには、テレビの電源を入れて入力を切り換えてください。

2 **設定ボタンを押す。**
システム設定メニューが表示されます。

3 **[9. その他の設定] を選んで決定する。**

4 **[HDMIコントロール設定] を選んで決定する。**

5 **HDMIコントロール機能のON/OFFを選択する。**
ON：HDMIコントロール機能が有効になります。本機の電源を切っても、HDMIコントロール機能に対応したソース機器を再生すれば、その映像と音声をHDMI出力からテレビに出力します。
OFF：HDMIコントロール機能は無効になり、連動動作することはできません。本機の電源を切ると、接続したソース機器の映像と音声はHDMI出力されません。

6 **戻るボタンを押す。**
HDMIコントロールモードの設定を終了します。
システム設定を終了するには、[設定] を押します。

- HDMIコントロールを ON に設定すると、入力端子の設定のHDMI入力(HDMI Input)は自動的にOFFになります。
- HDMIコントロールを ON に設定すると、SR+機能が使用できなくなります。

連動動作を開始する前に動作確認する

接続と設定が終了したら下記の確認作業を必ず行ってください。

1 **すべての機器をスタンバイ状態にする。**

2 **プラズマテレビ以外のすべての機器の電源を入れる。**

3 **プラズマテレビの電源を入れる。**

4 **プラズマテレビの入力をHDMIにする。**

5 **本機のHDMI入力を切り換える。**

6 **手順5で選んだHDMI入力に接続した機器を再生する。**
プラズマテレビに映像が表示されることを確認します。

7 **手順5〜6を繰り返し、すべてのHDMI入力を確認する。**

アンプ連動モードを使う

プラズマテレビのリモコンでアンプ連動モードにすることができます。アンプ連動モードでの動作は以下の説明をご覧ください。これらの機能はプラズマテレビのメニュー画面で設定します。詳しくはHDMIコントロール機能対応のパイオニア製プラズマテレビの取扱説明書をご覧ください。
なお、プラズマテレビのHDMIコントロール設定がONで、プラズマテレビの電源が入っているときに本機の電源を入れると自動的にアンプ連動モードになります。

アンプ連動モードでの連動動作について

アンプ連動モード使用中は、本機と接続したHDMIコントロール対応機器が以下のように連動動作します。
・ 本機の音量、消音などを操作したときに、その状態をプラズマテレビの画面に表示します。
・ HDMIコントロール対応機器の再生操作に連動して本機の入力が自動的に切り換わります。
・ HDMIコントロール対応のプラズマテレビでチャンネルを切り換えると、本機の入力が連動して切り換わります。
・ HDMIコントロール対応のプラズマテレビでメニュー言語を切り換えると、本機のOSD言語も連動して切り換わります。
・ 本機の入力をHDMI以外に切り換えても連動モードは継続されます。

アンプ連動モードの解除

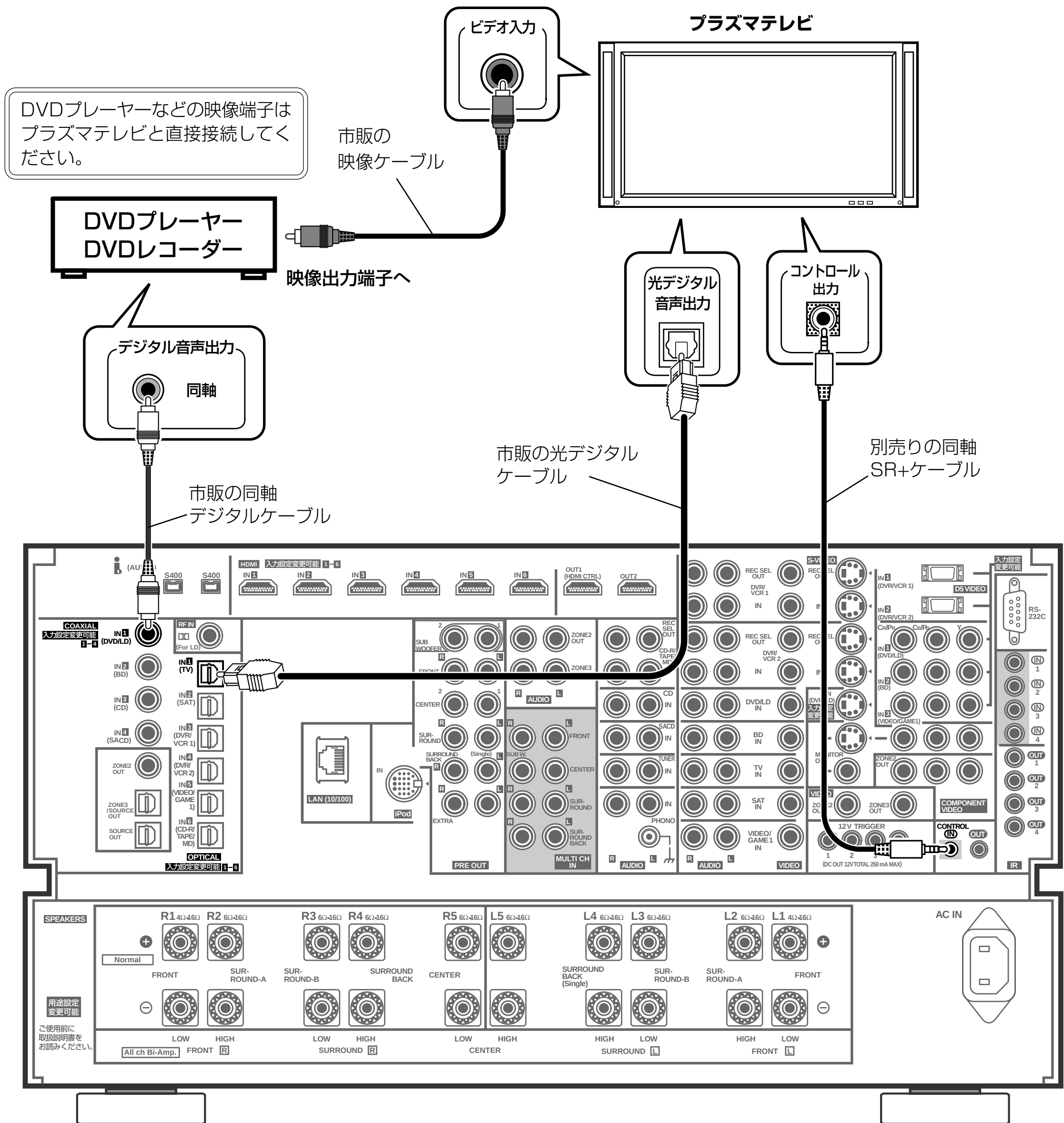
・ アンプ連動モードを解除すると、プラズマテレビでHDMI入力またはテレビ放送を視聴していた場合、本機の電源が切れます。
・ アンプ連動モードのときに、本機の電源を切ることでアンプ連動モードは解除されます。このとき再度アンプ連動モードにするには、プラズマテレビのリモコンでアンプ連動を選ぶか、本機の電源を入れます。
・ アンプ連動モードのとき、プラズマテレビのリモコンでプラズマテレビから音を出すように操作するとアンプ連動モードが解除されます。

パイオニアのプラズマテレビと連動操作する

SR＋に対応したプラズマテレビ(2003年以降に発売されたモデル)を、SR＋ケーブルで接続することでシステム動作が可能になります。プラズマテレビの画面を見ながら本機のシステムセットアップをしたり、音量やリスニングモードの確認ができます。また、本機とプラズマテレビの入力を連動させて切り換えることができます。本機とプラズマテレビをシステム動作させるには、下記の接続および設定が必要となります。

プラズマテレビとの接続

このシステム動作を実現するためには専用のSR＋ケーブル(パイオニア部品番号：ADE7095)が必要となります。詳しくはパイオニア部品受注センターへご連絡ください。市販の4極ミニジャック(両端とも)付コードでも使用できます。



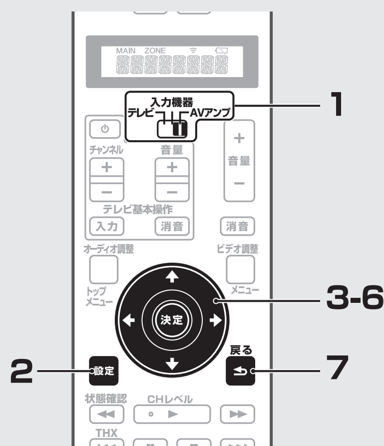
本機にSR+ケーブルを接続すると、本機のリモコン受光部はリモコン信号を受け付けなくなりますので、リモコンはプラズマテレビに向けて操作してください。プラズマテレビの電源が切れているときはリモコンで本機の操作ができません。

プラズマテレビとの連動モードを設定する(SR+設定)

本機とプラズマテレビの連動について、以下の2つの設定を行います。

PDPの音声連動：
連動モードを実行したとき(→133ページ)にプラズマテレビの音量を下げるかどうか設定します。
「ON」に設定すると連動モードを実行したとき瞬時にプラズマテレビの音から本機の音に切り換えることができます。

モニター出力の接続先：
本機のシステムセットアップを表示するために、接続したプラズマテレビの入力を設定します。システムセットアップを開始したときに自動的にプラズマテレビの入力も切り換わり、また、本機のシステム表示とプラズマテレビのSR+表示が重ならないように連動させます。



- 本機とプラズマテレビをSR＋ケーブルで接続して、本機とプラズマテレビの電源を入れてください。
- 本機の音声入力とプラズマテレビの映像入力の連動設定は「プラズマテレビの入力連動設定 ～PDP In (SR+)～」(→133ページ)で設定します。
- HDMIコントロール機能がONのときはプラズマテレビとの連動操作を行うことはできません。「HDMIコントロール設定」を[OFF]にしてください(→129ページ)。

1 リモコン操作切換スイッチをAVアンプにする。

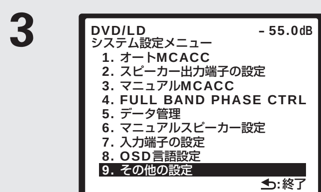
リモコンがAVアンプ操作モードになります。
システムセットアップ画面を表示するためには、テレビの電源を入れて入力を切り換えてください。

2 設定ボタンを押す。

システム設定メニューが表示されます。

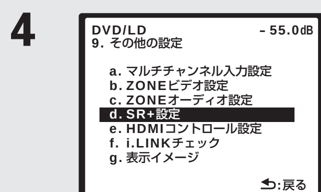
3 [9. その他の設定]を選んで決定する。

3



4 [SR+設定] を選んで決定する。

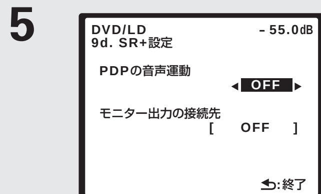
4



5 PDPの音声連動について、音声連動を選択する。

ON：連動モードを実行するとプラズマテレビの音量を消音します。
OFF：音声連動しません。

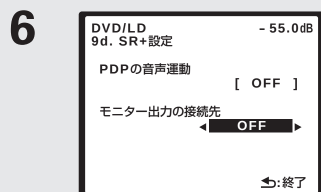
5



6 モニター出力の接続先について、本機のMONITOR OUT出力からプラズマテレビのどの入力へ接続したのかを選択する。

「Input-1」～「Input-9」(「Input-」の入力数はプラズマテレビによって異なります)、「OFF」から選びます。システムセットアップ時にここで設定した入力にプラズマテレビの入力が切り換わります。
工場出荷時は「OFF」に設定されています。

6



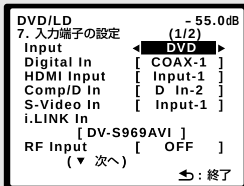
7 戻るボタンを押す。

連動モードの設定を終了します。
システム設定を終了するには、設定を押します。

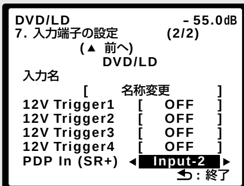
プラズマテレビの入力連動設定 ～PDP In (SR+)～

本機の音声とプラズマテレビの映像の入力を連動させるための設定です。ソース機器の映像出力を直接プラズマテレビの映像入力に接続した場合、本機の入力切り換えと連動してプラズマテレビの映像入力も自動で切り換わります。プラズマテレビに内蔵されているテレビチューナーの音声出力を本機に接続したときにも利用できます。例としてDVDの音声を本機のDVD/LDに、映像をプラズマテレビのビデオ入力2に接続した場合を説明します。

2



4



ここから読む場合は132ページの手順1～2を行ってから以下の手順へお進みください。

1 [7. 入力端子の設定]を選んで決定する。

2 PDPの映像入力に合わせたい本機の音声入力を選ぶ。

例)「DVD 」を選びます。

3 (▼ 次へ)に従って次のページを表示させる。

⇩ボタンを押して(2/2)ページを表示させます。

4 「PDP In (SR+)」で、本機の音声入力とプラズマテレビの映像入力の連動を設定する。

例)「Input-2 」を選びます。
プラズマテレビ(PDP)のBSデジタル放送を選ぶときは、本機の入力をTVに切り換えてからPDPの入力を切り換えてください。

5 戻るボタンを押す。

プラズマテレビの入力連動設定を終了します。
システム設定を終了するには、設定 を押します。

連動モードを実行する

本機とプラズマディスプレイがSR+ケーブルで接続されていることを確認してください。

2



3



- プラズマテレビの電源がOFFのとき、または正しく接続されていないときは連動モードは働きません。
- 入力連動モードを設定していない入力のときは、プラズマテレビの画面は切り換わりません。
- プラズマテレビと本機に表示される音量値は異なります。また、プラズマテレビの画面に表示される音量値は目安です。
- SR+ケーブルを接続した状態でプラズマテレビの電源が切れているときはリモコンで本機の操作ができません。
- 入力がiPodまたはHOME MEDIA GALLERYのときは「モニター出力の接続先」で設定された入力に連動します(→132ページ)。

1 プラズマテレビの電源を入れる。

2 

リモコンをAVアンプ操作モードにする。

3 

連動モードをONにする。

表示部にSR+ ONと表示されます。
連動モードを解除したいときは再度SR+ボタンを押します。

4 システム動作を確認する。

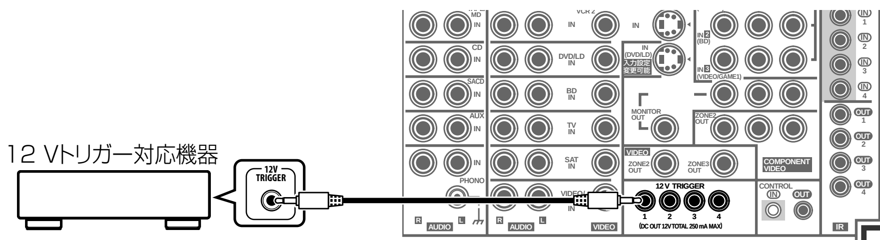
以下の操作を行うと本機とプラズマテレビが連動して動作します。

- 本機の入力を切り換えるとプラズマテレビの入力が切り換わります。
- 本機の音量を調整するとプラズマテレビの画面に音量値が5秒間表示されます。
- その他、本機の各種操作内容および設定状況を表示します。

12 Vトリガー対応機器との連動

連動機器を接続する

12 Vトリガー対応機器を本機に接続することで、システム動作を実施します。本機の入力ファンクションを選ぶだけで、「12V TRIGGER」端子に接続された機器へ制御信号が送られます。本機では最大4台まで12 Vトリガー対応機器との連動接続ができます。連動設定については「12 Vトリガー端子の連動設定」(→下記)をご覧ください。

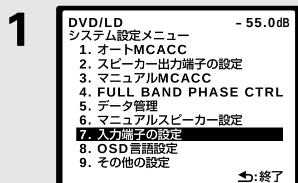


- 接続には市販のモノラルミニプラグコード(抵抗なし)をお使いください。
- 12V TRIGGER端子からは最大でDC OUT 12 V/50 mAが出力されます。

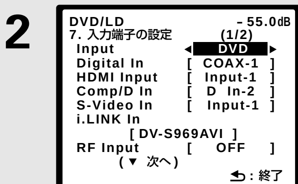
12 Vトリガー端子の連動設定

設定した入力ファンクションが選ばれたときに、電源などの操作を連動させるための制御信号が12 Vトリガー端子から出力されます。本機には4つの12 Vトリガー端子があり、それぞれについて設定することができます。

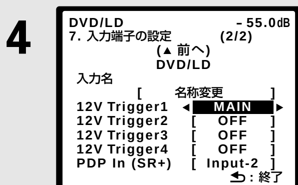
1



2



4



ここから読む場合は132ページの手順1~2を行ってから以下の手順へお進みください。

1 **[7.入力端子の設定]を選んで決定する。**

2 **連動設定したい入力ファンクションを選ぶ。**

3 **(▼ 次へ)に従って次のページを表示させる。**

⇩ボタンを押して(2/2)ページを表示させます。

4 **設定したい12V Triggerを選ぶ。**

12V Trigger1~12V Trigger4から選びます。

5 **[MAIN]、[ZONE 2]、[ZONE 3]、[OFF]を選択する。**

[MAIN]: メインゾーンで、手順2の入力ファンクションが選ばれたときに連動します。

[ZONE 2]:ZONE2で、手順2の入力ファンクションが選ばれたときに連動します。

[ZONE 3]:ZONE3で、手順2の入力ファンクションが選ばれたときに連動します。

[OFF]: 連動しません。

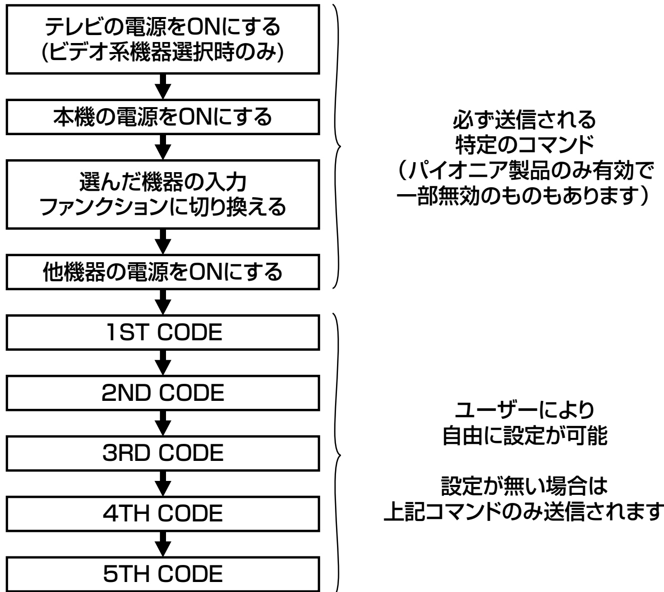
6 **戻るボタンを押す。**

[入力端子の設定]を終了します。

リモコンの他機器連動機能を使いこなす

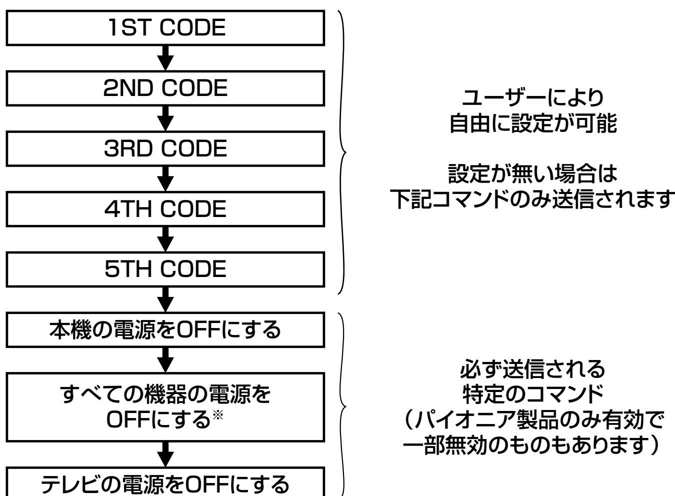
起動時連動操作　～マルチ・オペレーション～

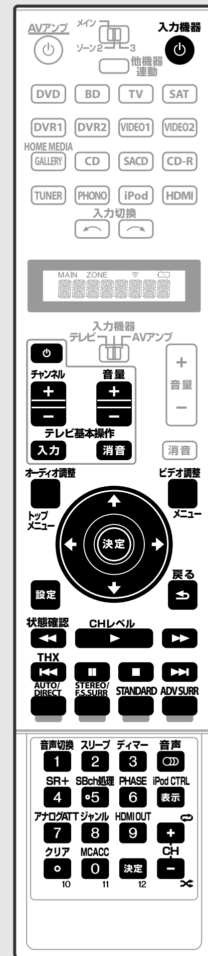
視聴を始めるための一連の動作を、2つのボタンを押すだけで実現させる機能です。あらかじめ決められているコマンドに加え、各他機器操作面に対し、5つまで自由に登録できる操作(コマンド)を設定できます。



終了時連動操作　～システム・オフ～

視聴が終了したときに、すべての機器の電源を一斉にオフにする動作を2つのボタンを押すだけで実現させる機能です。
5つまで自由に登録できる操作(コマンド)と、本機を含めたすべてのパイオニアの機器の電源オフのコマンドが送信されます。





上記イラストの強調表示されているボタンに登録可能です。

※ DVDレコーダーなど、一部対応していない機器もあります。
- 録画中に電源が切れてしまうことのないように、「必ず送信される特定のコマンド」にDVDレコーダーの電源をOFFにするコマンドは入っていません。

> 通常、⏻ボタンにはパワーのON/OFFコードが入っています。このコードでは、電源は前の状態の逆になるため、確実にON(またはOFF)させることはできませんので、自由コマンドとして設定することはお勧めしません。

連動操作を設定する

以下の設定を行う前に、この機能で使用したいリモコンコードは、必ずプリセットコード設定か学習モードを使用して、何かのボタン(キー)に割り当てておく必要があります。また、本機の操作を登録したいときは、リモコンの操作モード切り換えスイッチを「AVアンプ」に、他機器の操作を登録したいときは「入力機器」にしておきます。
ここでは例として、DVDボタンに「DVDを再生(または停止)する」という操作を記憶させます。

1　他機器連動ボタンを押しながら設定ボタンを押す。

「SETUP」が表示されます。設定を中止するには他機器連動ボタンを2秒間押し続けます。

2　起動時連動の設定は

「MULTI OP」を選んで決定し、手順3に進みます。

終了時連動の設定は

「SYS OFF」を選んで決定し、手順4に進みます。

3　起動動作を記憶させたい他機器操作ボタンを選んで決定する。

例)DVDボタンを選んで決定します。

4　「CODE EDT」を選んで決定する。

「CODE ERS」を選択すると現在登録しているコマンドを消去します。

5　登録したいCODEを選んで決定する。

例)「1ST CODE」を選んで決定します。
「PRES KEY」が点滅してコマンドの登録になります。

6　操作したい機器を選択する。

例)ＤＶＤボタンを選びます。

7　実行したい操作ボタンを選択する。

例)▶ 再生(または■ 停止)ボタンを選びます。
コマンド番号選択画面に戻ります。
(手順8へお進みください。)

8　さらにコマンドを登録したいときは、「＊＊＊CODE」を選んで決定したあとに、手順6〜7を繰り返す。

1つの他機器操作ボタンに対して最大5つまで登録することができます。

9　「EDIT EXIT」を選んで決定する。

SETUPメニューの表示画面に戻ります。別の他機器操作ボタンにも登録するときは、手順2〜8を繰り返してください。

10　「*Exit*」を選んで決定する。

連動操作の登録を終了します。

連動操作を実行する

1　マルチオペレーションモードにする。

「MULTI OP」が点滅します。
リモコンを受光部に向けてください。

2　起動時連動の実行は操作したい他機器を選択する。

プリセット動作と、このボタンに登録されているコマンドが実行されます。

入力機器



終了時連動の実行は入力機器の電源ボタン(システム切)を押す。

このボタンに登録したコマンドとパイオニア製品の電源オフコマンドが送信されます。

- 各コードの送信が終了するまで、リモコンを受光部に向けておいてください。
- 登録したコマンドによっては、送信終了まで3秒以上かかる場合もあります。
- 登録した機器の状態によっては、登録した動作と異なる場合があります。

スピーカーセッティングガイド

より本格的なサラウンドを目指すためには、正確にスピーカーを配置し、音量や音質の素性を均一にしてマルチchの音のピントを合わせることが重要です。
スピーカーの配置においては、特に**距離、角度、振り角**（どの方向を向いているか）が3大要素となります。それぞれの理想的な環境は次のとおりです。

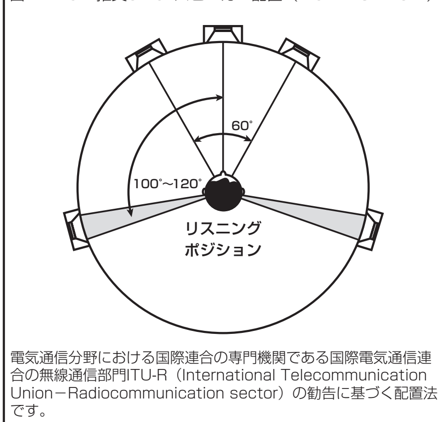
距離：すべてのスピーカーが等距離にあること

角度：図1のような角度に配置され、左右対称であること

振り角：左右対称であること

しかし、ほとんどの一般家庭ではこのような環境は望めません。本機の場合**「距離」**に関しては「オートMCACC」（→14ページ）によるスピーカー距離補正（電気的な補正）で1 cm精度にまで自動補正ができ、さらに「スピーカー位置の精密調整」（Precision Distance）（→93ページ）でより精密な調整が行えます。また、音量や音質についてもレベルやEQによる正確な音場補正、さらに「FULL BAND PHASE CTRL」（→101ページ）によるスピーカー位相特性の補正、という相乗効果で理想的な視聴環境にすることができます。
ここではITU-R推奨5.1ch配置＜図1＞を基準とし、それ以外の2要素**「角度」**と**「振り角」**を中心に考えます。

図1　ITU-R推奨5.1chスピーカー配置（ITU-R BS.775-1）



電気通信分野における国際連合の専門機関である国際電気通信連合の無線通信部門ITU-R（International Telecommunication Union－Radiocommunication sector）の勧告に基づく配置法です。

step 1 スピーカーの配置と距離調整

＜図1＞の角度になるようにメインの各スピーカーを配置します。ぐらつかないようにスピーカースタンドなどを使用し、周りの壁から最低10 cm以上離してください。リスニングポジション（調整の中心）から、左右のスピーカーが等角度になるように注意しながら配置します（ひもなどを使って配置場所の調整をすることをお勧めします）。また各スピーカーをリスニングポジションから等距離に配置するのが理想です。

ポイント

スピーカーを等距離（円上）に配置することができない場合は、「オートMCACC」によるスピーカー距離補正と、「スピーカー位置の精密調整」による調整で各スピーカーの距離を擬似的に等距離な状態にします。

step 2 スピーカーの高さ調整

各スピーカーの高さ（角度）を調整します。

フロントスピーカー➡中高域を再生するユニットが、ほぼ耳の高さになるように調整します。

センタースピーカー➡フロントスピーカーの高さにそろえられない場合は、仰角を調整してリスニングポジションに向けてください。

サラウンドスピーカー➡耳の高さを下回らないように設置します。

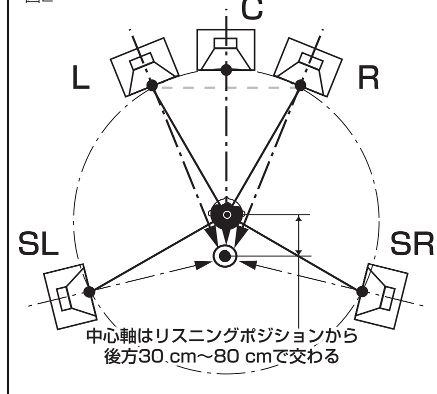
step 3 スピーカーの振り角（向き）調整

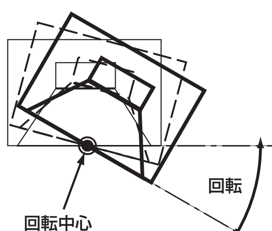
左右の振り角が違うと音色が左右で合わなくなるため、結果的に音場が正しく再現できません。しかし、すべてのスピーカーをリスニングポジションに向けてしまうと、窮屈な音場になります。当社のマルチチャンネル研究グループによる実験の結果、＜図2＞のように、リスニングポジションの後方30 cm～80 cm（サラウンドスピーカーとリスニングポジションの間）にすべてのスピーカーを向けると良好な定位感が得られました。
しかし、定位感は部屋の状況や使っているスピーカーによっても変化します。特に狭い環境（フロントスピーカーとリスニングポジションが近い）の場合、この方法では内振りになりすぎてしまいます。この設置例を参考にしながらいろいろ試してみることをお勧めします。

ポイント

スピーカーの向きを調整する際には、配置したスピーカーの中心位置が変わらないように、スピーカーのバッフル面の中央を中心に回転させてください。＜図3＞

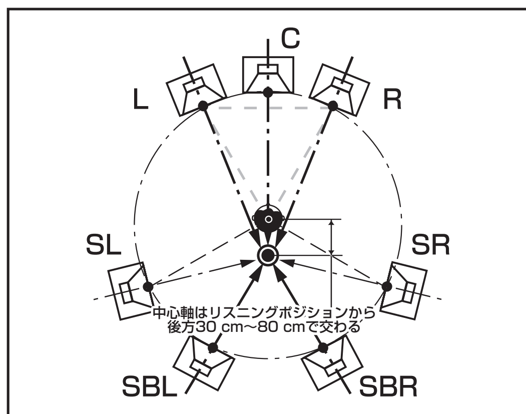
図2



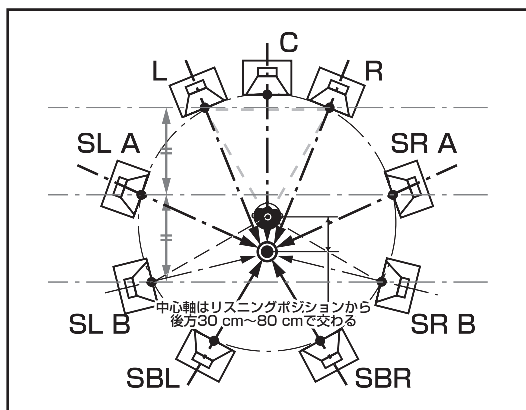


※ITU-R（図1）を参考にした場合の、5.1 ch以上の推奨スピーカー配置例

• 7.1 ch(または7.2 ch)の場合



• 9.1 ch(または9.2 ch)の場合



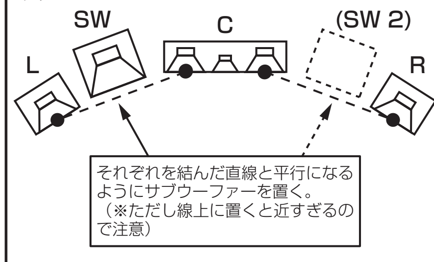
step4 サブウーファーの設置、調整

サブウーファーはセンターとフロントスピーカーの間に配置すると、音楽ソースでも自然に再生できます（サブウーファーが1本の場合は、左右どちらの間に設置しても問題ありません）。サブウーファーから出力される超低域には指向性がないため、高さの調整は必要ありません。通常は床置きしますが、他のスピーカーの低音出力との打ち消し合いが起こらないような場所に配置してください。また、壁の近くに設置すると建物との共振により低音が極端に増強される場合がありますのでご注意ください。

壁の近くに設置しなければならない場合は、壁面と平行にならないよう、角度をつけて設置してください。角度をつけることで共振などはある程度は防げますが、部屋の形状などによっては定在波が発生する場合があります。ただし、その場合でも「オートMCACC」の定在波制御機能（→86ページ）によって、定在波が音質へ与える悪影響を回避することができます。

ポイント

サブウーファーは、<図4>のようにセンターとフロントスピーカーのウーファー部（中低域用ユニット）を結ぶ直線と、サブウーファーの前面を平行に合わせるように設置すると、より自然で力強い低音が得られます。



step5 オートMCACC（自動音場補正）による初期設定

ここまで調整したうえで「オートMCACC」および「スピーカー位置の微調整（Precision Distance）」を行うと、より効果的です。

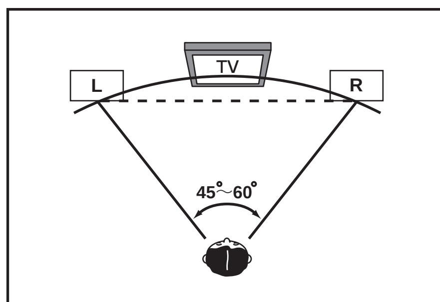
ポイント

サブウーファーまでの距離は、メジャーなどによる実測に比べてやや遠めに設定されることがありますが、その場合は電気的な遅延も含めた補正となっているので問題ありません。

スピーカーとモニターとの位置関係

フロントスピーカーとモニターの位置

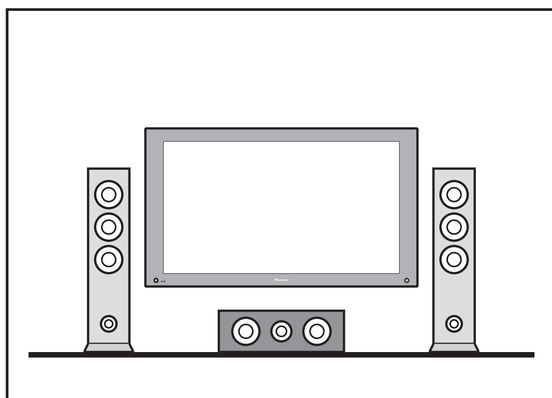
フロントスピーカーはなるべくモニターから等距離になるようにします。



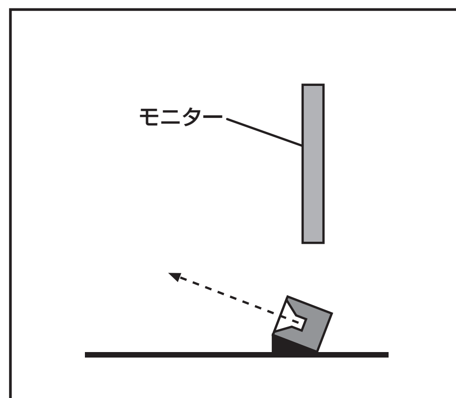
センタースピーカーとモニターの位置

センタースピーカーからは主にセリフなどが出力されるため、なるべく画面に近い方が全体が自然に聞こえます。
ただし、ブラウン管式テレビの場合は、色ズレ防止のための防磁型スピーカーを使用してください。
また、センタースピーカーを床に置いて設置する際は、仰角を調整してリスニングポジションに向けてください。

床置き設置



（横から見た図）



※センタースピーカーが防磁型でない場合は、テレビから離して設置してください。
※センタースピーカーをモニターの上に設置する場合は、やや下向きにしてリスニングポジションへ向けてください。

デジタル音声フォーマットについて

DVDソフトのパッケージのほとんどに以下のような表示がされています。
1枚のディスクに複数の音声が収録されている場合が多く、どの音声を聴くか選択することができます。



1. 英　語（5.1 ch サラウンド）
2. 日本語（ドルビーサラウンド）
3. 英　語（DTS 5.1 ch サラウンド）



収録音声数　録音方式　音声記録方式

ドルビーデジタルはDVDの標準音声フォーマットであるため、単に「5.1 chサラウンド」と記載されている場合は、「ドルビーデジタル(5.1 ch)」であることを示します。

デジタル音声の記録方式について

デジタル音声のフォーマットは、下記の「デジタル記録方式」と「収録チャンネル」の組み合わせにより細分化されています。

デジタル記録方式

非圧縮デジタル方式
PCM(Pulse Code Modulation)方式が一般的で、CDやDVDの2 chトラックなどに用いられています。サンプリング周波数やビット数の数字が大きいほど高音質となり、通常のCDは44 kHz/16 bitですが、DVD は48 kHz/20 bitや96 kHz/24 bitなどで記録されています。DVDオーディオは、この高音質を保ったままマルチch収録が可能で、192 kHzの2 ch信号も収録できます。SACDも非圧縮マルチch記録ですが、PCMとは違う高速⊿Σ変調1ビット方式を採用しています。DVDオーディオやSACDのデジタル伝送にはHDMI接続が必要となります。

圧縮デジタル方式
ドルビーデジタルやDTS、MPEG-2 AAC などはすべて圧縮デジタル方式です。各フォーマットとも聴感心理学などを用いて、音質変化を感じさせない独自の圧縮方式を開発し、従来のデジタルケーブル(同軸または光ファイバー)でのマルチch伝送を可能にしています。

収録チャンネル

2 ch ステレオ信号
左右の２つのチャンネルに別々の音が記録されている信号で、通常の音楽用CD などはほとんどがこのタイプです。

2 ch サラウンド信号(ドルビーサラウンド信号)
フロント左/ 右、センター、サラウンドの4 ch信号を所定の演算で2 chに変換してある信号です。そのまま2 chで再生しても違和感なく楽しめますが、所望のデコード処理(ドルビープロロジックサラウンド再生など)により、製作者の意図どおりの再生となります。

マルチch サラウンド信号
3 ch以上の独立した信号が収録されたものをマルチch信号と呼びますが、5.1 ch収録が最も一般的です。フロント左/右、センター、サラウンド左/右の5 chと、LFEと呼ばれる超低音域専用の0.1 chに独立した信号が記録されています。近年では6.1 ch信号も登場し、上記の5.1 chに加えサラウンドバックch信号が収録されています。

デジタル音声の再生方式について

マルチチャンネルサラウンド再生

3本以上のスピーカー(サブウーファーを除く)で多チャンネル再生することを指します。音場の立体感や移動感が増し、迫力ある臨場感が期待できます。音源となるソフトがマルチch収録ならばソフトに忠実に再生し、ソフトが2　chの場合は、マトリックスデコード処理(ドルビープロロジックⅡxやNeo:6技術など)を施し、マルチch再生させることが可能です。

(2 ch)ステレオ再生

2 ch信号をそのまま再生する場合と、マルチchソースを2 chにダウンミックスして再生する場合の双方を意味します。設定やソースにより、サブウーファーから音が出る2.1 ch再生も「ステレオ再生」と呼ぶことがあります。

デコードとは
デジタル信号処理回路などにより、圧縮記録されたデジタル信号を、もとの信号に変換させる技術です。また、2　chの音源をマルチch化させる演算技術をマトリックス・デコードと言い、5.1 ch信号を6.1 chに伸長させる技術もデコードと呼ぶことがあります。

ドルビー

ドルビーデジタル

ドルビーデジタルは、ドルビーのマルチチャンネル音声システムのディスクリート・デジタルサラウンド方式の名称です。映画業界の主流であり、DVDビデオの標準音声方式としても採用されるなど、デジタル時代の標準フォーマットとなっています。独立した各チャンネルに記録された自然で高度な立体音像と、低域専用chにより、臨場感あふれるマルチchサラウンドを再現します。人間の聴覚特性を応用した圧縮技術により聴覚上の音質低下を招きません。この信号を伝送するには、デジタル接続が必要です。その他にも以下のような機能を持つ柔軟性の高いフォーマットです。

1） モノ、ステレオ、プロロジック対応の構成および5.1 ch音声の再生に最適なダウンミキシング
2） 広範囲のビットレートにわたる動作
3） ダイナミックレンジ情報を伝達する機能
4） ダイアログノーマライゼーション機能
ダイアログノーマライゼーション機能とは平均的音量レベルが異なるさまざまなソフトでも、一定の音量で再生されるように自動調整する機能です。
「Dial. Norm.」と表現されることもあります。

ドルビーデジタルサラウンドEX

ドルビーデジタルサラウンドEXは、映画「スターウォーズ·エピソード1」の製作に向けて、ドルビーラボラトリーズとルーカスフィルム社で共同開発された、6.1 ch再生可能な新しい音響フォーマットです。新たに加えられたサラウンドバックchにより空間表現力、定位感が高められ、中央から離れた客席からでも360度の回転や頭上を通過するような移動音効果·音像をより生々しく体感することが可能となりました。フィルム上ではサウンドトラックのサラウンドL / R ch にエンコードされるため、既存のドルビーデジタル（5.1 ch）環境での再生互換性があります。この技術により製作された映画のリストはドルビーラボラトリーズのウェブサイトでご覧になれます。
http://www.dolby.com/

プロロジックIIx製品は、プロロジックIIxの持つさまざまな機能を、選択して搭載することが可能です。プロロジックIIx搭載、とキャッチフレーズされた商品でも、必ずしもまったく同じ機能を持っているとは限らないことにご注意ください。

DOLBY TRUEHD

ドルビープロロジック
ドルビープロロジックIIx

ドルビープロロジックIIx は、ドルビープロロジック、ドルビープロロジックII、ドルビーデジタルEX をさらに改良し、ステレオ音声や5.1 ch音声を、すべて最大 7.1 ch まで拡張できるマトリックスデコード技術です。
ステレオ音声のマルチch化方式として、ドルビープロロジックは4 chに、ドルビープロロジックIIは5 ch化していましたが、それらをさらに進化させ、メインの7 ch を創り出します。
また5.1 chソースに対し、ドルビーデジタルEXはモノラルのサラウンドバックc h を生成していましたが、これをステレオ化することで最大7.1 ch 再生が可能になりました。今まで以上に自然でシームレスな移動感、滑らかで包み込むような、音楽および映画サウンドを体験できます。
本機には複数のモードを搭載しているため、お好みに応じて切り換えることが可能です。

■2 chソース用
MOVIE/MUSIC/PRO LOGIC

■5.1 chソース用
MOVIE/MUSIC/DIGITAL SURROUND EX

MOVIE（PRO LOGIC IIx MOVIE）
7.1 ch化します。映画再生に適したモードで、特にドルビーサラウンド・エンコード作品に効果的です。ドルビーデジタルEXに迫るセパレーションや移動感などが得られます。

MUSIC（PRO LOGIC IIx MUSIC）
7.1 ch化します。音楽再生に適したモードで、通常のステレオ録音されたソース（CDなど）を再生するときにも効果的です。サラウンドc h は定位よりも広がり感を重視しています。

PROLOGIC（PRO LOGIC）
従来のドルビープロロジックと同等の再生モードです。ソースのクオリティを問わず、幅広くお使いいただけるモードです。

SURROUND EX
同ページ内参照
サラウンドバックchを使用しない場合は、自動的に従来のプロロジックIIモードになります。

■2 chソースに対するプロロジックとプロロジックIIxの違い

	プロロジック	プロロジックII	プロロジックIIx
効果的なソース	ドルビーサラウンドエンコード処理されたステレオ音声	すべてのステレオ音声	すべてのステレオ音声/Dolby Digital 5.1 chソース
デコードチャンネル数	4.1 ch（サラウンドモノラル）	5.1 ch（サラウンドステレオ）	7.1 ch（サラウンド、サラウンドバック、ステレオ）
周波数特性	サラウンド 7 kHz帯域制限	全チャンネル フルバンド	全チャンネル フルバンド

ドルビーデジタルプラス

ドルビーデジタルプラスは、高精細映像放送番組やパッケージメディア向けに開発された次世代音声技術です。HD DVDの必須音声として、ブルーレイディスクのオプション音声として、それぞれのフォーマットに採用されたこの技術は、将来の放送の要求を満たす高い効率性ときたるべき高精細映像時代に求められる音声の可能性を実現するための機能と柔軟性を結合させたものです。
音声出力については、ディスクリートチャンネル出力によるマルチチャンネルサウンド出力を行い、従来を越える音質で最大7.1チャンネル*出力します。また、従来のドルビーデジタルデコーダーでは通常のドルビーデジタル信号として出力するため、完全互換性を持っています（この際、処理遅延や音質劣化はありません）。
最大6Ｍｂｐｓのビットレート性能で、ＨＤ　ＤＶＤでは3 Mbps、ブルーレイディスクでは1.7 Mbpsが最大規格となります。
ケーブル１本で高精細映像・音声のデジタル接続を可能にするHDMIでサポートされています。

* ドルビーデジタルプラスは、８チャンネル以上のチャンネル数をサポートしていますが、現在HD DVD およびブルーレイディスクそれぞれの規格では、最大音声チャンネル数が8チャンネルに制限されています。

ドルビーTrueHD

ドルビーTrueHDは、次世代高精細光ディスク向けに開発されたロスレス符号化技術です。HD DVDの必須音声として、ブルーレイディスクのオプション音声として、それぞれのフォーマットに採用されたこの技術は、１ビット精度で復元可能な記録・再生を実現し、次世代高精細光ディスクの要である高精細画像を完全なものにします。高精細映像と組み合わせることで、ドルビーTrueHDは高精細映像と最高品位のサウンドで、かつてないホームシアター体験を実現します。
最大18 Mbpsのビットレートで、24 bit/96 kHz、最大8ｃｈ*の独立チャンネルを記録することが可能です。
また、ドルビーＴｒｕｅＨＤはダイアログノーマライゼーションやダイナミックレンジコントロールに対応しています。ダイアログノーマライゼーションは、再生中に他のドルビーデジタル、ドルビーTrueHDプログラムに移行する際も同一のボリュームレベルを維持することが可能で、ダイナミックレンジコントロールでは音量を下げても収録された音源の細部まで聞きとることが可能な(音源の細部を聞くために大音量にする必要がない)音声再生のカスタマイズです。
ケーブル１本で高精細映像・音声のデジタル接続を可能にするHDMIでサポートされています。

*ドルビーTrueHDは、8チャンネル以上のチャンネル数をサポートしていますが、現在HD DVD およびブルーレイディスクそれぞれの規格では、最大音声チャンネル数が8チャンネルに制限されています。

DTS



DTS

デジタルシアターシステムズ(Digital Theater Systems)の略で、低圧縮率と高転送レートがもたらす豊富な情報量により、高音質マルチチャンネルサラウンド再生を実現します。音楽用にも独自録音による DTS-CDがあります。

DTS 96/24

5.1 chすべてを96 kHz/24 bitの高音質で再生する最新のサラウンドフォーマットで、スタジオのマスター音源のクオリティを踏襲しています。DVDの限られた記録エリアで、高音質/高画質を両立させるために開発されました。
本機は、DTS96/24対応デコーダーを搭載しているので、既存のDTS対応のDVD プレーヤーと、DTS96/24に対応するデコーダー（AVアンプ等）をデジタル接続することで、再生することができます。（専用プレーヤーは必要ありません。）従来のDTSデコーダーでは通常のDTS信号として再生されるため、完全互換性を持っています。

DTS-ES

2000年11月に発表されたサラウンドフォーマットで、「DTS Extended Surround」の略称です。従来の5.1 chにサラウンドバック（ＳＢ）ｃｈを加えたもので、かつてない音像･定位感をもたらすことが可能になりました。「ＤＴＳ-ＥＳディスクリート6.1」と「DTS-ESマトリックス6.1」の2種類があり、どちらも従来のDTS5.1 chデコーダーとの下位互換性を有しています。

DTS Neo:6

すべての2 chソースを7.1 ch化するマトリックスデコード技術です。Cinemaモード/Musicモードがあります。

CINEMA（Neo6: CINEMA）
7.1 ch化します。映画再生に適したモードで、2 chでも映画館特有の移動感などをお楽しみいただけます。

MUSIC（Neo6: MUSIC）
7.1 ch化します。フロントからは原音をそのまま再生するため音質の変化が無く、音楽再生に適しています。また、センター/サラウンド/サラウンドバックch の音声が音場にナチュラルな広がり感を加えます。

DTS-HD Master Audio

DTS-HD Master Audio（DTS-HDマスターオーディオ）は、プロフェッショナルスタジオで作られるマスター音源を、その品質のままに伝送することが可能なフォーマットです。DTS-HD Master Audioが伝送する音声は可変データ転送レートで、Blu-ray discフォーマットにおいては毎秒最高24.5 Mbps、HD-DVDフォーマットにおいては18.0 Mbpsであり、スタンダードDVDよりも格段に高い転送レートを持っています。この高いデータ転送レートによって、7.1 chの音声すべてを96 kHz/24 bitの高音質で伝送することを可能にしています。

DTS-EXPRESS

DTS-EXPRESSは最大5.1 chまでのロービットレート技術です。DTS-EXPRESSが伝送する音声は固定データ転送方式で、24 kbps～256 kbpsまでをサポートしています。HD DVD discのSUB AUDIOとして、ブルーレイディスクのオプション音声として収録される他、放送コンテンツやメモリーオーディオコンテンツへの応用が想定されています。本機はPRIMARY AUDIOとして伝送されてきた場合にのみ再生が可能です。

MPEG-2 AAC



MPEG-2オーディオの標準方式のひとつで、BS デジタルや地上デジタル放送で採用されている音声符号化規格です。高圧縮率ながら高音質を確保できる点が特長で、番組内容によりマルチチャンネル設定が可能なフォーマットです。

■米国におけるパテントナンバー

08/937,950	5 297 236	5,481,614	5,490,170
5848391	4,914,701	5,592,584	5,264,846
5,291,557	5,235,671	5,781,888	5,268,685
5,451,954	07/640,550	08/039,478	5,375,189
5 400 433	5,579,430	08/211,547	5,581,654
5,222,189	08/678,666	5,703,999	05-183,988
5,357,594	98/03037	08/557,046	5,548,574
5 752 225	97/02875	08/894,844	08/506,729
5,394,473	97/02874	5,299,238	08/576,495
5,583,962	98/03036	5,299,239	5,717,821
5,274,740	5,227,788	5,299,240	08/392,756
5,633,981	5,285,498	5,197,087	

Windows Media Audio 9 Professional

Windows Media Audio 9 Professional(WMA9 Pro)は、マイクロソフト社が 従来のWindows Media Audio(WMA)のテクノロジーをさらに進化させて開発したディスクリート・デジタルサラウンドフォーマットです。WMAは圧縮効率の高さを特徴とし、インターネット配信によるストリーミング再生やダウンロード再生などWindows PCでの音楽再生に用いられる圧縮音声の標準フォーマットとなっています。
そしてこのWindows Media 9シリーズでは、WMAの特徴を継承しながら、さらにマルチチャンネル対応に拡張しました。WMA9 Proコーデックは、96 kHz/24 bitの解像度によるクリアな音質・5.1 ch/7.1 ch完全ディスクリート処理による高い臨場感を確保しながら、低ビットレートでデジタル サラウンド サウンドを実現します。またその高い圧縮効率により、CD/DVDなどのデジタルメディアだけでなく、高速ブロードバンド通信によるストリーミング配信にも対応しています。

Windows Media、Windowsロゴは、米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標または商標です。

本機はWMA9 Proデコーダーを内蔵していますので、WMA9 Pro対応プレーヤー*と同軸または光ファイバーケーブルでデジタル接続することによって、WMA9 Proでエンコードされた音声をデコードして再生することができます。
* WMA9 Pro対応プレーヤーとしては、PC、DVDプレーヤー、セットトップボックス等が考えられます。ただし、それらの機器の同軸または光デジタル出力端子からWMA9 Pro音声を出力できる場合のみ、本機でデコードして再生することができます。



	WMA	WMA9 Pro
最大ディスクリートチャンネル数	2 ch	5.1 ch/7.1ch
最大量子化ビット数	16 bit	24 bit
最大サンプリング周波数	48 kHz	96 kHz
対応ビットレート	128 kbps~192 kbps	128 kbps~768 kbps
S/PDIF 伝送	非圧縮	圧縮

THX



THXは、THX社によって確立された独自の規格と技術の集大成です。「映画館でもホームシアターでも、映画のサウンドトラックは映画監督の意図どおり、できるかぎり忠実に再生して欲しい」というジョージ・ルーカス監督の情熱によって誕生しました。THXはホームシアターの音場最適化に関する数々の特許技術を開発しています。

THX Ultra2

ホームシアター機器がTHX Ultra2認証されるには、下記の技術を備え、かつ品質と動作に関する一連の厳しい試験に合格しなくてはなりません。こうして製品搭載が許諾されるTHX Ultra2のロゴは、ご購入いただいたホームシアター製品が長年にわたって素晴らしい性能を維持する保証となります。THX Ultra2規格は、プリアンプ・パワーアンプの性能、操作性、デジタル・アナログの両分野にわたる何百もの性能要求を含め、製品の全体像を網羅しています。

THX Cinema

映画のサウンドトラックは、ダビングステージ(ミキシング専用大型映画館)で制作されます。DVD などに収録する音声もそのサウンドトラックのままで、ホームシアター向けの変更は加えません。家庭と映画館との空間的な違いによる音色の差を補正し、映画館の音場を正確に再現します。

THX Surround EX

「THX Surround EX - Dolby Digital Surround EX」はドルビーラボラトリーズとルーカスフィルム社のTHX部門との共同開発によるものです。リスナーの後方に位置するよう加えられたサラウンドバックchは、ミキシング段階で　Dolby Digital Surround EX 技術によって符号化され、映画館での上映時に復元されます。従来の5.1 chスピーカー構成では表現しきれなかった後方部の繊細な描写力・空間の奥行きや広がり感・音像定位などが得られるようになりました。一般家庭でこの新技術を忠実に再生することができるのは、THX Surround EX のロゴが搭載された製品だけです。この製品は通常の5.1　chソースでも「THX Surround EX 」モードでお楽しみいただけます。この場合のサラウンドバックchの音声は、所定の演算処理によって生成されますので、お好みに応じてご使用ください。

Re-Equalization

映画のサウンドトラックは、映画館での上映用に製作されているため、それを家庭用のオーディオ機器で再生すると、過度に明るく耳障りに聞こえます。Re-Equalizationは小型のホームシアターでも正確な音色バランスを再現します。

Timbre Matching

人間の耳は、音の到達方向によって音色の感じ方が変わります。映画館では数多くのサラウンドスピーカーが聴衆を囲むように配置されていますが、ホームシアターではリスナー両側の2本のみです。 この配置の違いから起こる音色の差を補正し、かつ前方から到達する音の性質に合わせることによって、フロント-サラウンド間の音のつながりをスムーズにします。

Adaptive Decorrelation

映画館ではサラウンドスピーカーが多数なのに対し、ホームシアターは通常2本です。そのため、広がり感やサラウンド感に欠けてしまったり、近接したスピーカーに音場が偏ってしまうことがあります。Adaptive Decorrelationは サラウンド信号間の時間と位相の関係を微妙に変化させせることにより、2本のスピーカーでもリスニングエリアを拡大して、映画館と同様の効果をもたらします。

Advanced Speaker Array(ASA)

ASAは最良のサラウンド再生を行うためのTHX技術のひとつです。サラウンドバックスピーカー2本を近接配置し、THXオーディオ設定で2本の間の距離が最も近くなるように設定した場合に最高の音場が得られます。この技術はTHX Ultra2 Cinema、THX Ultra2 MusicおよびTHX Ultra2 Gamesに用いられています。

Boundary Gain Compensation

ホームシアターでは、壁面の影響で空間利得が生じ、低減の周波数帯が自然と持ち上がってしまう場合がありますが、この技術により、超低域再生能力のあるサブウーファーなどを使用していても、空間利得を補正し、聴感レベルをフラットにすることが可能です。

THX Music

マルチチャンネルのDVD音楽ソフトの中には、映画のサウンドトラックとはまったく違ったミキシングを行っているものがあり、そのようなソフトに適したモードです。

THX Games

ステレオやマルチチャンネルとして収録されたゲームソフトの再生に適しています。

THX Loudness Plus

この技術はTHX Ultra2 Plus™とTHX Select2 Plus™の認証を受けた製品の特徴となる新しい音量調節技術で、どの音量レベルでも豊かで繊細なホームシアターサラウンド音場を創造します。
リファレンスレベル(本機の0 dBポジション)以下での再生では音質や空間表現が変化することがありますが、各チャンネルの音量や周波数特性を最適化することによりこの変化を補正し、音量レベルにかかわらず、サウンドトラックの持つ真のインパクトを体験できるようになります。THXのリスニングモードを選択しているときは、それぞれのコンテンツタイプに応じて自動でこの技術が適用されます。

THX Ultra2 Cinema

このモードはDolby DigitalやDTSで収録された映画ソースを、8本(7.1 ch)すべてのスピーカーを使って再生するのに適しています。
このモードでのASA処理は、サラウンドとサラウンドバックスピーカーを調和させ、包囲感と定位感を最適化します。(＊注)参照。

THX Ultra2 Music

THX Ultra2 Musicモードは、Dolby DigitalやDTSで収録されたソースだけでなく、DVD-Audioなどすべてのマルチチャンネル収録の音楽ソースに適しています。ASA処理によって落ち着きのある広がり感が得られます。

THX Ultra2 Games

このモードはゲーム音声の再生に適しています。マルチチャンネル収録でもステレオ収録でも、ASAの音場定位技術により360°取り囲むような音響空間を創り出します。どのポイントでも滑らかなサラウンド音場が得られることも特徴です。

＊注
本機は「6.1再生検出信号」(DTS - ES と Dolby Digital Surround EX)を自動検出しますが、それらの技術を用いて上映された映画でも、DVD化の際にこの検出信号を収録していないものがあります。この場合は手動で最適なモードに変更してください。Surround EX技術により製作された映画のリストは各ウェブサイトでご覧になれます。

Neural-THX Surround

Neural-THX® Surroundはステレオ素材からマルチチャンネルサラウンドを作り出します。楽器、音声、背景音などの詳細部分をきめ細かく再生し、豊かでディスクリート感に優れたサラウンドサウンドを作り出します。

本製品は、Neural Audio Corporation と THX社 からの実施権に基づき製造されています。パイオニア株式会社はユーザーに対し、Neural Audio Corporation と THX社の所有する技術、商標およびアメリカと諸外国の特許・出願中特許に基づき、本製品を使用する非独占的かつ譲渡不能な限定的権利を許諾します。
Neural Surround は Neural Audio Corporation の商標です。THX は THX社の商標です。それらはいくつかの所轄権に登録されている場合があります。無断複写・複製・転載を禁じます。

伝送方式について

i.LINK



i.LINKとは、米国電子電気技術協会（IEEE）によって標準化された高速双方向シリアル転送方式IEEE1394の呼称で、国際標準規格です。デジタル音声などのデータ送受信や、接続した相手機器を操作できるなどの自由度と、複数機器に対する接続の自由度があります。本機のi.LINKは AUDIO（A&Mプロトコル）に対応しているため、DVDオーディオやSACDなどの高品位デジタル・マルチチャンネル音声もi.LINKケーブル1本だけで伝送が可能です。また本機では、i.LINK接続したSACDやCDの再生を行うとき、デジタル音声をジッターレスで伝送することができます。

PQLS（レートコントロール）

PQLS（Precision Quartz Lock System）とは、本機の高精度な水晶発振器を使用してプレーヤーからのデータ伝送レートをコントロールすることで、ジッターのない状態でデジタル/アナログ変換を行う、高音質デジタルオーディオ伝送技術です。この技術を動作させるには、本機とPQLSまたは同様のレートコントロール機能に対応したプレーヤーとがi.LINK接続されている必要があります。

著作権保護システム

i.LINK接続を通してDVDオーディオ、SACD、DVD（コピー自由なディスクは除く）の音声を再生するには、プレーヤーとアンプの双方がDTCP（Digital Transmission Content Protection）と呼ばれる著作権保護システムに対応している必要があります。DTCPはデータの暗号化と相手機器の認証からなるコピープロテクション技術です。本機はDTCPに対応しています。お手持ちのプレーヤーについてはプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

この機器のi.LINKインターフェースは、以下の規格に基づいて設計されています。
1) IEEE Std 1394a-2000, Standard for a High Performance Serial Bus
2) Audio and Music Data Transmission Protocol 2.0
この規格のAM824 sequence adaptation layersの中の、IEC60958 bitstream、DVD-Audio、SACDに対応しています。

i.LINKネットワーク

下図のようにして複数のi.LINK機器を接続することができます。

■ デイジー・チェーン(数珠つなぎ)型では、最大17台まで接続できます。(図1)

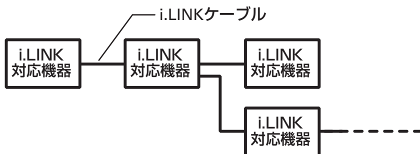
■ ツリー(分岐)型では、最大34台まで接続できます。(図2)
i.LINK端子が3個以上ある機器の場合に使用できます。

■ ループ(輪状)型接続は禁止されています。(図3)・(図4)
i.LINK伝送は接続したすべての機器にデジタル信号が流れるため、データ発振が起きてしまいます。

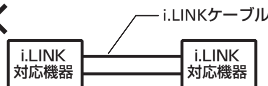
(図1)



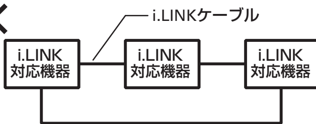
(図2)



(図3) ×



(図4) ×



プロトコルについて

i.LINKの伝送フォーマットには、本機のような「i.LINK AUDIO(A&Mプロトコル)」、BSデジタルのような「MPEG-2 TS」、DVDレコーダーやデジタルビデオのような「DV」といった種類があります。i.LINK AUDIO以外の機器やパソコン周辺機器を本機と接続したときには、正常にデータ転送ができません。また、誤動作する場合もあります。

伝送速度について

• i.LINK対応機器には、その機器が対応している最大データ転送速度がi.LINK端子の周辺に表記されています。
i.LINKの最大データ転送速度は、約100 Mbps/200 Mbps/400 Mbps*が定義されており、それぞれS100/S200/S400と表記されます。本機のi.LINK最大データ転送速度は、400 Mbps(S400)です。数珠つなぎ接続の途中に速度の遅い機器をつないだ場合、隣や、機器の仕様により、実際の転送速度が400 Mbpsより遅くなることがあります。できるだけ、最大データ転送速度が同じ機器どうしを並べて接続してください。
* Mbps(メガビーピーエス)とは、「Mega bits per second」の略で、1秒間に通信できるデータの容量を示しています。400 Mbpsでは、1秒間に400メガビットのデータを転送します。

- 本機の電源がオンのときは、新しい機器の接続、他機器のi.LINKケーブルの接続変更、他機器の電源オン/オフは行わないでください。
- i.LINK対応機器の中には、電源がスタンバイ状態やオフになっていると、データを中継できない機器があります。接続するi.LINK対応機器の取扱説明書もご覧ください。本機はスタンバイ状態のとき、i.LINKのデータを中継できません。
- i.LINK機能は、すべてのi.LINK対応機器間での接続動作を保証するものではありません。i.LINK対応機器間でデータやコントロール信号がやりとりできるかどうかは、それぞれの機器の機能によって異なります。

i.LINKとi.LINKロゴは、ソニー株式会社の商標です。

HDMI

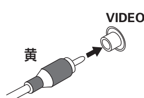
HDMI(High Definition Multimedia Interface)とは1本のケーブルで映像と音声を受信するデジタル伝送規格です。ディスプレイ接続技術のDVI(Digital Visual Interface)を家庭向けのオーディオ機器用にアレンジしたものであり、高い帯域幅のデジタル内容保護(HDCP)を実現した次世代テレビ向けのインターフェース規格です。

HDMI™
HIGH-DEFINITION MULTIMEDIA INTERFACE

接続コードについて

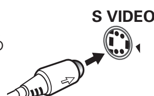
■ビデオコード

一般的な映像用コードで、コンポジットフォーマットの映像信号を伝送します。



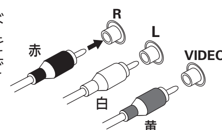
■Sビデオケーブル

映像信号(Y)と色信号(C)を分離して接続することができ、コンポジットよりも高品位な映像品質を楽しめます。



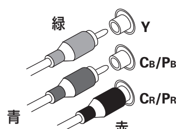
■AVコード

オーディオコードとビデオコードを一体化したものです。



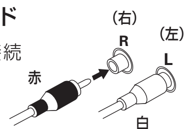
■コンポーネント映像ケーブル

映像信号のY、C_B/P_B、C_R/P_R の3つの信号からなり、Sビデオケーブルよりも高品位な映像品質を楽しめます(ビデオコード3本での接続も可能です)。D端子変換ケーブルも市販されています。

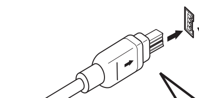


■オーディオコード

オーディオ機器の接続に使用します。



■i.LINKケーブル



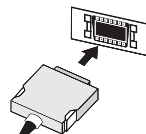
ケーブルに表示されている⬆と端子の▲を合わせて挿入してください。斜めから無理に挿入すると端子が破損する恐れがあります。

本機は最大転送速度が400 Mbpsのため、S400対応で長さ3.5 m以下の4ピンi.LINKケーブルを使用してください。

※推奨ケーブル：オーディオテクニカ製
AT-DVC44/1.0(長さ1.0 m)
AT-DVC44/1.5(長さ1.5 m)
AT-DVC44/2.0(長さ2.0 m)
AT-DVC44/3.0(長さ3.0 m)

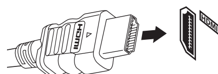
■D端子ケーブル

映像信号と映像コントロール信号を、1つのコネクタで接続できるケーブルです。コンポーネント映像ケーブルと同等の映像品質を楽しめます。



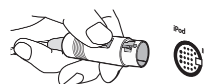
■HDMIケーブル

デジタル信号でテレビや衛星チューナーと接続することができます。1本で映像信号と音声信号の両方を伝送します。デジタル信号をアナログ変換しないため、鮮明で高品位な映像品質を楽しめます。



■Audio control Cable (for iPod)

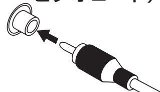
本機とiPodを接続することができるケーブルです。



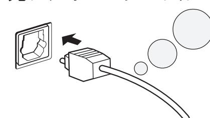
■同軸ケーブル/光ファイバーケーブル

デジタル機器の接続に使用します。

同軸ケーブル
(またはオーディオ/ビデオコード)



光ファイバーケーブル



- 接続の際は端子の向きを合わせてください。誤った向きでむりやり挿入すると、端子が変形し、ケーブルを抜いてもシャッターが閉まらなくなることがあります。
- 長さは3 m以下のものを使用してください。
- プラグにホコリが付着したときは、柔らかい布で拭いてから接続してください。

リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧

この表は出力する最大の出力チャンネル数を示したもので、厳密なデコードch数とは異なります。詳しくは「デジタル音声フォーマットについて」(→140ページ)をご覧ください。

- 表中の灰色で表示された部分は、本機により最適なモードが自動選択されます。ユーザーによる選択はできません。
- 入力信号によっては、サラウンドバック信号を生成できないものがあります。

サラウンドバックスピーカーを接続しているとき

	ch	入力信号 信号名称	入力信号 インジケーター例	THX	STANDARD	AUTO SURROUND	DIRECT	PURE DIRECT
SBch処理モード ON	マルチch信号	DOLBY DIGITAL PLUS DOLBY TrueHD DTS-HD DTS-HD Master Audio WMA9 Pro (44.1 kHz/48 kHz) PCM (6.1 ch信号/7.1 ch信号)	L C R / SL S SR / SBL SB SBR / LFE *3	THX CINEMA THX MUSIC THX GAMES	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生	AUTO SURROUND と同様	AUTO SURROUND と同様
		DOLBY DIGITAL PLUS DOLBY TrueHD (176.4 kHz/192 kHzを除く) (5.1 ch信号)	L C R / SL S SR / SBL SB SBR / LFE	THX SURROUND EX DD PLIIx Movie +THX *1 THX ULTRA2 CINEMA *1 THX ULTRA2 MUSIC *1 THX ULTRA2 GAMES *1 DD PLIIx Music +THX DD EX +THX GAMES *4	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 DD PLIIx Music	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1		
		DOLBY TrueHD (176.4 kHz/192 kHz) (5.1 ch信号)		THX CINEMA *4 THX ULTRA2 CINEMA *1 THX ULTRA2 MUSIC *1 THX ULTRA2 GAMES *1 THX MUSIC *4 THX GAMES *4		ストレートデコード再生		
		DTS-EXPRESS DTS-HD Master Audio WMA9 Pro (88.2 kHz/96 kHz) (5.1 ch信号)			ストレートデコード再生	ストレートデコード再生		
		DOLBY DIGITAL EX (6.1 ch再生検出信号付)	L C R / SL S SR / SBL SB SBR / LFE	THX SURROUND EX DD PLIIx Movie +THX *1 THX ULTRA2 CINEMA *1 THX ULTRA2 MUSIC *1 THX ULTRA2 GAMES *1 DD PLIIx Music +THX DD EX +THX GAMES *4	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 DD PLIIx Music	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1		
		DTS ES Matrix DTS ES Discrete (6.1 ch再生検出信号付)		DTS ES Matrix + THX CINEMA DTS ES Discrete + THX CINEMA DTS + DD PLIIx Movie +THX *1 THX ULTRA2 CINEMA *1 THX ULTRA2 MUSIC *1 THX ULTRA2 GAMES *1 DTS ES Matrix + THX MUSIC *4 DTS ES Matrix + THX GAMES *4 DTS ES Discrete + THX MUSIC *4 DTS ES Discrete + THX GAMES *4	DTS ES Matrix DTS ES Discrete DTS + DD PLIIx Movie *1 DTS + DD PLIIx Music	DTS ES Matrix DTS ES Discrete		
		DTS DTS96/24 (5.1 ch信号等)	L C R / SL S SR / SBL SB SBR / LFE	DTS + Neo:6 + THX CINEMA DTS + DD PLIIx Movie +THX *1 THX ULTRA2 CINEMA *1 THX ULTRA2 MUSIC *1 THX ULTRA2 GAMES *1 DTS + Neo:6 + THX MUSIC *4 DTS + Neo:6 + THX GAMES *4 DD PLIIx Music +THX *1	DTS+Neo:6 DTS + DD PLIIx Movie *1 DTS + DD PLIIx Music	DTS+Neo:6	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生
		DOLBY DIGITAL MPEG-2 AAC WMA9 Pro (44.1 kHz/48 kHz) PCM (5.1 ch信号等)		THX SURROUND EX DD PLIIx Movie +THX *1 THX ULTRA2 CINEMA *1 THX ULTRA2 MUSIC *1 THX ULTRA2 GAMES *1 DD PLIIx Music +THX DD EX +THX GAMES *4	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 DD PLIIx Music	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1		
		DVD-A(i.LINK経由時) (5.1 ch信号)		THX ULTRA2 MUSIC DD PLIIx Music +THX MUSIC	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 DD PLIIx Music	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1		PCM DIRECT
		SACD (5.1 ch信号)		THX ULTRA2 MUSIC DD PLIIx Music +THX MUSIC				SACD DIRECT
SBch処理モード AUTO	マルチch信号	DOLBY DIGITAL PLUS DOLBY TrueHD DTS-HD DTS-HD Master Audio WMA9 Pro (44.1 kHz/48 kHz) PCM (6.1 ch信号/7.1 ch信号)	L C R / SL S SR / SBL SB SBR / LFE *3	THX CINEMA	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生	AUTO SURROUND と同様	AUTO SURROUND と同様
		DOLBY TrueHD (176.4 kHz/192 kHz) (5.1 ch信号)	L C R / SL S SR / SBL SB SBR / LFE	THX ULTRA2 CINEMA *1 THX CINEMA *4	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生		
		DOLBY DIGITAL EX (6.1 ch再生検出信号付)	L C R / SL S SR / SBL SB SBR / LFE	THX SURROUND EX	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1		
		DTS-ES (6.1 ch信号/ 6.1 ch再生検出信号付)		DTS ES Matrix + THX DTS ES Discrete + THX	DTS ES Matrix DTS ES Discrete	DTS ES Matrix DTS ES Discrete		
		上記以外の5.1 chソース	L C R / SL S SR / SBL SB SBR / LFE	THX ULTRA2 CINEMA *1 THX CINEMA *4	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生		
		DVD-A(i.LINK経由時) (5.1 ch信号)		THX ULTRA2 MUSIC *1 THX MUSIC *4	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生		PCM DIRECT
		SACD (5.1 ch信号)		THX ULTRA2 MUSIC *1 THX MUSIC *4				SACD DIRECT

SBch処理モード	CH	入力信号 信号名称	インジケーター例	THX	STANDARD	AUTO SURROUND	DIRECT	PURE DIRECT
SBch処理モード ON/AUTO	2 ch信号	DOLBYサラウンド	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	DD PLIIx Movie +THX DD PLIIx Music +THX MUSIC DD PLIIx Game +THX GAMES Neo:6 Cinema +THX THX ULTRA2 GAMES *1 Neo:6 Music +THX MUSIC DD PL +THX CINEMA *2	DD PLIIx Movie DD PLIIx Music DD PLIIx Game DD PRO LOGIC *2 Neo:6 Cinema Neo:6 Music	DD PLIIx Movie	AUTO SURROUNDと同様	AUTO SURROUNDと同様
		DTSサラウンド				Neo:6 Cinema	AUTO SURROUNDと同様	AUTO SURROUNDと同様
		DOLBY DIGITAL PLUS DOLBY TrueHD WMA9 Pro (44.1 kHz/48 kHz)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	DD PLIIx Movie +THX DD PRO LOGIC +THX *2 THX ULTRA2 GAMES *1 DD PLIIx Music +THX MUSIC DD PLIIx Game +THX GAMES	DD PLIIx Movie DD PLIIx Music DD PLIIx Game DD PRO LOGIC *2	ステレオ再生	ステレオ再生	ステレオ再生
		DTS-HD Master Audio DTS-HD DTS-EXPRESS WMA9 Pro (88.2 kHz/96 kHz)		THX CINEMA THX MUSIC THX GAMES	ステレオ再生			
		その他のステレオソース		DD PLIIx Movie +THX DD PLIIx Music +THX MUSIC DD PLIIx Game +THX GAMES Neo:6 Cinema +THX THX ULTRA2 GAMES *1 Neo:6 Music +THX MUSIC DD PL +THX CINEMA *2	DD PLIIx Movie DD PLIIx Music DD PLIIx Game DD PRO LOGIC *2 Neo:6 Cinema Neo:6 Music Neural THX *5	ステレオ再生	ステレオ再生	ステレオ再生
		アナログ入力						ANALOG DIRECT
		PCM						PCM DIRECT
		SACD		Neo:6 Music +THX MUSIC DD PLIIx Music +THX MUSIC	DD PLIIx Movie DD PLIIx Music DD PLIIx Game DD PRO LOGIC *2 Neo:6 Cinema Neo:6 Music			SACD DIRECT
		DVD-A(i.LINK経由時)						PCM DIRECT

*1：サラウンドバックスピーカーを1本しか接続していないときは選択することができません。
*2：DD PRO LOGICを選択するとサラウンドバックスピーカーから音は出ません。
*3：6.1 ch信号のときは「SBL」「SBR」が消灯して「SB」が点灯します。
*4：サラウンドバックスピーカーを2本接続しているときは選択することができません。
*5：入力信号がアナログ入力とPCMのときのみ選択することができます。

サラウンドバックスピーカーを接続していない、またはSBch処理モードOFFのとき

SBch処理モード	CH	入力信号 信号名称	インジケーター例	THX	STANDARD	AUTO SURROUND	DIRECT	PURE DIRECT
SBch処理モード 関係なし(OFF)	マルチch信号	DVD-A(i.LINK経由時) (5.1 ch信号)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE *3	THX MUSIC	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生	PCM DIRECT
		SACD (5.1 ch信号)						SACD DIRECT
		DOLBY DIGITAL EX (6.1 ch再生検出信号付) 上記以外の5.1/6.1/7.1 chソース		THX CINEMA THX MUSIC THX GAMES	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生		ストレートデコード再生
	2 ch信号	DOLBY サラウンド	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	DD PRO LOGIC +THX DD PLII Movie +THX CINEMA DD PLII Music +THX MUSIC DD PLII Game +THX GAMES Neo:6 Music +THX MUSIC Neo:6 Cinema +THX	DD PLII Movie DD PLII Music DD PLII Game DD PRO LOGIC Neo:6 Cinema Neo:6 Music	DD PLII Movie	AUTO SURROUNDと同様	AUTO SURROUNDと同様
		DTSサラウンド				Neo:6 Cinema	AUTO SURROUNDと同様	AUTO SURROUNDと同様
		DOLBY DIGITAL PLUS DOLBY TrueHD WMA9 Pro (44.1 kHz/48 kHz)			DD PLII Movie DD PLII Music DD PLII Game DD PRO LOGIC	ステレオ再生	ステレオ再生	ステレオ再生
		DTS-HD Master Audio DTS-HD DTS-EXPRESS WMA9 Pro (88.2 kHz/96 kHz)		THX CINEMA THX MUSIC THX GAMES	ステレオ再生			
		その他のステレオソース	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	DD PLII Movie +THX CINEMA Neo:6 Music +THX MUSIC DD PLII Game +THX GAMES DD PLII Music +THX MUSIC Neo:6 Cinema +THX DD PRO LOGIC +THX	DD PLII Movie DD PLII Music DD PLII Game DD PRO LOGIC Neo:6 Cinema Neo:6 Music Neural THX *4	ステレオ再生	ステレオ再生	ステレオ再生
		アナログ入力						ANALOG DIRECT
		PCM						PCM DIRECT
		SACD		Neo:6 Music +THX MUSIC DD PLII Music +THX MUSIC				SACD DIRECT
		DVD-A(i.LINK経由時)						PCM DIRECT

*1：サラウンドバックスピーカーを1本しか接続していないときは選択することができません。
*2：DD PRO LOGICを選択するとサラウンドバックスピーカーから音は出ません。
*3：5.1 ch信号のときは「SBL」「SBR」が消灯します。6.1 ch信号のときは「SBL」「SBR」が消灯して「SB」が点灯します。
*4：入力信号がアナログ入力とPCMのときのみ選択することができます。

ADVANCED SURROUNDモードの種類と効果

理想の視聴空間形状や、各ソフトに収録された音声の研究などにより開発された、パイオニアオリジナルのサラウンドモードです。映画/音楽/TV放送/ゲームなど多岐にわたるいかなるソフトでも、快適なサラウンド再生が提供できるよう、多種のモードをご用意いたしました。各ソースはデコード処理（2 chソースはマトリックス・デコード処理）後、それぞれに合わせたオリジナルの処理を加えています。以下をご参照のうえ、お好みに応じて選択してください。

ACTION
アクションシーンや戦闘、爆発シーンの迫力が、包み込むように再現され、映画の迫力や臨場感を楽しめます。

DRAMA
落ち着いた雰囲気でストーリー性重視の映画の再生に効果的です。

SCI-FI (Science Fiction)
セリフと効果音の分離が良いため、SF映画などのSE（特殊効果音）の多いソースに効果的です。

MONOFILM
古い映画やモノラル信号のテレビ放送などを楽しむのに効果的で、マルチチャンネルサラウンドで再生します。

ENTERTAINMENT SHOW
ミュージカルのサラウンド感や、劇場ホールのような雰囲気をお楽しみいただけます。

EXPANDED THEATER
2 chで収録された音声を、5 chまたは7 chのサラウンド効果で再生できます。ドルビーサラウンドソフト再生時は特に効果的です。

TV SURROUND
テレビ放送のほとんどの割合を占めるモノラル信号やステレオ信号をマルチチャンネルサラウンドで再生します。

ADVANCED GAME
ゲームのスピード感、躍動感をよりいっそうに高めます。シューティングゲームやレーシングゲームなど、右へ左へ駆け抜け巡るような流れのあるシーンの多いゲームに効果的です。

SPORTS
スポーツ中継の視聴に最適です。その場で観戦しているような臨場感を体感できるサラウンド再生です。

CLASSICAL
大型のコンサートホールをイメージしています。反射音の遅延時間帯が長く、さらに残響音を加えることでコンサートホール特有の美しい響きと、オーケストラの迫力が楽しめます。

ROCK/POP
楽器の分離感と臨場感があり、躍動感のあるサラウンドを楽しめます。

UNPLUGGED
アコースティック系の音楽ソースに最適なモードです。

EXTENDED STEREO
標準のステレオ（2 ch）音声を加工することなく、ステレオ音声のまま5本または7本のスピーカーで再生します。部屋のどの場所でも同じようなステレオ感が得られます。

PHONES SURROUND
（ヘッドホン挿入時のみ）
ヘッドホンでありながら仮想立体音響を再現し、マルチチャンネルサラウンド再生時の臨場感をお楽しみいただけます。

デコード処理の方法は、各モードに最適な技術を組み合わせてありますのでお客様が変更することはできません。

ホームメディアギャラリーに関する用語の解説

■AAC
AACとは、「Advanced Audio Coding 」の略で、MPEG-2 、MPEG-4 で使用される音声圧縮技術に関する基本フォーマットです。AAC データは、作成に使用したアプリケーションによってファイル形式と拡張子が異なります。

■イーサネット(Ethernet)
同じ場所にある複数のパソコンなどを接続してローカルエリアネットワーク(LAN)を構築するときに使われる規格です。現在は、100BASE-TXと呼ばれる方式が最も普及しています（10BASE-Tと呼ばれる方式もあります）。通常はLANケーブルとハブを使って複数のパソコンを接続します。

■サブネットマスク
IPアドレスの何ビット分をネットワークグループの識別のために使うかを定義する32ビットの数値です。「255.255.255.0 」のように表示されます。

■デフォルトゲートウェイ
ネットワーク外（インターネットなど）の機器にアクセスするとき「出入り口」になるルータなどの機器です。

■DHCP
Dynamic Host Configuration Protocolの略です。ネットワークに関する設定(IP アドレスの取得など)を自動で行う機能です。

■DLNA
Digital Living Network Alliance (デジタル・リビング・ネットワーク・アライアンス)の略です。ローカルエリアネットワーク(LAN)上で接続したメーカーの異なるパソコンやデジタル家電の動画、音楽、または画像データなどを相互で視聴できるようにするためのデータの圧縮方式や転送方式の標準化を進めている団体の名称です。本機はDLNA Home Networked Device Interoperability Guidelines v1.0 に準じています。



DLNA CERTIFIED™ Audio/Video/Image Player
DLNA およびDLNA CERTIFIED はDigital Living Network Allianceの商標です。

■DNS
「ドメインネームシステム」の略で、ホームページの閲覧時に使用する「http://pioneer.jp」のようなドメイン名を、実際の通信に使用するIPアドレス(「202.221.192.106 」など)に置き換える仕組みのことです。

■IP アドレス
インターネットなどのI P(インターネットプロトコル)ネットワークに接続されたパソコンに割り振られた識別番号です。通常は「192.168.130.106 」のように、0 から255 までの数字を4 つ並べて表示します。

■LAN
Local Area Networkの略です。同じ建物の中にあるパソコンやプリンタなどを専用ケーブルで接続してデータを送受信するネットワークです。最も普及している規格はイーサネット(Ethernet)規格で、通信速度が10Mbps 、最大伝送距離が100 mの10BASE-T やその10倍の通信速度を実現できる100BASE-TX が主流です。

■MAC アドレス
イーサネットカードに付与される固有のI D 番号です。これを元にカード間でデータが送受信されます。IEEE (Institute of Electrical and Electronic Engineers =電気電子学会)が割り当てる番号と各メーカーが独自に割り当てる番号の組み合わせによって表示されます。

■Windows Media
Windows Mediaは、米国Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。WMAファイルは、米国Microsoft Corporationの認証を受けたアプリケーションを使用してエンコードしてください。もし、認証されていないアプリケーションを使用すると、正常に動作しないことがあります。

■Windows Media DRM
Windows Mediaデジタル著作権管理(DRM)は、パソコン、デジタルオーディオプレーヤー、またはネットワーク機器などで再生するファイルを保護して、安全に配信できる技術です。WMDRMで保護されているファイルはWMDRM に対応している機器でのみ再生できます。

■Windows Media Player 11
Windows Media Connect
Windows Media Player 11とWindows Media Connect は、パソコンに保存されている動画、音楽、または画像ファイルなどをネットワーク上で共有するソフトウェアです。現在Windows Media Connect はマイクロソフト社のウェブサイトでダウンロードできません。Windows Media Connect がお使いの機器にインストールされていないときは、同じ機能が使えるWindows Media Player 11 for Windows XP をインストールしてください(マイクロソフトウェブサイトからダウンロードできます)。詳しくはマイクロソフトウェブサイトをご覧ください。

オープンソースに関するライセンスについて

ここでは、本機に使われているソフトウェアの利用許諾(ライセンス)について記載しています。正確な内容を保持するため、原文(英文)を記載しています。

Linux Source Notice

The Pioneer Plasma Television is powered by utilizing the Linux operating system. The machine readable copy of the corresponding source code is available for the cost of distribution. To obtain a copy, please visit
http://www.pioneerelectronics.com/ for more information.

GNU General Public License

Version 2, June 1991
Copyright (C) 1989, 1991 Free Software Foundation, Inc.
59 Temple Place - Suite 330, Boston, MA 02111-1307, USA
Everyone is permitted to copy and distribute verbatim copies of this license document, but changing it is not allowed.

Preamble

The licenses for most software are designed to take away your freedom to share and change it. By contrast, the GNU General Public License is intended to guarantee your freedom to share and change free software-to make sure the software is free for all its users. This General Public License applies to most of the Free Software Foundation’s software and to any other program whose authors commit to using it. (Some other Free Software Foundation software is covered by the GNU Library General Public License instead.) You can apply it to your programs, too.

When we speak of free software, we are referring to freedom, not price. Our General Public Licenses are designed to make sure that you have the freedom to distribute copies of free software (and charge for this service if you wish), that you receive source code or can get it if you want it, that you can change the software or use pieces of it in new free programs; and that you know you can do these things.

To protect your rights, we need to make restrictions that forbid anyone to deny you these rights or to ask you to surrender the rights. These restrictions translate to certain responsibilities for you if you distribute copies of the software, or if you modify it.

For example, if you distribute copies of such a program, whether gratis or for a fee, you must give the recipients all the rights that you have. You must make sure that they, too, receive or can get the source code. And you must show them these terms so they know their rights.

We protect your rights with two steps: (1) copyright the software, and (2) offer you this license which gives you legal permission to copy, distribute and/or modify the software.

Also, for each author’s protection and ours, we want to make certain that everyone understands that there is no warranty for this free software. If the software is modified by someone else and passed on, we want its recipients to know that what they have is not the original, so that any problems introduced by others will not reflect on the original authors’ reputations.

Finally, any free program is threatened constantly by software patents. We wish to avoid the danger that redistributors of a free program will individually obtain patent licenses, in effect making the program proprietary. To prevent this, we have made it clear that any patent must be licensed for everyone’s free use or not licensed at all.

The precise terms and conditions for copying, distribution and modification follow.

GNU General Public License

TERMS AND CONDITIONS FOR COPYING, DISTRIBUTION AND MODIFICATION

0. This License applies to any program or other work which contains a notice placed by the copyright holder saying it may be distributed under the terms of this General Public License. The “Program”, below, refers to any such program or work, and a “work based on the Program” means either the Program or any derivative work under copyright law: that is to say, a work containing the Program or a portion of it, either verbatim or with modifications and/or translated into another language. (Hereinafter, translation is included without limitation in the term “modification”.) Each licensee is addressed as “you”.
   Activities other than copying, distribution and modification are not covered by this License; they are outside its scope. The act of running the Program is not restricted, and the output from the Program is covered only if its contents constitute a work based on the Program (independent of having been made by running the Program). Whether that is true depends on what the Program does.
1. You may copy and distribute verbatim copies of the Program’s source code as you receive it, in any medium, provided that you conspicuously and appropriately publish on each copy an appropriate copyright notice and disclaimer of warranty; keep intact all the notices that refer to this License and to the absence of any warranty; and give any other recipients of the Program a copy of this License along with the Program.
   You may charge a fee for the physical act of transferring a copy, and you may at your option offer warranty protection in exchange for a fee.

2. You may modify your copy or copies of the Program or any portion of it, thus forming a work based on the Program, and copy and distribute such modifications or work under the terms of Section 1 above, provided that you also meet all of these conditions:
   a) You must cause the modified files to carry prominent notices stating that you changed the files and the date of any change.
   b) You must cause any work that you distribute or publish, that in whole or in part contains or is derived from the Program or any part thereof, to be licensed as a whole at no charge to all third parties under the terms of this License.
   c) If the modified program normally reads commands interactively when run, you must cause it, when started running for such interactive use in the most ordinary way, to print or display an announcement including an appropriate copyright notice and a notice that there is no warranty (or else, saying that you provide a warranty) and that users may redistribute the program under these conditions, and telling the user how to view a copy of this License.

   (Exception: if the Program itself is interactive but does not normally print such an announcement, your work based on the Program is not required to print an announcement.)

   These requirements apply to the modified work as a whole. If identifiable sections of that work are not derived from the Program, and can be reasonably considered independent and separate works in themselves, then this License, and its terms, do not apply to those sections when you distribute them as separate works. But when you distribute the same sections as part of a whole which is a work based on the Program, the distribution of the whole must be on the terms of this License, whose permissions for other licensees extend to the entire whole, and thus to each and every part regardless of who wrote it.

   Thus, it is not the intent of this section to claim rights or contest your rights to work written entirely by you; rather, the intent is to exercise the right to control the distribution of derivative or collective works based on the Program.

   In addition, mere aggregation of another work not based on the Program with the Program (or with a work based on the Program) on a volume of a storage or distribution medium does not bring the other work under the scope of this License.
3. You may copy and distribute the Program (or a work based on it, under Section 2) in object code or executable form under the terms of Sections 1 and 2 above provided that you also do one of the following:
   a) Accompany it with the complete corresponding machine-readable source code, which must be distributed under the terms of Sections 1 and 2 above on a medium customarily used for software interchange; or,
   b) Accompany it with a written offer, valid for at least three years, to give any third party, for a charge no more than your cost of physically performing source distribution, a complete machine-readable copy of the corresponding source code, to be distributed under the terms of Sections 1 and 2 above on a medium customarily used for software interchange; or,
   c) Accompany it with the information you received as to the offer to distribute corresponding source code. (This alternative is allowed only for noncommercial distribution and only if you received the program in object code or executable form with such an offer, in accord with Subsection b above.)

   The source code for a work means the preferred form of the work for making modifications to it. For an executable work, complete source code means all the source code for all modules it contains, plus any associated interface definition files, plus the scripts used to control compilation and installation of the executable. However, as a special exception, the source code distributed need not include anything that is normally distributed (in either source or binary form) with the major components (compiler, kernel, and so on) of the operating system on which the executable runs, unless that component itself accompanies the executable.

   If distribution of executable or object code is made by offering access to copy from a designated place, then offering equivalent access to copy the source code from the same place counts as distribution of the source code, even though third parties are not compelled to copy the source along with the object code.
4. You may not copy, modify, sublicense, or distribute the Program except as expressly provided under this License. Any attempt otherwise to copy, modify, sublicense or distribute the Program is void, and will automatically terminate your rights under this License.

   However, parties who have received copies, or rights, from you under this License will not have their licenses terminated so long as such parties remain in full compliance.
5. You are not required to accept this License, since you have not signed it. However, nothing else grants you permission to modify or distribute the Program or its derivative works. These actions are prohibited by law if you do not accept this License. Therefore, by modifying or distributing the Program (or any work based on the Program), you indicate your acceptance of this License to do so, and all its terms and conditions for copying, distributing or modifying the Program or works based on it.
6. Each time you redistribute the Program (or any work based on the Program), the recipient automatically receives a license from the original licensor to copy, distribute or modify the Program subject to these terms and conditions. You may not impose any further restrictions on the recipients' exercise of the rights granted herein. You are not responsible for enforcing compliance by third parties to this License.
7. If, as a consequence of a court judgment or allegation of patent infringement or for any other reason (not limited to patent issues), conditions are imposed on you (whether by court order, agreement or otherwise) that contradict the conditions of this License, they do not excuse you from the conditions of this License. If you cannot distribute so as to satisfy simultaneously your obligations under this License and any other pertinent obligations, then as a consequence you may not distribute the Program at all. For example, if a patent license would not permit royalty-free redistribution of the Program by all those who receive copies directly or indirectly through you, then the only way you could satisfy both it and this License would be to refrain entirely from distribution of the Program.

   If any portion of this section is held invalid or unenforceable under any particular circumstance, the balance of the section is intended to apply and the section as a whole is intended to apply in other circumstances.

   It is not the purpose of this section to induce you to infringe any patents or other property right claims or to contest validity of any such claims; this section has the sole purpose of protecting the integrity of the free software distribution system, which is implemented by public license practices. Many people have made generous contributions to the wide range of software distributed through that system in reliance on consistent application of that system; it is up to the author/donor to decide if he or she is willing to distribute software through any other system and a licensee cannot impose that choice.

   This section is intended to make thoroughly clear what is believed to be a consequence of the rest of this License.

8. If the distribution and/or use of the Program is restricted in certain countries either by patents or by copyrighted interfaces, the original copyright holder who places the Program under this License may add an explicit geographical distribution limitation excluding those countries, so that distribution is permitted only in or among countries not thus excluded. In such case, this License incorporates the limitation as if written in the body of this License.
9. The Free Software Foundation may publish revised and/or new versions of the General Public License from time to time. Such new versions will be similar in spirit to the present version, but may differ in detail to address new problems or concerns.
   Each version is given a distinguishing version number. If the Program specifies a version number of this License which applies to it and “any later version”, you have the option of following the terms and conditions either of that version or of any later version published by the Free Software Foundation. If the Program does not specify a version number of this License, you may choose any version ever published by the Free Software Foundation.
10. If you wish to incorporate parts of the Program into other free programs whose distribution conditions are different, write to the author to ask for permission. For software which is copyrighted by the Free Software Foundation, write to the Free Software Foundation; we sometimes make exceptions for this. Our decision will be guided by the two goals of preserving the free status of all derivatives of our free software and of promoting the sharing and reuse of software generally.

NO WARRANTY

11. BECAUSE THE PROGRAM IS LICENSED FREE OF CHARGE, THERE IS NO WARRANTY FOR THE PROGRAM, TO THE EXTENT PERMITTED BY APPLICABLE LAW. EXCEPT WHEN OTHERWISE STATED IN WRITING THE COPYRIGHT HOLDERS AND/OR OTHER PARTIES PROVIDE THE PROGRAM “AS IS” WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EITHER EXPRESSED OR IMPLIED, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE. THE ENTIRE RISK AS TO THE QUALITY AND PERFORMANCE OF THE PROGRAM IS WITH YOU. SHOULD THE PROGRAM PROVE DEFECTIVE, YOU ASSUME THE COST OF ALL NECESSARY SERVICING, REPAIR OR CORRECTION.
12. IN NO EVENT UNLESS REQUIRED BY APPLICABLE LAW OR AGREED TO IN WRITING WILL ANY COPYRIGHT HOLDER, OR ANY OTHER PARTY WHO MAY MODIFY AND/OR REDISTRIBUTE THE PROGRAM AS PERMITTED ABOVE, BE LIABLE TO YOU FOR DAMAGES, INCLUDING ANY GENERAL, SPECIAL, INCIDENTAL OR CONSEQUENTIAL DAMAGES ARISING OUT OF THE USE OR INABILITY TO USE THE PROGRAM (INCLUDING BUT NOT LIMITED TO LOSS OF DATA OR DATA BEING RENDERED INACCURATE OR LOSSES SUSTAINED BY YOU OR THIRD PARTIES OR A FAILURE OF THE PROGRAM TO OPERATE WITH ANY OTHER PROGRAMS), EVEN IF SUCH HOLDER OR OTHER PARTY HAS BEEN ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGES.
    END OF TERMS AND CONDITIONS

How to Apply These Terms to Your New Programs

If you develop a new program, and you want it to be of the greatest possible use to the public, the best way to achieve this is to make it free software which everyone can redistribute and change under these terms.
To do so, attach the following notices to the program. It is safest to attach them to the start of each source file to most effectively convey the exclusion of warranty; and each file should have at least the “copyright” line and a pointer to where the full notice is found.

<one line to give the program’s name and an idea of what it does.>
Copyright (C) yyyy name of author

This program is free software; you can redistribute it and/or modify it under the terms of the GNU General Public License as published by the Free Software Foundation; either version 2 of the License, or (at your option) any later version.
This program is distributed in the hope that it will be useful, but WITHOUT ANY WARRANTY; without even the implied warranty of MERCHANTABILITY or FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE. See the GNU General Public License for more details.
You should have received a copy of the GNU General Public License along with this program; if not, write to the Free Software Foundation, Inc., 59 Temple Place - Suite 330, Boston, MA 02111-1307, USA.
Also add information on how to contact you by electronic and paper mail.
If the program is interactive, make it output a short notice like this when it starts in an interactive mode:

Gnomovision version 69, Copyright (C) year name of author
Gnomovision comes with ABSOLUTELY NO WARRANTY; for details type ‘show w’. This is free software, and you are welcome to redistribute it under certain conditions; type ’show c’ for details.

The hypothetical commands ’show w’ and ’show c’ should show the appropriate parts of the General Public License. Of course, the commands you use may be called something other than ’show w’ and ’show c’; they could even be mouse-clicks or menu items-whatever suits your program.
You should also get your employer (if you work as a programmer) or your school, if any, to sign a “copyright disclaimer” for the program, if necessary. Here is a sample; alter the names:
Yoyodyne, Inc., hereby disclaims all copyright interest in the program ’Gnomovision’ (which makes passes at compilers) written by James Hacker.

signature of Ty Coon, 1 April 1989
Ty Coon, President of Vice

This General Public License does not permit incorporating your program into proprietary programs. If your program is a subroutine library, you may consider it more useful to permit linking proprietary applications with the library. If this is what you want to do, use the GNU Lesser General Public License instead of this License.

GNU Lesser General Public License

Version 2.1, February 1999
Copyright (C) 1991, 1999 Free Software Foundation, Inc.
59 Temple Place, Suite 330, Boston, MA 02111-1307, USA
Everyone is permitted to copy and distribute verbatim copies of this license document, but changing it is not allowed.
[This is the first released version of the Lesser GPL. It also counts as the successor of the GNU Library Public License, version 2, hence the version number 2.1.]

Preamble

The licenses for most software are designed to take away your freedom to share and change it. By contrast, the GNU General Public Licenses are intended to guarantee your freedom to share and change free software-to make sure the software is free for all its users. This license, the Lesser General Public License, applies to some specially designated software packages-typically libraries-of the Free Software Foundation and other authors who decide to use it. You can use it too, but we suggest you first think carefully about whether this license or the ordinary General Public License is the better strategy to use in any particular case, based on the explanations below.
When we speak of free software, we are referring to freedom of use, not price. Our General Public Licenses are designed to make sure that you have the freedom to distribute copies of free software (and charge for this service if you wish); that you receive source code or can get it if you want it; that you can change the software and use pieces of it in new free programs; and that you are informed that you can do these things.
To protect your rights, we need to make restrictions that forbid distributors to deny you these rights or to ask you to surrender these rights. These restrictions translate to certain responsibilities for you if you distribute copies of the library or if you modify it.
For example, if you distribute copies of the library, whether gratis or for a fee, you must give the recipients all the rights that we gave you. You must make sure that they, too, receive or can get the source code. If you link other code with the library, you must provide complete object files to the recipients, so that they can relink them with the library after making changes to the library and recompiling it. And you must show them these terms so they know their rights.
We protect your rights with a two-step method: (1) we copyright the library, and (2) we offer you this license, which gives you legal permission to copy, distribute and/or modify the library.
To protect each distributor, we want to make it very clear that there is no warranty for the free library. Also, if the library is modified by someone else and passed on, the recipients should know that what they have is not the original version, so that the original author’s reputation will not be affected by problems that might be introduced by others.
Finally, software patents pose a constant threat to the existence of any free program. We wish to make sure that a company cannot effectively restrict the users of a free program by obtaining a restrictive license from a patent holder.
Therefore, we insist that any patent license obtained for a version of the library must be consistent with the full freedom of use specified in this license.
Most GNU software, including some libraries, is covered by the ordinary GNU General Public License. This license, the GNU Lesser General Public License, applies to certain designated libraries, and is quite different from the ordinary General Public License. We use this license for certain libraries in order to permit linking those libraries into non-free programs.
When a program is linked with a library, whether statically or using a shared library, the combination of the two is legally speaking a combined work, a derivative of the original library. The ordinary General Public License therefore permits such linking only if the entire combination fits its criteria of freedom. The Lesser General Public License permits more lax criteria for linking other code with the library.
We call this license the “Lesser” General Public License because it does Less to protect the user’s freedom than the ordinary General Public License. It also provides other free software developers Less of an advantage over competing non-free programs. These disadvantages are the reason we use the ordinary General Public License for many libraries. However, the Lesser license provides advantages in certain special circumstances.
For example, on rare occasions, there may be a special need to encourage the widest possible use of a certain library, so that it becomes a de-facto standard. To achieve this, non-free programs must be allowed to use the library.
A more frequent case is that a free library does the same job as widely used non-free libraries. In this case, there is little to gain by limiting the free library to free software only, so we use the Lesser General Public License.
In other cases, permission to use a particular library in non-free programs enables a greater number of people to use a large body of free software. For example, permission to use the GNU C Library in non-free programs enables many more people to use the whole GNU operating system, as well as its variant, the GNU/Linux operating system.
Although the Lesser General Public License is Less protective of the users’ freedom, it does ensure that the user of a program that is linked with the Library has the freedom and the wherewithal to run that program using a modified version of the Library.
The precise terms and conditions for copying, distribution and modification follow. Pay close attention to the difference between a “work based on the library” and a “work that uses the library”. The former contains code derived from the library, whereas the latter must be combined with the library in order to run.

GNU Lesser General Public License

TERMS AND CONDITIONS FOR COPYING, DISTRIBUTION AND MODIFICATION

0. This License Agreement applies to any software library or other program which contains a notice placed by the copyright holder or other authorized party saying it may be distributed under the terms of this Lesser General Public License (also called “this License”). Each licensee is addressed as “you”.
   A “library” means a collection of software functions and/or data prepared so as to be conveniently linked with application programs (which use some of those functions and data) to form executables.
   The “Library”, below, refers to any such software library or work which has been distributed under these terms. A “work based on the Library” means either the Library or any derivative work under copyright law: that is to say, a work containing the Library or a portion of it, either verbatim or with modifications and/or translated straightforwardly into another language. (Hereinafter, translation is included without limitation in the term “modification”.)
   ”Source code” for a work means the preferred form of the work for making modifications to it. For a library, complete source code means all the source code for all modules it contains, plus any associated interface definition files, plus the scripts used to control compilation and installation of the library.
   Activities other than copying, distribution and modification are not covered by this License; they are outside its scope. The act of running a program using the Library is not restricted, and output from such a program is covered only if its contents constitute a work based on the Library (independent of the use of the Library in a tool for writing it). Whether that is true depends on what the Library does and what the program that uses the Library does.

1. You may copy and distribute verbatim copies of the Library's complete source code as you receive it, in any medium, provided that you conspicuously and appropriately publish on each copy an appropriate copyright notice and disclaimer of warranty; keep intact all the notices that refer to this License and to the absence of any warranty; and distribute a copy of this License along with the Library.
   You may charge a fee for the physical act of transferring a copy, and you may at your option offer warranty protection in exchange for a fee.
2. You may modify your copy or copies of the Library or any portion of it, thus forming a work based on the Library, and copy and distribute such modifications or work under the terms of Section 1 above, provided that you also meet all of these conditions:
   a) The modified work must itself be a software library.
   b) You must cause the files modified to carry prominent notices stating that you changed the files and the date of any change.
   c) You must cause the whole of the work to be licensed at no charge to all third parties under the terms of this License.
   d) If a facility in the modified Library refers to a function or a table of data to be supplied by an application program that uses the facility, other than as an argument passed when the facility is invoked, then you must make a good faith effort to ensure that, in the event an application does not supply such function or table, the facility still operates, and performs whatever part of its purpose remains meaningful.
   (For example, a function in a library to compute square roots has a purpose that is entirely well-defined independent of the application. Therefore, Subsection 2d requires that any application-supplied function or table used by this function must be optional: if the application does not supply it, the square root function must still compute square roots.) These requirements apply to the modified work as a whole. If identifiable sections of that work are not derived from the Library, and can be reasonably considered independent and separate works in themselves, then this License, and its terms, do not apply to those sections when you distribute them as separate works. But when you distribute the same sections as part of a whole which is a work based on the Library, the distribution of the whole must be on the terms of this License, whose permissions for other licensees extend to the entire whole, and thus to each and every part regardless of who wrote it.
   Thus, it is not the intent of this section to claim rights or contest your rights to work written entirely by you; rather, the intent is to exercise the right to control the distribution of derivative or collective works based on the Library.
   In addition, mere aggregation of another work not based on the Library with the Library (or with a work based on the Library) on a volume of a storage or distribution medium does not bring the other work under the scope of this License.
3. You may opt to apply the terms of the ordinary GNU General Public License instead of this License to a given copy of the Library. To do this, you must alter all the notices that refer to this License, so that they refer to the ordinary GNU General Public License, version 2, instead of to this License. (If a newer version than version 2 of the ordinary GNU General Public License has appeared, then you can specify that version instead if you wish.) Do not make any other change in these notices.
   Once this change is made in a given copy, it is irreversible for that copy, so the ordinary GNU General Public License applies to all subsequent copies and derivative works made from that copy. This option is useful when you wish to copy part of the code of the Library into a program that is not a library.
4. You may copy and distribute the Library (or a portion or derivative of it, under Section 2) in object code or executable form under the terms of Sections 1 and 2 above provided that you accompany it with the complete corresponding machine-readable source code, which must be distributed under the terms of Sections 1 and 2 above on a medium customarily used for software interchange.
   If distribution of object code is made by offering access to copy from a designated place, then offering equivalent access to copy the source code from the same place satisfies the requirement to distribute the source code, even though third parties are not compelled to copy the source along with the object code.
5. A program that contains no derivative of any portion of the Library, but is designed to work with the Library by being compiled or linked with it, is called a "work that uses the Library". Such a work, in isolation, is not a derivative work of the Library, and therefore falls outside the scope of this License. However, linking a "work that uses the Library" with the Library creates an executable that is a derivative of the Library (because it contains portions of the Library), rather than a "work that uses the library". The executable is therefore covered by this License. Section 6 states terms for distribution of such executables.
   When a "work that uses the Library" uses material from a header file that is part of the Library, the object code for the work may be a derivative work of the Library even though the source code is not. Whether this is true is especially significant if the work can be linked without the Library, or if the work is itself a library. The threshold for this to be true is not precisely defined by law.
   If such an object file uses only numerical parameters, data structure layouts and accessors, and small macros and small inline functions (ten lines or less in length), then the use of the object file is unrestricted, regardless of whether it is legally a derivative work. (Executables containing this object code plus portions of the Library will still fall under Section 6.)
   Otherwise, if the work is a derivative of the Library, you may distribute the object code for the work under the terms of Section 6. Any executables containing that work also fall under Section 6, whether or not they are linked directly with the Library itself.
6. As an exception to the Sections above, you may also combine or link a "work that uses the Library" with the Library to produce a work containing portions of the Library, and distribute that work under terms of your choice, provided that the terms permit modification of the work for the customer's own use and reverse engineering for debugging such modifications.
   You must give prominent notice with each copy of the work that the Library is used in it and that the Library and its use are covered by this License. You must supply a copy of this License. If the work during execution displays copyright notices, you must include the copyright notice for the Library among them, as well as a reference directing the user to the copy of this License.
   Also, you must do one of these things:
   a) Accompany the work with the complete corresponding machine-readable source code for the Library including whatever changes were used in the work (which must be distributed under Sections 1 and 2 above); and, if the work is an executable linked with the Library, with the complete machine-readable "work that uses the Library", as object code and/or source code, so that the user can modify the Library and then relink to produce a modified executable containing the modified Library. (It is understood that the user who changes the contents of definitions files in the Library will not necessarily be able to recompile

the application to use the modified definitions.)

b) Use a suitable shared library mechanism for linking with the Library. A suitable mechanism is one that (1) uses at run time a copy of the library already present on the user's computer system, rather than copying library functions into the executable, and (2) will operate properly with a modified version of the library, if the user installs one, as long as the modified version is interface-compatible with the version that the work was made with.

c) Accompany the work with a written offer, valid for at least three years, to give the same user the materials specified in Subsection 6a, above, for a charge no more than the cost of performing this distribution.

d) If distribution of the work is made by offering access to copy from a designated place, offer equivalent access to copy the above specified materials from the same place.

e) Verify that the user has already received a copy of these materials or that you have already sent this user a copy.

For an executable, the required form of the "work that uses the Library" must include any data and utility programs needed for reproducing the executable from it. However, as a special exception, the materials to be distributed need not include anything that is normally distributed (in either source or binary form) with the major components (compiler, kernel, and so on) of the operating system on which the executable runs, unless that component itself accompanies the executable.

It may happen that this requirement contradicts the license restrictions of other proprietary libraries that do not normally accompany the operating system. Such a contradiction means you cannot use both them and the Library together in an executable that you distribute.

7. You may place library facilities that are a work based on the Library side-by-side in a single library together with other library facilities not covered by this License, and distribute such a combined library, provided that the separate distribution of the work based on the Library and of the other library facilities is otherwise permitted, and provided that you do these two things:
   a) Accompany the combined library with a copy of the same work based on the Library, uncombined with any other library facilities. This must be distributed under the terms of the Sections above.
   b) Give prominent notice with the combined library of the fact that part of it is a work based on the Library, and explaining where to find the accompanying uncombined form of the same work.
8. You may not copy, modify, sublicense, link with, or distribute the Library except as expressly provided under this License. Any attempt otherwise to copy, modify, sublicense, link with, or distribute the Library is void, and will automatically terminate your rights under this License. However, parties who have received copies, or rights, from you under this License will not have their licenses terminated so long as such parties remain in full compliance.
9. You are not required to accept this License, since you have not signed it. However, nothing else grants you permission to modify or distribute the Library or its derivative works. These actions are prohibited by law if you do not accept this License. Therefore, by modifying or distributing the Library (or any work based on the Library), you indicate your acceptance of this License to do so, and all its terms and conditions for copying, distributing or modifying the Library or works based on it.
10. Each time you redistribute the Library (or any work based on the Library), the recipient automatically receives a license from the original licensor to copy, distribute, link with or modify the Library subject to these terms and conditions. You may not impose any further restrictions on the recipients' exercise of the rights granted herein. You are not responsible for enforcing compliance by third parties with this License.
11. If, as a consequence of a court judgment or allegation of patent infringement or for any other reason (not limited to patent issues), conditions are imposed on you (whether by court order, agreement or otherwise) that contradict the conditions of this License, they do not excuse you from the conditions of this License. If you cannot distribute so as to satisfy simultaneously your obligations under this License and any other pertinent obligations, then as a consequence you may not distribute the Library at all.

    For example, if a patent license would not permit royalty-free redistribution of the Library by all those who receive copies directly or indirectly through you, then the only way you could satisfy both it and this License would be to refrain entirely from distribution of the Library.

    If any portion of this section is held invalid or unenforceable under any particular circumstance, the balance of the section is intended to apply, and the section as a whole is intended to apply in other circumstances.

    It is not the purpose of this section to induce you to infringe any patents or other property right claims or to contest validity of any such claims; this section has the sole purpose of protecting the integrity of the free software distribution system which is implemented by public license practices. Many people have made generous contributions to the wide range of software distributed through that system in reliance on consistent application of that system; it is up to the author/donor to decide if he or she is willing to distribute software through any other system and a licensee cannot impose that choice.

    This section is intended to make thoroughly clear what is believed to be a consequence of the rest of this License.
12. If the distribution and/or use of the Library is restricted in certain countries either by patents or by copyrighted interfaces, the original copyright holder who places the Library under this License may add an explicit geographical distribution limitation excluding those countries, so that distribution is permitted only in or among countries not thus excluded. In such case, this License incorporates the limitation as if written in the body of this License.
13. The Free Software Foundation may publish revised and/or new versions of the Lesser General Public License from time to time. Such new versions will be similar in spirit to the present version, but may differ in detail to address new problems or concerns. Each version is given a distinguishing version number. If the Library specifies a version number of this License which applies to it and "any later version", you have the option of following the terms and conditions either of that version or of any later version published by the Free Software Foundation. If the Library does not specify a license version number, you may choose any version ever published by the Free Software Foundation.
14. If you wish to incorporate parts of the Library into other free programs whose distribution conditions are incompatible with these, write to the author to ask for permission. For software which is copyrighted by the Free Software Foundation, write to the Free Software Foundation; we sometimes make exceptions for this. Our decision will be guided by the two goals of preserving the free status of all derivatives of our free software and of promoting the sharing and reuse of software generally.

NO WARRANTY

15. BECAUSE THE LIBRARY IS LICENSED FREE OF CHARGE, THERE IS NO WARRANTY FOR THE LIBRARY, TO THE EXTENT PERMITTED BY APPLICABLE LAW. EXCEPT WHEN OTHERWISE STATED IN WRITING THE COPYRIGHT HOLDERS AND/OR OTHER PARTIES PROVIDE THE LIBRARY "AS IS" WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EITHER EXPRESSED OR IMPLIED, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE. THE ENTIRE RISK AS TO THE QUALITY AND PERFORMANCE OF THE LIBRARY IS WITH YOU. SHOULD THE LIBRARY PROVE DEFECTIVE, YOU ASSUME THE COST OF ALL NECESSARY SERVICING, REPAIR OR CORRECTION.
16. IN NO EVENT UNLESS REQUIRED BY APPLICABLE LAW OR AGREED TO IN WRITING WILL ANY COPYRIGHT HOLDER, OR ANY OTHER PARTY WHO MAY MODIFY AND/OR REDISTRIBUTE THE LIBRARY AS PERMITTED ABOVE, BE LIABLE TO YOU FOR DAMAGES, INCLUDING ANY GENERAL, SPECIAL, INCIDENTAL OR CONSEQUENTIAL DAMAGES ARISING OUT OF THE USE OR INABILITY TO USE THE LIBRARY (INCLUDING BUT NOT LIMITED TO LOSS OF DATA OR DATA BEING RENDERED INACCURATE OR LOSSES SUSTAINED BY YOU OR THIRD PARTIES OR A FAILURE OF THE LIBRARY TO OPERATE WITH ANY OTHER SOFTWARE), EVEN IF SUCH HOLDER OR OTHER PARTY HAS BEEN ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGES.
    END OF TERMS AND CONDITIONS

How to Apply These Terms to Your New Libraries

If you develop a new library, and you want it to be of the greatest possible use to the public, we recommend making it free software that everyone can redistribute and change. You can do so by permitting redistribution under these terms (or, alternatively, under the terms of the ordinary General Public License).

To apply these terms, attach the following notices to the library. It is safest to attach them to the start of each source file to most effectively convey the exclusion of warranty; and each file should have at least the "copyright" line and a pointer to where the full notice is found.

<one line to give the library's name and an idea of what it does.>
Copyright (C) year name of author

This library is free software; you can redistribute it and/or modify it under the terms of the GNU Lesser General Public License as published by the Free Software Foundation; either version 2.1 of the License, or (at your option) any later version.

This library is distributed in the hope that it will be useful, but WITHOUT ANY WARRANTY; without even the implied warranty of MERCHANTABILITY or FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE. See the GNU Lesser General Public License for more details.

You should have received a copy of the GNU Lesser General Public License along with this library; if not, write to the Free Software Foundation, Inc., 59 Temple Place, Suite 330, Boston, MA 02111-1307, USA

Also add information on how to contact you by electronic and paper mail.

You should also get your employer (if you work as a programmer) or your school, if any, to sign a "copyright disclaimer" for the library, if necessary. Here is a sample; alter the names:

Yoyodyne, Inc., hereby disclaims all copyright interest in the library 'Frob' (a library for tweaking knobs) written by James Random Hacker.

signature of Ty Coon, 1 April 1990
Ty Coon, President of Vice
That's all there is to it!

仕様

オーディオ部

定格出力（マルチチャンネル動作時）
全10 ch .... 140 W 合計1400 W
(20 Hz～20 kHz、0.05 %、8 Ω)
定格出力（ステレオ動作時）
20 Hz～20 kHz、0.05 %、8 Ω
....200 W+200 W
20 Hz～20 kHz、0.05 %、6 Ω
....270 W+270 W
1 kHz、0.05 %、4 Ω
....400 W+400 W

入力端子（感度/インピーダンス）
PHONO MM ....5.0 mV/47 kΩ
LINE系 ....475 mV/47 kΩ
周波数特性
LINE系 .... 5 Hz～100 kHz、$^{+0}_{-3}$ dB
出力端子（レベル/インピーダンス）
REC OUT系 ....475 mV/2.2 kΩ
SN比（IHF、ショートサーキット、Aネットワーク）
LINE系 .... 105 dB

ビデオ部（コンポジット、S）

入力端子（感度/インピーダンス）........... 1 Vp-p/75 Ω
出力端子（レベル/インピーダンス）....... 1 Vp-p/75 Ω
周波数特性 .... 5 Hz～10 MHz
SN比 .... 70 dB

ビデオ部（コンポーネント、D5）

入力端子（感度/インピーダンス）........... 1 Vp-p/75 Ω
出力端子（レベル/インピーダンス）....... 1 Vp-p/75 Ω
周波数特性 .... 5 Hz～100 MHz
SN比 .... 70 dB

電源供給部

HDMI出力端子 .... 5 V、100 mA

ネットワーク部

LAN端子 .... 1系統、10BASE-T/100BASE-TX

USB部

USB入力端子 .... 1系統、USB2.0対応

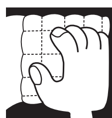
電源部・その他

電源 .... AC 100 V、50 Hz/60 Hz
消費電力 ....550 W
待機時消費電力
............0.5 W（HDMIコントロール機能 OFF時）
.... 0.75 W（HDMIコントロール機能 ON時）
外形寸法(幅×高さ×奥行)
.... 440 mm ×247 mm × 479 mm
質量 ....35.5 kg

付属品

リモコン 1
電源コード 1
単3形乾電池 2
セットアップ用マイク（5 m）....................................... 1
iPodケーブル 1
ワイピングクロス 1
保証書 1
取扱説明書（本書）

●仕様および外観は改良のため予告なく変更することがあります。



お手入れについて

通常は柔らかい布でから拭きしてください。汚れがひどい場合は水で5～6倍に薄めた中性洗剤に柔らかい布を浸してよく絞ったあと、汚れを拭き取り、その後乾いた布で拭いてください。アルコール、シンナー、ベンジン、殺虫剤などが付着すると、印刷、塗装などがはげることがありますのでご注意ください。また、化学ぞうきん等をお使いの場合は、化学ぞうきん等に添付の注意事項をよくお読みください。



音のエチケット

楽しい音楽も時と場所によっては気になるものです。隣近所への思いやりを十分にいたしましょう。
ステレオの音量は、あなたの心がけ次第で大きくも小さくもなります。
とくに静かな夜間には小さな音でも通りやすいものです。夜間の音楽鑑賞にはとくに気を配りましょう。近所へ音が漏れないように窓を閉め、お互いに心を配り、快い生活環境を守りましょう。

取扱上のご注意

液晶画面について

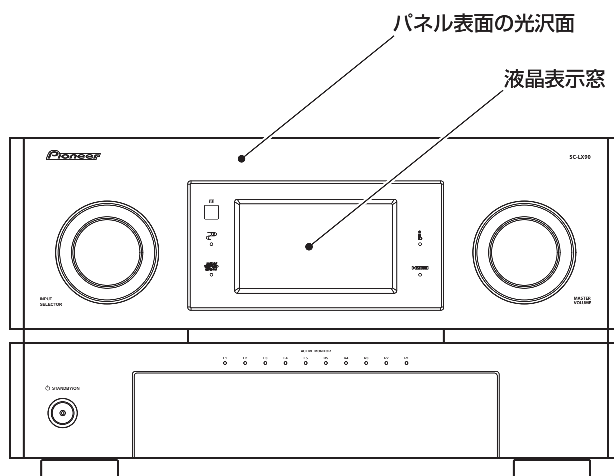
- 液晶画面の中に小さな黒い点や明るく光る点(輝点)が出ることがあります。これは、液晶画面特有の現象で故障ではありません。
- 寒い所でお使いになるときは、電源を入れたあと、しばらく画面が暗いことがあります。時間が経つと正常な明るさになります。
- 液晶画面に直射日光が当たると、光が反射し画面が見づらくなりますので、直射日光をさえぎってください。

液晶バックライトについて

- 約1万時間お使いになると寿命になります。(ラックでの使用による高温連続動作や低温連続動作環境では、寿命が短くなることがあります。ラックでの使用時は放熱にご注意ください。)

パネル表面の光沢面および液晶表示窓のお手入れのしかた

本機のパネル表面の光沢面、液晶表示窓は、付属のワイピングクロスで軽くから拭きしてください。



付属ワイピングクロスの取り扱いについてのお願い

- ホコリ等で汚れたままのワイピングクロスを使用すると、本機の表面にキズがつく恐れがあります。
- ワイピングクロスが汚れたときには、以下のように洗濯をしてください。中性洗剤を1%程度に薄めて、もみ洗いをしてください。その後、洗剤が残らないように十分にすすぎ洗いをし、乾燥後ご使用ください。
- ワイピングクロスを紛失されたり汚れがひどくなった場合は、お近くの販売店でワイピングクロスをご注文頂くか、直接部品受注センターで購入をお願いいたします。また、代用品として市販の眼鏡レンズ拭きなどを購入されてもご使用できます。

故障かな ? と思ったら

故障かな ? と思ったら以下を調べてみてください。意外なミスが故障と思われがちです。また、本機以外の原因も考えられます。ご使用の他の機器および同時に使用している電気機器もあわせてお調べください。
以下の項目を調べても直らない場合は、修理を依頼してください。

音について

「音が出ない」「音がおかしい」「ノイズが出る」など、音についての疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
入力切換を合わせても、音が出ない	入力端子の接続が正しくない。	接続を再確認する。	
	デジタル入力の設定が正しくない。	設定を修正する。	**111**
	音声切換の選択が正しくない。	音声切換ボタンで正しい入力信号を選択する。	**42**
	ミュート状態(音量インジケーターが点滅)になっている。	リモコンでミュートを解除する。	**41**
	スピーカー出力がOFFになっている。	SPEAKERSボタンを押して、OFF以外にする。	**82**
	音量が下がっている。	MASTER VOLUMEを調整する。	**41**
フロントスピーカー以外の音が出ない	スピーカーシステムの設定がフロントch以外すべてNOになっている。	スピーカーシステムの設定を修正する。	**105**
	リスニングモードがSTEREOまたはフロントサラウンド･アドバンスモードになっている。	サラウンド再生用のリスニングモードを選択する。	**43**
サラウンドバックスピーカーから音が出ない	SBch処理モードの設定がOFFになっている。	ONを選択する。	**50**
	SBch処理モードの設定がAUTOで「6.1 ch再生検出信号」の記録されていないソースを使用している。	ONを選択する。	**50**
	スピーカー出力端子の設定が［All Ch Bi-Amp］になっている。	［All Ch Bi-Amp］以外を選択する。	**90**
	スピーカーシステムの設定でサラウンドまたはサラウンドバックchの設定が[NO](無し)になっている。	サラウンドバックchの設定を修正する。	**105**
	接続が正しくない(サラウンドバックchを1本のスピーカーで接続していてRch側に接続している)。	接続を再確認する(サラウンドバックchを1本のスピーカーで接続しているときはLch側に接続する)。	**28**
特定のスピーカーから音が出ない	スピーカーシステムの設定が[NO](無し)になっている。	スピーカーシステムの設定を修正する。	**105**
	スピーカーの接続が外れている。	スピーカーの接続を確認する。	**28**
	ソフトのサウンドトラックが意図的にそのように録音されている。	リスニングモードによっては効果音のみ出力される場合があります。	**43**
	スピーカーの出力レベル設定が小さい。	スピーカーの出力レベル設定を上げる。	**107**
	スピーカー出力の設定で［7.2ch+Front B］が選択されているときのスピーカーシステムの選択が合っていない。	スピーカーシステムで「A+B」または「B」にする。	**82**
ステータス画面の音声の入力情報画面で、入力チャンネルは表示されているが、音が出ていないスピーカーがある	再生しているソースのプログラムフォーマットにはそのチャンネルの情報が記録されているが、そのチャンネルに音声が収録されていない。	故障ではありません。収録内容をご確認ください。	
デジタル機器の音が出ない	デジタル接続が正しくない。	デジタル接続を再確認する。	**39**
	デジタル入力の設定が正しくない。	デジタル入力の設定を修正する。	**111**
	音声切換の選択が正しくない。	接続されているデジタル機器に応じて、音声切換ボタンでDIGITALを選択する。	**42**
	デジタル出力レベル調整機能が付いているCDレコーダーなどのデジタル出力レベル設定が低すぎる。	プレーヤーのデジタル出力設定を適切に修正する。(DTS CDの場合は0 dBに設定してください。)	
	再生ソフトのデジタルフォーマットに対応していないプレーヤーである(または出力しない設定になっている)。	対応フォーマットの音声トラックを選択する(または出力させる設定にする)。	**18**
PCM以外の信号の音が出ない	音声切換の選択が「PCM」になっている。	音声切換ボタンで正しい入力信号を選択する。	**42**

症　状	原　因	対　応	参照
録音ができない	アナログ信号をデジタルで、デジタル信号をアナログで録音しようとしている。 コピープロテクト信号の入ったデジタル信号である。 REC端子の接続が正しくない。	アナログ信号はアナログ録音、デジタル信号はデジタル録音のみ可能です。 コピープロテクト信号の入ったデジタル信号は録音することはできません。 正しく接続し直す。	**78** **38**
無入力でもノイズが聞こえる	電源そのものにノイズが残っている。	パソコンなどのデジタル機器とタコ足配線になっていないか確認する。	
MULTI CH INPUT端子に接続した機器で、DVDオーディオを再生したが2 chにダウンミックスされているような音になっている	MULTI CH INPUT端子に接続したものではない信号を再生している。(デジタルPCM出力など) プレーヤーの出力設定が間違っている。	入力切換ボタンで入力を切り換え、マルチチャンネル入力の再生をする。 プレーヤーの取扱説明書をご覧ください。	**76**
スピーカーの設定をフロントのみ「LARGE」としていてマルチchのDVDオーディオを再生したが、マルチch音声がダウンミックスされない	ダウンミックス禁止のソフトを再生している。	故障ではありません。	
DTS CDのサーチ中にノイズが出る	サーチ中にCDに含まれるデジタル情報を読み取ってしまう。	故障ではありません。サーチ中はアンプの音量を下げ、スピーカーから出る音を抑えてください。	
DTSのLDを再生するとノイズが出る	音声切換の設定がANALOGで選択されている。	機器を正しくデジタル接続し、音声切換ボタンでDIGITALを選択する。	**42**

サブウーファーの接続／再生について

音についての問題の中でも、特に接続したサブウーファーについての疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
サブウーファーから音が出ない	サブウーファーあり／なしの設定が [NO](無し) に設定されている。 再生しているソース(シーン)や音楽に超低域成分(LFEチャンネル)が含まれていない。 接続が外れている(または、間違っている)。 サブウーファー側の電源がOFFになっている。 サブウーファー側の自動スタンバイ機能が働いている。 PRE OUT SUBWOOFER2端子にサブウーファーを1本接続している。	[スピーカー設定] を確認して、サブウーファーの設定を [YES](有り)または [PLUS] にする。 故障ではありません。収録内容をご確認ください。 サブウーファーの接続を確認して、外れているときは接続し直す。 サブウーファーの電源を確認する。 サブウーファーの機能を確認する(詳しくはサブウーファーの取扱説明書をご覧ください。) サブウーファーを1本だけ接続するときは、PRE OUT SUBWOOFER1端子に接続する。	**105** **13** **13**
サブウーファーからの音が小さい	低域成分の少ない／ないソースやディスク(CDなど)を再生している。 サブウーファー出力レベルの設定値が小さい。 クロスオーバー周波数の設定が低い。 サブウーファー側のボリューム設定が小さい。	再生しているソースの低域成分が少なく、サブウーファーの音量が不足している場合は、[スピーカー設定]でサブウーファーの設定を [PLUS] にする。 [スピーカー出力レベル] の設定を確認して、適切なレベルに調整する。 [X.OVER] の設定を確認して、適切なレベルに調整する。 サブウーファーのボリュームレベルを上げる。	**105** **107** **105**

映像について

「映像が出ない」「メニュー画面(OSD画面)が表示されない」など映像についての疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
入力切換を合わせても、映像が出ない。または違う入力の映像が出る	TVモニター側の入力切り換え設定が正しくない。 ソース機器とHDMI端子で接続しているが、TVモニターをHDMI端子で接続していない。 ソース機器とTVモニターを接続しているコードの種類が違っていてビデオコンバート機能がOFFに設定されている。 映像によっては著作権の関係で映像が出力されない場合があります。 TVモニター側で非対応の映像信号を出力している	TVモニターの取扱説明書をお読みになり、正しい入力に切り換えてください。 ソース機器とTVモニターはHDMI端子を使って本機と接続する。 ビデオコンバート機能をONにする。 解像度の設定を変更するか、ビデオコンバーターの設定をOFFにしてください。 解像度の設定を変更するか、ビデオコンバーターの設定をOFFにする。	**32** **56** **56**
コンポーネント端子やD端子、Sビデオ端子に接続したソース機器の映像が出ない	入力端子の設定の「S-Video In」または「Comp/D In」の設定が正しくない。	入力端子の設定を正しく行う。	**111**
録画ができない	録画機器とソース機器の接続端子が合っていない。	録画機器の接続端子とソース機器の接続端子を(コンポジットまたはSビデオで)合わせる。 コピープロテクト信号の入った映像信号は録画することができません。	
コンバート後のコンポーネント出力映像が出ない、または乱れる	コピープロテクト信号が極端に大きい、または画質劣化の激しいビデオテープを再生している。	コンバート回路またはモニターTVの仕様です。コンポジットまたはS端子の出力映像でお楽しみください。	**31**
ZONE2のビデオコンバート機能が働かない	映像入力がコンポーネント信号である。 劣化の激しい画像を入力している。	入力をコンポジットかS端子にする。またはTVモニターとコンポーネントケーブルで接続する。 ビデオコンバート機能をOFFにして、ソース機器とモニターを同じ種類のコードで接続する。	**37** **56**
LCD画面に外部映像が表示されない。または画像が乱れる	以下の状態の時は正しく表示されません。 • HDMI 入力である • ビデオコンバーターがOFFである • 解像度の設定がPUREである • 外部映像入力がない • 対応できない信号が入力されている	LCD VIEWボタンを押してOSD表示に切り換えてください。	**79**

操作について

「操作できない」「電源が切れる」など操作時にある疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
大音量で再生したときに電源が切れる	スピーカーコードの芯線がスピーカー端子からはみ出して、リアパネルに接触しているか、+/−が接触し、保護回路が働いている。 スピーカーの実動作上の最低インピーダンスが非常に低いため、保護回路が働いた。または、低周波の過大な入力が持続した。	スピーカーコードの芯線をもう一度しっかりねじり直し、アンプまたはスピーカー側のスピーカー端子からはみ出ないように接続する。 ボリュームを下げて再生する。 チャンネルごとの周波数特性の補正で低域(63 Hzまたは125 Hz)のレベルを下げる。 DIGITAL SAFETY機能を1または2にすると、さらに数dB音量が上げられる場合があります。(スタンバイモード時に、SETUPボタンを押しながら⏻ STANDBY/ONボタンを押して⬆/⬇でDIGITAL SAFETY[OFF]を選び、⬅/➡で1、2またはOFFを切り換えます。ただし、DIGITAL SAFETY[OFF]以外に設定した場合、一部の機能が選択できない場合があります。)	**28** **95**
電源が突然切れてPHASE CONTROLインジケーターが点滅する	スピーカーコードの芯線がスピーカー端子からはみ出して、リアパネルに接触しているか、+/−が接触し、保護回路が働いている。 本機のアンプ回路が故障です。	スピーカーコードの芯線をもう一度しっかりねじり直し、アンプまたはスピーカー側のスピーカー端子からはみ出ないように接続する。 すみやかに使用を停止し、修理を依頼してください。この症状のあとに電源のON/OFFを繰り返すのはおやめください。	**28** **179**

症　状	原　因	対　応	参照
操作ボタンを押しても動作しない	空気が乾燥しているとき、静電気などの影響を受けている。	電源プラグを一度コンセントから外して、再び差し込む。	40
AMP ERRまたはMCACCインジケーターが点滅して自動的に電源が切れる	本機のアンプ回路の故障です。	すみやかに使用を停止し、修理を依頼してください。この症状のあとに電源のON/OFFを繰り返すのはおやめください。	179
AMP OVERHEATと点滅表示が出たあと電源が切れ、STANDBY/ONボタンのインジケーターが点滅する	本機内部の温度が許容値を超えた。	通風がよくなるように設置を変える。 一度電源を切り、冷えてから使用する。	5
12V TRG ERRと点滅表示される	12 Vトリガー端子に不具合が生じている。	一度電源を切り、12 Vトリガーの接続を見直してください。	134
音声切換ボタンを押しても入力がDIGITALにならない	接続またはデジタル入力の設定が正しくない。 MULTI CH IN入力になっている。 入力設定をしていないi.LINK対応機器を選択している。	機器の接続を再確認し、「デジタル入力の設定」を正しく修正する。 MULTI CH IN入力以外に切り換える。 正しい入力ファンクションを選択する。	111 41 42
5.1 chソースを再生しているのに、5.1 ch再生されない	DVDプレーヤーのデジタル出力設定がOFFになっている。 DVDプレーヤーのドルビーデジタルまたはDTS出力設定がOFFになっている。	DVDプレーヤーのデジタル出力設定をONにする。 DVDプレーヤーのドルビーデジタルまたはDTS出力設定をONにする。	18 18
DVDオーディオを再生するとプレーヤーには96 kHzと表示されるが、本機では表示されない	MULTI CH IN端子はアナログ入力端子なので、デジタル情報を表示することはできません。	故障ではありません。プレーヤーの取扱説明書もご覧ください。	
96 kHzのソフトを再生しても表示が96 kHzにならない	プレーヤー側で96 kHz出力がOFFになっている。	プレーヤーの96 kHz出力をONにする。	18
リモコン操作ができない	リモコンの電池が消耗している。 距離が離れすぎている。角度が悪い。 途中に信号を遮る障害物がある。 蛍光灯などの強い光がリモコン信号受光部に当たっている。	電池を交換する。 7 m以内、左右30°以内で操作する。 障害物を取り除くか、操作する場所を移動する。 リモコン信号受光部に光が直接当たらないようにする。	6 20
他機器をリモコンで操作できない	プリセットコードの設定が間違っている。 電池切れの期間にメモリーが消去された。	正しいプリセットコードを設定する。 もう一度設定を行う。	117
プラズマテレビとのSR+による連動操作ができない	HDMIコントロール機能がONになっている。	HDMIコントロール設定でOFFを選択する。	129
IR接続をしているのに相手機器がリモコンで動作しない	接続でコントロール端子のIN/OUTを間違えている。 コントロールコード以外の接続をしていない。 他社製品の同用途端子と接続している。	正しく接続し直す。 アナログのオーディオコードまたはHDMIケーブルなどを接続する。 他社製品の動作はサポートしていません。	127 127
CD-R/TAPE/MD OUT、DVR/VCR1 OUT、DVR/VCR2 OUT端子から音が出ない	ZONEオーディオ設定のZONE 3 / RECSEL出力がZONE 3になっている。	RECSELを選択する。	124
ZONE 3が選択できない	ZONEオーディオ設定のZONE 3 / RECSEL出力がRECSELになっている。	ZONE 3を選択する。	124
HDMIコントロール機能によるアンプ連動操作ができない	HDMIコントロール機能がOFFになっている。 本機の電源をテレビよりも先にONにした。 テレビ側のHDMIコントロール設定がOFFになっている。 テレビをHDMI OUT2に接続し、HDMI出力をHDMI OUT2に設定して視聴している。	HDMIコントロール設定でONを選択する。 テレビの電源をONしてから本機の電源をONにする。 テレビ側のHDMIコントロール設定をONにする。 テレビをHDMI OUT1に接続し、HDMI出力をHDMI OUT1に設定します。そのあと、テレビの電源をONにしてから本機の電源をONにする。	129 128 128

インジケーター／表示について

操作中のインジケーター表示などの疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
圧縮デジタル*のソフトを再生しても、ステータス画面の音声の入力情報画面で入力チャンネル表示が点灯しない	デジタル接続が正しくない。 デジタル入力の設定が正しくない。 音声切換の選択が正しくない。 プレーヤーが停止か一時停止になっている。 プレーヤーの音声出力設定が間違っている。 再生しているトラックがPCMなどになっている。 収録フォーマットが5.1 ch(または「6.1 ch再生検出信号」対応)ではない。	接続を再確認する。 デジタル入力の設定を正しく行う。 音声切換ボタンで正しい入力を選択する。 再生を開始する。 プレーヤーの音声出力設定を各フォーマットに対応するよう修正する。 プレーヤーの音声切り換え機能で圧縮デジタル*の音声を選択する。 故障ではありません。再生しているソフトのパッケージをご確認ください。	39 111 42 18 18
圧縮デジタル*のソフトを再生しても、DD DIGITALまたはDTSなどの表示にならない	デジタル信号が入力されていない。 ソフトの音声が2 chフォーマットである。 ドルビーサラウンドエンコードされたソフトである。	音声切換ボタンでAUTOまたはDIGITALを選ぶ。 故障ではありません。再生しているソフトのパッケージをご確認ください。	42 140
Surround EX(またはDTS ES)ソフト再生時に、SBch処理モードの設定をAUTOにしてもEX(またはES)デコードしない	「6.1 ch再生検出信号」が記録されていない(劇場公開時とDVD収録時はまれに違う場合があります)。	SBch処理モードの設定をONにする。	50
Surround EX(またはDTS ES)ソフトを再生中、ステータス画面でSL、SB、SRのインジケーターは点灯するが、EX(またはES)デコードしない	スピーカーシステムの設定で、サラウンドバックチャンネルが[NO](無し)に設定されている。 リスニングモードが正しくない。	サラウンドバックchの設定を、接続したスピーカーに合わせて変更する。 SBch処理モードの設定をONまたはAUTOに変更し、リスニングモードをサラウンドにして再生する。	105 43, 50 149
DVD オーディオを再生しているのにディスプレイにはPCMと表示される	HDMI接続をしている入力でDVDオーディオを再生するとPCMと表示されます。	故障ではありません。	

圧縮デジタル＊：ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AACなどの総称として使用します。

MCACC(音場補正)について

MCACC(音場補正)に関する疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
音場補正のオート設定を何度行ってもエラーになる	マイクとスピーカーとの間に障害物がある。 スピーカーコードの接続が正しくない。	障害物を移動させる。 スピーカーコードの接続を正しく行う。	14 28
測定結果のサブウーファーの距離が実際の距離より長い	サブウーファー内部ローパスフィルターの遅延特性の影響で、再生音にディレイがかかっている。	MCACCでは、こういった遅延特性を考慮したうえで距離を特定して、正確なディレイ時間を設定するようにしています。	
スピーカーの大、小設定が誤った設定になる	耳に聞こえにくい周波数の騒音がある。 マイクの位置によって微妙な音響特性の変化を検出している。	エアコンなどモーターを使用した機器の電源を切ってみる。 [スピーカー設定]で正しい設定にする。	 105
音場補正したが、音がおかしい	スピーカーの位相が反転している(+/－が逆に接続されている)。	正しく接続する。	28
EQプロフェッショナルで自動測定された補正カーブを手動で調整中に「OVER」がディスプレイに表示される	調整値の組み合わせによっては補正レベルが許容量を超える。	「OVER」の表示が消えるまで、さまざまな帯域のレベルを下げる。	95

EQ補正後の残響特性表示に関する疑問

症　状	原　因	対　応	参照
PCまたはOSD画面上でのEQ補正後残響周波数特性表示のグラフがフラットにそろわない	グラフの傾斜は残響特性を示しています。部屋の残響特性そのものは、EQ補正だけでは直すことができないため、グラフの傾斜角度は補正前後でも同じになります。 さまざまな原因によって、ALL CH ADJで補正を行っても周波数特性のグラフはフラットにならないことがあります。	補正により、各周波数ごとのグラフがEQの補正分だけ水平移動します。補正の効果は、指定した時間軸上のあるポイントでそろうことが確認できます。 残響特性（グラフの形状）そのものは、視聴環境を改善しないと変化しません。 MCACCでは、無理な補正をせず、音質的に最良となるよう自動的に補正を行います。	PC表示用アプリケーションソフト取扱説明書97
マニュアルMCACCのEQの調整で調整した補正量が補正後表示のグラフに反映されない	残響周波数特性の表示では、各帯域を分析フィルタで分析したものを表示します。一方、EQ補正は専用のフィルタを使用して信号の補正を行っており、このことが分析フィルタとEQ補正専用フィルタの形状の違いがグラフに反映されない原因です。	問題ありません（オートMCACCの場合は、このフィルタ形状による違いも考慮したうえで補正を行っています）。	
スピーカーシステムの設定で[SMALL]と設定されたスピーカーの低域が補正されていない	[SMALL]に設定されたスピーカーは、EQによる低域の補正は行いませんが、残響特性の表示はスピーカーから出る音の純粋な特性を示すため、低域補正をしていない状態での特性がそのまま表示されます。	MCACCはスピーカーの再生能力に応じて適切な補正を行っているため、[SMALL]に設定されたスピーカーの低域補正には問題ありません。	

i.LINK接続／再生について

i.LINKケーブルでつないだ機器の音を再生するときの疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
i.LINKインジケーターが消灯していて、音が出ない	入力信号の切り換えで、i.LINK対応機器を選んでいない。 i.LINKケーブルが外れている。 i.LINKケーブルが長すぎる。 i.LINK AUDIOフォーマットに対応していない機器を接続している。 再生している機器と本機との間の機器の電源が切れている。	音声切換ボタンでAUTOを選択する。 正しく接続し直す。 3.5 m以下のケーブルを使用する。 接続した機器の取扱説明書を参照する。 電源が切れていたり、機種によっては、電源がスタンバイ状態の場合、信号を伝送することができません。 詳しくは、接続した機器の取扱説明書をご覧ください。	42 77 147
PQLS OFFまたはPQLS ONが一瞬表示されて、音がとぎれる	i.LINK接続で再生中に、他のi.LINK接続機器の状態を変更したりするとPQLSのON/OFFが切り換わり、音が一瞬とぎれることがあります。		
音声切換でi.LINKが選べない	i.LINK対応機器の電源が入っていない。 i.LINK入力の設定が正しくない。	電源を入れる。 正しく設定する。	
DVDオーディオ/SACDの再生を停止してもプログラムフォーマットインジケーターが表示されたままになる	DVDオーディオ/SACDの再生を停止しても、他のフォーマットが入力されるまで、プログラムフォーマットインジケーターは表示されたままです。		
他製品のアップグレードを行ったあとにi.LINKで接続したその機器の名前が表示されなかったりその機器をファンクションで選択できない	製品のアップグレードなどによって機器の認識ができなくなっている。	本機内部の機器情報を初期化します。本体のボタンを使って以下の手順で行ってください。 1　電源スタンバイ時にSETUPボタンを押しながらSTANDBY/ONボタンを押します。 2　⇧⇩で「i.LINK DB [NO]」を選んでENTERボタンを押す。 3　⇦⇨で[Clear]を選んでENTERボタンを押す。 4　「Clear? [OK]」と表示されたら、もう一度ENTERボタンを押す。 通常画面が表示されたら初期化終了です。もし[DB ERROR]が表示されたら、再度行ってください。	

HDMI接続／再生について

HDMIケーブルでつないだ機器の音を再生するときの疑問や症状をまとめました。
HDMIインジケーターが点滅し続けるときは以下の症状、原因、対応をご確認ください。

症　状	原　因	対　応	参照
映像と音声の両方が出ない	本機はHDCPに対応しています。ご使用の機器がHDCP対応かどうかをご確認ください。	HDCP非対応のときはコンポーネントビデオ、Dビデオ、Sビデオ、コンポジットビデオコードのいずれかで接続してください。	**32**
	ソース機器の仕様によってはAVアンプを通してのHDMI接続ができない場合があります。	ソース機器の仕様を確認し、非対応のときはソース機器と本機をコンポーネントビデオ、Dビデオ、Sビデオ、コンポジットビデオコードのいずれかで接続してください。	**32**
映像が出ない	ソース機器によっては、設定した解像度で映像が出力されない場合があります。	解像度の設定を変更してみてください。	
	映像信号はDeepColorだが再生機器がDeepColorに対応していない。	DeepColorに対応した機器で再生する。	
	映像信号はDeepColor だがHDMIケーブルがDeepColorに対応していない。	High Speed HDMI™ケーブルを使ってください。	
	HDMI出力の設定が接続しているHDMI OUT端子と合っていない。	HDMI出力の設定を接続しているHDMI OUT端子に合わせる。	**80**
音声が出ない。またはとぎれる	オーディオ調整機能のHDMI設定が「THROUGH」になっている。	「AMP」に設定してください。	**53**
	DVI機器と接続しているときは、音声が出ません。	別途音声の接続を行ってください。	**38-39**
	アナログ映像をHDMI出力しているときは音声接続が必要です。	別途音声の接続を行ってください。	**38-39**
	ソース機器の設定が正しくない。	ソース機器を正しく設定してください。	
	オーディオ調整機能のHDMI設定が「THROUGH」で、マルチチャンネル音声を入力している場合、すべてのチャンネルの音声はHDMI出力されません。	アナログまたはデジタル音声接続を行ってください。	**38-39**
映像が乱れる	ビデオデッキなど映像信号に乱れがあるとき（早送りなど）は映像の品位によって映像が歪んだり乱れたり映らなくなることがあります。また、ディスプレイ側の性能によっては同様の症状が出ることもあります。	ビオデオコンバート機能をOFFにして入力と同じビデオフォーマット（コンポーネントビデオ、Dビデオ、Sビデオ、コンポジットビデオコードのいずれか）で接続、再生してください。	**56**
HDCP ERRORと表示される	HDCPに対応していない機器が接続されている。	コンポーネントビデオ、Sビデオ、コンポジットビデオコードのいずれかで接続してください。HDCPに対応した機器でも表示されることがありますが、映像がとぎれなく出力されているときは不具合ではありません。	
NOT SUPPORTと表示される	映像信号とディスプレイの能力が合っていない。	ソース機器の解像度やDeepColorの設定などを変更してみてください。	
入力端子の設定でHDMI Inputの入力切り換え設定ができない	HDMIコントロールの設定が「ON」になっている。	HDMIコントロールの設定を「OFF」にしてください。	**111, 129**

HDMI接続に関するご注意

本機を経由してソース機器(DVDプレーヤーやビデオ、セットトップボックスなど)とTV(モニター)をHDMIケーブルを使って接続すると、映像や音声が出力されないことがあります(ソース機器の仕様により、AVアンプを経由してTVに映像や音声を出力できないことがあります)。 このようなときは、接続しているソース機器のメーカーにお問い合わせください。

AVアンプを経由してTVに映像や音声を出力できないソース機器をそのままお使いになるときは、下記の接続例1または接続例2の接続方法に変更すると映像や音声を出力できます(詳しい接続方法については31～32ページ、38～39ページをご覧ください)。

接続例１

■ ソース機器と本機をコンポーネント映像ケーブル(またはD端子ケーブル)、および音声ケーブルで接続してください。
■ 本機とTVをHDMIケーブルで接続してください。

• 上記の接続では、ソース機器からのコンポーネント映像信号を本機がデジタル映像信号に変換してTVに出力します。このため、映像信号を変換したときに多少画質が変わります。

接続例2

■ ソース機器とTVをHDMIケーブルで直接接続してください。
■ 本機とソース機器を音声ケーブルを使って接続してください。このときTVの音量は最小にしてください。

• HDMI入力端子が1系統のTVからは、直接接続したソース機器の映像のみ出力されます。
• ソース機器によっては、2チャンネル音声しか出力されないことがあります(これは、ソース機器がTVの音声チャンネル数に合わせるためです)。
• ソース機器を切り換えるときは、本機とTVの入力を両方切り換えてください。
• HDMI端子に入力される映像をTVで見るときは、TVの入力をHDMIに切り換えます。このときTVの音量は最小に調整してください。

ホームメディアギャラリー入力について

ご使用のネットワーク上のオーディオ機器やUSBメモリーもあわせてお調べください。

症　状	原　因	対　応	参照
ネットワークに接続できない	LANケーブルが抜けている。	LANケーブルを正しく接続してください。	**59**
	ルーターの電源が入っていない。	ルーターの電源を入れてください。	
	接続している機器にインターネットセキュリティーソフトウェアなどがインストールされている。	インターネットセキュリティーソフトウェアなどがインストールされている機器には接続できないことがあります。	
	本機の電源がONの状態で、電源がOFFだったネットワーク上の機器の電源をONにした。	本機の電源をONにする前にネットワーク上の機器の電源をONにしておいてください。	
ホームメディアギャラリー入力のメニュー画面が表示されない	ホームメディアギャラリー入力を選択すると初期化処理を行います。メイン、ZONE2、ZONE3それぞれに初期化は行われます。	初期化には30秒～40秒程度の時間がかかります。しばらくお待ちください。	
「再生準備中」と表示されたまま再生が始まらない	接続している機器の電源や接続が切れている。	接続している機器の電源や接続を確認する。	**59**
パソコンが正しく動作しない	IPアドレスが正しく設定されていない。	ルーターのDHCPサーバー機能をオンにするか、ネットワーク環境に合わせて、「ネットワークの設定を行う」を手動で設定してください。	**70**
	IPアドレスの自動設定中です。	自動設定には時間がかかります。しばらくお待ちください。	
パソコンなどのネットワーク上の機器のファイルが再生できない	パソコンにWindows Media Player 11がインストールされていない。	パソコンにWindows Media Player 11をインストールしてください。	**57**
	本機が対応していないフォーマットで記録されたファイルを再生している。	本機が対応しているフォーマットで記録されたファイルを再生してください。	**58**
	Windows Media Player 11またはWindows Media ConnectでMPEG-4 AACファイルを再生しようとしている。	Windows Media Player 11またはWindows Media ConnectではMPEG-4 AACファイルを再生することはできません。他のサーバーを使用してください。	**サーバーの取扱説明書参照**
	ネットワークに接続している機器が動作していない。	待機状態やスリープモードになっていないか確認してください。 必要に応じて再起動してみてください。	
	ネットワークに接続している機器がファイルの共有を許可していない。	接続している機器の設定を変更してください。	
	ネットワークに接続している機器のフォルダーが削除または破損している。	接続している機器に保存されているフォルダーを確認してください。	
接続しているネットワーク上の機器にアクセスできない	接続している機器の設定が正しくない。	接続している機器に、本機がデバイスとして認証(許可)されていないとアクセスできません。接続している機器の設定を確認してください。	
	接続している機器に再生できるファイルがない。	接続している機器に保存されているファイルを確認してください。	
動画、音楽、画像ファイルの再生が自動で停止したり乱れたりする	本機で正常に再生できるファイルではない。	本機で再生できるファイルフォーマットか確認してください。	**58**
		フォルダーが壊れていないか確認してください。	
		本機で再生できる拡張子がついたファイルでも再生できないことや表示されないことがあります。	
	LANケーブルが抜けている。	LANケーブルを正しく接続してください。	**59**
	同一ネットワーク上でインターネット通信が行われているなど、ネットワークの通信が混雑している。	ネットワーク上の機器と接続するときは100BASE-TXをご使用ください。 ネットワークの通信が混雑しているときは正しく再生できないことがあります。	**59**

症　状	原　因	対　応	参照
Windows Media Player 11 に接続できない	OS にWindows XP を使用しているパソコンで、ドメインにログオンしている。	ドメインではなく、ローカルマシンにログオンしてください。	**60**
USB デバイスのフォルダーやファイルが表示されない	フォルダーや音楽ファイルがFATおよびNTFS領域以外に保存されている。	フォルダーや音楽ファイルをFATおよびNTFS領域に保存してください。	
	1つのフォルダー内に99999 をこえるフォルダー/ファイルが保存されている。	1つのフォルダー内が99999 以内のフォルダー/ファイル数になるよう保存してください。	**63**
	USBメモリーに記録されたファイルに著作権保護（DRM）がかけられている。	著作権保護（DRM）がかけられているファイルは再生できません。	**63**
USB デバイスを認識できない	USB デバイスがUSB マスストレージクラスに対応していない。	USB マスストレージクラスに対応したUSBデバイスをお使いください（USB マスストレージクラスに対応したUSBデバイスであっても、本機で再生できないものもあります）。	**59**
	USBデバイスがしっかりと接続されていない。	USB デバイスの接続を確認してから、本機の電源をオンしてください。	**59**
	本機がUSB デバイスを不正と認識している。	一度本機の電源をオフにしたのち、再びオンにしてください。	
USB デバイスを接続していて画面には表示されるが再生できない	USBメモリーのフォーマットが、FAT12またはHFSである。	USBメモリーのフォーマットがFAT16、FAT32またはNTFSであるかどうか確認してください。FAT12、HFSは本機で再生することができません。	**59**
	本機で正常に再生できるファイルフォーマットでない。	再生できるファイルフォーマットを確認してください。	
リモコンのボタンを押してもホームメディアギャラリーの再生操作ができない	リモコンがホームメディアギャラリーモードになっていない。	リモコン操作モード切り換えスイッチを「入力機器」にしてからHOME MEDIA GALLERYボタンを押して、リモコンをホームメディアギャラリーモードにしてください。	**60**

エラーメッセージについて

iPod接続時のメッセージの意味

メッセージ(エラー番号)	メッセージが表示されるとき	対応
Error I1	正常に通信できないとき。	コネクターを一度外し、iPodのメインメニューが表示されてから、もう一度確実にコネクターを接続してください。それでもiPodが正常に動作しない場合は、iPodをリセットしてください。
Error I2	iPodソフトウェアのバージョンが古いとき。	iPodのソフトウェアを最新バージョンにアップデートしてください。
Error I3	iPod操作モードが「Type 1」では操作できないとき。 iPodソフトウェアのバージョンが古いとき。	iPodの操作モードを「Type 2」に切り換えてください(→75ページ)。 iPodのソフトウェアを最新バージョンにアップデートしてください。
Error I4	iPodからの応答がないとき。	iPodのソフトウェアを最新バージョンにアップデートしてください。
No Music Track	iPodに曲が入っていないとき。	iPodに曲を転送してください。映像を再生したいときはiPod CTRLをONにして、iPod本体の操作で映像トラックを再生してください。
No Track	iPodで選択したカテゴリー内にトラックが入っていないとき。	別のカテゴリーを選択してください。

HDMIコントロール機能をONに設定しているときに表示されるメッセージの意味

メッセージ(エラー番号)	メッセージが表示されるとき	対応
HDMI C ERR 110〜190 HDMI C ERR 1A0 HDMI C ERR 1B0 HDMI C ERR 1C0 HDMI C ERR 2C0	HDMIケーブルの接続が正しくない。	接続を確認してください。 ケーブル断線の可能性があります。 本機または接続機器が故障している可能性があります。

ホームメディアギャラリー入力のときのメッセージの意味

メッセージ(エラー番号)	メッセージが表示されるとき	対応
001	ファイルの再生に失敗したとき。	本機が対応しているフォーマットのファイルかご確認ください。(→72ページ)
100	通信がとぎれているとき。	接続をご確認ください。(→59ページ) LANケーブル断線の可能性があります。
101	サーバーからの応答がないとき。	接続をご確認ください。(→59ページ) 本機とサーバーとの通信に問題がある可能性があります。
102	ネットワーク接続が切れたとき。	接続をご確認ください。(→59ページ) LANケーブル断線の可能性があります。
103	サーバーからの応答が無効なとき。	サーバーが正常に動作しているかをご確認ください。
300	選んだファイルのフォーマットに対応していないとき。	本機が対応しているフォーマットのファイルかご確認ください。(→72ページ)
400 401 403 404	選んだファイルのライセンスが無効なとき。	ファイルのライセンスをご確認ください。 著作権保護により本機で再生できないファイルの可能性があります。
500 501 503 504 505	選んだファイルのライセンスが無効なとき。	ファイルのライセンスをご確認ください。 サーバーが再生を許可していないファイルの可能性があります。 著作権保護により本機で再生できないファイルの可能性があります。

システムセットアップでのMCACC(音場補正)時に表示されるメッセージの意味

「マイクを接続してください。」:
マイクが接続されていません。フロントパネルのMCACC SETUP MIC端子に、付属のマイクを接続してください。

「暗騒音が大きすぎます。」:
周辺の騒音が大きすぎ、測定に誤差が生じる可能性があります。
・エアコンなどモーターを使用した機器や超音波ねずみ駆除装置などの電源を一時的にOFFにするか遠ざけるなどの処置を行ってみてください。
・周囲が比較的静かな時間帯にもう一度やり直してください。

「マイクをチェックしてください。」:
マイクからテスト信号が検出できなくなりました。
・オートセットアップ用マイクの接続や接続コードの断線をチェックしてください。
・スピーカーが正しく接続されているか確認してください。
・測定中はできるだけボリュームを変化させないでください。

「ERR」:
スピーカーYes/No(有り/無し)判定で、以下のような間違った接続を検出しました。
・Front[ERR]の場合:フロントスピーカー左右の両方が検出されない、または片方のみしか検出されませんでした。
・Surr A/Surr B[ERR]の場合:左右のスピーカーの片方しか検出されませんでした。
・Surr A[NO]、Surr B[ERR]の場合:サラウンドAの接続は検出されず、サラウンドBの接続が検出されました。サラウンドスピーカーを一組(2本)のみ接続するときは、Surr A側(L2/R2端子側)を使用してください。
・Surr A[NO]、SB[ERR]の場合:サラウンドAの接続は検出されず、サラウンドバックの接続が検出されました。
・Surr A[YES]、SB[ERR]の場合:サラウンドバック右(SBR)のみが検出されました。サラウンドバックを1本のみ接続するときは、SBL側(L4端子側)を使用してください(→13ページ)。
・SW[ERR]の場合:サブウーファー2のみが検出されました。サブウーファーを1本のみ接続するときは、SUB WOOFER 1端子側を使用してください(→13ページ)。

「サブウーファー1(または 2)/レベルが大きすぎます。ボリュームを下げてください。」:
[YES]と設定したサブウーファー1(または2)の出力信号が大きすぎます。サブウーファー本体のボリュームを適正値に下げてください。

「サブウーファー1(または 2)/レベルが小さすぎます。ボリュームを上げてください。」:
[YES]と設定したサブウーファー1(または2)の出力信号が検出できません。サブウーファー本体の電源を確認しボリュームを適正値に上げてください。

「MCACCメモリーを選択してください。」:
マニュアルMCACC、またはマニュアルスピーカー設定のスピーカー出力レベル、スピーカーまでの距離を行う際、MCACC MEMORYの選択がMCACC OFF になっています。調整を行いたいMCACC MEMORYを選んでください。

i.LINK関係の表示部のメッセージの意味

「BUS FULL」:
i.LINKの伝送容量が最大まで達したために、データを送信することができません。

「CANNOT LINK 1」:
本機とi.LINK接続されている機器との接続関係が不安定です。i.LINK ケーブルが正しく接続されているか確認し、本機とi.LINK接続されている機器との間にi.LINK対応機器がある場合は、それらの機器も含めて正しく接続されているか確認してください。

「CANNOT LINK 2」:
i.LINK接続したい機器を識別できないので、その機器からの信号を受信できません。

「LINK CHECK」:
i.LINK接続関係を確認しています。たとえば本機とi.LINK接続されているネットワーク上で、新しく機器が加えられたり、外されたりしたときに表示します。再生中にこのメッセージが表示されたときは、音がとぎれる場合があります。

「LOOP CONNECT」:
i.LINK対応機器間の接続において、接続がループになっている。

「NO NAME」:
i.LINK接続されている機器に、製品名またはメーカー名などの情報がないときに表示します。

「NO SIGNAL」:
i.LINK対応機器でもレシーバーのように再生信号を出力しない機器や本機で受信できない信号を出力する機器を選択した時に表示します。

「PQLS OFF」:
再生中にPQLSの機能がOFFになったときに表示されます。このとき、音が瞬間的にとぎれます。

「PQLS ON」:
再生中にPQLSが機能がONになったときに表示されます。このとき、音が瞬間的にとぎれます。

「UNKNOWN」:
i.LINK接続されている機器の情報が認識できないときに表示します。

保証とアフターサービス

保証書(別添)

保証書は、必ず「販売店名・購入日」などの記入を確かめて販売店から受け取っていただき、内容をよくお読みのうえ、大切に保管してください。

保証期間はご購入日から1年間です。

補修用性能部品の保有期間

当社は、この製品の補修用性能部品を製造打ち切り後8年間保有しています。性能部品とはその製品の機能を維持するために必要な部品です。

修理に関するご質問、ご相談

お買い求めの販売店へご相談・ご依頼ください。

修理を依頼されるとき

修理を依頼される前に取扱説明書の「故障かな?と思ったら」の項目をご確認ください。それでも異常のあるときは、必ず電源プラグを抜いてから、販売店へご依頼ください。ご転居されたり、ご贈答品などで、お買い求めの販売店に修理のご依頼ができない場合は、「ご相談窓口のご案内・修理窓口のご案内」(179ページ)をご覧になり、修理受付センターにご相談ください。

連絡していただきたい内容

- ご住所
- お名前
- お電話番号
- 製品名:AVマルチチャンネルアンプ
- 型番:SC-LX90
- お買い上げ日
- 故障または異常の内容(できるだけ詳しく)
- 訪問ご希望日
- ご自宅までの道順と目標(建物や公園など)

■ 保証期間中は:

修理に際しては、保証書をご提示ください。保証書に記載されている当社の保証規定に基づき修理いたします。

■ 保証期間が過ぎているときは:

修理すれば使用できる製品については、ご希望により有料で修理いたします。

本製品は家庭用オーディオ機器(オーディオ・ビデオ機器)です。下記の注意事項を守ってご使用ください。

1. 一般家庭用以外での使用(例:店舗などにおけるBGMを目的とした長時間使用、車両・船舶への搭載、屋外での使用など)はしないでください。
2. 音楽信号の再生を目的として設計されていますので、測定器の信号(連続波)などの増幅用には使用しないでください。
3. ハウリングで製品が故障する恐れがありますので、マイクロフォンを接続する場合はマイクロフォンをスピーカーに向けたり、音が歪むような大音量では使用しないでください。
4. スピーカーの許容入力を超えるような大音量で再生しないでください。

S26_Ja

愛情点検

長年ご使用のオーディオ製品の点検を!

このような症状はありませんか	・電源コードや電源プラグが異常に熱くなる。 ・電源コードにさけめやひび割れがある。 ・電源が入ったり切れたりする。 ・本体から異常な音、熱、臭いがする。	➡	ご使用中止	故障や事故防止のため、すぐに電源を切り、電源プラグをコンセントから抜き、必ず販売店にご相談ください。

サービスステーションリスト

サービス拠点のご案内

サービス拠点への電話は、修理受付センターでお受けします。（沖縄県の方は沖縄サービスステーション）
また、認定店は不在の場合もございますので、持ち込みをご希望のお客様は修理受付センターにご確認ください。

●北海道地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

☆札幌サービスセンター	FAX　011-611-5694	〒064-0822	札幌市中央区北2条西20-1-3　クワザワビル
旭川サービス認定店	FAX　0166-55-7207	〒070-0831	旭川市旭町1条1丁目438-89
帯広サービス認定店	FAX　0155-23-7757	〒080-0015	帯広市西5条南28丁目1-1
函館サービス認定店	FAX　0138-40-6473	〒041-0811	函館市富岡町2-18-7

●東北地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

☆仙台サービスセンター	FAX　022-375-4996	〒981-3121	仙台市泉区上谷刈6-10-26
山形サービス認定店	FAX　023-615-1627	〒990-0023	山形市松波1-8-17
郡山サービス認定店	FAX　024-991-7466	〒963-8861	郡山市鶴見坦1-9-25　クレールアヴェニュー伊藤第2ビル1F D号
盛岡サービス認定店	FAX　019-659-1895	〒020-0051	盛岡市下太田下川原153-1
青森サービス認定店	FAX　017-735-2438	〒030-0821	青森市勝田2-16-10
八戸サービス認定店	FAX　0178-44-3351	〒031-0802	八戸市小中野3-16-8
秋田サービス認定店	FAX　018-869-7401	〒010-0802	秋田市外旭川字梶の目345-1

●東京都内

受付　月～土　9:30～18:00（日・祝・弊社休業日は除く）

世田谷サービスステーション	FAX　03-3419-4234	〒155-0032	世田谷区代沢4-25-9
北東京サービスステーション	FAX　03-3944-7800	〒170-0002	豊島区巣鴨1-9-4　第三久保ビル1F
多摩サービスステーション	FAX　042-524-5947	〒190-0003	立川市栄町4-18-1　エクセル立川1 F

●関東・甲信越地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

☆千葉サービスセンター	FAX　043-207-2555	〒263-0014	千葉市稲毛区作草部町1369-1　椎の実ハイツ1F
松戸サービス認定店	FAX　047-340-5052	〒270-0021	松戸市小金原4-9-23
水戸サービス認定店	FAX　029-248-1306	〒310-0844	水戸市住吉町307-4
つくばサービス認定店	FAX　0298-58-1369	〒305-0045	つくば市梅園2-2-6
☆埼玉サービスセンター	FAX　048-651-8030	〒331-0812	さいたま市北区宮原町1-310-1
川越サービス認定店	FAX　049-233-6581	〒350-0804	川越市下広谷1128-11
宇都宮サービス認定店	FAX　028-657-5882	〒321-0912	宇都宮市石井町3373-1
群馬サービス認定店	FAX　0270-22-1859	〒372-0801	伊勢崎市宮子町1191-17　パサージュ808伊勢崎101号
新潟サービス認定店	FAX　025-374-5756	〒950-0982	新潟市中央区堀之内南1-20-11
佐渡サービス指定店　横山電機商会	FAX　0259-63-3400	〒952-1209	佐渡市金井町千種1158-1
☆神奈川サービスセンター	FAX　045-943-3788	〒224-0037	横浜市都筑区茅ヶ崎南2-18-1　ベルデユール茅ヶ崎
横浜サービス認定店	FAX　045-348-8661	〒240-0043	横浜市保土ヶ谷区坂本町250
神奈川西サービス認定店	FAX　046-231-1209	〒243-0422	海老名市中新田4-10-53　中山ビル1F
三宅島サービス指定店　勝見電機	FAX　04994-6-1246	〒100-1211	三宅村大字坪田
松本サービス認定店	FAX　0263-48-0575	〒390-0852	松本市大字島立180-5　パイオニア松本拠点1F
長野サービス認定店	FAX　026-229-5250	〒380-0935	長野市中御所1-24
甲府サービス認定店	FAX　055-228-8003	〒400-0035	甲府市飯田4-9-14

●中部地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

☆名古屋サービスセンター	FAX　052-532-1148	〒451-0063	名古屋市西区押切2-8-18
岡崎サービス認定店	FAX　0564-33-7080	〒444-0931	岡崎市大和町字荒田36-1　大和ビレッジB-1
津サービス認定店	FAX　059-213-6712	〒514-0821	津市垂水522-5
岐阜サービス認定店	FAX　058-274-5256	〒500-8356	岐阜市六条江東1-1-3
静岡サービス認定店	FAX　054-236-4063	〒422-8034	静岡市駿河区高松1-17-17
沼津サービス認定店	FAX　055-967-8455	〒410-0876	沼津市北今沢12-7
浜松サービス認定店	FAX　053-422-1401	〒435-0042	浜松市東区篠ヶ瀬町415　ビラモデルナ5号
金沢サービス認定店	FAX　076-240-0550	〒920-0362	金沢市古府3-60-1　K2ビル1F
富山サービス認定店	FAX　076-425-3027	〒939-8211	富山市二口町1-7-1
福井サービス認定店	FAX　0776-27-1768	〒910-0001	福井市大願寺3-5-9

●関西地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

☆大阪サービスセンター	FAX　06-6310-9120	〒564-0052	吹田市広芝町5-8
大阪南サービス認定店	FAX　0722-75-2625	〒593-8322	堺市西区津久野町1-8-15　ローズマンション1F
神戸サービス認定店	FAX　078-265-0832	〒651-0093	神戸市中央区二宮町1丁目10-1　ローレル三宮ノースアベニュー1F
姫路サービス認定店	FAX　0792-51-2656	〒671-0224	姫路市別所町佐土1-126
和歌山サービス認定店	FAX　0734-46-3026	〒641-0021	和歌山市和歌浦東3-1-25
京都サービス認定店	FAX　075-352-2588	〒600-8322	京都市下京区西洞院通五条東南角小柳町513-2　五条久保田ビル1F
奈良サービス認定店	FAX　0742-36-8713	〒630-8132	奈良市大森西町21-26
福知山サービス認定店	FAX　0773-24-5375	〒620-0055	福知山市篠尾新町2-74　カマハチマンション

●中国・四国地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

☆広島サービスセンター	FAX　082-248-9939	〒730-0041	広島市中区小町2-30　第二有楽ビル1F
岡山サービス認定店	FAX　086-244-8748	〒700-0975	岡山市今8-15-21
松江サービス認定店	FAX　0852-22-7779	〒690-0017	松江市西津田4-5-40　（有）テクピット内
福山サービス認定店	FAX　0849-31-2791	〒720-0815	福山市野上町3-12-9
鳥取サービス認定店	FAX　0857-28-8011	〒680-0934	鳥取市徳尾422-2
徳山サービス認定店	FAX　0834-33-5759	〒745-0006	周南市花畠町3-11　森広事務所1F
高松サービスステーション	FAX　087-861-4841	〒760-0078	高松市今里町1-16-1
徳島サービス認定店	FAX　088-669-6076	〒770-8023	徳島市勝占町中須92-1　大松ジョリカ地下1階103号
高知サービス認定店	FAX　088-802-3321	〒780-0051	高知市愛宕町3-12-13　晃栄ビル1F
松山サービス認定店	FAX　089-911-5608	〒791-8013	松山市山越5-12-8

●九州地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

☆福岡サービスセンター	FAX　092-412-7460	〒812-0016	福岡市博多区博多駅南2-12-3
北九州サービス認定店	FAX　093-941-8354	〒802-0044	北九州市小倉北区熊本1丁目9-4　植田ビル1F
博多サービス認定店	FAX　092-461-1643	〒812-0006	福岡市博多区上牟田2-6-7
長崎サービス認定店	FAX　095-849-4606	〒852-8145	長崎市昭和1丁目12-10　クリスタルハイツ平野
熊本サービス認定店	FAX　096-331-3323	〒862-0918	熊本市花立5丁目14-17
大分サービス認定店	FAX　097-551-2049	〒870-0921	大分市萩原3-23-15　日商ビル101
鹿児島サービス認定店	FAX　099-201-3803	〒890-0046	鹿児島市西田3-8-24　サニーサイド21 1F
宮崎サービス認定店	FAX　0985-27-3136	〒880-0821	宮崎市浮城町98-1

●沖縄県

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）

沖縄サービスステーション	TEL　098-879-1910 FAX　098-879-1352	〒901-2113	浦添市大平2-2-6　ひろえハイツ102

平成20年2月現在　　記載内容は、予告なく変更させていただくことがありますので予めご了承ください。

<各窓口へのお問い合わせの時のご注意>
「0120」で始まる フリーコールおよび フリーダイヤルは、PHS、携帯電話などからは、ご使用になれません。
また、【一般電話】は、携帯電話・PHSなどからご利用可能ですが、通話料がかかります。

ご相談窓口のご案内

パイオニア商品の修理・お取り扱い（取り付け・組み合わせなど）については、お買い求めの販売店様へお問い合わせください。

商品についてのご相談窓口

● 商品のご購入や取り扱い、故障かどうかのご相談窓口およびカタログのご請求について

カスタマーサポートセンター（全国共通フリーコール）

受付時間　月曜～金曜9:30～18:00、土曜・日曜・祝日9:30～12:00、13:00～17:00（弊社休業日は除く）

●家庭用オーディオ/ビジュアル商品	■ 0120−944−222	■一般電話　03−5496−2986
■ファックス	03−3490−5718	
■インターネットホームページ	http://pioneer.jp/support/ ※商品についてよくあるお問い合わせ・メールマガジン登録のご案内・お客様登録など	

修理窓口のご案内

修理をご依頼される場合は、取扱説明書の『故障かな？と思ったら』を一度ご覧になり、故障かどうかご確認ください。それでも正常に動作しない場合は、①型名②ご購入日③故障症状を具体的に、ご連絡ください。

修理についてのご相談窓口

● お買い求めの販売店に修理の依頼が出来ない場合

修理受付センター

受付時間　月曜～金曜9:30～19:00、土曜・日曜・祝日9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

■電話	0120−5−81028（ゴーハイオニア）	■一般電話　03−5496−2023
■ファックス	0120−5−81029	
■インターネットホームページ	http://pioneer.jp/support/repair.html ※インターネットによる修理受付対象商品は、家庭用オーディオ/ビジュアル商品に限ります	

沖縄サービスステーション（沖縄県のみ）

受付時間　月曜～金曜9:30～18:00（土曜・日曜・祝日・弊社休業日は除く）

■一般電話	098−879−1910
■ファックス	098−879−1352

部品のご購入についてのご相談窓口

● 部品（付属品、リモコン、取扱説明書など）のご購入について

部品受注センター

受付時間　月曜～金曜9:30～18:00、土曜・日曜・祝日9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

■電話	0120−5−81095	■一般電話　0538−43−1161
■ファックス	0120−5−81096	

平成20年2月現在　記載内容は、予告なく変更させていただくことがありますので予めご了承ください。　VOL.027

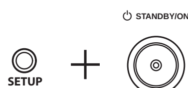
工場出荷時の設定一覧

設定項目	初期値	参照ページ
スピーカー出力端子の設定	ノーマル	90
スピーカーの有り無し / 低域再生能力	9 ch / すべて Small（小）	105
サブウーファー	YES（有り）× 2	105
スピーカー出力レベル（M1 ～ M6）	すべて 0.0 dB（補正無し）	107
スピーカーまでの距離（M1 ～ M6）	すべて 3.00m	108
クロスオーバー周波数	80 Hz	105
定在波制御（M1 ～ M6）	全フィルター 0.0 dB（補正無し）	52、94
視聴環境の周波数特性の補正（M1 ～ M6）	全帯域 0.0 dB（補正無し）	52、96
X カーブ	OFF	108
サラウンドバックスピーカー間の距離	0 – 0.3m	109
入力の設定	リアパネル表記のとおり（入力端子の設定参照）	111
入力ファンクション	DVD/LD	41
入力信号の種類	AUTO（入力信号により変化します）	42
SBch 処理モード	ON	50
リスニングモード	AUTO SURROUND	43
MCACC	M1:MEMORY1	49、52
PHASE CONTROL	ON	47
FULL BAND PHASE CONTROL	OFF	48
オーディオ調整機能の各項目	（オーディオ調整機能のページを参照）	51
ビデオ調整機能の各項目	（ビデオ調整機能のページを参照）	55
Digital Safety	OFF	166
スピーカーシステム A/B	SP : A ＋ B ON	82
ディスプレイの明るさ	一番明るい	80
SR ＋連動モードの設定	OFF	132
HDMI コントロール機能	ON	129
12 V トリガーの連動設定	すべて OFF	134

本機のすべての設定を工場出荷時に戻す

設定オールリセットは以下の手順で実行します。操作は本体フロントパネルで行います。
設定オールリセットを行うと、上記のすべての設定が工場出荷時の状態になりますので**十分ご注意ください。**

① 本機が STANDBY モードのときに SETUP ボタンを押しながら STANDBY/ON ボタンを押します



② LCD 画面で「ALL RESET ◄NO►」を選びます

③ ⇦/⇨ で「RESET」を選んで ENTER ボタンを押します



④ フロントパネル表示部に「RESET? [OK]」と表示されたらもう一度 ENTER ボタンを押し、「OK」と表示されたら設定のオールリセットは完了です

電源コンセントからコンセントを長時間抜いた状態にしていても、本機で設定した各種設定が消去されることはありません。

さくいん

本機を操作するときの主な用語や表示をまとめました。参照ページに進むと、それぞれに関連する情報があります。

五十音順

アルファベット / 数字順

インターネットによるお客様登録のお願い

http://pioneer.jp/support/

このたびは弊社製品をお買い上げいただき、まことにありがとうございました。弊社では、お買い上げいただいたお客様に「お客様登録」をお願いしています。 左記アドレスからご登録いただくと、ご使用の製品についての重要なお知らせなどをお届けいたします。なお左記アドレスは、困ったときのよくある質問や各種お問い合わせ先の案内、カタログや取扱説明書の閲覧など、お客様のお役に立てるサービスの提供を目的としたページです。

パイオニア株式会社

〒153-8654 東京都目黒区目黒1丁目4番1号

JIS C 61000-3-2適合品 D50-5-10-1_A_Ja

(JIS C 61000-3-2適合品とは、日本工業規格「電磁両立性－第3-2部：限度値－高調波電流発生限度値(1相当たりの入力電流が20A以下の機器)」に基づき、商用電力系統の高調波環境目標レベルに適合して設計・製造した製品です。)